博 多 130

－博多遺跡群第173次調査報告－

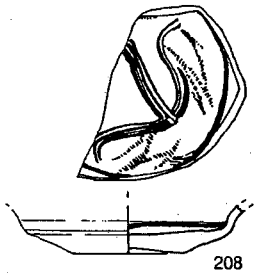
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1042集

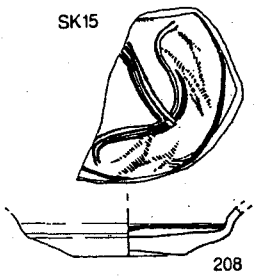
２００９

福岡市教育委員会

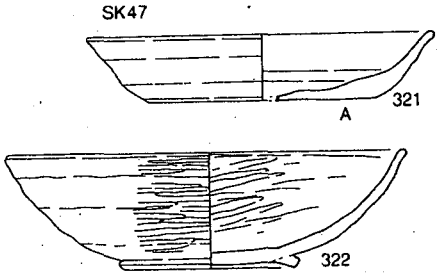
頁	行	誤	正
凡例	(3)	今井孝博	今井隆博
14	7	106は磁　窯系	106は磁灯窯系
17	9	137～139	137・139
20	34	208は同安窯系青磁皿Ⅱ-1b類。	208はSK15出土の同安窯系青磁皿Ⅱ-1b類。
34	6	321は土師器坏。…中略…を測る。	321はSK52出土の土師器坏。…中略…を測る。
35	25	405はSP225出土。	405はSP227出土。
35	29	411はSP224出土。	411はSP244出土。
53	14	648は先端が曲がった釘。	648は先端が曲がった釘。SP681出土。
60	40	E-5区で検出した調査区に係る土坑。…(中略)…埋土は黒褐色粘質土で炭化物を含む。	D-5・6区で検出した土坑状の落ち込み。南境界にかかり全容は不明。最大深0.5mを測る。埋土は黒褐色土が主体で、焼土・炭化物を混入する。
76	3	40は陶器の鉢底部。…(中略)…。17世紀末～18世紀前半の肥前陶器。	40は龍泉窯系青磁と思われる平底鉢か坏底部。…(中略)…畳付は無施釉。
79	16	64は坏。	65は坏。
83	5	113は…(中略)…目が細かい。	113は…(中略)…目が細かい。SC252出土。
PL.7	(4)	同第2面全景(東から)	同第2面全景(西から)

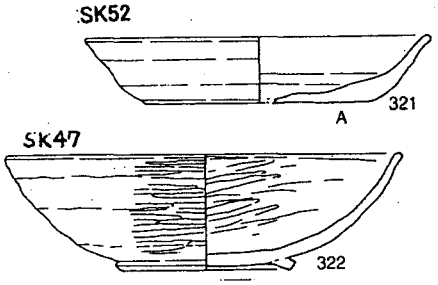
23 Fig.19



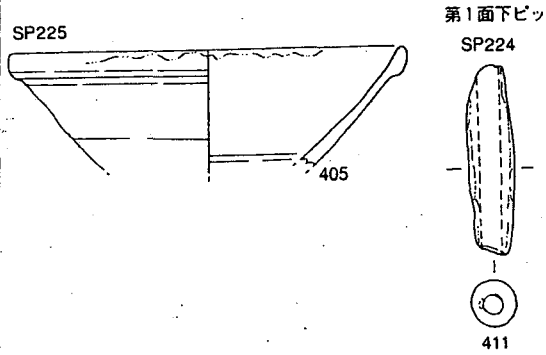


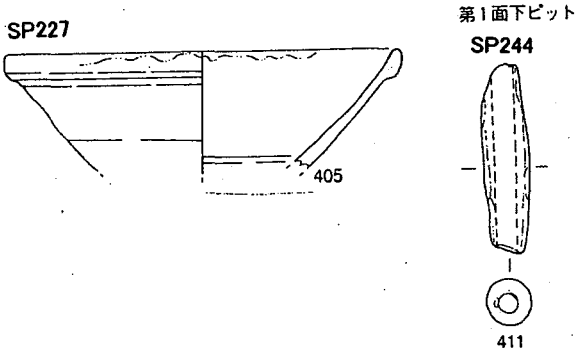
29 Fig.24



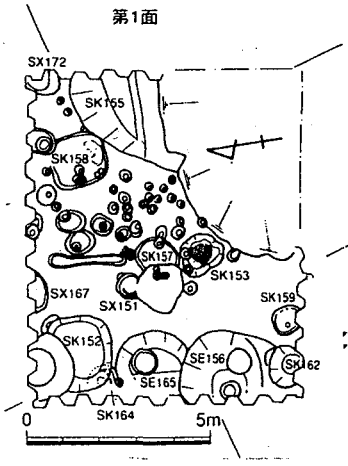


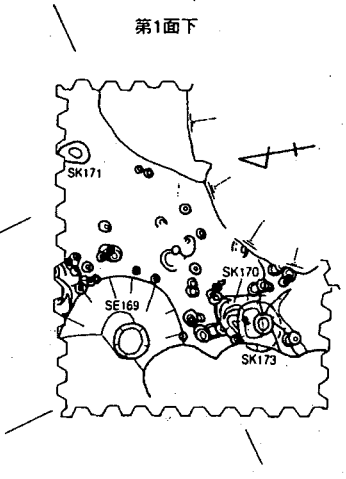
37 Fig.29

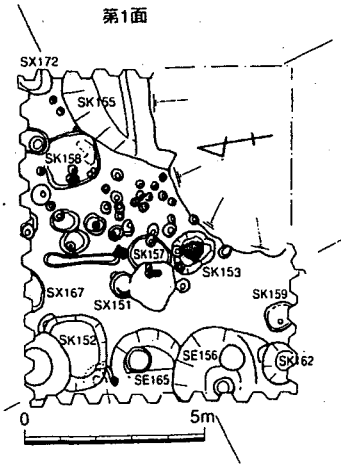


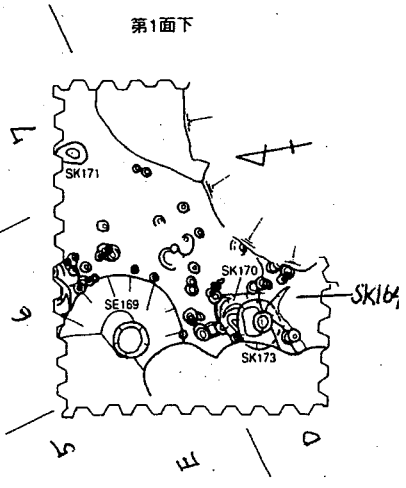


54 Fig.47

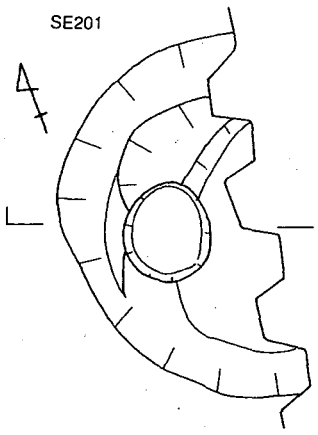
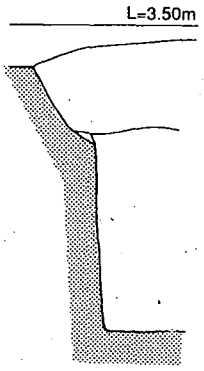
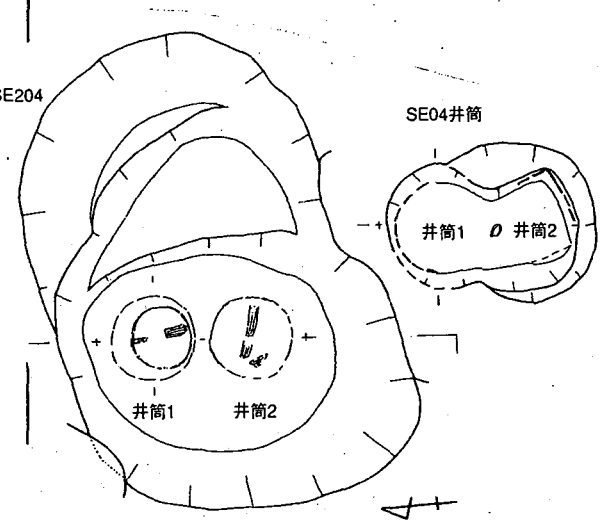
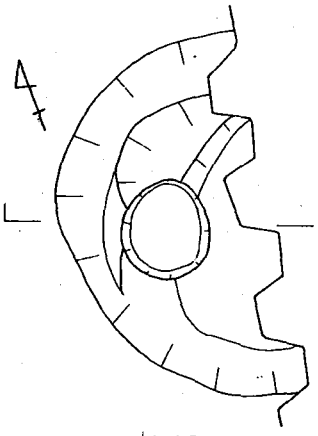
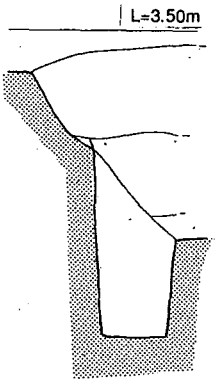
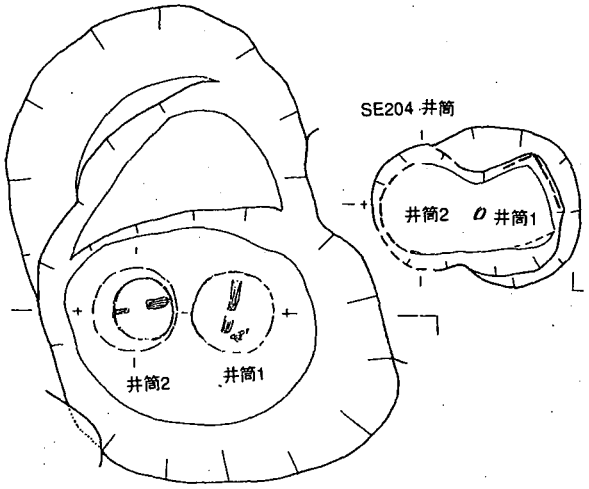








NO.67987

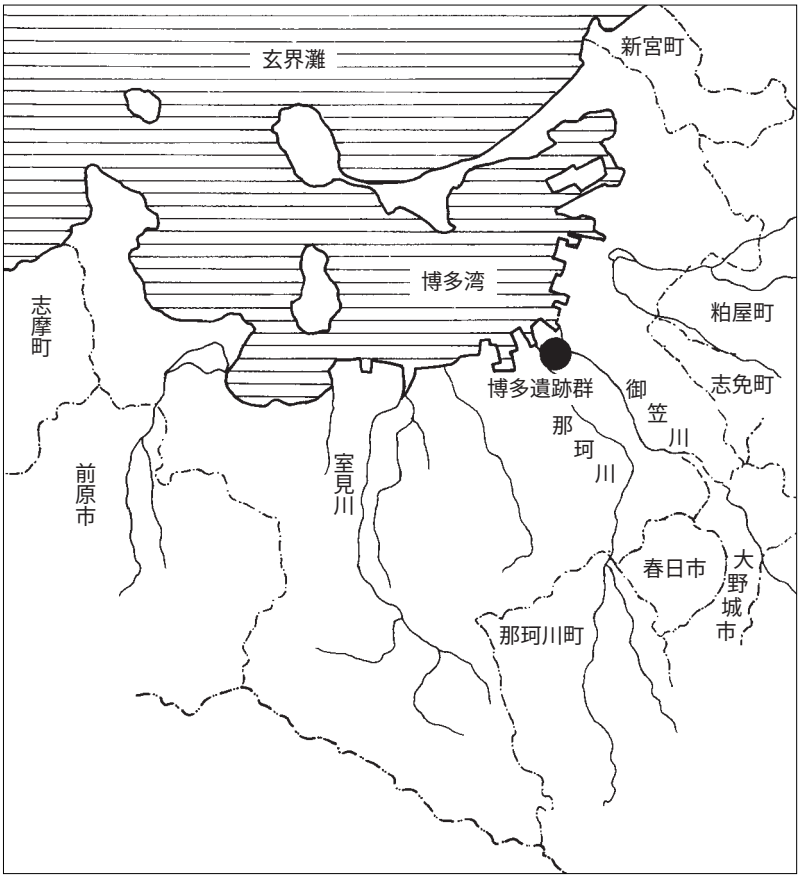
頁	行	誤	正
72	Fig.63	  	  

HAKA　TA

博 多 130

―博多（はかた）遺跡群第173次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1042集



遺跡略号　HKT－173
調査番号　0708

2009

福岡市教育委員会

序

海に開かれたアジアの交流拠点都市づくりを目指す福岡市は、大陸文化の受入口として古来より繁栄して来ました。その証拠を示す貴重な文化遺産が市内には数多く残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの責務であります。

博多は大陸交易の窓口として古代から繁栄してきた地域です。博多地区での調査は昭和52年の地下鉄建設に伴う調査が最初です。以後急激に進む再開発に対して、本市は記録保存の調査を行い、文化財の保護に努めていますが、それらの調査によって、博多が弥生時代から現代に至るまで連綿として続く大遺跡であることが判明してきています。

本書は、平成19年度に実施した博多遺跡群第173次調査の成果を報告するものです。調査では弥生時代中期の甕棺墓、古墳時代から中世にかけての集落跡や墓を検出しました。平安時代の墓からは鏡などの副葬品とともに、人骨が出土しました。平安時代の人骨は博多遺跡群では出土例が少なく重要なものです。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業者をはじめとして、関係各位のご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

平成21年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　山田　裕嗣

凡　例

(1)　本書は、福岡市教育委員会が平成19年（2007）度に福岡市博多区祇園町２－21で調査を実施した発掘調査報告書である。
(2)　発掘調査は埋蔵文化財第２課の山崎龍雄が担当して行った。
(3)　遺構・遺物の実測は山崎が主として行い、遺構実測は一部本市埋蔵文化財第２課の阿部泰之（現埋蔵文化財第１課）と今井孝博、橋口達也氏（現福岡女子短期大学教授）、藤野雅基、坂口剛毅の協力を得た。
(4)　本書で使用した遺構記号はSC：竪穴住居跡、SD：溝、SE：井戸、SK：土坑、SP：ピット、ST：甕棺墓、SR：木棺墓、SX：その他としている。
(5)　本書に使用した図面の浄書は山崎が行った。
(6)　調査で出土した中世輸入陶磁器の分類については福岡市教育委員会『博多60』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第543集1997年）を基に行い、中世輸入陶磁器と土師器の時期の比定については太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』（2000年）、山本信夫『統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて－』『乙益重隆先生古希記念論文集』（1990年）を参考にした。また近世陶磁器については九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』を参考にした。陶磁器の判定については本市調査員の田中克子の協力を得た。
(7)　中世土師器皿・坏の底部調整の記述については、図中にA：糸切り、B：ヘラ切り、C：板状圧痕の記号を組み合わせて付けたので、割愛した。
(8)　遺構・遺物の撮影は山崎が行った。
(9)　本書に使用した方位は磁北であり、真北とは６°30′西偏する。
(10)　第Ⅰ区で出土した人骨の調査については九州大学大学院比較社会文化研究院教授中橋孝博氏に依頼し、玉稿を賜った。また第Ⅲ区出土甕棺内の赤色砂については埋蔵文化財センターの田上勇一郎に分析を依頼した。
(11)　調査で出土した貝類の分析については本市文化財部専門調査員の山崎純男氏に依頼した。
(12)　土層・遺物の色調の記録については新版標準土色帖を使用した。
(13)　調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。
(14)　本書の執筆・編集は山崎が行った。

博多遺跡群第173次調査概要

遺跡略号	調査番号	調査地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当	分布地図番号
HKT-173	0708	福岡市博多区祇園町2－21	1781.78㎡	645㎡	ホテル・事務所ビル建設	2007.05.01～09.18	山崎龍雄	天神49

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の組織 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境 …… 2
　1　遺跡の立地と歴史的環境 …… 2
第Ⅲ章　調査の記録 …… 3
　1　第Ⅰ区の調査　1）調査の概要 …… 3
　　2）第１面の調査 …… 4
　　3）第２面の調査 …… 41
　2　第Ⅱ区の調査　1）調査の概要 …… 53
　　2）第１面の調査 …… 54
　　3）第２面の調査 …… 66
　3　第Ⅲ区の調査　1）調査の概要 …… 69
　　2）第１面の調査 …… 70
　　3）第２面の調査 …… 82
　4　まとめ …… 89
　付論１　博多遺跡群第173次調査区出土の貝類について …… 89
　付論２　博多遺跡群第173次調査ST258出土の赤色砂について …… 92
　付論３　福岡市博多遺跡群第173次発掘調査出土の中世人骨 …… 93

挿　図　目　次

Fig.1　博多遺跡群と調査地点の位置（1/25,000）…… 2
Fig.2　第173次調査地点位置図（1/4,000）…… 3
Fig.3　調査区配置図（1/400）…… 4
Fig.4　第Ⅰ区第１面・第１面下遺構全体図（1/200）…… 5
Fig.5　調査区北壁・南北ベルト土層（1/60）…… 5
Fig.6　SE02・05・06・64（1/50）…… 7
Fig.7　SE04・09・20、SK03（1/50）…… 8
Fig.8　SE02・04・05出土遺物（1/3・1/4）……10
Fig.9　SE04・05出土遺物（1/3・1/4）……11
Fig.10　SE05・09出土遺物（1/3・1/4）……12
Fig.11　SE20出土遺物Ⅰ（1/3・1/4）……13
Fig.12　SE20出土遺物Ⅱ（1/3）……14
Fig.13　SE46・63、SK51（1/50）……15
Fig.14　SE46出土遺物（1/3・1/4）……16
Fig.15　SE46・63・66・67出土遺物（1/3）……17
Fig.16　各井戸出土石製品、骨製品（1/3）……19
Fig.17　SK14・17・22・24（1/40）……21
Fig.18　SK07･18･27･28･29･57、SK07出土遺物（1/40･1/3）……22
Fig.19　SK14・15・17出土遺物（1/3）……23
Fig.20　SK18・28出土遺物（1/3）……25
Fig.21　SK29・57出土遺物（1/3）……26
Fig.22　SK22・24・26・27・30・31・33・44出土遺物（1/3）‥27
Fig.23　SK40・43・44・47・53（1/40）……28
Fig.24　SK40・43～45・47出土遺物（1/3）……29
Fig.25　SK55（1/40）……30
Fig.26　SK47・52・55出土遺物（1/3）……31
Fig.27　各土坑出土石製品（1/3）……33
Fig.28　第１面ピット出土遺物（1/3・1/4）……36
Fig.29　第１面・第１面下ピット出土遺物（1/3）……37
Fig.30　その他（SX）の遺構等出土遺物（1/3）……38
Fig.31　第１面遺構面出土遺物（1/3）……39
Fig.32　各遺構出土石製品（1/3）……40
Fig.33　各遺構出土鉄製品、銅銭（2/3・1/2・1/3）……41
Fig.34　第２面遺構全体図（1/200）……42
Fig.35　SC109・112・113（1/60）……43
Fig.36　SC109・112・113出土遺物（1/4・1/3・1/2）……44
Fig.37　SK104・105・115（1/40）……45
Fig.38　SK104・105・115・118出土遺物（1/4・1/3）……46
Fig.39　SR108と出土遺物（1/30・1/2・1/3）……47
Fig.40　SX107検出状況（北西から）……48
Fig.41　SX107出土遺物Ⅰ（1/4）……49
Fig.42　SX107出土遺物Ⅱ（1/4）……50
Fig.43　第２面ピット出土遺物（1/3）……50
Fig.44　第１面下出土遺物（1/3・1/4）……51
Fig.45　第２面包含層出土遺物（1/3・1/4）……52
Fig.46　包含層出土石製品（1/3・1/4）……53
Fig.47　第Ⅱ区各面遺構全体図（1/200）……54
Fig.48　SE156・165・169、SK155・162（1/50）……56
Fig.49　SE156・165出土遺物（1/3）……57
Fig.50　SE169出土遺物（1/3）……58
Fig.51　SK152・153・158 （1/40）……59
Fig.52　SK153・155・157～159出土遺物（1/3）……61
Fig.53　SK171・173・188・189（1/40）……62
Fig.54　SK152・162・164・170・171・173出土遺物（1/3・1/4）…63
Fig.55　SX172・174出土遺物（1/3）……64
Fig.56　SE169出土鉄製品（1/2）……64
Fig.57　第１面ピット、遺構面出土遺物（1/3・1/4）……65
Fig.58　各遺構面出土石製品、玉類、銅銭（1/3･2/3･1/1･1/4）…66
Fig.59　SC181、SX186（1/60・1/20）……67
Fig.60　SC181、SK189、SX186、ピット、包含層出土遺物（1/3･1/4）……68
Fig.61　第Ⅲ区第１面・第２面遺構全体図（1/200）……69
Fig.62　SD225土層とSD225・244出土遺物（1/40・1/3・1/4）…70
Fig.63　SE201～204・206、SK205（1/50）……72
Fig.64　SE210・211・215・218・222（1/50）……73
Fig.65　SE201～204・206・210・211出土遺物（1/3・1/4）……75
Fig.66　SE211・215・218・222出土遺物（1/3・1/4）……77
Fig.67　SK217・223・224・226・229～232・259（1/40・1/50）……78
Fig.68　SK209・223・224・226・230・231出土遺物（1/3・1/4）…79
Fig.69　各面ピット出土遺物（1/3・1/4）……81
Fig.70　攪乱・遺構面・包含層出土遺物（1/3・1/4）……82
Fig.71　SC251・252、SD254土層（1/60）……83
Fig.72　SC251・252、SD254、SK259出土遺物（1/4）……84
Fig.73　ST253・258・261・262・263（1/30）……85
Fig.74　ST253・258・261・262・263甕棺（1/6、1/12）……86
Fig.75　各遺構出土石製品（1/3・1/4）……87
Fig.76　SX264礫群（1/20）……88
Fig.77　各遺構出土鉄製品、銅銭（1/2・2/3・1/3）……88
Fig.78　第173次調査区第１面遺構全体図（1/250）……90
Fig.79　第173次調査区第２面遺構全体図（1/250）……91
Fig.80　赤色砂の実体顕微鏡写真 ……92
Fig.81　蛍光X線スペクトル ……92

写　真　目　次

PL.1　(1) 第173次調査区周辺の状況（東から西方面を臨む）　(2) 第Ⅰ区第１面全景（東から）
(3) 同 第２面全景（東から）　(4) 調査区北壁土層状況（南から）
PL.2　(1) SE09（西から）　(2) SE20（南から）　(3) SE46（南から）
(4) SE63（北西から）　(5) SK14（北から）　(6) SK18・28・29・57（北西から）
(7) SK29焼土検出状況（北から）
PL.3　(1) SK27（西から）　(2) SK40（南から）　(3) SK43（西から）
(4) SK43・44完掘状況（東から）　(5) SK47（西から）　(6) SK52（北から）
(7) SK53（北から）　(8) SK55（東から）
PL.4　(1) 調査区東側第２面検出状況（南から）　(2) SC109、SR108検出状況（東から）
(3) SC112（南東から）　(4) SK 105（北西から）　(5) SK104（南西から）
(6) SK105（東から）　(7) SR108（北から）　(8) SR108人骨検出状況（北から）
PL.5　(1) 第Ⅱ区第１面全景（東から）　(2) 同 第１面下全景（西から）
(3) 同 第２面全景（南から）　(4) SE156・165・169（南東から）
PL.6　(1) SE156（西から）　(2) SK153（西から）　(3) SK155（北から）
(4) SK171（北から）　(5) SK173（南から）　(6) SC181（西から）
(7) SX186（南から）　(8) SK189（南から）
PL.7　(1) 第Ⅲ区第１面全景（西から）　(2) 同東側第１面全景（西から）
(3) 同 第１面西側全景（北から）　(4) 同 第２面全景（東から）
PL.8　(1) SE201（西から）　(2) SE 202（南東から）　(3) SE203（北東から）
(4) SE204（東から）　(5) SE215（南から）　(6) SE210（北西から）
(7) SE211（北西から）　(8) SE211井側（北西から）
PL.9　(1) SE218（南東から）　(2) SD225（北西から）　(3) SD225遺物出土状況
(4) SK223（北西から）　(5) SK224（南東から）　(6) SK230（北西から）
(7) SK232（北東から）　(8) SX264礫群（南東から）
PL.10　(1) SC251（北東から）　(2) 同 遺物出土状況　(3) SC252（北から）
(4) SD254（南西から）　(5) ST253・262・263（北西から）　(6) ST263（北から）
(7) ST258（北西から）　(8) ST261（東から）
PL.11　第Ⅰ区～第Ⅲ区出土遺物（縮尺不統一）
PL.12　第Ⅲ区出土遺物（縮尺不統一）

表　目　次

表１.　博多遺跡群第173次調査区SK17出土貝類構成比表 …… 92

第Ⅰ章　はじめに

1　調査に至る経過

平成18（2006）年４月16日付けで株式会社エスパース建設（現（株）ミヤビエステックス）より、福岡市博多区祇園町２-21番におけるホテル建設の為の埋蔵文化財事前審査願い（事前審査番号18－２－0108）が福岡市教育委員会に提出された。申請地は過去、61－２－271で試掘歴があり、その時は計画建物が低層建物で、基礎が遺構を損なわないということから、調査は実施していなかったが、今回は現在のホテルを解体して、新たにホテルを建て直す計画であり、平成18年12月14日、15日に再度、確認調査を実施して遺跡の有無を確認した。調査の結果、遺跡の存在が確認されたため、申請者側とその取り扱いについて協議を行ったが、設計変更は困難であり、申請者側の費用負担によって、記録保存のための調査を実施する事となった。本調査は旧建物の地下室などによって、遺構の破壊を受けた部分を除いた範囲を対象地とした。旧建物の基礎や地下構造物の撤去後、調査を行なうこととなったが、撤去作業の遅れなどから、調査と工事は並行するということになり、安全対策を充分に配慮して、調査を行うこととなった。調査区は建築工事計画がホテル棟、オフィス棟、立体駐車場棟の三棟の建物に分かれるので、工事を急ぐ順にホテル棟を第Ⅰ区、立体駐車場棟を第Ⅱ区、オフィス棟を第Ⅲ区とした。本調査は、平成19年４月26日から第Ⅰ区の表土鋤取り立ち会い、５月１日から作業員を導入して調査に着手し、９月18日の発掘機材等の撤収で調査を終了した。調査実施面積は申請面積1781.78㎡中の645㎡である。調査報告書作成作業は平成20年度に実施した。

調査にあたっては、申請者の株式会社ミヤビエステックス、及び工事担当のミライ建設工業株式会社の方々に調査費用の負担、現場事務所の提供など多大な協力を受けた、記して感謝の意を表する次第である。

2　調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

調査委託	株式会社ミヤビエステックス代表取締役　山岸　俊雄	
調査主体	福岡市教育委員会	
調査総括	文化財部埋蔵文化財第２課長	力武　卓治（前任）、田中　寿夫（現任）
	埋蔵文化財第２課調査第１係長	杉山　富雄
事務担当	文化財管理課管理係	鈴木　由喜（前任）、古賀とも子（現任）
調査担当	埋蔵文化財第２課主任文化財主事	山崎　龍雄
調査作業	橋口達也（現福岡女子短期大学教授）、浅井伸一、安藤建典、井上澄敏、井上正通、小野千佳、榎田信一、金谷豊美、神原堅、栗木昭孝、近藤由美、真田弘二、指原始子、関博行、田口恵子、竹原吉秋、武田潤子、高手興志子、田原忠昭、津田照子、土橋一則、徳永洋二郎、西野光子、西川吾郎、野口リウ子、野田順二、花田昌代、保坂由美子、藤野雅基、森弘品子、森下初美、山下美枝子、山本千亜紀、吉田哲夫	
整理作業	井上朝美、木藤直子、増永好美、村上信子	

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

1　遺跡の立地と歴史的環境（Fig.1・2）

博多遺跡群は、玄界灘に開口した博多湾のほぼ中央部、那珂川・御笠川の河口部に形成された砂丘上に立地する弥生時代前期から現代まで連綿と続く複合遺跡である。遺跡の範囲は南北長1.5km、東西幅１kmを測る。遺跡群が立地する砂丘は現在の微地形から推定して大きく三列認められる。三列の砂丘は内陸側から砂丘１、砂丘２、砂丘３と仮称され、砂丘１・２は博多浜、砂丘３は息浜と呼ばれている。博多遺跡群の始まりは内陸側の砂丘１の一帯に弥生時代前期の甕棺墓地や中期の集落跡が営まれる。古代にかけても砂丘１・２の博多浜が中心となる。弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、東の東海地方の土器をはじめ、西日本各地の土器が出土しており、対外交流の窓口である博多遺跡群の特色を見せ始める。古墳時代中期には前方後円墳を含む古墳群が造営され、家形埴輪などを含む埴輪が出土している。海浜砂丘上の古墳は市域では箱崎遺跡や唐原遺跡でも確認されている。

古代は博多浜砂丘上に100メートル四方の区画溝で囲まれた官衙的施設が築かれたようで、官職にあった人が付けた帯金具や石帯、官職を示す墨書土器なども出土しており、鴻臚館に関連する外交施設の存在が考えられている。古代末、平和台にあった鴻臚館が衰退するのに替わって、博多が海外交渉の窓口として発展しはじめ、遺跡は砂丘３の息浜部へと拡大してゆく。

中世前半には「博多津唐房」と中国の史料に見られるような中国人居留区なども造られ、中国を中心とする東アジアとの交易が大々的に始まり、交易によってもたらされた多量の輸入陶磁器が出土する。鎌倉時代には文永の役によって博多は壊滅的被害を受けるが、再度の元軍襲来を防ぐために息浜北辺海浜上に石塁が築かれる。その石塁と思われる遺構が第111次地点で見つかっている。また幕府の出先機関の鎮西探題が置かれる。探題の場所は櫛田宮周辺が推定されている。室町時代から戦国時代にかけては、博多浜は大内氏、息浜は大友氏の支配下に入る。両大名の庇護のもとで、博多商人は

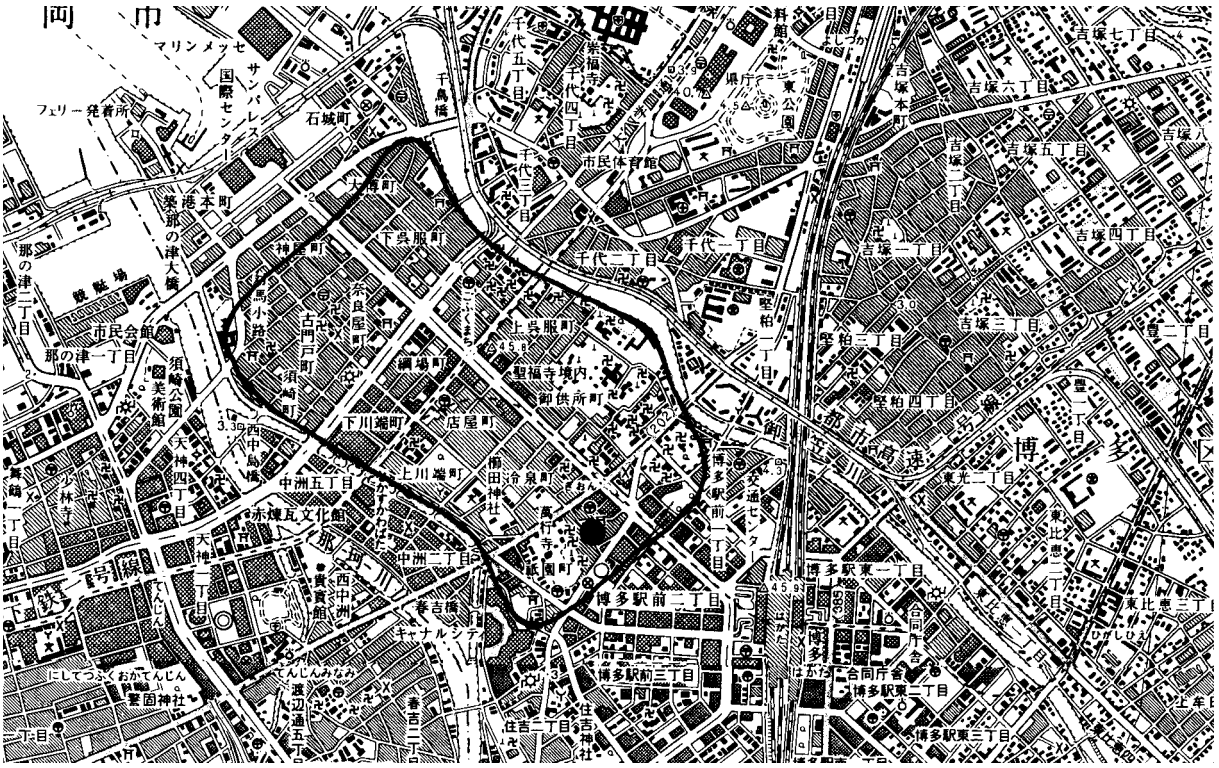


Fig.1　博多遺跡群と調査地点の位置（1/25,000）

中国の明との貿易を発展させ、大内氏滅亡以降は大友氏のもとで、息浜が博多の中心として発展していく。キリスト教の教会なども息浜に建てられる。大友氏が衰退を始める戦国時代末以降、肥前の龍造寺氏、薩摩の島津氏など他地域大名の焼き討ちを受け、荒れ果てる。天正15年（1587）の豊臣秀吉の九州平定後、秀吉は来たるべき朝鮮侵攻に向けて、博多を兵站基地とするための太閤町割といわれる博多再建を行う。続く小早川氏、その後の黒田氏のもとで、近世博多の町並みに再整備されていく。

第Ⅲ章　調査の記録

1　第Ⅰ区の調査（Fig.3～5・34、PL.1）

1）　調査の概要

第Ⅰ区は申請地西側のホテル棟部分。西側隣地は第156次・169次調査が実施されている。調査区の東側は地下構造物で消滅しているので、その部分を廃土置き場として調査を行った。調査地の北西部と南東部は建物基礎で残りは悪いが、井戸などの深い遺構は残っていた。調査は試掘調査に基づいて、大きく二面を調査面とし、各面でそれぞれ掘り下げ未確認遺構の調査を行い、実際には四面の調査となっている。調査区は他区も含めて５m四方の小区を設定し、南北方向は南からアルファベット順で、東西方向は西から数字の番号を付け、小区の番号とした。調査は平成19年４月26の表土除去立会から開始し、７月６日まで実施した。調査面積は325㎡である。第１面は地表面から－1.6m程掘り下げた標高4.4m、第2面は標高3.8～3.9mで、遺構面は暗褐色砂である。最後に明黄褐色細砂まで掘り下げ、甕棺など弥生時代遺構の確認の有無を行ったが確認出来なかった。

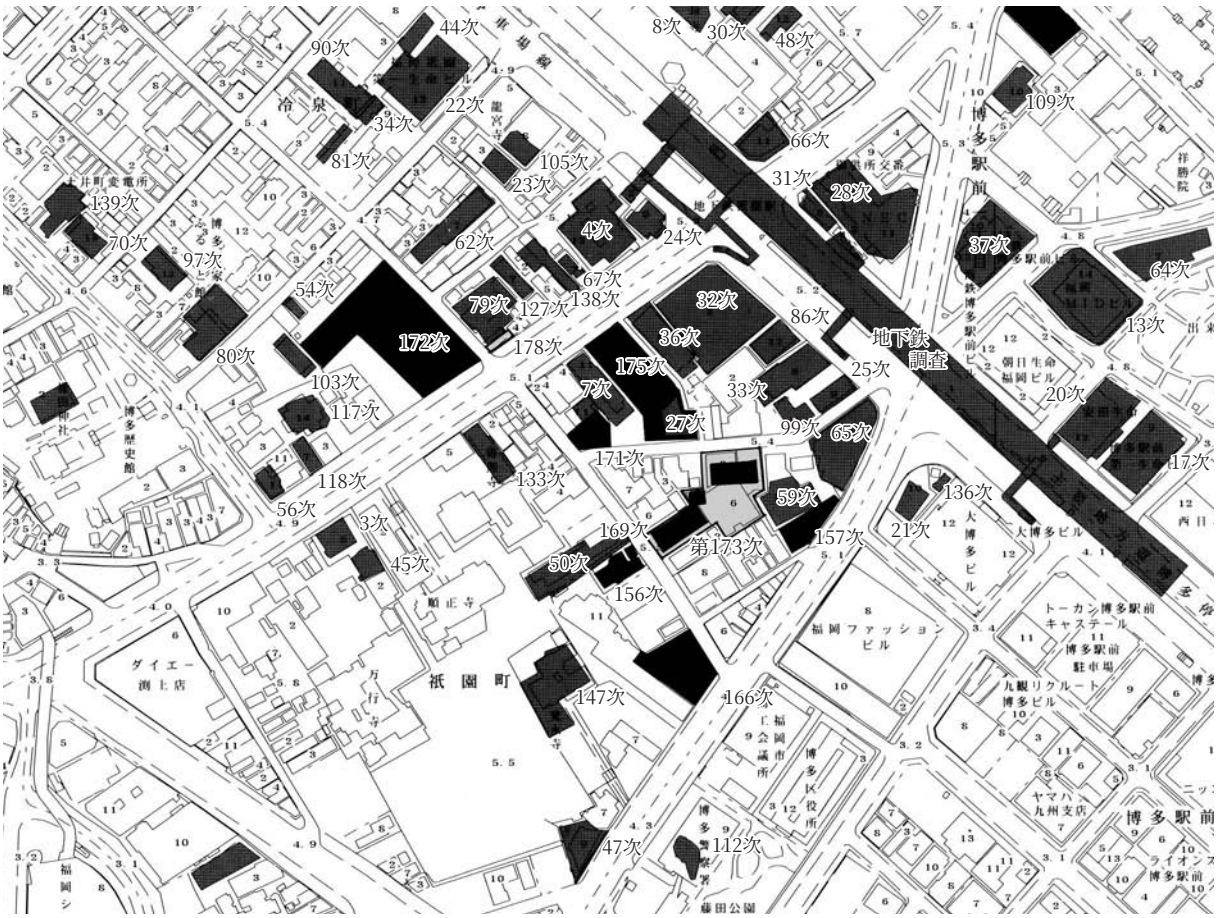


Fig.2　第173次調査地点位置図（1/4,000）

2)　第１面の調査

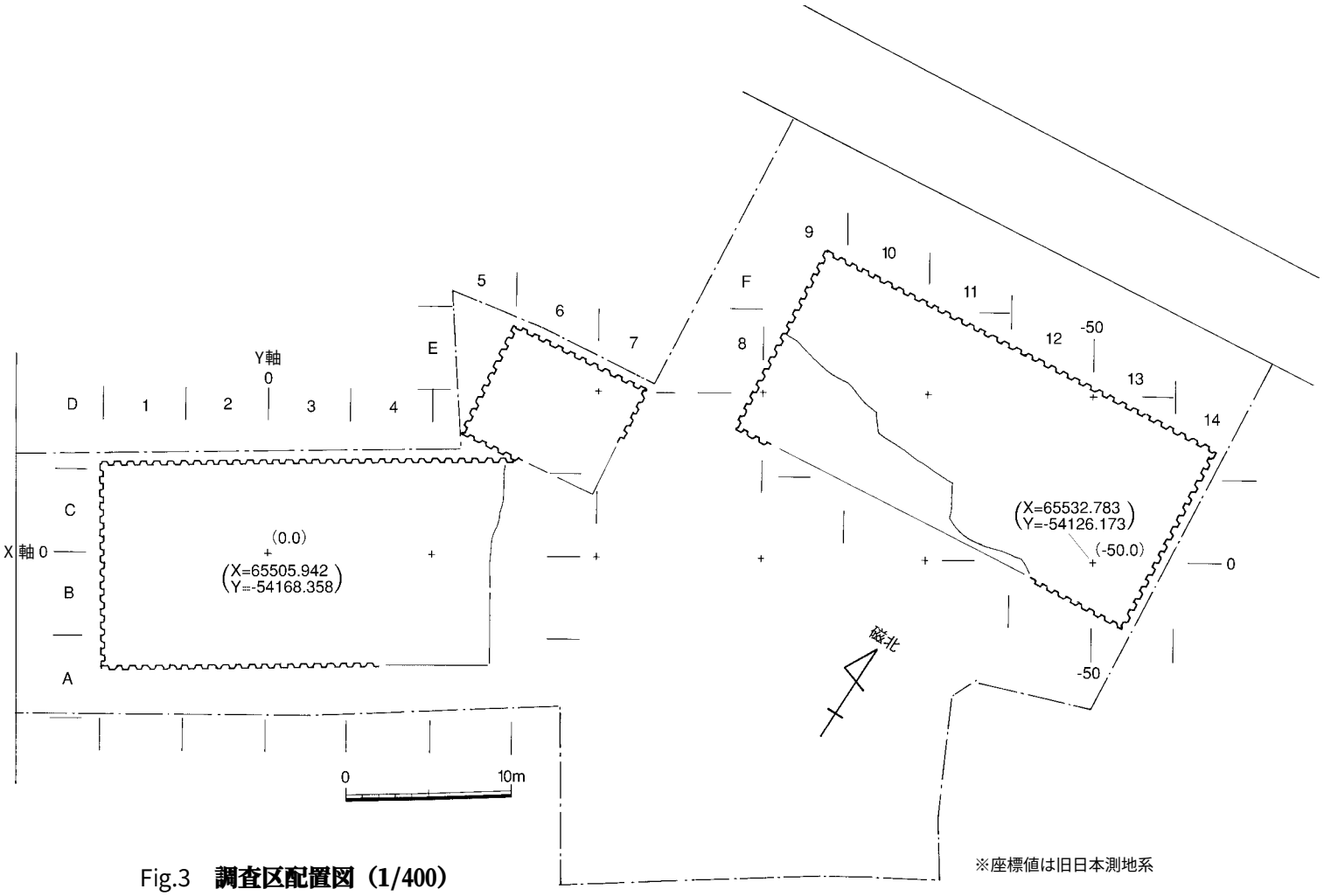
①　井戸状遺構（SE）

近世から中世にかけての井戸を10基（中世５基、近世５基）確認した。

SE02（Fig.6・8）　C-1区の攪乱部で検出した近世井戸。掘方平面形は円形で、規模は直径1.3mで、未完掘であるが深さ3.1m（標高0.9m）を測る。下部の壁面は砂礫となる。埋土から多量の平瓦がある。本来は瓦井戸であろう。　出土遺物は古代から近世にかけての土器類、中国産輸入陶磁器、近世の国産陶磁器、古代～近世の瓦類などが出土している。１～３は上層出土。１・２は近世磁器。１は形打ちの四方入隅額形皿。19世紀後半のもの。２は金魚文様のレンゲ。近世後半以降のもの。３は青磁。龍泉窯系Ⅰ類碗底部。12世紀中頃～後半のもの。４は中層出土の白磁皿Ⅳ類。復元口径11.0㎝、器高2.7㎝を測る。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。５～７は下層出土。５は土師器坏。復元口径11.6㎝、器高2.6㎝を測る。６・７は白磁。６はⅥ類の底部片。７は瓦玉。白磁の底部を再利用したもの。

SE04（Fig.7・8・9・16・33、PL11）　A・B-1区の隅で検出した井戸。西と南側は鋼矢板にかかり未掘。西側にはSK03やピットがある。掘方の確認規模は東西4.4m、南北3.5m、深さ2.6mを測る。底は壁が崩壊したので未掘。埋土は黒褐色砂質土や暗黄褐色砂質土、黄褐色砂などがレンズ状に堆積し、埋立られたものか。２m程掘り下げた面で、直径0.8mの井筒と思われる円形土坑を確認したが、土層壁が崩落のため未掘で詳細は不明。

出土遺物は中世の土師器、須恵器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、瓦類、古代の土師器・須恵器、



※座標値は旧日本測地系

Fig.3　調査区配置図（1/400）

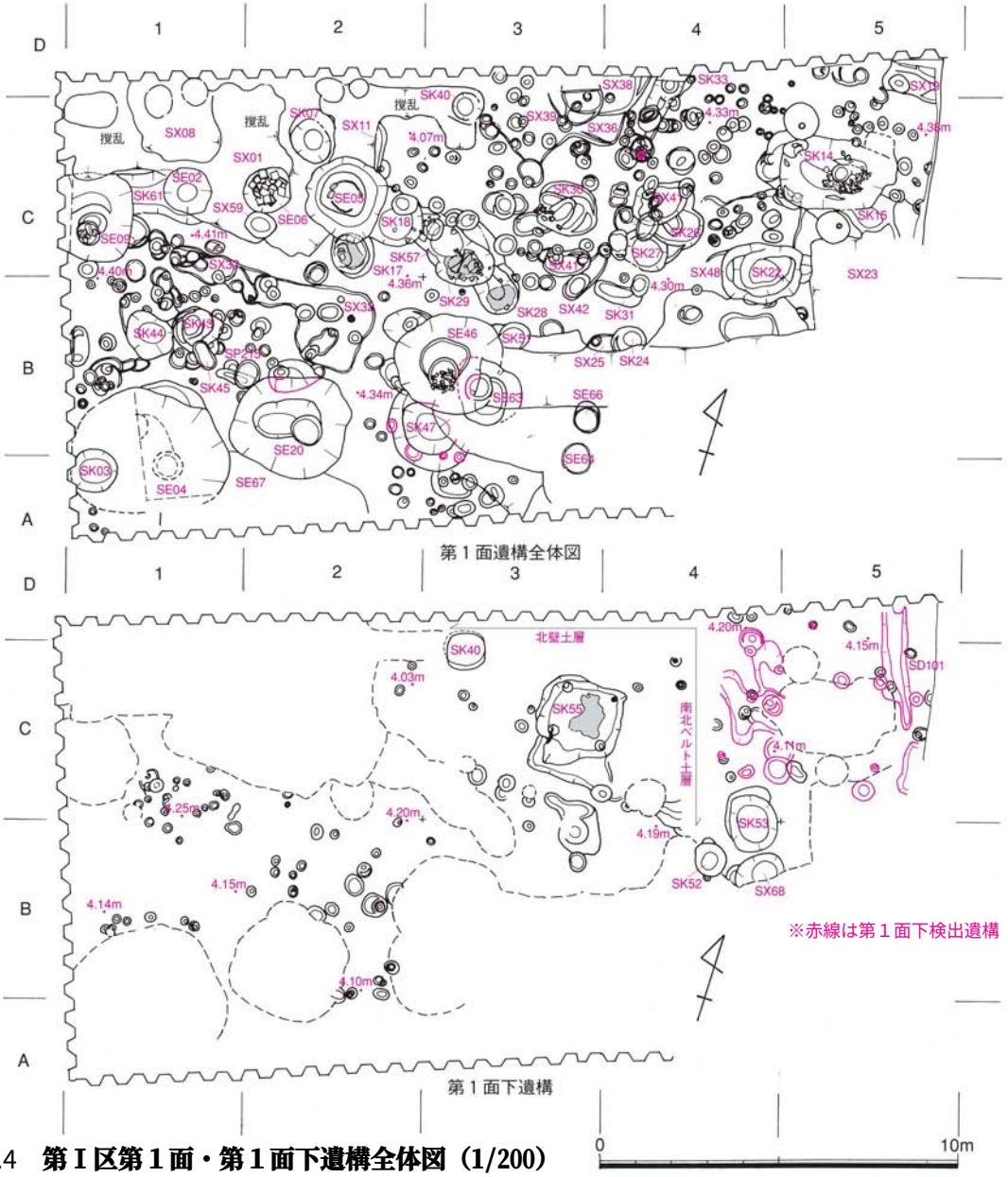
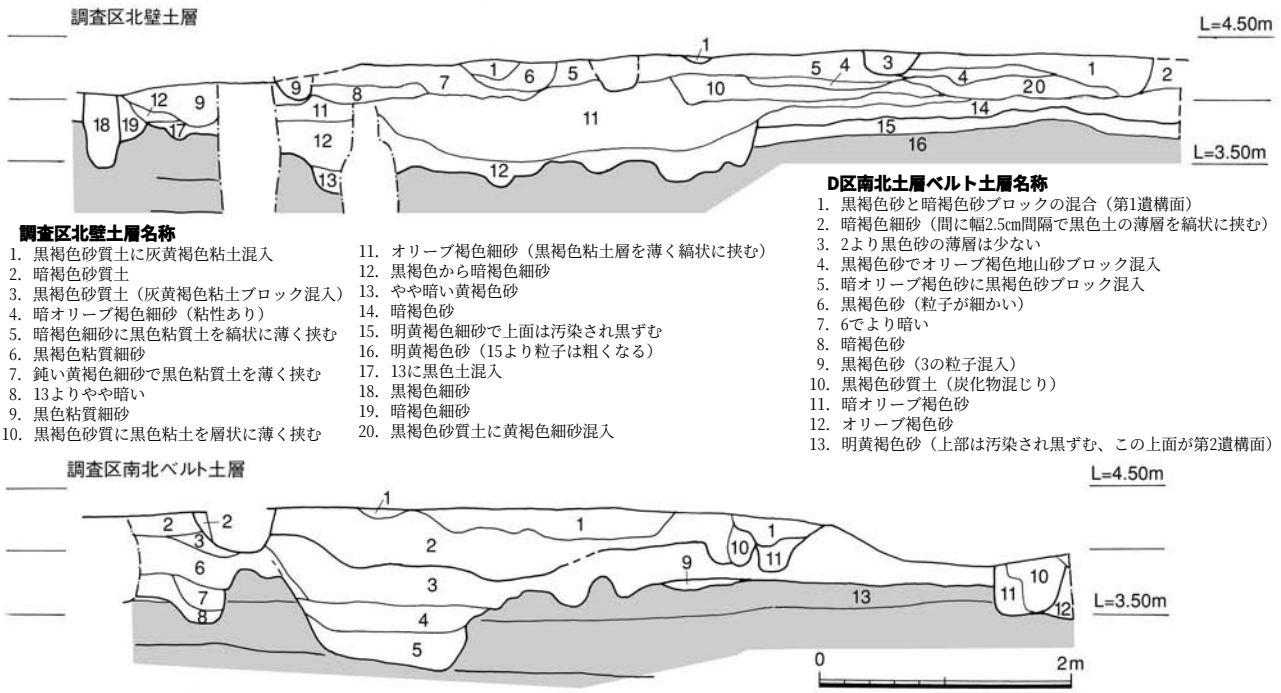


Fig.4　**第Ⅰ区第１面・第１面下遺構全体図（1/200）**



調査区北壁土層名称

1. 黒褐色砂質土に灰黄褐色粘土混入
2. 暗褐色砂質土
3. 黒褐色砂質土（灰黄褐色粘土ブロック混入）
4. 暗オリーブ褐色細砂（粘性あり）
5. 暗褐色細砂に黒色粘質土を縞状に薄く挟む
6. 黒褐色粘質細砂
7. 鈍い黄褐色細砂で黒色粘質土を薄く挟む
8. 13よりやや暗い
9. 黒色粘質細砂
10. 黒褐色砂質に黒色粘土を層状に薄く挟む
11. オリーブ褐色細砂（黒褐色粘土層を薄く縞状に挟む）
12. 黒褐色から暗褐色細砂
13. やや暗い黄褐色砂
14. 暗褐色砂
15. 明黄褐色細砂で上面は汚染され黒ずむ
16. 明黄褐色砂（15より粒子は粗くなる）
17. 13に黒色土混入
18. 黒褐色細砂
19. 暗褐色細砂
20. 黒褐色砂質土に黄褐色細砂混入

D区南北土層ベルト土層名称

1. 黒褐色砂と暗褐色砂ブロックの混合（第1遺構面）
2. 暗褐色細砂（間に幅2.5cm間隔で黒色土の薄層を縞状に挟む）
3. 2より黒色砂の薄層は少ない
4. 黒褐色砂でオリーブ褐色地山砂ブロック混入
5. 暗オリーブ褐色砂に黒褐色砂ブロック混入
6. 黒褐色砂（粒子が細かい）
7. 6でより暗い
8. 暗褐色砂
9. 黒褐色砂（3の粒子混入）
10. 黒褐色砂質土（炭化物混じり）
11. 暗オリーブ褐色砂
12. オリーブ褐色砂
13. 明黄褐色砂（上部は汚染され黒ずむ、この上面が第2遺構面）

Fig.5　**調査区北壁・南北ベルト土層（1/60）**

中国銭、近世と思われる遺物がある。８～12は表面出土。８・９は白磁。８は碗Ⅶ類碗。外面体部下半は露胎。９はⅨ類の口剥げの皿。復元口径8.6㎝、器高1.6㎝を測る。10は龍泉窯系青磁Ⅲ類の蓮弁の青磁鉢底部片。全面施釉である。11は青白磁碗底部。内面見込みにヘラ片切彫りと櫛目文が入る。12は磁灶窯系陶器の鉢細片。不透明の薄いオリーブ黄色釉がかかる口縁部はT字形を呈し、上面重ね焼き痕が残る。13～30は上層出土。13～18は土師器。13・14は小皿。復元口径8.0㎝・10.6㎝を測る。器高1.1㎝・復元1.7㎝を測る。15～17は坏。復元口径12.2～12.5㎝、器高2.6～2.9㎝を測る。18は盤で復元口径16.0㎝を測る。内外面丁寧なナデ。19～21は白磁。19はⅣ類碗口縁部片。体部外面下半は露胎。20はⅦ類の底部。高台部はケズリで露胎。21はやや上げ底の皿。底部は露胎でケズリ後丁寧な擦り。明緑灰色釉がかかり、青白磁の可能性もある。22・23は青磁。22は龍泉窯系碗Ⅰ-６類で、灰オリーブ釉が厚めにかかる。発色は良い。23は龍泉窯系小碗Ⅰ類碗底部。見込みは櫛描き文を施す。24～27は陶器。24は褐釉陶器の把手片。25・26は碁笥底状の底部。25は灰オリーブ釉がかかる。26は褐釉陶器か。暗褐色から暗オリーブ褐色釉がかかる。27は越州窯系青磁の把手細片。28・29は中世須恵器の鉢。復元口径23.3㎝・28.8㎝を測る。東播磨の魚住窯系のものか。28・29の内面は使用で摩滅する。30は製塩土器細片。内面細かい布目が残る。鈍い赤褐色を呈し、焼き締まる。31・32は中層出土。31は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-２a類の底部。見込みは無文で高台内面は露胎でケズリ。灰オリーブ釉がかかる。32は磁州窯系黄釉絞胎陶器の梅瓶の胴部片。外面黄釉、内面白釉がかかる。33・34は下層出土。33は平底の龍泉窯系白磁皿Ⅵ類。復元口径10.0㎝、器高2.2㎝を測る。見込みヘラ片切彫りの花文で、外底は露胎。34は褐釉陶器の壺の胴部片か。陽刻文様と貼付け把手が付く。35～41は井筒内出土。35～37は土師器。35・36は小皿。復元口径8.6㎝・9.0㎝、器高1.2㎝・1.0㎝を測る。37は坏で復元口径11.0㎝、器高2.7㎝を測る。38・39は瓦器椀。38は復元口径約14㎝を測る。外面はヘラミガキ。40は浅黄色釉が体部から内面までかかる磁器合子。釉際は橙色を呈す。41は建窯系の黒釉の天目碗底部。高台部は露胎。42～44は管状の土錘。42・43は上層出土。43は残存長6.3㎝を測る。44は井筒内出土。最大径2.5㎝を測る。160は下層出土。滑石製石鍋の破片であるが、再利用したのか、工具による切り込み痕が残る。650は中国銭。北宋の至和通宝（初鋳年1054年）である。外に図示出来ないが皇宋通宝（初鋳年1038年）がある。出土遺物から遺構の時期は12世紀後半～13世紀後半頃と考える。

SE05（Fig.6・9・10・16）　C-２区で検出した近世井戸。掘方平面形は略円形で、規模は上面で2.4m×2.3m、深さ約3m（標高1.3m）を測るが、未完掘である。深さ2.3mの所で瓦の枠が１段検出されたが残りは悪い。瓦の部分より下の壁面は砂礫となる。掘方埋土は黒灰色土。下層井側内は黒灰色泥土となる。井側内の中から瓦が３枚出土。枠から外れて中に倒れたものであろう。使用瓦の法量は長さ28㎝、幅25㎝である。　出土遺物は古墳時代から古代の須恵器や瓦、中世の土師器、瓦器、中国産陶磁器、近世の国産陶磁器、瓦質土器、土師質土器、瓦類がある。井戸枠材の瓦が多く出土している。45～49は上層出土。45は18世紀前半代の肥前系染付磁器小碗底部。46は貝殻状に型打ちした紅皿。19世紀前半のもの。47は白磁大皿底部。見込みに線彫り文様を描く。高台部は露胎。48は中世須恵器の鉢。49は瓦玉。近世の白磁皿底部を再利用したもの。径4.9㎝を測る。50～52は下層出土。50は土師器坏で復元口径12.8㎝、器高2.7㎝を測る。51は染付碗で17世紀後半代の肥前系磁器か。52は同安窯系青磁皿Ⅱ類の平底皿。復元口径10.6㎝を測る。底部は露胎。53・54は井側内出土。53は瓦質土器の火鉢で復元口径34.6㎝を測る。外面丁寧なミガキ調整で、花と蔓草のスタンプを施す。54は肥前磁器染付小坏。17世紀後半のもの。55～59は瓦類。55・56・59は軒平瓦。55は最大長25.7㎝、最大幅21.7㎝を測る。瓦頭文様は宝珠と二葉？の中心飾りから唐草が伸びる文様。56は瓦頭部片で、瓦当文様は三葉の中心飾りから唐草が左右２巻で伸びる文様。59は古代で須恵質の軒平瓦の一部。

57は平瓦。最大長23.8㎝、最大幅26.2㎝を測る。調整はナデ。55～57は燻し瓦で江戸時代以降のもの。58は磚の一部。側面に楔を打込んだような長方形の孔がある。55・58は中層、56・57・59は下層出土。161は中層出土。砥石片で残存長10.6㎝を測る。断面は方形を呈し、各面は砥石として使用されている。石材は頁岩か。

SE06（Fig.6）　C-２区で検出した近世の瓦組井戸。掘方平面形は略円形で、規模は1.18×1.25mを測る。未完掘であるが、遺構面下2.2m（標高0.75m）まで掘り下げた。上面から0.5～0.7m程の深さで井戸枠の平瓦が多数出土し、更に下げたところで井戸枠の瓦が１/４周ほど２段分残っていた。井戸は人為的に壊されたものであろう。使用された瓦の大きさは長さ24.5～26.5㎝、幅19.5～22.0㎝、厚さ2.5～3.0㎝で、法量から３種類に大別出来る。出土遺物は井戸枠の平瓦が多数出土したほか、中世の白磁・青磁、近世以降の国産陶磁器、土師質土器などがある。

SE09（Fig.7・10・16、PL.2）　C-１区西側鋼矢板に一部がかかる掘方が円形の井戸。確認規模は長軸長2.5mを測る。底面は二段堀で深さ1.8mの所で、北側に三段の平坦面があり、南側は円形の井筒がある。井筒直径は0.66mを測る。埋土は明黄褐色砂と黒褐色砂質土の混合土で、下までほぼ均一であり、一気に埋めた状況を示す。井側は桶組と思われ、その痕跡は遺構面下1.5mの所から確認出来た。1.8mあたりには礫群が出土している。井筒内埋土は黒灰色泥土である。

出土遺物は中世の土師器、須恵器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、瓦玉、滑石製品や砥石、鉄釘、鉄滓、焼土ブロックなどがある。60～66・72・73は上層～中層出土。60・61は瓦器椀底部。底部に板状圧痕が残る。12世紀のものか。62・63は白磁。62は碗口縁部片。細かい玉縁口縁

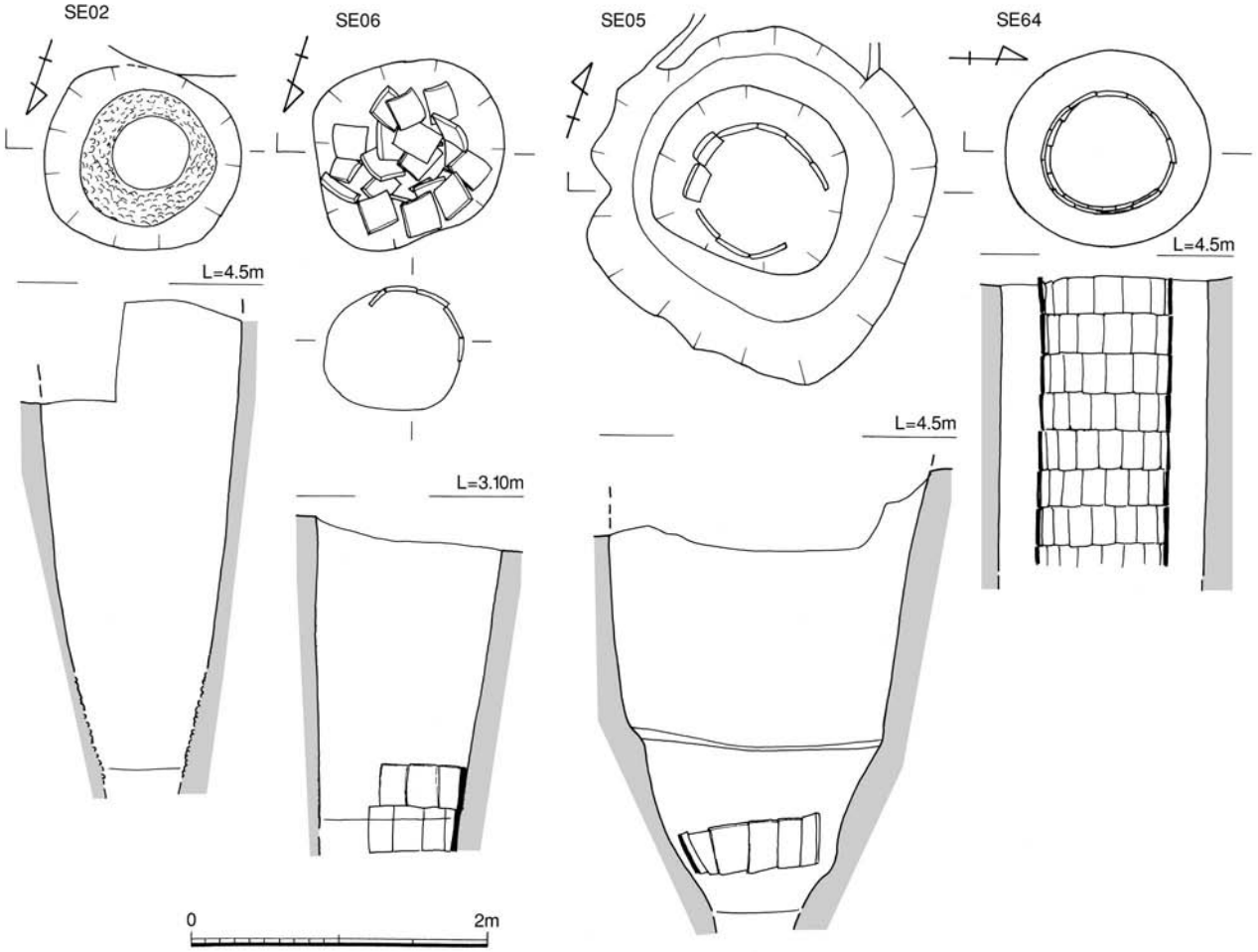
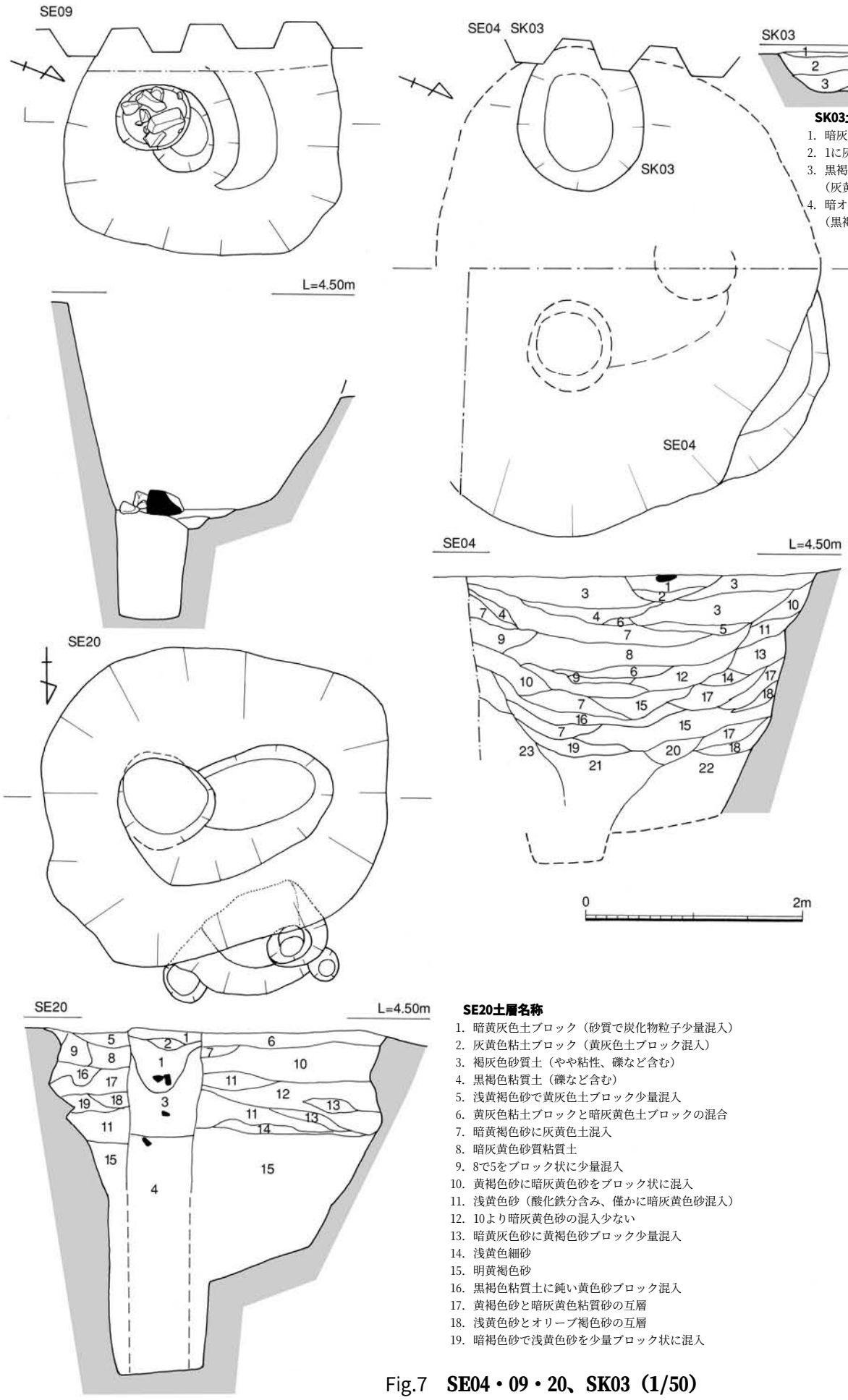


Fig.6　SE02・05・06・64（1/50）



SK03土層名称

1. 暗灰黄色土
2. 1に灰黄色粘土ブロック混入
3. 黒褐色粘質砂質土
（灰黄色粘土ブロック少量混入）
4. 暗オリーブ褐色砂
（黒褐色粘質砂質土混入）

SE04土層名称

1. 黒褐色砂質土
2. 明黄褐色細砂
3. 黒褐色砂質土
（灰黄色砂・炭化物小ブロック少量混入）
4. 暗褐灰色砂質土
（灰黄色粘土ブロック少量混入）
5. 黒褐色砂質土
6. 暗灰黄色砂
7. 暗黄灰色砂質土
（粘性強く、灰黄色粘土ブロック混入）
8. 7で黄褐色砂少量混入
9. 8より黄褐色砂の混入多い
10. 暗オリーブ褐色砂
11. 暗灰黄色砂質土（粘性が強い）
12. 6に黄灰色粘質砂混入
13. 11で炭化物・焼土ブロック混入
14. 鈍い黄色粘質砂と暗灰黄色砂の混合
15. 暗灰黄色粘質砂に鈍い黄色砂混入
16. オリーブ褐色砂
（粘性強く暗黄褐色土混入）
17. オリーブ褐色砂
18. 黒褐色砂
19. 暗褐色砂（やや粘性あり）
20. 鈍い黄褐色砂
21. 黒褐色粘質土に鈍い黄褐色砂
ブロック混入
22. 黒褐色砂と黄褐色砂の互層
23. 鈍い黄色砂に暗黄灰色砂を混入

SE20土層名称

1. 暗黄灰色土ブロック（砂質で炭化物粒子少量混入）
2. 灰黄色粘土ブロック（黄灰色土ブロック混入）
3. 褐灰色砂質土（やや粘性、礫など含む）
4. 黒褐色粘質土（礫など含む）
5. 浅黄褐色砂で黄灰色土ブロック少量混入
6. 黄灰色粘土ブロックと暗灰黄色土ブロックの混合
7. 暗黄褐色砂に灰黄色土混入
8. 暗灰黄色砂質粘質土
9. 8で5をブロック状に少量混入
10. 黄褐色砂に暗灰黄色砂をブロック状に混入
11. 浅黄色砂（酸化鉄分含み、僅かに暗灰黄色砂混入）
12. 10より暗灰黄色砂の混入少ない
13. 暗黄灰色砂に黄褐色砂ブロック少量混入
14. 浅黄色細砂
15. 明黄褐色砂
16. 黒褐色粘質土に鈍い黄色砂ブロック混入
17. 黄褐色砂と暗灰黄色粘質砂の互層
18. 浅黄色砂とオリーブ褐色砂の互層
19. 暗褐色砂で浅黄色砂を少量ブロック状に混入

Fig.7　**SE04・09・20、SK03（1/50）**

で大宰府分類Ⅱ類か。63は皿Ⅱ類の底部。オリーブ黄色釉がかかるが、体部下半から底部は無釉。64は青磁。龍泉窯系碗Ⅰ-２類の底部。見込みに「金玉満堂」の印文がある。高台部以外は透明感のある灰オリーブ色釉がかかる。畳付には砂粒が付着する。65は越州窯系青磁の壷と思われる口縁部細片。口縁部に目跡粘土が残る。66は越州窯系青磁碗底部を再利用した瓦玉。見込みと高台畳付に重ね焼きの目跡粘土が残る。72は管状土錘。端部を欠くが、残存長7.5㎝、最大径2.0㎝を測る。73は須恵器坏蓋で復元口径11.4㎝を測る。混入品である。67～71は中層出土。67は井側内出土。瓦玉で同安窯系青磁碗底部を再利用したもの。68～71は掘方出土。68は素焼陶器の鉢。小片で復元口径約30㎝を測る。胴部外面は格子目タタキ、内面は粗いハケ目口縁。69・70は白磁。69は碗Ⅶ類で復元口径16.5㎝、器高4.1㎝を測る。内面櫛描文を施す。高台はケズリで無釉。70は皿底部か。見込みは蛇ノ目釉剥ぎし、高台は無釉。71は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-２類の底部。高台内は無釉。162・163は滑石製品。162は上層～中層出土。釣り針状に曲がる形態。残存長3.3㎝、幅2.8㎝を測る。163は中層出土。平面不整菱形を呈す形態。最大長10㎝、最大幅7.3㎝を測る。底面は平坦を呈し、上面は中央が高く盛上がり平坦を呈す。この平坦部に頂部が長方形を呈す鋲か栓が残る。先端は二股に分かれる。上面ススが付着する。蓋状のものか。164は井側内中層。平面長方形を呈す砥石。全長9.8㎝、幅5.9㎝を呈す。各面使用面で、砥石として使用された後、叩き石として再利用したものか。石材は砂岩。出土遺物から遺構の時期は12世紀中頃～後半頃と考える。

SE20（Fig.7・11・12・16、PL.2）　A・B-２区で検出した掘方が楕円形を呈す井戸。規模は長軸長3.2m、短軸長2.9m、井戸底までの深さ3.2m（標高1.25m）を測る。底面は西側に深さ２m程で傾斜を持つテラスを持ち、中央東寄りに直径0.7mの円形井筒がある。井筒に沿って鉄分が沈着していた。井側痕跡は上面から確認出来たので、井戸は自然に埋没したのであろう。井側材は残っていないが、断面土層から見て、木質の井側であろう。井側内埋土は暗灰黄色土～褐灰色砂質土である。

出土遺物　中世の土師器、須恵器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・青白磁・陶器、国産陶器、滑石石鍋片、古墳時代～古代の土師器・須恵器などがある。74～82は上層出土。74は井側内上層の土師器小皿。復元口径9.0㎝、器高1.1㎝を測る。75・76は瓦器。75は皿で復元口径10.2㎝を測る。底部ケズリのちナデ、外面回転ナデ、内面ヘラミガキ。76は椀底部。底部に低い高台が付く。77～79は白磁。77・78は碗口縁部で復元口径16.2㎝・15.2㎝を測る。77はⅥ類、78はⅦ類で、77の外面には縦線文、78は外面縦線文と櫛描文が入る。79は皿Ⅰ類で復元口径10.0㎝、器高2.6㎝を測る。底部は丁寧なケズリで露胎。釉は不均一にかかる。80・81は青磁。80は香炉の底部。外面ヘラ片切彫りの斜格子文で、畳付に重ね焼き目跡が残る。81は上層から中層出土の小皿。灰オリーブ釉がかかる。82は陶器の注口部。灰オリーブ釉がかかる。83～90は中層から下層出土。83は土師器小皿でほぼ完形。口径8.7㎝、器高1.0㎝を測る。84は白磁皿XI類底部。不透明な灰白色がかかる。85は龍泉窯系Ⅰ-４類小碗。外面蓮花文で厚めの明緑灰色釉がかかる。86は青白磁合子。口径4.9㎝を測る。明青灰色釉がかかるが、底部釉を掻き取る。87～89は井側内中層～下層出土の磁灶窯系の黄釉鉄絵盤。87は復元口径27.4㎝、器高9.0㎝を測る。外面灰黄褐色釉が薄めにかかり、その上に灰オリーブ釉がかかる。内面は鈍い黄橙色の下地釉の上に黒褐色の鉄釉で絵を描く。底部は丁寧なナデで無釉。88は外面褐色の薄い釉の上に灰オリーブ釉が不均一にかかり、内面には漢字で「天下○○」と書き、周りを文様で四角く囲む鉄絵文様が描かれる。底部はナデで板状圧痕が残り無釉である。89は蓋か。復元口径4.4㎝を測る。外面に陽刻で文様を付ける。内面回転ナデ。色調は灰白色を呈し、胎土は精良。90は長方形磚片。断面は3.9×6.9㎝を測る。各面工具により平滑にナデ仕上げる。91～93は井側内下層。91・92は龍泉窯系青磁Ⅰ類碗。91は小碗Ⅰ-１類。復元口径10.2㎝、器高4.5㎝を測る。92は碗Ⅰ-６類。

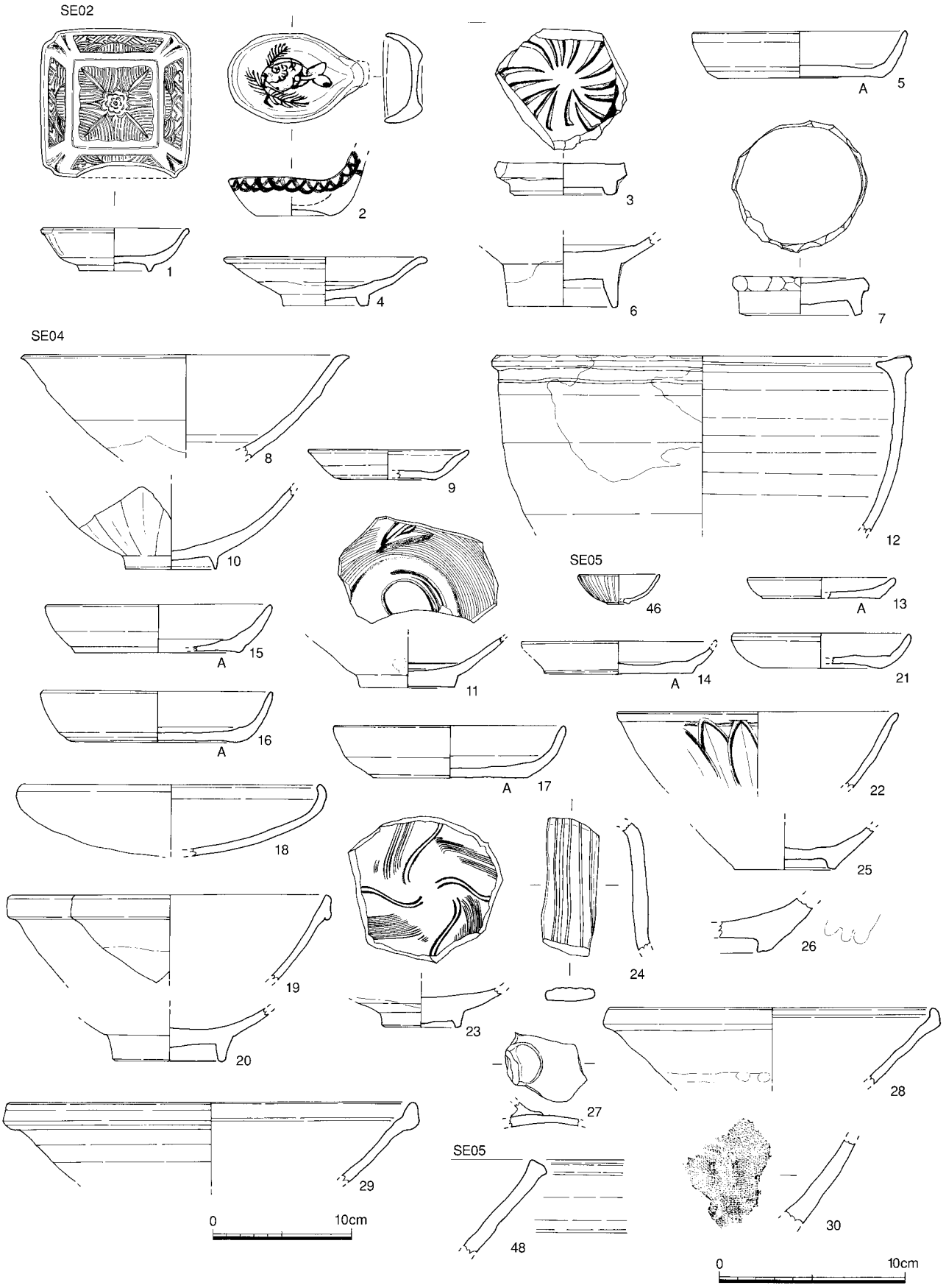


Fig.8　**SE02・04・05出土遺物（1/3・1/4）**　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

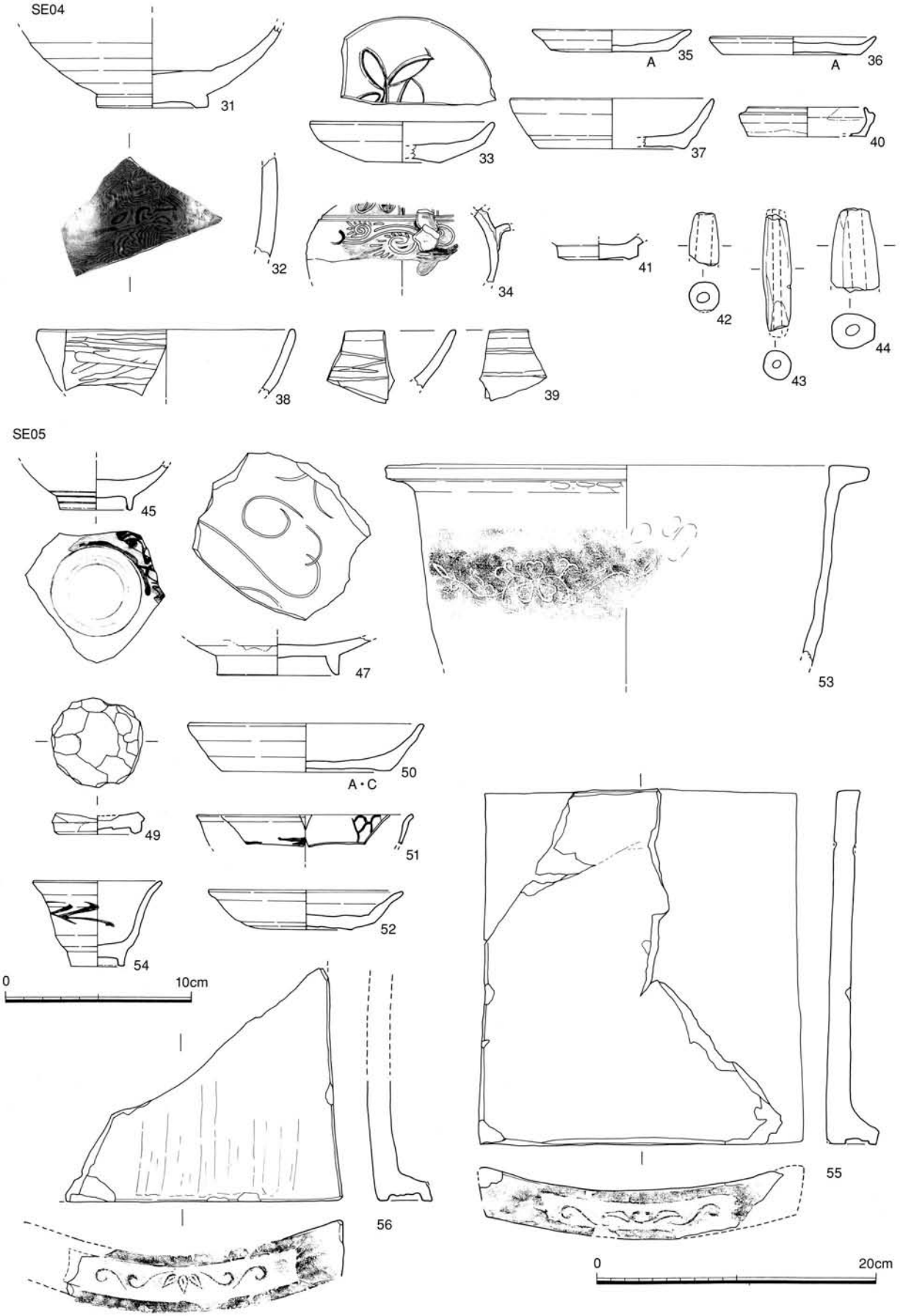


Fig.9　**SE04・05出土遺物（1/3・1/4）**　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

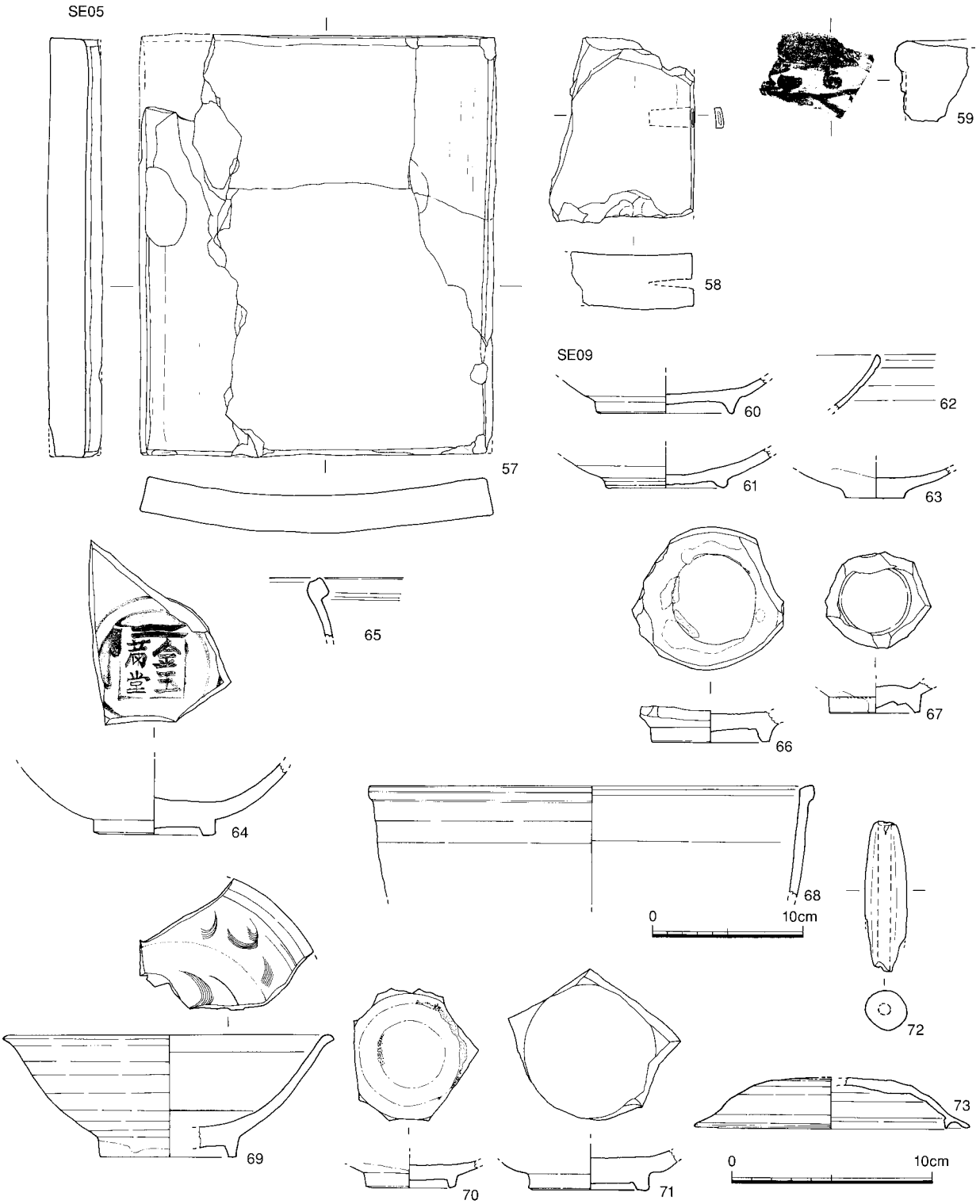


Fig.10　**SE05・09出土遺物（1/3・1/4）**

復元口径15.2㎝、器高6.3㎝を測る。高台部はケズリで露胎。灰オリーブ釉が厚めにかかるが、内面は粗い氷裂が入る。93は青白磁小皿小片。復元口径約９㎝を測る。内面雷文と浮文を形打ちで施す。釉の発色は良い。94～107は井側内出土。94～98は土師器。94～97は小皿で復元口径8.2㎝～9.6㎝、器高0.9㎝～1.4㎝を測る。98は坏で復元口径13.1㎝、器高は3.1㎝を測る。底部の調整は、95の底部がナ

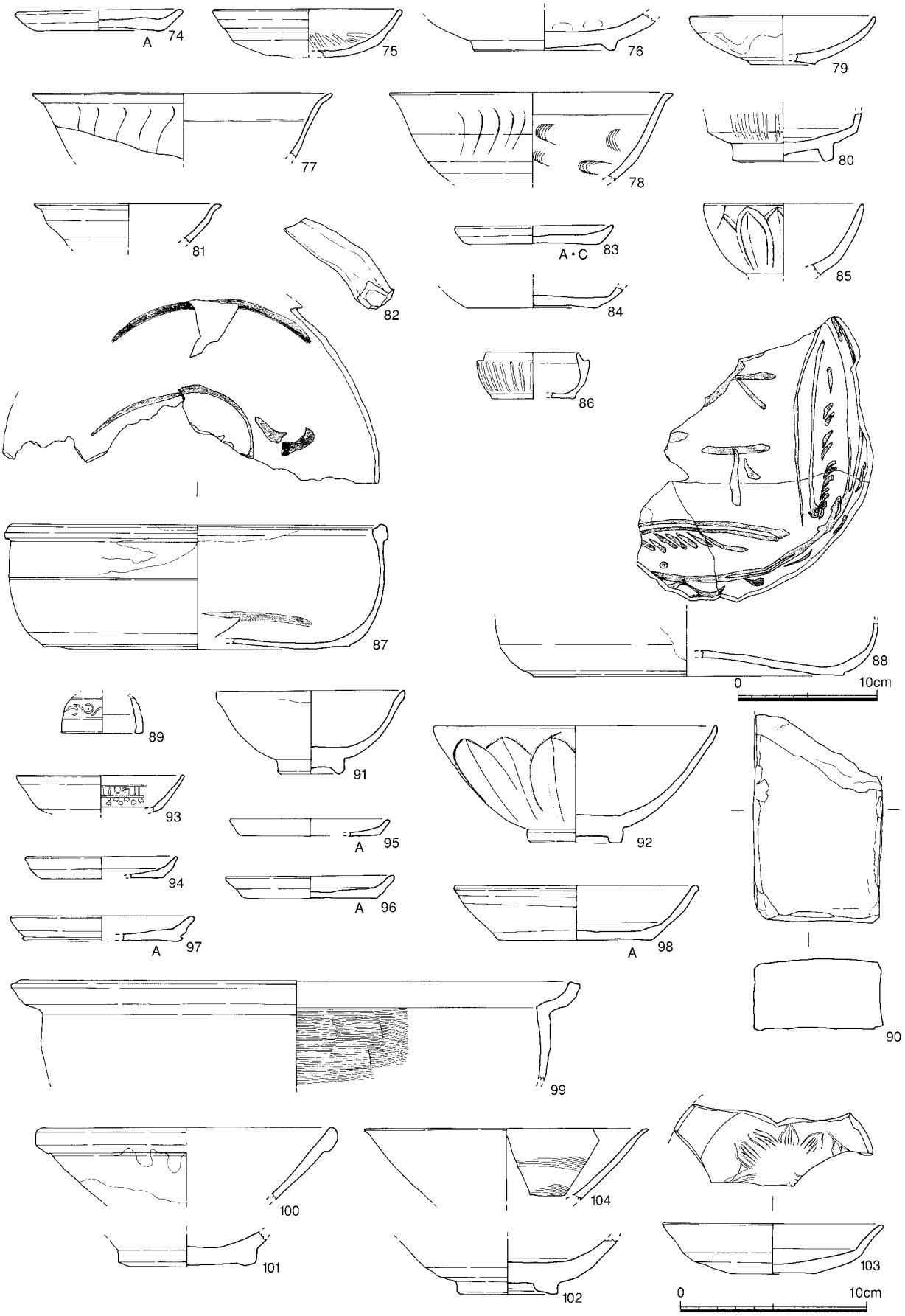


Fig.11　**SE20出土遺物Ⅰ（1/3・1/4）**　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

デ以外は糸切り。99は瓦質土器の鍋の小片。復元口径30.4cmを測る。内面はヨコハケで、外面は火を受け赤変し、ススが付着する。焼きは良い。100・101は白磁碗Ⅳ-1類。100は復元口径16.2cmを測る。灰白色釉が内面から口縁部まで厚めにかかる。101は底部で、無釉で露胎。102・103は青磁。102は龍泉窯系Ⅰ類碗底部。103は平底の皿で白磁皿Ⅶ類に近い形態。復元口径11.8cm、器高2.7cmを測る。見込み線彫りの花文が入る。オリーブ黄色釉がかかるが底部は無釉。104は青白磁碗。口縁が大きく開く碗の形態。内面櫛描文を施す。105～107は下層出土の陶器。105は皿か。復元口径13.4cmを測る。体部上半から内面は灰白色の不透明釉がかかる。106は磁　窯系の黄釉陶器盤で復元口径23.6cmを測る。外面暗褐色、内面灰オリーブ釉がかかり、口縁部は化粧土を塗り、重ね焼き砂粒が残る。107は褐釉擂鉢片。極暗褐色釉が厚めにかかり、内面擂り目が入る。108～110は瓦玉。108・109は陶器片、110は弥生土器の丹塗研磨土器片を加工したもの。111は土師質の管状土錘。上端を欠損するが、残存長6.7cm、最大径1.7cmを測る。112～116は井戸の時代以前のもの。112～114は土師器で掘方上層出土。112は甕口縁部で８世紀後半のもの。113は６世紀の丸底の椀。復元口径10.4cmを測る。底部は静止ヘラケズリ。内面は丁寧なナデ。114は口縁を持つ鉢か。調整は体部外面ハケ目、内面ケズリ。115・116は８世紀前半の須恵器。115は摘みが付く坏蓋で復元口径14.1cmを測る。天井部回転ヘラケズリ、他は回転ナデと内面はナデ。116は坏底部。調整は高台内ナデ以外、回転ナデ。165は上層出土。滑石製石鍋の転用品。割口は研磨調整。直径0.7cmの円孔が２か所ある。170は井側内出土。鹿の中手骨か中足骨を半切し、一部加工を加えた未製品。端部に径２mmの孔がある。全長11.9cmを測る。出土遺物から遺構の時期は12世紀後半～13世紀前半頃と考える。

SE46（Fig.13～16、PL.2・11）　B-２・３区で検出した掘方が不整円形を呈す井戸。一部攪乱を受けるが、規模は3.0m×2.8m、遺構面から井筒底までの深さ3.2m（標高1.2m）を測る。底面は深さ2.4mの所で北側にテラスを持ち、その南側が0.78×0.88mの略円形の井筒がある。中～下層の井側内あたりから５～25cm前後の鉄滓、割石を含む礫石が多量に出土した。廃棄時に投げ込まれたものか。埋土は深さ1.2mまでは黒褐色土で焼土や炭化物を含む均一土で、その下は黄褐色砂で、井側部分は黒褐色粘土となる。桶などの木製の井側があったのであろうか。

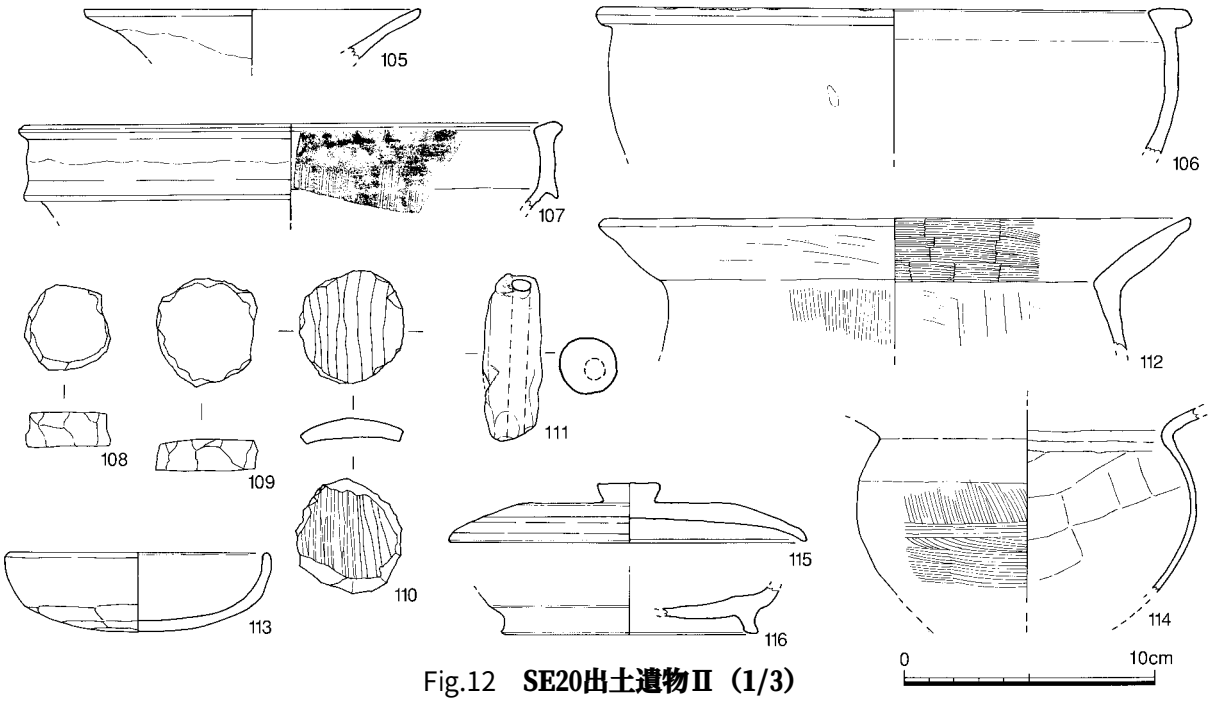


Fig.12　SE20出土遺物Ⅱ（1/3）

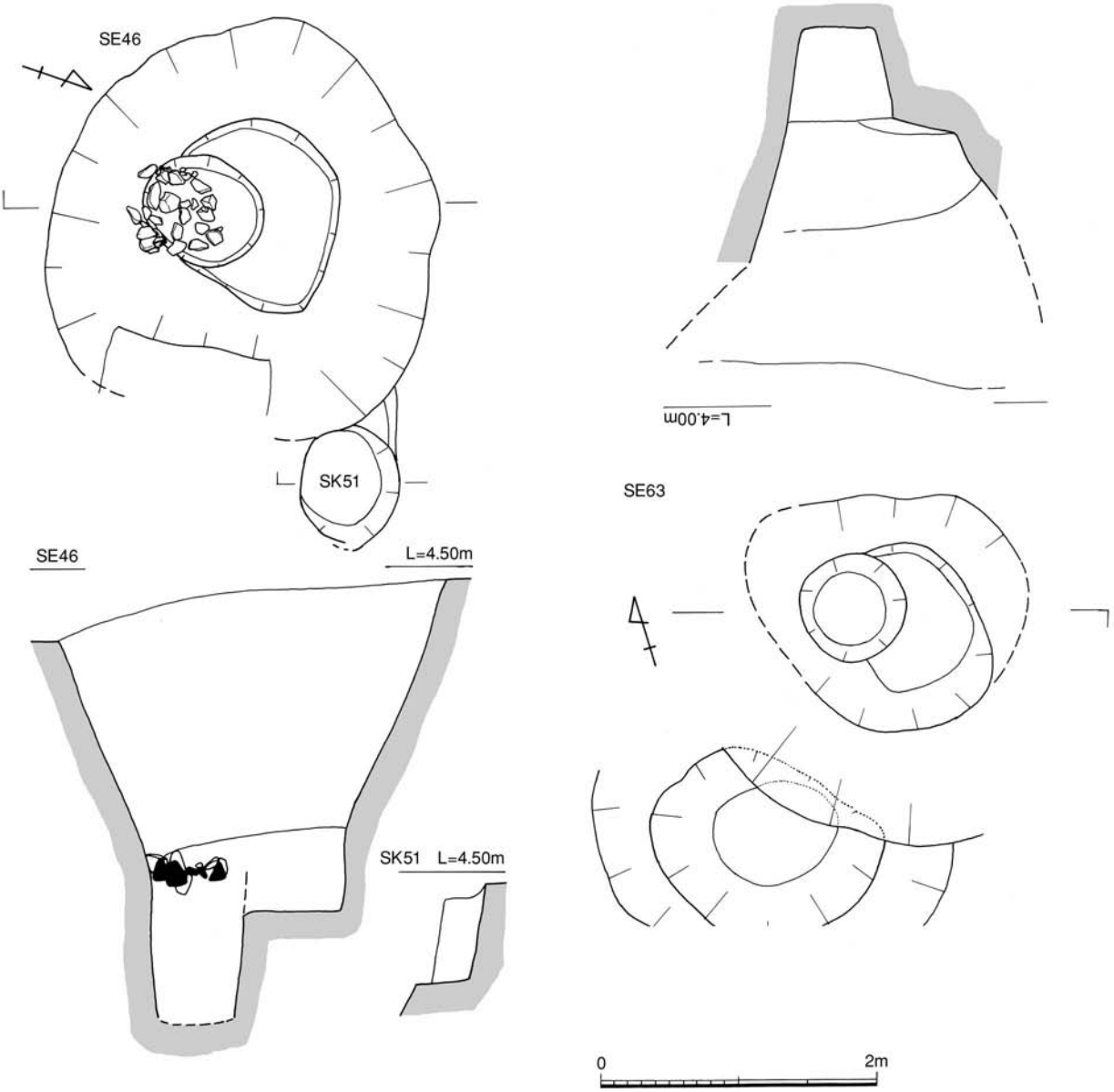


Fig.13　SE46・63、SK51（1/50）

出土遺物は井側内や掘方から、中世の土師器、須恵器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・青白磁・陶器、国産陶器、滑石石鍋片、鉄釘などの鉄製品、鉄滓、鞴片、馬などの歯、古墳時代～古代の土師器・須恵器などが、破片であるが出土している。117～122は上層出土。117・118は土師器。117は小皿。復元口径7.7㎝、器高1.4㎝を測る。118は坏。復元口径12.2㎝、器高2.8㎝を測る。119は土師質土器か瓦質土器の鍋の口縁部小片で、復元口径約34㎝を測る。口縁部が内湾し、端部が内側に折り曲がる形態。外面ススが付着する。例を見ず新しい時期の可能性がある。120は白磁碗Ⅶ類底部。121・122は磁灶窯系陶器盤。121は緑釉で1/2程残る。復元口径39.6㎝、器高9.75㎝を測る。底部は上げ底で無釉。ケズリのち丁寧なナデ仕上げ。内面見込みには片切彫りで、見込みは花文、体部内面は唐草を描く。その表面には緑釉がかかるが、銀化が著しい。122は黄釉鉄絵の小片。底部の調整は121と同じ。内面に鉄絵を描き、灰オリーブ釉がかかる。体部外面下半まで釉はかからない。123～127は中層出土。123は土師器坏で復元口径15.7㎝、器高2.8㎝を測る。底部は糸切り。124・125は青磁。124は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-４類の底部。見込みはヘラによる花文が入り、オリーブ黄色釉が厚めに高台外面までかかる。125は同安窯系Ⅱ-２類皿で、見込み櫛刺突文で、底部は丁寧なケズリで露胎。126・127は陶器。126は小型の褐釉深鉢か。復元口径24.0㎝を測る。外面オリーブ黄色もしくは鈍い

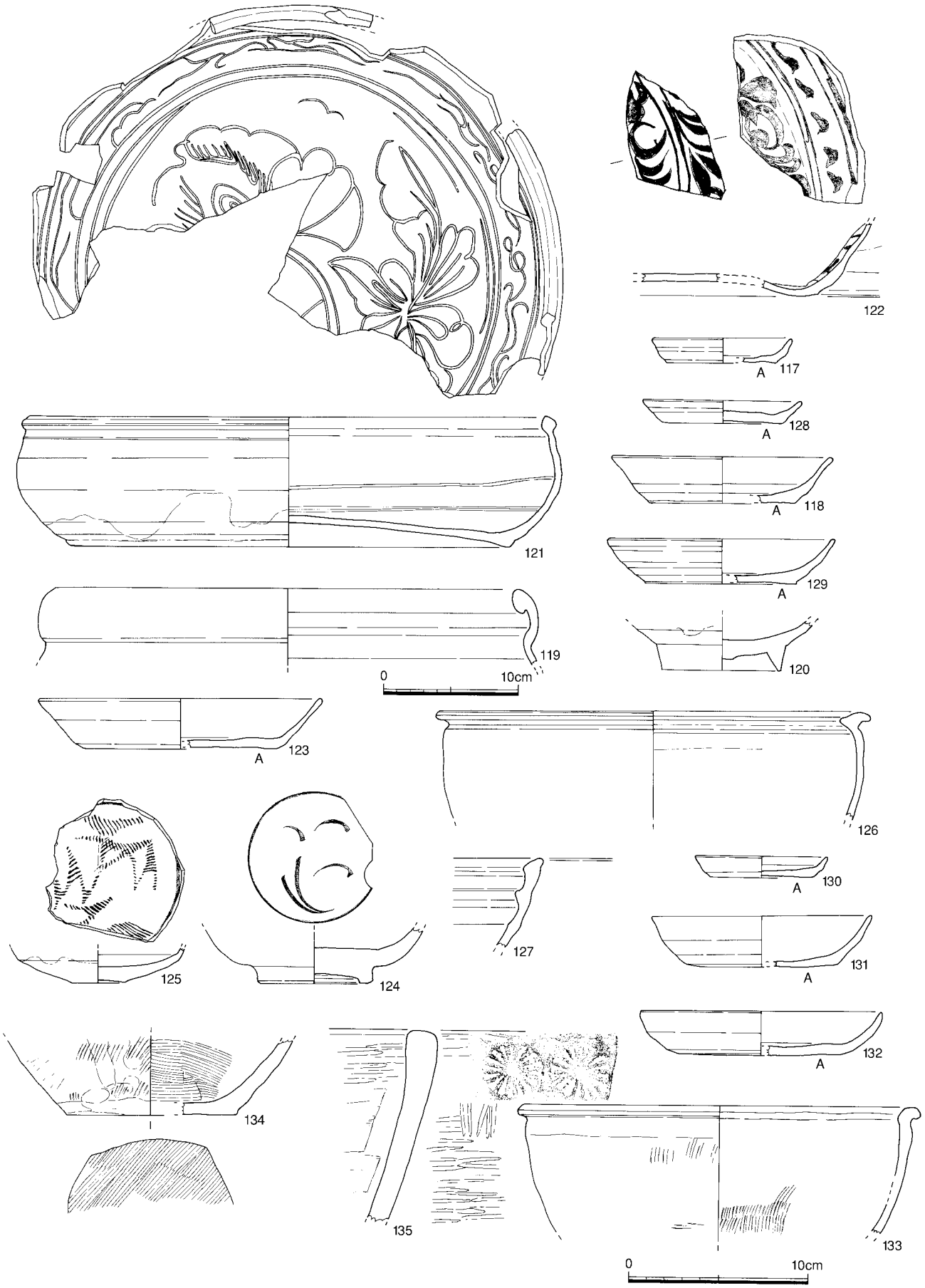


Fig.14　**SE46出土遺物（1/3・1/4）**　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

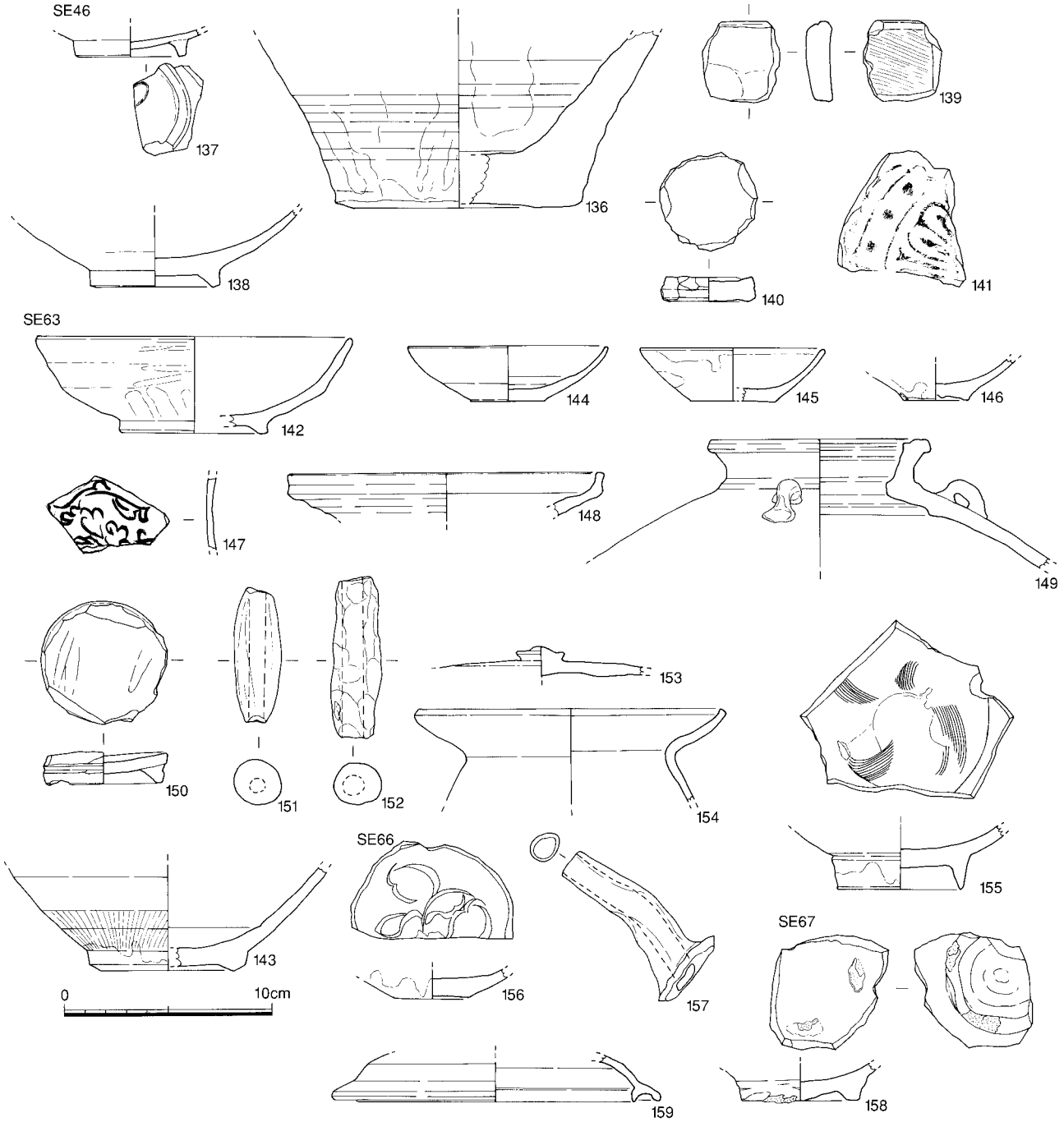


Fig.15　SE46・63・66・67出土遺物（1/3）

橙色の釉が薄くかかる。外面ススが付着する。127は鉢の口縁片。赤褐色を呈すが無釉。128～139は下層出土。130～136は井側内出土。128・129は下層出土の土師器。128は小皿で復元口径8.8cm、器高1.3cmを測る。129は坏。復元口径12.6cm、器高2.5cmを測る。130～132は土師器。130は小皿で口径7.4cm、器高1.2cmを測る。131・132は坏で復元口径12.2cm・13.4cm、器高2.9cm・2.5cmを測る。133は土師器鍋口縁部で復元口径22.2cmを測る。内外面ハケ目が残る。外面にはススが付着し、焼けて赤変する。134・135は瓦質土器。134は鉢底部。全面ハケ目を施す。体部外面は火を受け赤くなり硬く締まる。135は火鉢口縁小片。内外面丁寧なヘラミガキで、外面菊花をスタンプする。136は陶器甕底部で復元底径12.0cmを測る。底部は雑なナデで露胎。内外面は暗赤褐色釉の上にオリーブ黄色釉がかかる。137～139は掘方出土。137は土師器椀底部で、高台内に墨書が残る。138は白磁碗Ⅶ類底部。

器表面には発色が悪い灰白色釉が薄目にかかるが、底部はケズリで露胎。139・140は瓦玉。139は134の口縁部を利用したものか。割れ口は擦っている。井側内下層出土。140は白磁皿Ⅲ類底部を再利用したもの。底部はケズリで露胎。141は鴻臚館式軒丸瓦瓦頭細片。表面は風化が著しい。166は上層出土。小型の滑石製石鍋。復元口径12.6cmを測る。外面ノミによるケズリ、内面丁寧に平滑に仕上げる。167は井側内出土。長方形の砥石で残存長11.2cm、最大幅3.2cmを測る。各面を使用している。石材は火成岩系か。出土遺物から遺構の時期は12世紀後半～13世紀前半頃と考える。

SE63（Fig.13・15・16、PL.2）　SE46の東側で検出した、SE46に切られ、SK47を切る井戸。東側は基礎で攪乱を受け、残りは悪い。掘方規模は直径2.6m、深さ2.6m（標高1.25m）を測る。深さ1.9mの所で平坦面があり、その東側には円形の井側がある。井側は上面で0.78×0.76m、底面で径0.5mを測る。井戸埋土はSE46と近い埋土であった。　出土遺物は井側内や掘方から、中世の土師器、須恵器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・青白磁・陶器、国産陶器、滑石石鍋片、不明鉄製品や鉄滓、古墳時代～古代の土師器・須恵器などがある。142は土師器椀で復元口径15.2cm、器高4.7cmを測る。体部から内面は丁寧なヘラミガキで平滑に仕上げ、高台部はヨコナデ。143・144は白磁。143は井側内下層とSE66上層出土破片の接合した碗Ⅳ-１類底部。高台はケズリ出しで露胎。見込みには段を有す。144は中層出土の皿Ⅱ類。復元口径9.6cm、器高2.65cmを測る。底部以外施釉。145は井側内下層出土。青磁皿で復元口径9.0cm、器高2.6cmを測る。口縁部から内面に灰オリーブ釉が薄めにかかるが発色は良い。口縁内面は釉の掻き取り。146は陶器底部片。黒褐色の釉がムラにかかる。無釉で底部ケズリ。147は中層出土。磁灶窯系壺の細片。陽刻の花文がある。148・149井側内下層出土。148は初期高麗の盤口壺の口縁部片。復元口径15.2cmを測る。表面には灰オリーブ釉がかかる。149は褐釉壺。肩部に耳が１か所残るが、形態から四耳壺か。外面から口縁内面にかけて鈍い赤褐色釉がかかる。150は瓦玉。土師器椀底部を再利用したもの。151・152は土師質の管状土錘。151は両端が欠ける。残存長6.5cm、最大径2.3cmを測る。152は棒状で完存品。指押え痕が残り雑なナデである。全長7.8cm、最大径2.6cmを測る。153は上層出土。須恵器の蓋天井部片。154は土師器甕口縁部。小片で外面にはススが付着する。古墳時代前期のもの。168は井側内下層出土。石鍋の小片を利用した滑石製品。全長5.0cm、幅2.7cmを測る。上面はナナメに削っており、楔か栓の可能性がある。169は滑石石鍋の口縁部片。鍔部が付くが欠損している。外面ケズリ、内面は研磨仕上げ。出土遺物から遺構の時期は12世紀後半頃と考える。

SE64（Fig.6）　A-３区の旧建物地下構造物下で検出した円形の近世瓦組井戸。掘方径は上面で1.4mを測る。掘方の中に直径0.85mの瓦組井側があった。井側内にはコンクリートブロックや瓦礫などが出土。旧建物建設時まで使用されていたもの。

SE66（Fig.15）　図示していないがB-３区の攪乱部で検出したSE63を切る井戸。掘方は一部のみの確認で、規模は不明。標高2.8mで略円形の径0.68×0.7mを測る井側を検出した。安全対策上完掘していないので深さなどは不明。　出土遺物は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、国産陶器、不明鉄製品、古代瓦がある。155は下層出土の白磁碗Ⅶ類。底径6.1cmを測る。高台は高くケズリ出し露胎。不透明な灰白色釉がかかる。156は龍泉窯系青磁皿Ⅰ-３類の底部。見込み片切彫りの花文、底部は無釉で露胎。157は陶器の水注の注口。表面に灰オリーブ釉がかかる。

SE67（Fig.15）　A-１・２区で検出したSE04・20に切られる井戸。井戸は鋼矢板にかかり未掘。出土遺物は中世の瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、瓦と古代の土師器、須恵器などがある。158は高麗青磁碗底部。見込みと高台畳付きに粘土目跡が残る。159は須恵器坏蓋。内面にかえりがつく。いずれも上層出土。

② 土坑

SK03（Fig.7） A-１区で検出した平面楕円形状の土坑。規模は長軸径1.3m、短軸径1.1m、深さ0.34mを測る。埋土は上層が暗灰黄色土、下層が黒褐色粘質砂質土である。出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、瓦などと寛永通宝1枚が上層から出土している。

SK07（Fig.18）C-２区で検出した円形土坑。上面の攪乱土坑の下で検出した。平面形は略円形を呈し、規模は1.0m×0.98m、深さは上面から0.8mを測る。 出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・天目碗などの陶器、滑石片、砥石片などがある。171は土師器小皿で復元口径9.4cm、器高1.3cmを測る。172は白磁小皿で復元口径11.8cmを測る。口縁が開き僅かに外反する形態。内面２条の沈線が巡る。オリーブ黄色釉が内外面にかかる。173は同安窯系青磁碗で、復元口径17.2cmを測る。無文で灰オリーブ釉がかかる。

SK14（Fig.17・19・27、PL.2） C-５区で検出した隅丸長方形の土坑。南東隅は攪乱を受けるが、長軸長3.29m、短軸幅2.02m、最大深1.2mを測る。断面は逆台形を呈す。埋土は上層は黒褐色土で炭化物・焼土などを含み、下層は黒褐色粘質土、鈍い黄色粘土で礫石を含み、底層は明黄褐色砂で黒褐色砂を層状に薄く挟み、上部程暗褐色砂になる。底面東側には５～30cmほどの割れ石を含む礫群が出土した。礫群内には鉄滓や土器の破片を僅かに含む。礫群は流れ込んだ状況で、廃棄土坑と考える。

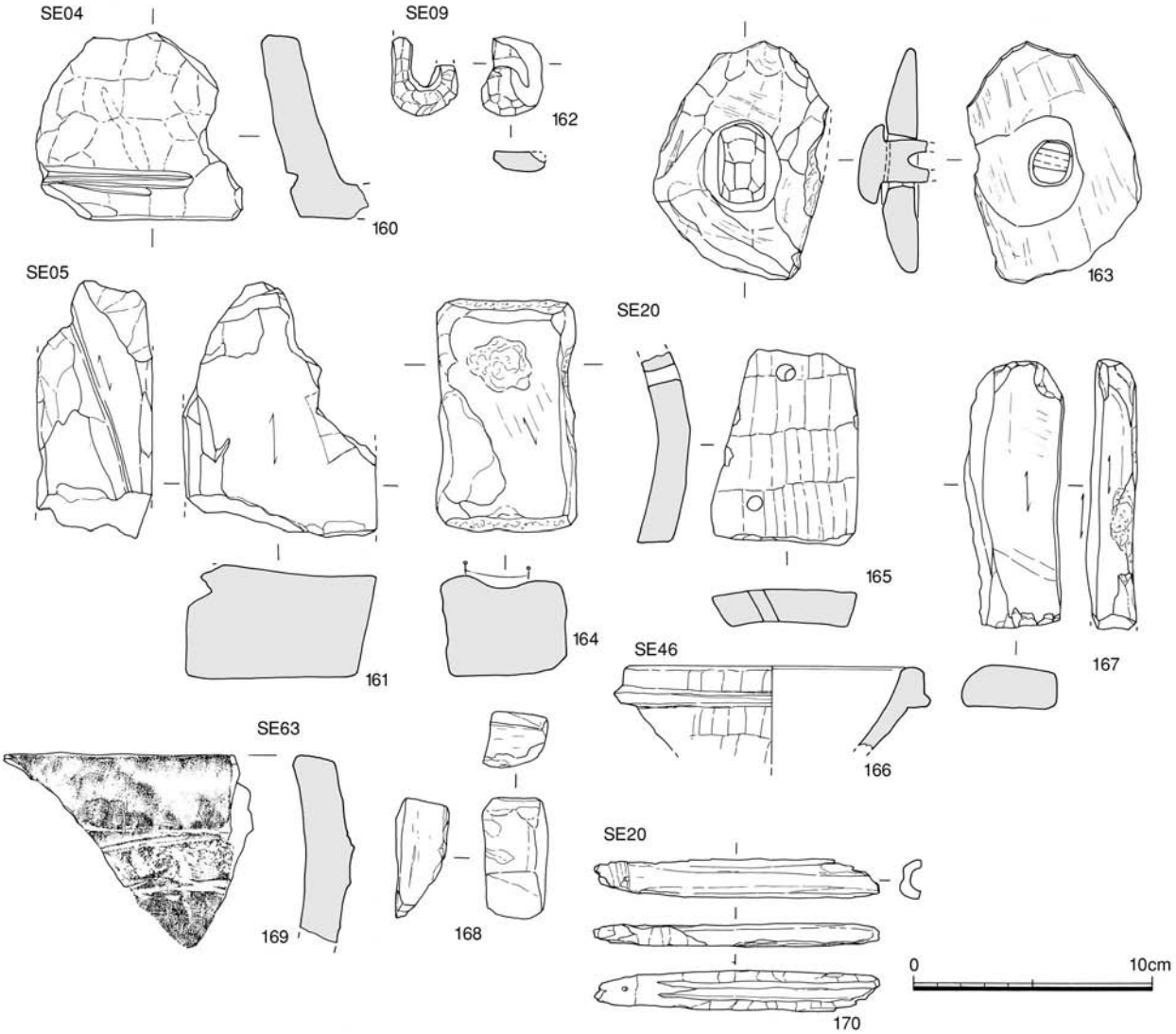


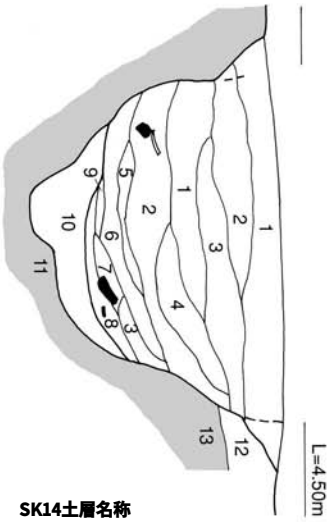
Fig.16 各井戸出土石製品、骨製品（1/3）

出土遺物は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・青白磁・陶器、鉄滓、平瓦・磚と古墳時代から古代にかけての土師器・須恵器、瓦などがある。174～183は土師器。174～181は小皿。中層から下層出土。完形品はないが、口径8.0～9.8cm、器高0.9～1.6cmを測る。182・183は下層出土の坏。口径12.8cm・14.6cm、器高2.5cm・2.4cmを測る。184は瓦器皿で復元口径9.0cmを測る。ナデ調整で、内面ナデで不規則なヘラミガキを加える。185～189は白磁。185・186は碗。185はⅣ-１a類で復元口径15.8cm、器高6.5cmを測る。内面には段を有す。不透明な灰オリーブ釉がかかるが、高台部は露胎。186は底部片。高台を高くケズリ出す形態。高台外面まで灰白色から明オリーブ灰釉がかかる。187・188は皿Ⅳ類。187は復元口径13.0cm、器高3.3cmを測る。体部下半から高台は露胎。高台部に重ね焼き痕が残る。188は青磁のような釉色であるが、形状としては白磁皿Ⅳ類である。復元口径10cm、器高2.3cmを測る。明オリーブ釉がかかるが、見込みは蛇ノ目釉剥ぎする。189は水注か壺の底部。高台以外明オリーブ灰釉が厚めにかかる。花押と思われる墨書が残る。190は白磁水注頸部から胴部。頸部に飾りが１つ付く。透明感の強い灰白色釉がかかり、氷裂が入る。191は同安窯系青磁碗Ⅳ類底部で見込み蛇ノ目釉剥ぎ。192は青白磁合子細片。外面花文を陽刻し、内面は無釉。193～195は陶器。193は不透明の灰黄色釉がかかる。194は壺の底部。明オリーブ釉が薄目にかかるが、かかり方にむらがある。焼成は不良。底部に墨書がある。195は無頸大甕の口縁部小片。暗オリーブ色から暗褐色釉がかかるが、内面は同心円状の当て具痕が残る。196はミニチュア土器。丁寧な仕上げ。色調は鈍い橙色で、胎土は精良。混入品か。197は瓦玉。白磁皿Ⅳ類の底部を再利用したものか。高台部は無釉。346は楕円形硯片。色調は暗褐灰色を呈す。石材は砂岩か。185は上層出土。186～193・195・197は中層出土。194・196は下層出土。出土遺物から遺構の時期は12世紀後半頃と考える。

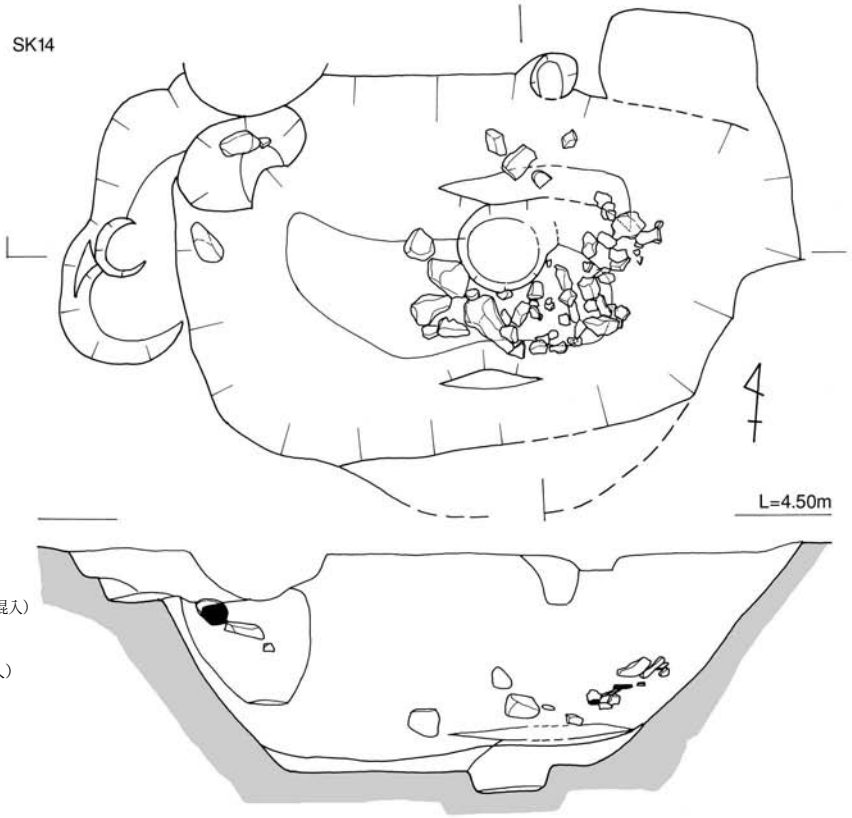
SK15（Fig.19）　SK14の南側で検出した土坑。性格は不明。上層をSX13として取り上げており、合わせて報告する。　出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産白磁、古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。198・199・200は土師器小皿。復元口径8.6～9.6cm、器高1.0～1.4cmを測る。201は瓦器椀底部。調整は外面ナデ、内面はヘラミガキ。遺物から遺構の時期は12世紀後半頃と考える。

SK17（Fig.17・19・表１）　C-２区で検出した円形土坑。北側をSE05に切られる。規模は南北径1.3m、東西径1.21m、深さは最深で1.26mを測る。底面は西側がピット状に深くなる。埋土は黒褐色砂質土が主体で、中層には巻貝などの殻・骨片・炭化物・焼土塊を多量に含む層が20cm前後の厚さで凸レンズ状に堆積していた。廃棄土坑であろう。出土した貝類については付論１で報告している。出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・陶器、古墳時代から古代の土師器・須恵器、砥石片、鉄製品などがある。202・203は土師器の皿。202は底部片。203は復元口径16.4cm、器高2.6cmを測る。202は下層出土。204～206は白磁。204・205は碗Ⅳ類の口縁部と底部。204は復元口径15.4cmを測る。内面沈線が一条巡る。内面から体部上半は灰白色釉がかかる。205は内面に見込みと体部の境に段を持つ。底部は露胎。206は貝層下出土。碗Ⅶ類の底部。内面櫛描文を施す。207はⅥ類の形態を持つ小碗底部。高台は露胎で細く高くケズリ出す。208は同安窯系青磁皿Ⅱ-１b類。底部は丁寧なケズリで露胎。209・210は陶器。209は褐釉短頸壺胴部から底部。底部はケズリ。210は磁灯窯系の蓋で復元口径18cmを測る。丁寧なナデ調整であるが、口縁部から内面は無釉。出土遺物から遺構の時期は12世紀中頃と考える。

SK18・28・29・57（Fig.18・20・21・27、PL.2）　C-２区で検出した一連の土坑群で合わせて報告する。切り合い関係としては、SK28→SK29、SK57→SK18となる。遺構の時期は各土坑の出土遺物から古いSK28が11世紀末～12世紀前半、新しいSK18・29が12世紀中頃と考える。



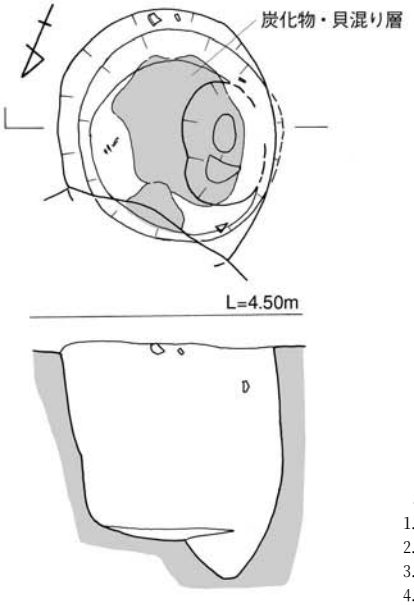
SK14



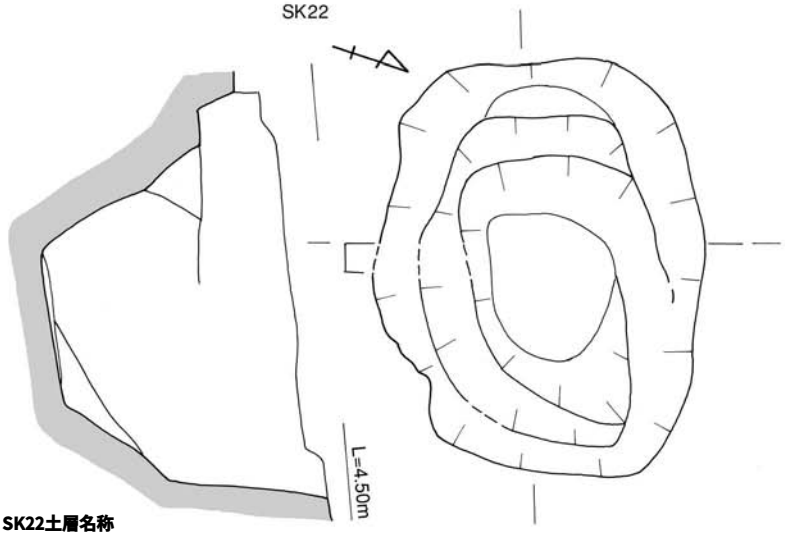
SK14土層名称

1. 黒褐色土（黒褐色土・焼土粒子混入）
2. 1で炭化物、焼土、鈍い黄色粘土ブロック混入
3. 暗灰黄色土（炭化物、鈍い黄色粘土ブロック少量混入）
4. 2より灰味が強い
5. 黒褐色粘質土
6. 黒褐色粘質土（砂質、焼土ブロック僅かに混入）
7. 鈍い黄色粘土（砂質）
8. 7に黒褐色粘質土混入
9. 灰黄褐色砂質土
10. 明黄褐色砂で黒褐色砂を薄く層状に挟む
11. 鈍い黄褐色砂
12. 鈍い黄褐色細砂
13. 暗褐色砂

SK17

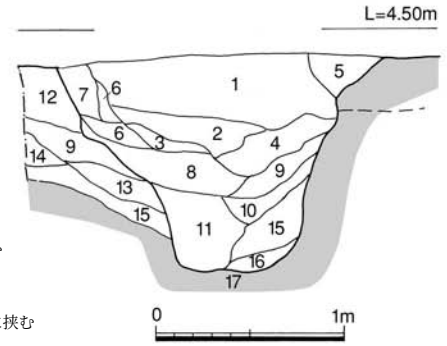


SK22



SK22土層名称

1. 暗灰黄色土（炭化物含む）
2. 暗オリーブ褐色土
3. 黒褐色砂質土に灰黄褐色砂質土混入
4. 2に鈍い黄色砂混入
5. 灰黄褐色砂（鈍い黄色砂互層状に挟む）
6. 黒褐色土
7. 黒褐色砂質土（薄く砂層を挟む）
8. 暗灰黄色土に鈍い黄色砂少量混入
9. 8に炭化物など混入
10. 暗オリーブ褐色細砂
11. 暗灰黄色土と浅黄色砂の混合
12. 暗灰黄色砂質土に黒褐色砂を互層状に挟む
13. オリーブ褐色砂
14. 黒褐色砂質土
15. オリーブ褐色砂に黒褐色砂を薄く互層状に挟む
16. 暗オリーブ褐色砂
17. 黒色粘質砂（オリーブ褐色砂混入）



SK24

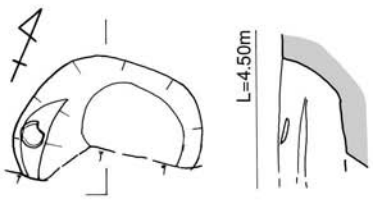


Fig.17　**SK14・17・22・24（1/40）**

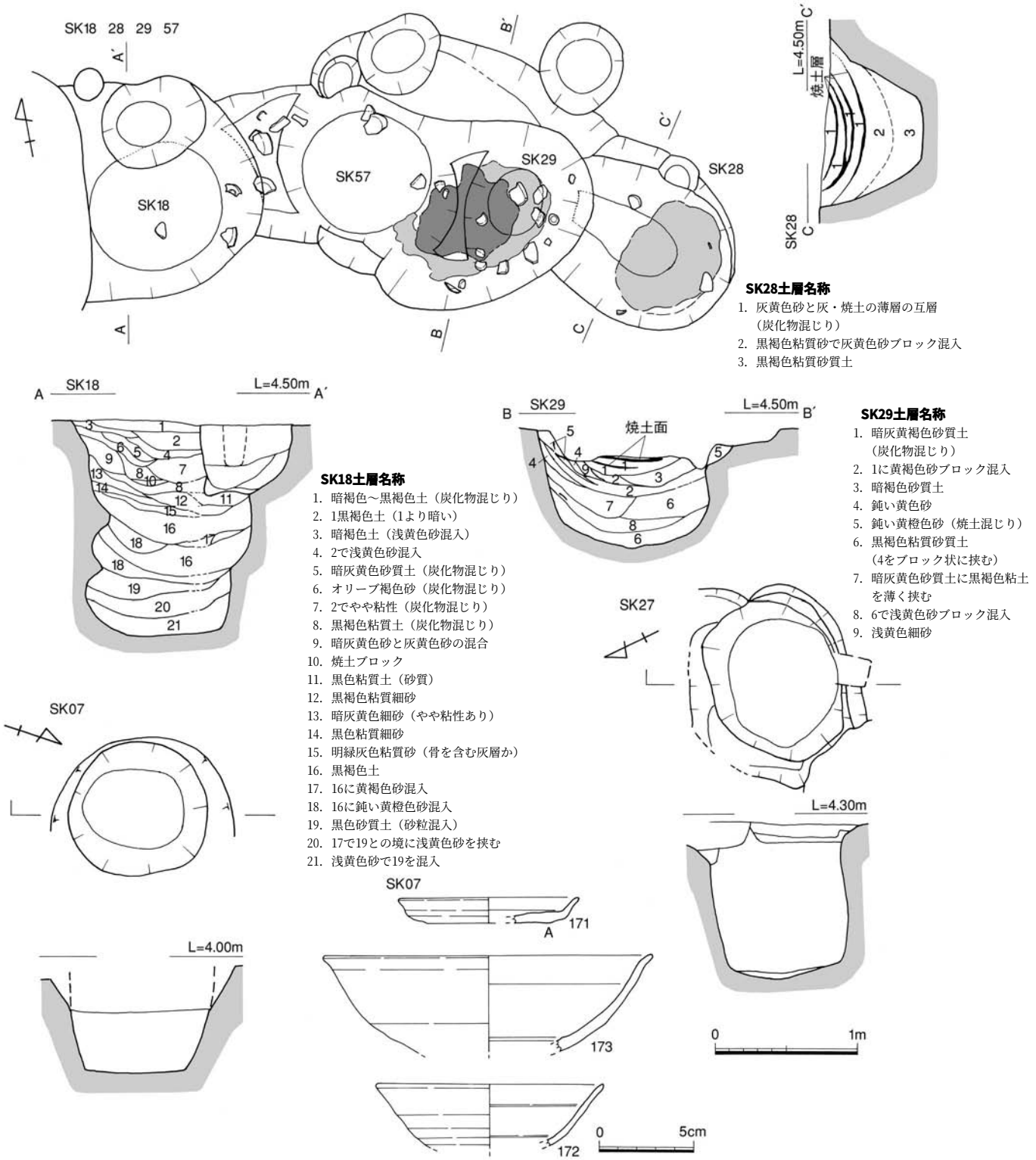


Fig.18　**SK07・18・27・28・29・57、SK07出土遺物（1/40・1/3）**

SK18は西側をSE05に、北側をピットに切られ、東側はSK57をきるが、ほぼ円形を呈す。規模は推定で最大径1.25m、最大深さ1.5mを測る。土層を見ると堆積土は三部分に分かれる。上層は黒褐色土系が主体であり、焼土や骨片を含む灰層の薄い層が挟まっていた。中層は黒褐色土で下に鈍い黄橙色砂を混入する。下層は上半が黒色砂質土、下半が浅黄色砂となる。出土遺物は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・青白磁・陶器、国産陶器、軒平瓦・磚、古墳時代から古代の土師

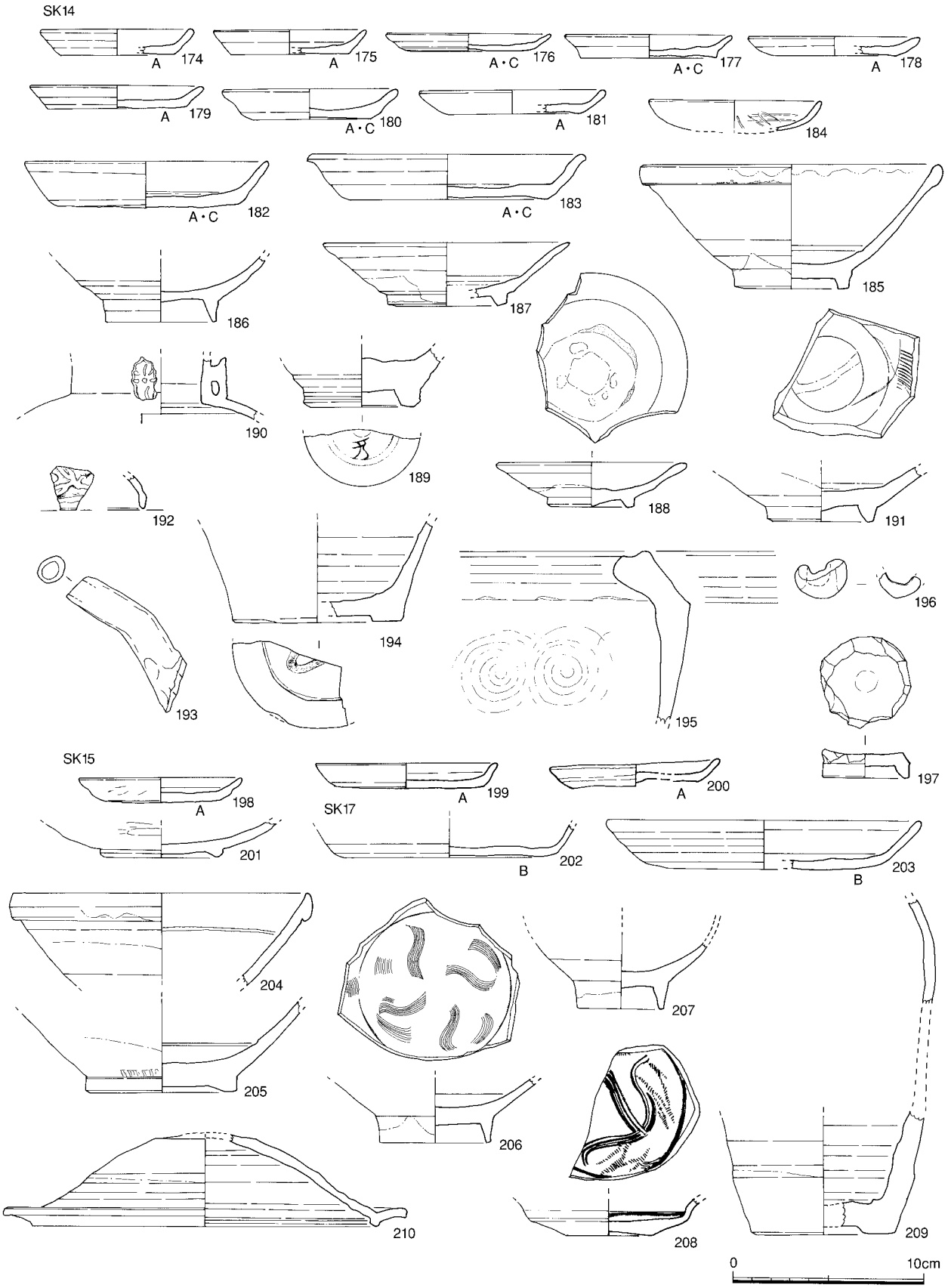


Fig.19　**SK14・15・17出土遺物（1/3）**　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

器・須恵器、砥石片、貝殻・骨片などがある。211～217は土師器。213が下層出土以外、上層出土。211～214は小皿。復元口径8.8～9.4㎝、器高1.15～1.5㎝を測る。215～217は坏で復元口径15.0㎝・14.8㎝・13.8㎝を測る。218～221は瓦器椀。221は下層出土。口縁部と底部片。番号順に復元口径16.2～18.5㎝を測る。218の口唇部内面には浅い沈線が巡り、畿内系のもの。218は細かいヨコヘラミガキ、219～221は粗いヘラミガキで、内面はジグザグに暗文風に施す。222～226は白磁碗。222・223はⅢ類碗。222・224は下層出土。222は復元口径15.4㎝を測る。透明感のある淡黄色釉がかかる。223は細片。224はⅣ類の大碗で復元口径19.2㎝を測る。光沢のある灰白色釉が厚めにかかる。225はⅥ類碗で口径14.2㎝、器高6.4㎝を測る。外面縦線文が入る。高台はケズリで露胎。226はⅦ類碗で復元口径15.0㎝を測る。不透明な灰白色釉がかかる。227・228は青磁。227は同安窯系碗Ⅰ類の底部。高台内は粘土が付着する。228は平底の皿底部。見込みに線彫りで花文を描く。底部以外、灰オリーブ釉がかかる。229は上層出土。陶器の小壺底部。外面光沢のない白色釉がかけ流れている。230は中層出土の国内産の陶器底部。底径16.0㎝を測る。無釉であるが自然釉が部分的にかかる。内面には粘土が付着する。231は瓦玉。白磁碗底部を再利用している。232は下層出土。須恵器で高台の付く坏底部。８世紀前半のもの。233は土師器の甕口縁部で復元口径20㎝を測る。外面ハケ目で、内面ケズリ。古墳時代後期のもの。

SK28は最大径が1.2m、深さは0.7mを測る。上面から深さ0.3m位まで灰・焼土と灰黄色砂の薄層が交互にレンズ状に堆積していた。灰層は４層を数える。その下は黒褐色粘質砂である。屋外炉のようなものか。　出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産白磁、国産陶器、土錘、古代の土師器・須恵器などがある。234・235は灰層下出土の土師器。234は小皿で復元口径9.6㎝、器高1.4㎝を測る。235は復元口径14.8㎝を測る。外面ナデ、内面丁寧なヘラミガキ調整。

SK29は楕円形状の土坑で、幅1.2m、深さ0.9mを測る。上面に焼土面があり、その下は厚さ20㎝程暗灰黄色砂質土と炭化物・灰が互層状に堆積する。その下底までは黒褐色粘質砂と暗灰黄色砂質土で、底は黒褐色粘質砂質土と鈍い黄色砂の互層となる。　出土遺物は中世の土師器、須恵器、瓦器、中国産白磁・陶器、国産陶器、土錘、滑石製石鍋片、鉄釘、鉄滓、古代の土師器・須恵器などがある。青磁は含まない。236～239は土師器。236～238は小皿。236・237はほぼ完形。口径8.4㎝～9.5㎝、器高1.3㎝～1.5㎝を測る。239は丸底坏で口径16.2㎝、器高3.2㎝を測る。調整はナデで、内面工具痕が残る。240～245は瓦器。240～243は椀。口径16.5～17.2㎝、器高4.5～5.0㎝を測る。いずれも内外面ナデで粗いヘラミガキを加える。240は黒色土器Aに近い。241の内面は放射線状にミガキを加える。244・245は皿。復元口径10.2㎝・9.0㎝、器高2.3㎝・2.5㎝を測る。244は内外面丁寧なヘラミガキ。245は回転ナデで、口唇部内面に軽い凹線が巡る。底部糸切り。246～251は白磁。246～249は碗。246はⅡ類の底部。高台は内面をナナメに削り、無釉。247・248はⅣ類。247は口縁部片で復元口径16.6㎝を測る。249はⅩ類の浅い碗。内面櫛描文を加える。高台は露胎。250・251は皿。250はⅢ類で口径9.8㎝、器高3.1㎝を測る。底部はケズリで露胎。251はⅩⅢ類で口径16.2㎝、器高4.1㎝を測る。見込みに櫛描の縦線文。252は管状土錘片。残存長4.2㎝を測る。349は滑石製品でヘラのようなものか。全長8.85㎝、最大幅2.3㎝、厚さ0.8㎝を測る。ケズリ仕上げで、使用擦痕が残る。ススが付着する。350は叩石。各面叩き使用痕が残る。色調は鈍い赤褐色を呈し、石材は火成岩。

SK57はSK18に切られ、SK29を切る土坑。黒褐色粘質砂質土で灰、炭化物・焼土塊を含む薄層を互層状に挟み、底層は暗褐色砂となる。　出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・陶器、滑石製石鍋片、鉄釘、鉄滓、古代の土師器・須恵器などがある。当初SK29として掘り下げたため、SK29

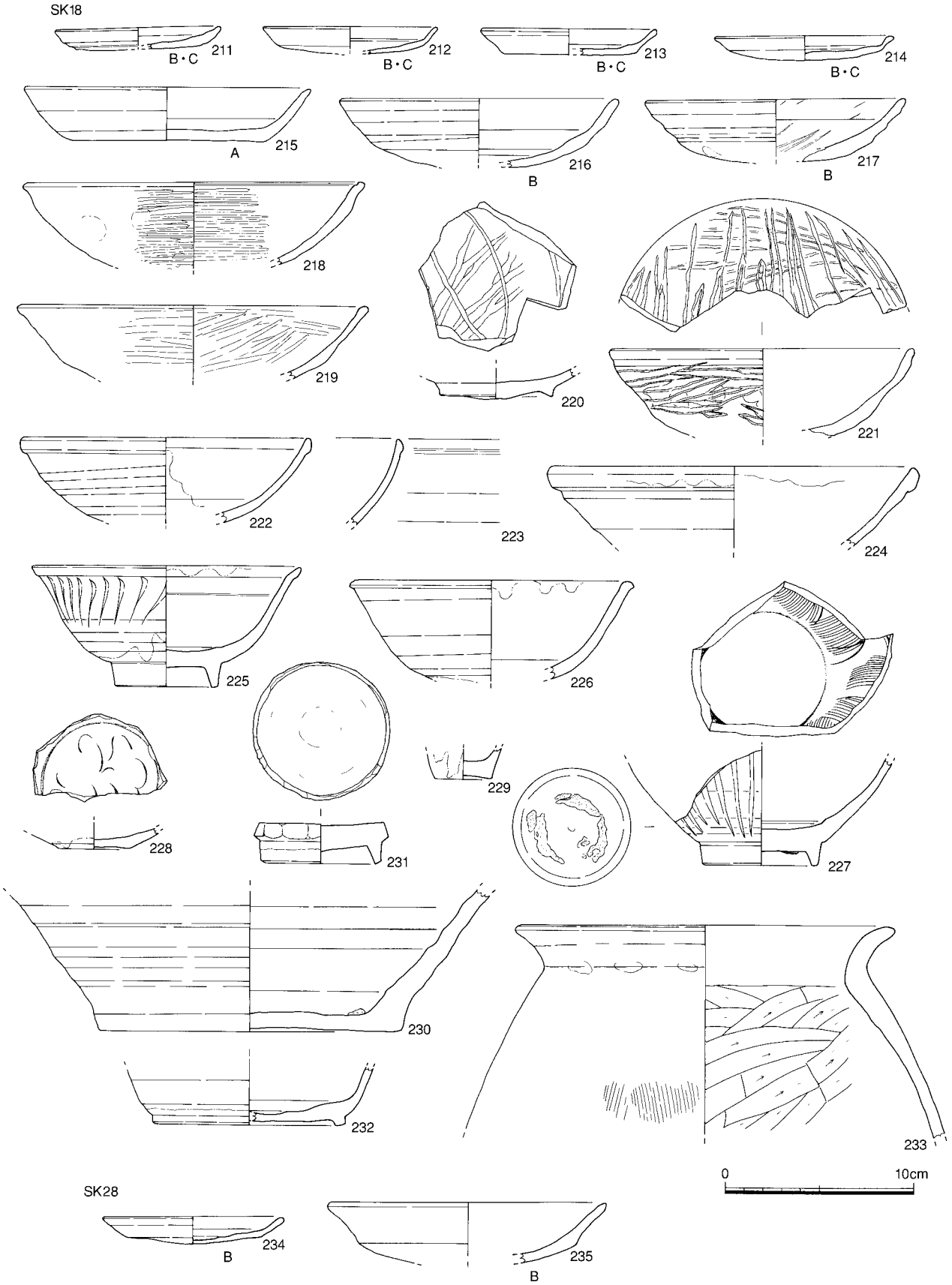


Fig.20　**SK18・28出土遺物（1/3）** A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

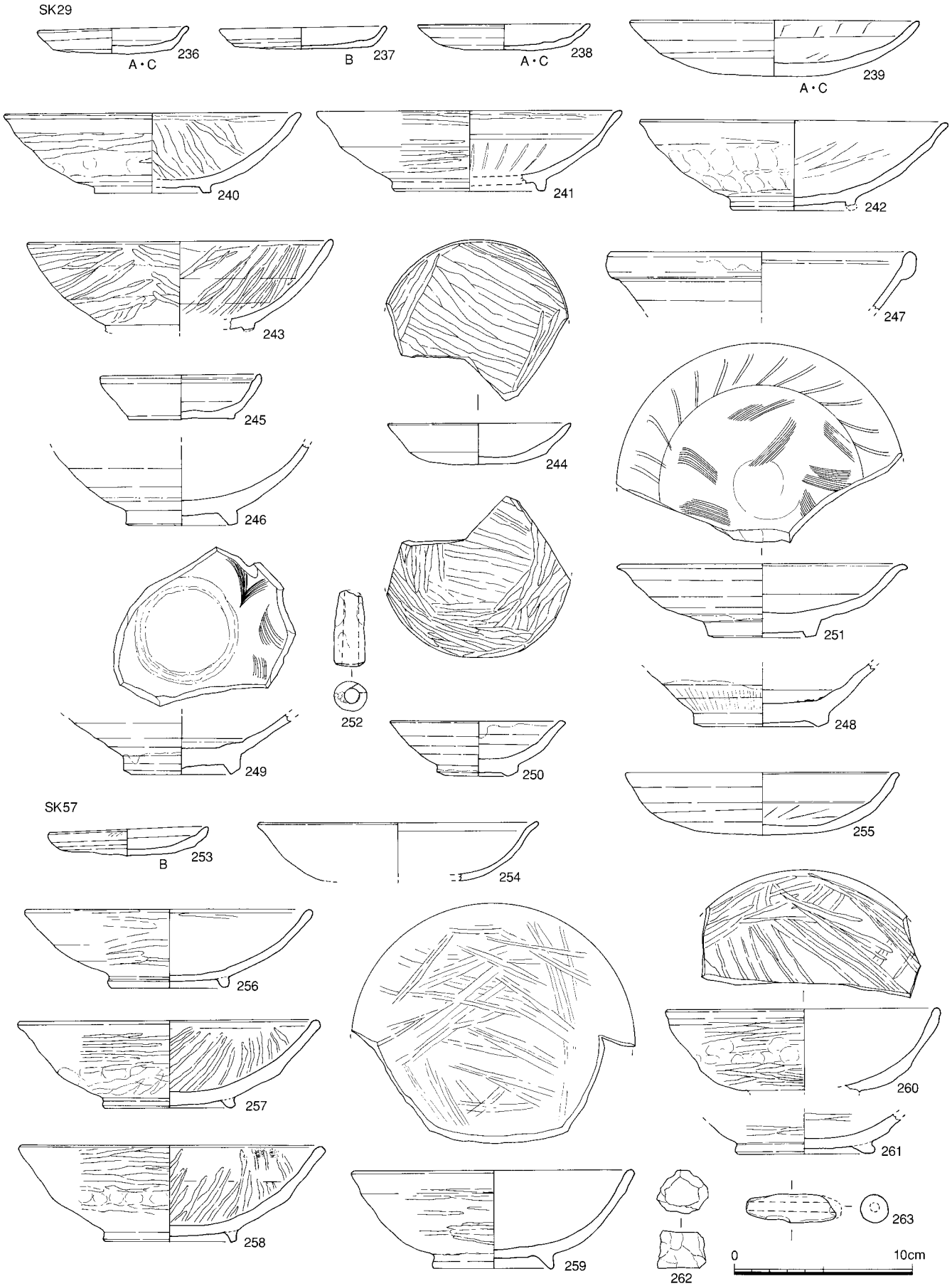


Fig.21　**SK29・57出土遺物（1/3）**　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

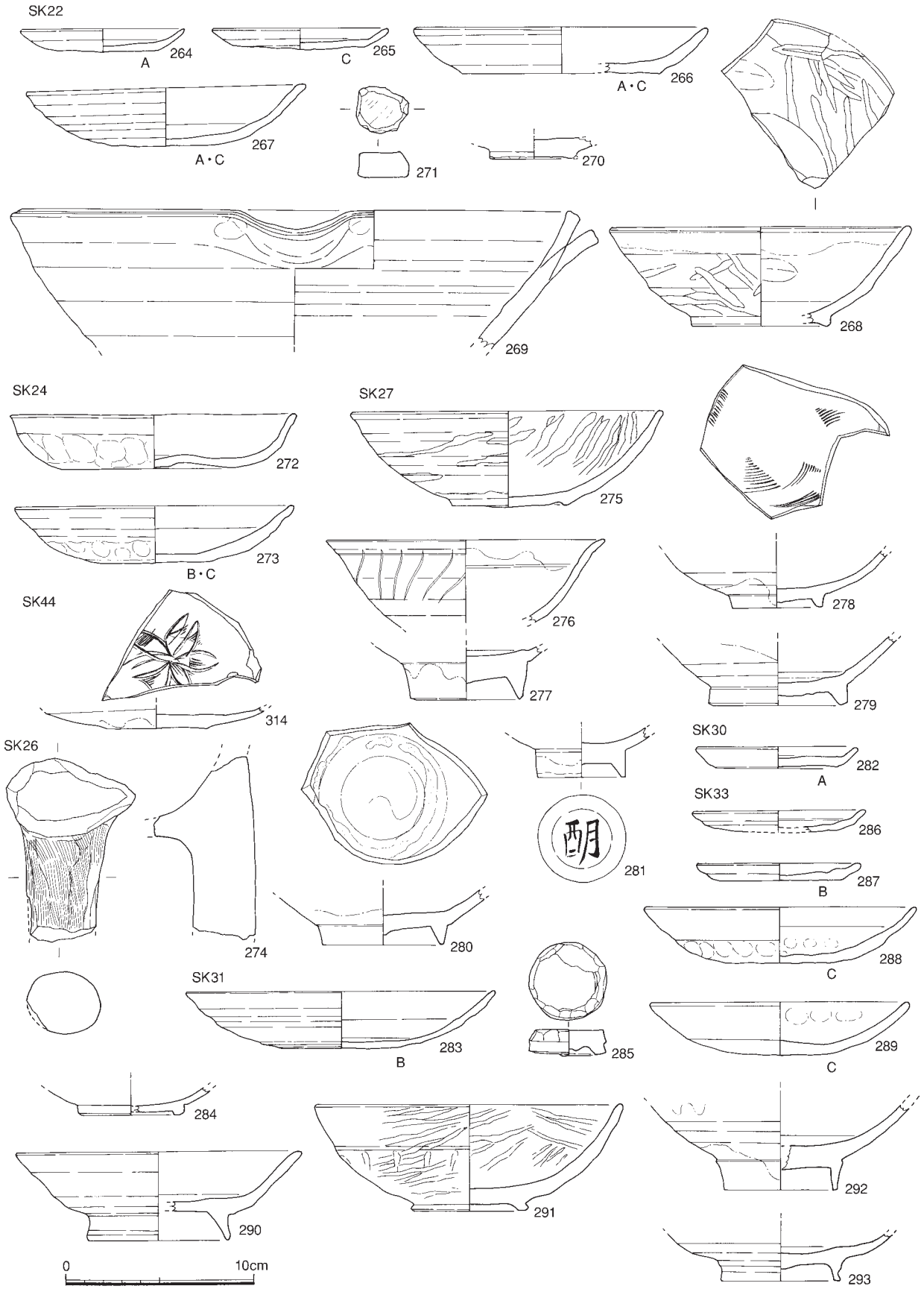


Fig.22　SK22・24・26・27・30・31・33・44出土遺物（1/3）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

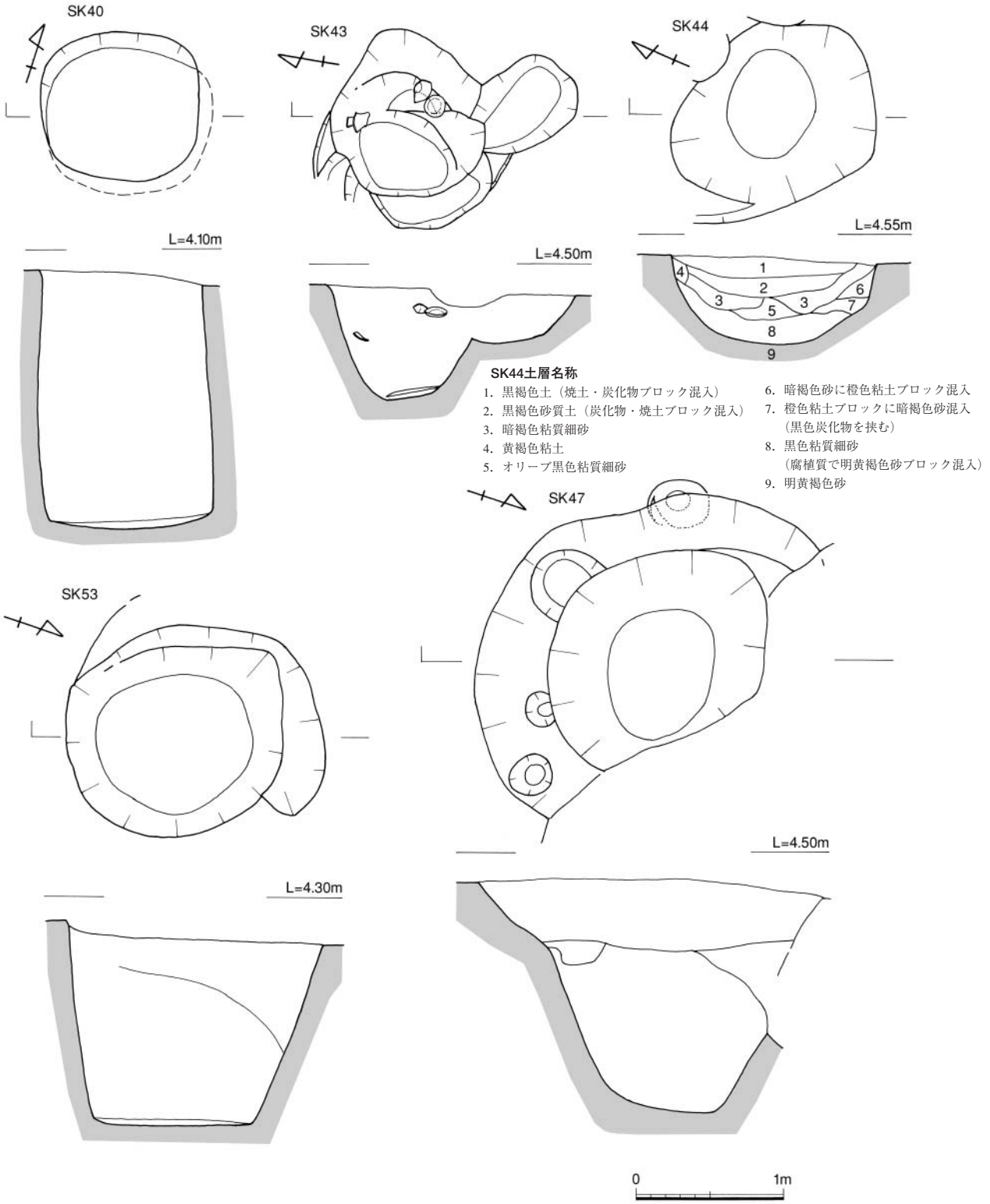


Fig.23　SK40・43・44・47・53（1/40）

に遺物が混入している。**253**～**255**は土師器。**253**は小皿。完形で口径8.9㎝、器高1.7㎝を測る。口縁部に一部ススが付着する。**254**・**255**は丸底坏。復元口径15.6㎝・15.8㎝、器高3.3㎝・3.4㎝を測る。調整はナデで、**255**の内面には工具痕が残る。**256**～**261**は瓦器椀。口径15.4～17.0㎝、器高4.4～5.4㎝を測る。いずれも調整は、外面はヨコヘラミガキ、内面不整方向のヘラミガキを加える。**261**は底部。**262**は瓦玉。瓦の細片を転用したもの。**263**は管状土錘。端部を欠損する。残存長は5.0㎝を測る。

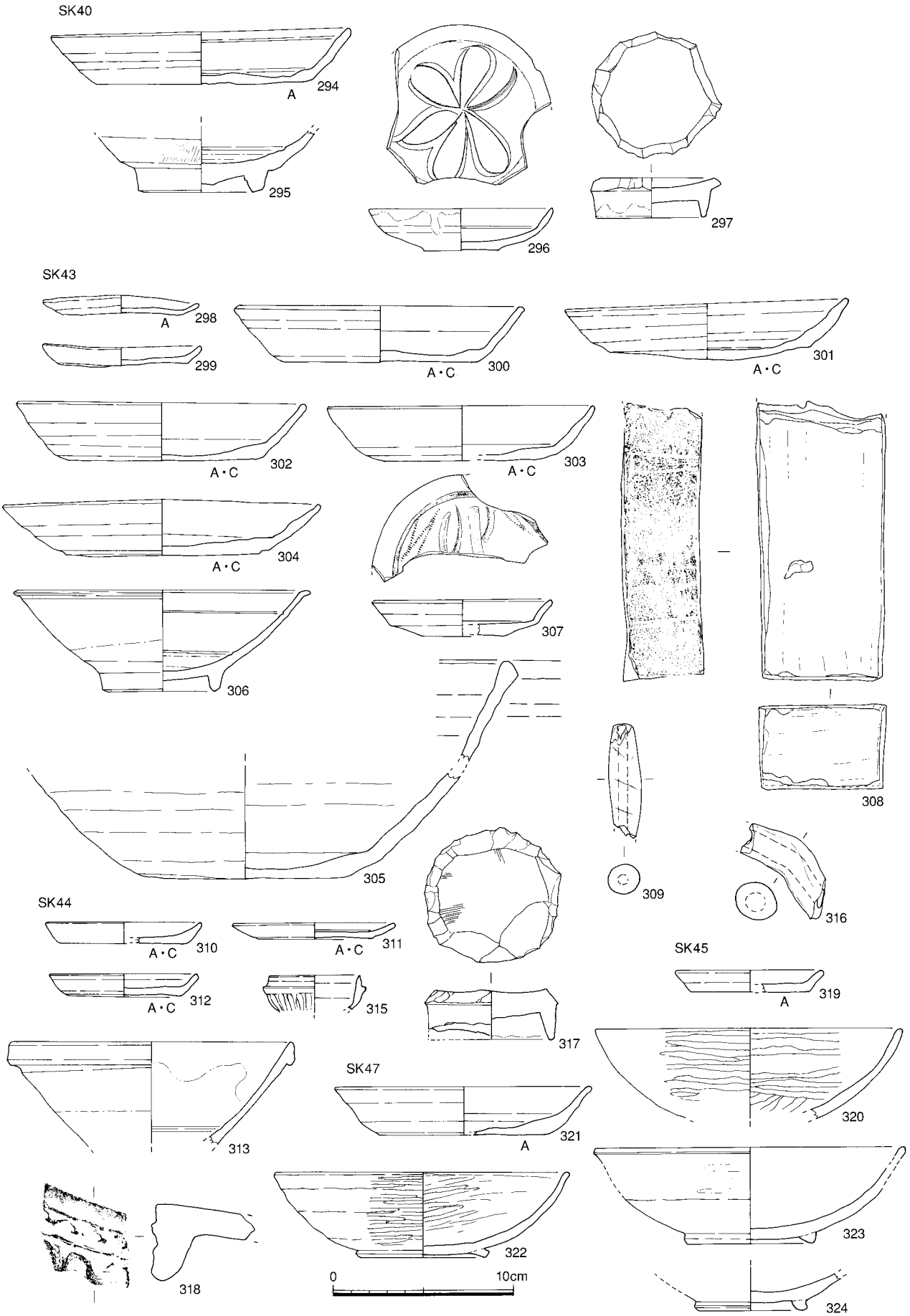


Fig.24　SK40・43～45・47出土遺物（1/3）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

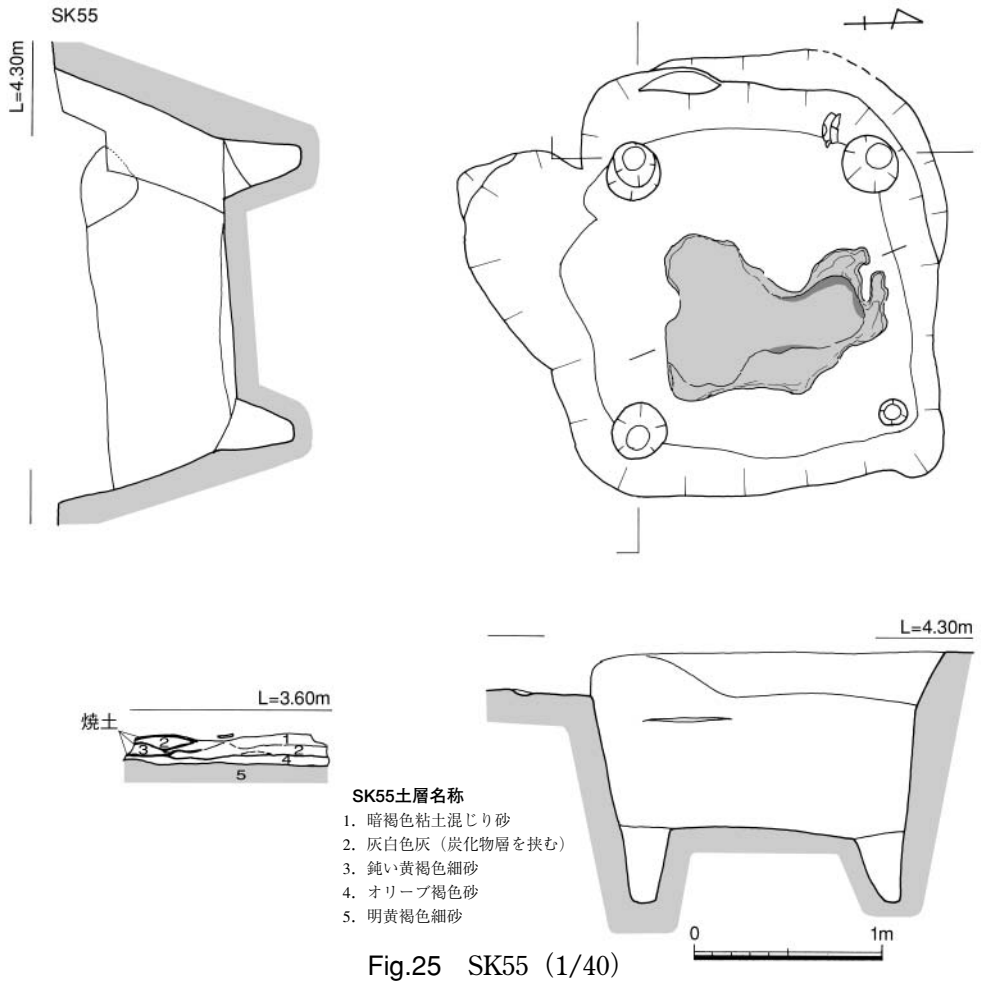


Fig.25　SK55（1/40）

358は小型の滑石石鍋。復元口径9.0㎝を測る。縦の鍔が付くが。鍔部は丁寧にケズリ加工を行なう。**359**は軽石製品。表面は擦っている。

SK22（Fig.17・22）　B・C-４区で検出した長方形の土坑。SK14と主軸は同じ。長軸長2.06m、短軸幅1.60m、最大深1.18mを測る。埋土は上層が暗灰黄土を主体とし、暗オリーブ褐色土、黄色砂や炭化物を含む。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、国産陶器、土錘、滑石製品片、鉄釘、鉄滓、古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**264～267**は土師器。**264・265**は小皿。**265**はほぼ完形。口径8.7㎝・9.2㎝、器高1.2㎝を測る。**266・267**は坏。口径15.5㎝・14.8㎝、器高3.2㎝・2.5㎝を測る。**268**は瓦器椀で復元口径16㎝を測る。内外面粗いヘラミガキ。**269**は瓦質土器の片口鉢口縁片。復元口径30.2㎝を測る。内外面回転ナデ。**270**は緑釉の底部片。内外面淡黄色釉の施釉で、底部糸切り。**271**は瓦玉。陶器片を再利用したもの。**347**は滑石製石鍋の転用品。中央部に摘みがあり側面に孔が開く。**264・265・267・268・269・270・347**は下層出土。出土遺物から遺構の時期は12世紀後半頃と考える。

SK24（Fig.17・22）　B-４区で検出した円形土坑。南側は攪乱で切られる。長軸長0.9m、深さ0.35mを測る。埋土は黒褐色砂である。　**出土遺物**は中世の土師器、中国産白磁、古代の土師器・須恵器がある。**272・273**は土師器坏で**272**は完形。口径15.1㎝・14.8㎝、器高3.0㎝・3.1㎝を測る。**273**は口縁部の一部が黒化する。灯明皿か。**272**は手捏で指押え痕が残る。

SK26（Fig.22）　C-４区で検出した不整形状の土坑。深さ0.4mを測る。埋土は灰黄褐色砂質土。**出土遺物**は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、鉄製品、古墳時代から古代の土師器・須恵器があるが、肥前磁器も混入で１点出土している。**274**は土師質土器の支脚。火鉢の支脚か。

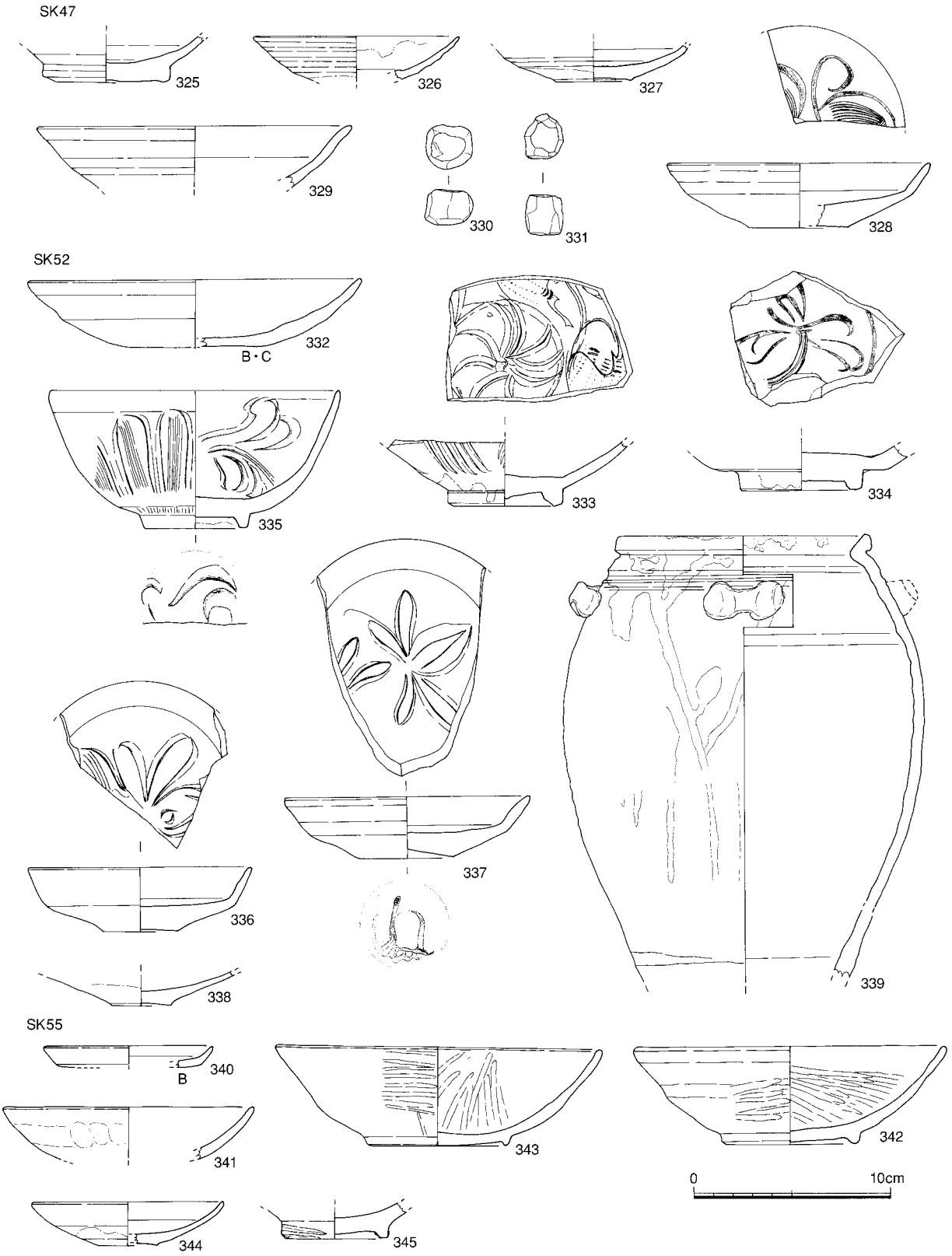


Fig.26　SK47・52・55出土遺物（1/3）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

SK27（Fig.18・22・27、PL.3）　C-４区で検出した円形土坑。SK26に切られる。規模は1.0m×1.2m、深さは1.06mを測る。壁面は直に近く、やや抉れる部分がある。埋土は水平堆積で上層は灰黄褐色砂質土や黄褐色砂、下層は暗オリーブ褐色土、黒褐色砂質土。　**出土遺物**は中世の土師器、須恵器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、鉄製品、滑石製品の細片、焼石と古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**275**は低い高台がつく瓦器椀で口径16.5㎝、器高5.0㎝を測る。内外面ナデと雑なヘラミガキ。**276**～**281**は白磁碗。**276**・**277**はⅥ類で同一個体。**276**は復元口径14.8㎝を測る。**277**の高台はケズリで内面は露胎。**278**はⅩ類の底部。底部はケズリで露胎。**279**はⅦ-１a類で見込みの蛇ノ目釉剥ぎ部分に重ね焼き粘土が残る。**280**はⅦ-２類。高台部は雑なケズリで露胎。**281**は内面に墨書を持つ高台部片。『酬』の字か。**348**は滑石製石鍋で復元口径30.5㎝を測る。外面ケズリ、内面ケズリ後ケンマ仕上げ。**276**・**277**は上層、**280**・**281**は下層出土。出土遺物から遺構の時期は12世紀中頃～後半頃と考える。

SK30（Fig.22）　C-30区で検出した隅丸方形の土坑。上面に礫群が西側には礫群がある。長軸長1.64m、短軸長1.44m、深さは0.35m、埋土は黒褐色砂質土である。　**出土遺物**は中世の土師器、土師質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、鉄滓、焼石と古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**282**は土師器小皿で復元口径8.6㎝、器高1.1㎝を測る。

SK31（Fig.22・33）　B-４区で検出した長方形土坑。長軸長1.36m、短軸長0.72m、深さ0.1mを測る。埋土は黒褐色砂質土である。　**出土遺物**は中世の土師器、中国産白磁・青磁、中国銭１枚、焼石と古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**283**は中層～下層出土。土師器の坏。復元口径16.4㎝、器高3.0㎝を測る。底部ヘラ切り後ナデ。**284**は白磁皿の底部。**285**は上層出土の瓦玉。青磁碗底部を再利用したもの。**651**は北宋の天聖元寶（初鋳年1023年）である。

SK33（Fig.22）　C・D-４区で検出した溝状の土坑。幅0.6m、深さ１m、北壁土層を見ると、埋土は大きく２層に分かれ、主体は黒褐色砂である。中層に焼土・炭化物を含む。　**出土遺物**は中世の土師器、中国産白磁・青磁・陶器、古代の土師器・須恵器、炭化物、骨片などがある。**286**～**290**は土師器。**286**・**287**は小皿。口径8.8㎝・9.2㎝、器高0.9㎝・1.2㎝を測る。**288**・**289**は丸底坏。復元口径14.6㎝・13.8㎝を測る。底部押し出し調整でナデ仕上げ。**290**は高台が付く坏。復元口径15.2㎝、器高4.7㎝を測る。底部は回転ヘラケズリ後ナデ。**291**は瓦器椀で復元口径16.2㎝を測る。調整はヘラミガキ。**292**は白磁碗Ⅵ類底部。高台はケズリ出す。**293**は越州窯系青磁碗底部。見込みと高台に目跡がある。出土遺物から遺構の時期は11世紀後半頃と考える。

SK40（Fig.23・24、PL.3）　C-３区の攪乱下で検出した円形土坑。規模は1.0m×1.06m、深さ1.75mを測る。壁面は直かやや内傾する。　**出土遺物**は中世の土師器、中国産白磁・青磁、焼石と古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**294**は土師器の坏でほぼ完形。口径16.5㎝、器高3.1㎝を測る。**295**・**296**は白磁。**295**は碗Ⅸ類。体部下半から高台はケズリで露胎。**296**は皿Ⅵ類。復元口径10.2㎝、器高2.8㎝を測る。見込みには片切彫りの花文が入る。**297**は瓦玉。白磁碗底部を再利用したもの。出土遺物から遺構の時期は12世紀後半頃と考える。

SK43（Fig.23・24・27、PL.3）　B-１区で検出したSK45に切られる土坑。規模は径1.15m、最大深0.8mを測る。埋土は炭化物・灰を含む暗褐色土や黒褐色土で、下層は暗オリーブ褐色細砂が堆積する。**出土遺物**は中世の土師器、黒色土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、瓦類、鉄釘、鉄滓、古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**298**～**304**は土師器。**298**・**299**は小皿。口径8.8㎝・8.9㎝、器高1.1㎝・1.3㎝を測る。**298**は歪みがひどい。**300**～**304**は坏。**300**はほぼ完形。口径14.8～17.0㎝、器高3.1～3.4㎝を測る。**305**は東播系中世須恵器鉢底部と口縁部細片。調整はナデ。**306**は白磁碗Ⅶ類

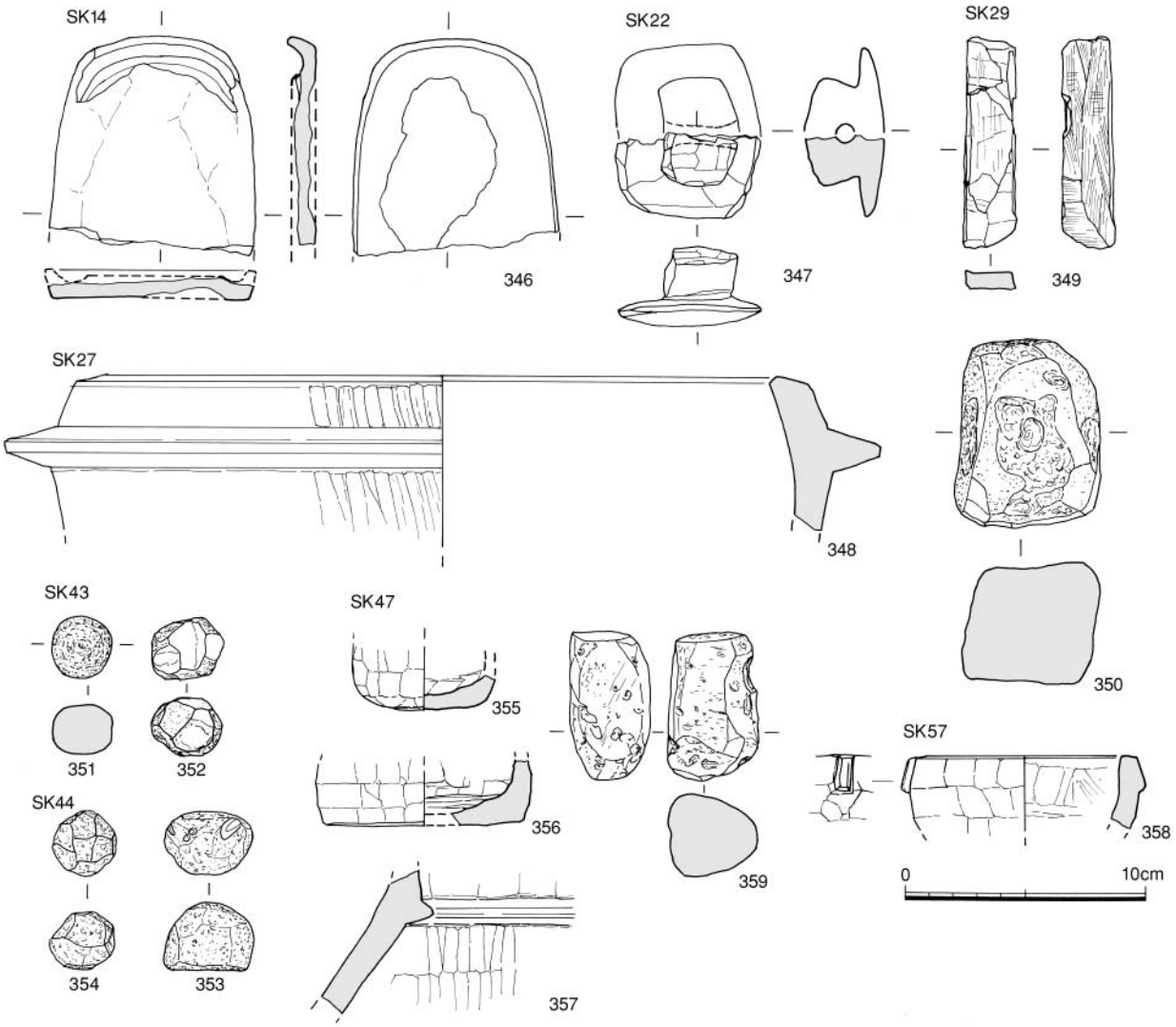


Fig.27　各土坑出土石製品（1/3）

で口径16.4㎝、器高5.7㎝を測る。高台はケズリで露胎。畳付に砂粒が付着する。**307**は同安窯系青磁Ⅲ類。復元口径10.0㎝、器高2.0㎝を測る。櫛歯の刺突と片切彫りの花文が入る。**308**は長方形の磚。幅6.8㎝、厚み4.5㎝を測る。各面は工具ナデ。**309**は土師質の管状土錘。両端を欠損するが、残存長6.2㎝を測る。**351**～**353**は円形の石球。直径2.6～3.7㎝を測る。表面の調整は粗割か擦り調整。石材は、**351**・**352**は砂岩。**353**は軽石。出土遺物から遺構の時期は12世紀後半頃と考える。

SK44（Fig.22・23・24・27、PL.3）　B-１区で検出したSK43に切られる不整円形の土坑。規模は長軸径1.4m、短軸径1.2m、深さ0.5mを測る。中央部が深くなる。埋土は上層が黒褐色土・砂質土、中層から下層はオリーブ黒色粘質砂から黒色粘質細砂で、上層は焼土・炭化物ブロックを多く含む。**出土遺物**は中世の土師器、黒色土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、丸瓦、鉄滓、石球、古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**310**～**312**は土師器小皿。復元口径8.2～9.0㎝、器高1.0～1.2㎝を測る。**313**は白磁碗Ⅳ類で復元口径15.5㎝を測る。体部下半は露台。**314**は白磁ⅢⅦb類。見込みは櫛歯と片切彫りによる花文。灰オリーブ釉がかかるが底部は露台。**315**が青白磁合子で復元口径4.5㎝を測る。内外面灰白色から淡青色釉がかかる。**316**は褐釉陶器の注口。鈍い黄褐色釉がかかる。**317**は瓦玉。白磁碗底部を再利用したもの。**318**は波状押圧文軒平瓦の瓦当小片。**354**は円形の石球。出土遺物から遺構の時期は12世紀後半頃と考える。

SK45（Fig.24）　B-１区で検出したSK43を切る長楕円形状の土坑。　**出土遺物**は中世の土師器、

瓦器、中国産白磁などが出土している。**319**は土師器小皿。復元口径8.2㎝、器高1.2㎝を測る。底部は糸切り。**320**は瓦器椀で復元口径17.0㎝を測る。内外面雑なヘラミガキ。

SK47（Fig. 24・26・27、PL.3）　SE46に切られる土坑。大きく深いので井戸の可能性もあるが、井筒が確認できないので土坑とした。長軸径2.6m、最大深さは1.6mを測る。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、滑石製石鍋、焼石、古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**321**は土師器坏。復元口径14.2㎝、器高2.7㎝を測る。**322**～**324**は瓦器。**322**・**323**は復元口径16.2㎝・17.2㎝、器高4.7㎝・5.3㎝を測る。体部内外面ヘラミガキ、**323**はやや摩滅する。**324**は底部片。**325**～**327**は白磁。**325**は碗Ⅳ類かⅫ類の底部。**326**～**327**は皿。いずれもⅡ類で底部は露胎。**328**は龍泉窯系青磁皿Ⅰ-３類。復元口径13.4㎝、器高3.3㎝を測る。底部は露胎。**329**は国産の瀬戸灰釉陶器碗か。復元口径16.0㎝を測る。内面自然釉がかかる。**330**・**331**は瓦玉。いずれも陶器片を再利用したもの。**355**～**357**は滑石石鍋。**355**・**356**は小型の石鍋片。内外面ケズリ調製であるが、内面のケズリは雑である。**357**は口縁部片。出土遺物から遺構の時期は12世紀前半～後半頃と考える。

SK51（Fig.13）　SE46と攪乱に切られる円形土坑。長軸径0.9m、最大深さ0.7mを測る。**出土遺物**は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・青磁などと古墳時代から古代の土師器・須恵器や弥生土器が少量出土しているが、細片が多く図示出来なかった。

SK52（Fig.26、PL.3）　B-４区で検出した楕円形状土坑。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、瓦類、古墳時代～古代の土師器・須恵器などがある。**332**は土師器坏。復元口径17.0㎝、器高3.4㎝を測る。**333**～**338**は青磁。**333**は同安窯系碗Ⅳ類の底部か。内面片切彫りと櫛描による施文。**334**は龍泉窯系碗Ⅰ-４類の底部。見込みに片切彫りによる花文が入る。**335**は龍泉窯系碗Ⅰ類。復元口径14.8㎝、器高7.0㎝を測る。内面に片切彫りの花文、外面蓮花に櫛目が入る。**336**・**337**は龍泉窯系皿Ⅰ-３b類。**336**は口径11.4㎝、器高3.2㎝を測る。見込みは劃花文。底部釉の掻き取り。**337**は復元口径12.6㎝、器高3.2㎝を測る。底部に花押と思われる墨書がある。**338**は青磁の釉であるが白磁皿Ⅱ類の形態。底部はケズリで露胎。**339**は褐釉陶器四耳壺で、破片から図上復元。復元口径12.6㎝を測る。灰オリーブ釉上に褐色釉が上掛けされる。出土遺物から遺構の時期は12世紀中頃～後半頃と考える。

SK53（PL.3）　B・C-４区のSK22下で検出した略楕円形を呈す土坑。規模は1.74m、短軸長1.44m、深さ1.4mを測る。**出土遺物**は取り上げ時にミスがあったため不明。

SK55（Fig.25・26、PL.3）　第１面下のC-４区で検出した隅丸方形状の土坑。南側は他遺構に切られるが、確認規模は東西長2.32m、南北長2.06m、深さは0.75mを測る。四隅には円形ピットが４か所ある。埋土は上層が鈍い黄褐色砂やオリーブ褐色砂、下層は黒褐色砂質土で、その下床面中央部には焼土・灰・炭化物が纏まって出土した。半地下式の倉庫のようなものかも知れない。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、瓦類、古墳時代から古代の土師器・須恵器などが出土している。**340**は土師器小皿。復元口径8.6㎝、器高1.1㎝を測る。**341**～**343**は瓦器。**341**は皿口縁部で復元口径12.8㎝を測る。内外面平滑に丁寧に仕上げる。**342**・**343**は椀で復元口径16.0㎝・16.7㎝、器高5.0㎝・4.9㎝を測る。調整はナデで、内外面粗いヘラミガキを加える。**344**は白磁小皿Ⅱ類。復元口径9.8㎝、器高2.2㎝を測る。灰白色釉がかかるが、底部は露胎。**345**は青磁碗底部で全面灰オリーブ釉がかかり、畳付には重ね焼き目跡が残る。出土遺物から遺構の時期は12世紀前半頃と考える。

③　ピット出土遺物（SP）（Fig.28・29）

第１面及び第１面下で検出したピット出土の遺物を報告する。

第１面ピット出土遺物　**360**はSP07出土の土師器小皿。口径9.6㎝。**361**・**362**はSP08出土。**361**は土師器小皿。口径9.8㎝を測る。**362**は瓦玉。土師質の瓦細片の再利用品。**363**はSP11出土。土師器の坏。復元口径14.2㎝を測る。**364**・**365**はSP21出土。**364**は土師器小皿で復元口径9.2㎝を測る。**365**は白磁碗Ⅳ類口縁。復元口径15.8㎝を測る。**366**はSP22出土。白磁碗底部で畳付に重ね焼き痕が残る。**367**～**369**はSP49出土。**367**・**368**は土師器の丸底坏。復元口径14.2㎝・15.7㎝を測る。**369**は瓦玉。青磁碗底部を再利用したもの。**370**はSP65出土。瓦玉で白磁碗底部を再利用したもの。**371**はSP71出土。平面八角形の青白磁合子。復元口径3.8㎝を測る。**372**・**373**はSP85出土。土師器小皿。口径10.0㎝・9.5㎝を測る。**374**～**376**はSP93出土。**374**は土師器小皿で口径8.8㎝を測る。**375**は白磁碗Ⅶ類の底部。高台部以外灰白色釉がかかる。**376**は龍泉窯系青磁皿Ⅰ類。復元口径10.0㎝を測る。底部は釉を拭い取る。**377**はSP96出土の土師器坏。復元口径15.0㎝を測る。**378**～**382**はSP97出土。**378**～**380**は土師器。**378**・**379**は小皿。復元口径9.4㎝を測る。**380**は坏で復元口径14.3㎝を測る。**381**・**382**は白磁碗Ⅵ類の底部。高台部はケズリで露胎である。**383**・**384**はSP99出土の瓦器椀。**383**は口縁部で復元15.4㎝を測る。**384**は底部片。**385**はSP112出土の白磁碗底部。**386**はSP118出土の古墳時代前期布留式土器古段階の甕。復元口径15.8㎝を測る。口縁内側に凹線が巡る。**387**・**388**はSP119出土。**387**は土師器の坏。復元口径13.2㎝を測る。**388**は白磁碗Ⅲ類か。復元口径16.8㎝を測る。**389**はSP123出土。古墳時代前期の山陽系二重口縁壺。口縁部８条の櫛描横線が巡る。**390**～**392**はSP125出土。**390**は土師器坏で、口径15.5㎝を測る。調整は回転ナデで内面工具痕が残る。**391**は瓦器椀。復元口径17.0㎝を測る。内外面ヘラミガキ。**392**は白磁碗Ⅳ-１a類。復元口径17.0㎝を測る。体部から高台部は露胎。**393**はSP128出土。古墳時代前期小型甕。**394**はSP131出土。土師質の管状土錘。両端部は欠損する。残存長6.1㎝を測る。**395**はSP133の瓦玉。布目瓦細片の転用か。**396**はSP136出土。白磁碗Ⅳ類の底部。高台部はケズリで露胎。**397**はSP138出土。黒色土器底部。体部はヘラミガキ。**398**はSP155出土。白磁碗Ⅵ類の底部か。**399**はSP183出土。白磁碗Ⅳ類の底部で、復元口径16.3㎝を測る。**400**はSP185出土の土師器丸底坏。復元口径18.6㎝を測る。**401**はSP188出土。白磁碗Ⅱ類の口縁片。**402**はSP211出土。口縁部が玉縁状を呈す土師器。口径16.2㎝を測る。調整はヘラミガキで、底部に板状圧痕が残る。**403**・**404**はSP218出土。土師器小皿で8.6㎝・9.0㎝を測る。**405**はSP225出土。白磁碗Ⅳ-１a類。復元口径16.2㎝を測る。**406**・**407**はSP235出土。**406**は土師器小皿。完形で口径9.1㎝を測る。**407**は白磁碗Ⅶ-２類。内底見込みは蛇ノ目状に釉を掻き取る。**408**～**410**はSP289出土。土師質の管状土錘。いずれも細身で端部を欠損する。残存長3.2㎝・2.8㎝・4.9㎝を測る。

第１面下ピット出土遺物　**411**はSP224出土。土師質の管状土錘。端部を一部欠くが、残存長7.6㎝を測る。**412**はSP240出土。８世紀前半の須恵器坏。**413**はSP254出土。古墳時代前期の鉢。復元口径13.4㎝を測る。外面ヘラミガキ、内面ハケ目調整。**414**～**416**はSP257出土。**414**・**415**は土師器小皿。復元口径9.4㎝を測る。**416**は白磁Ⅳ-１a類の底部。**417**はSP261出土。土師器椀。復元口径15.8㎝を測る。外面はヘラミガキ。**418**はSP263出土。瓦器椀底部。**419**はSP278出土。白磁皿Ⅷ類。見込みは線描きの花文。

④　その他の遺構出土遺物（SX）（Fig.30）

攪乱土坑と遺構として明確でない遺構（SX）について報告する。**420**はSX08近代攪乱より出土した角を欠く般若の面。全長19.4㎝を測る。陶製で型作りか。実用でなく好事家が趣味として集めたもの。**421**・**422**はSX19（不明落ち込み）出土。**421**は土師器小皿で復元口径9.0㎝を測る。**422**は瓦玉。古代の須恵質の平瓦片を再利用したもの。**423**・**424**はSX23（建物基礎跡）出土。**423**は江戸時代の外面菊花状の紅皿。**424**は瓦玉。古代の須恵質の平瓦転用。**425**～**427**はSX32（浅い落ち込み状遺構）出

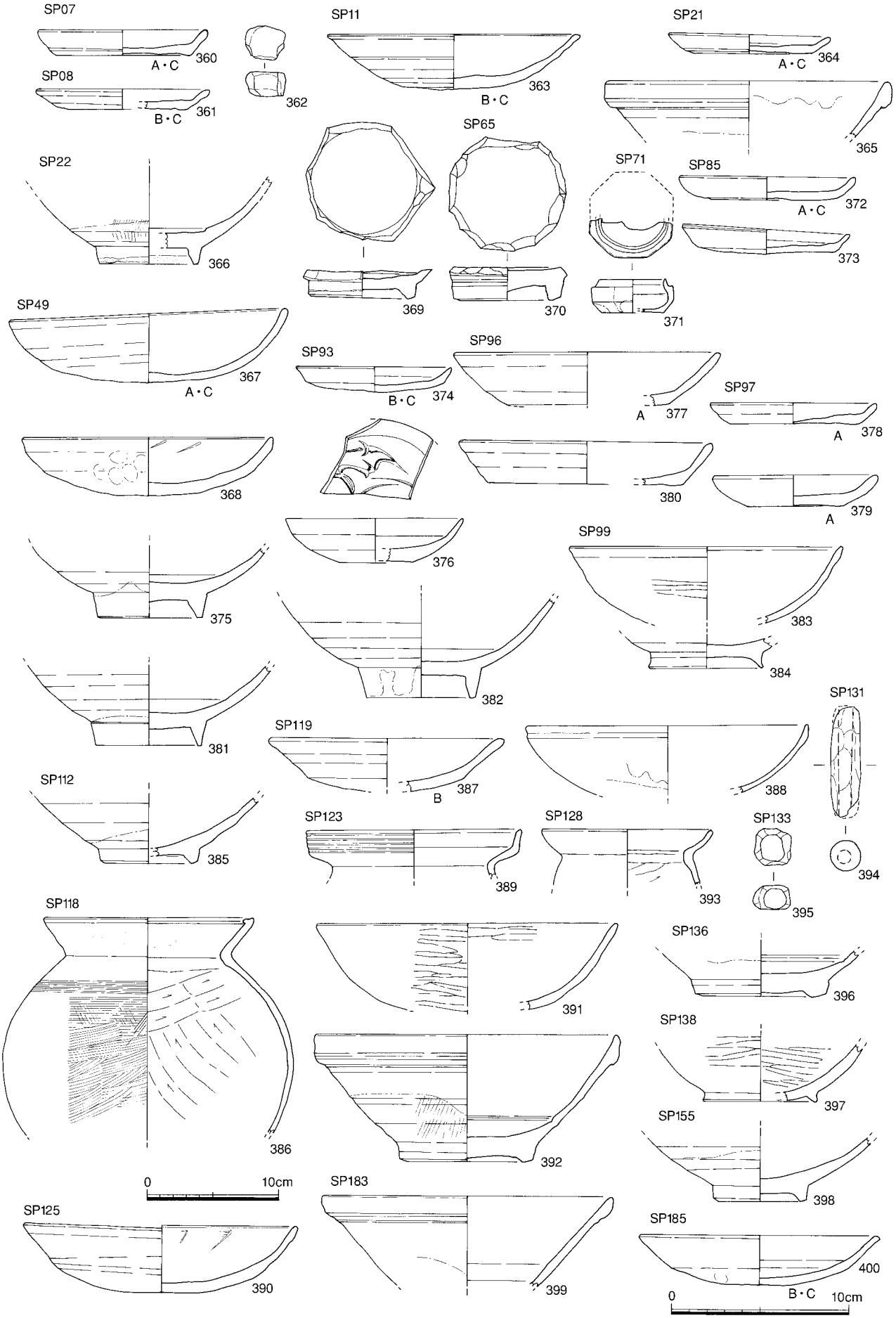


Fig.28　第１面ピット出土遺物（1/3・1/4）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

土。**425**は土師器小皿。復元口径9.4㎝を測る。**426**は瓦器椀で口径16.2㎝を測る。体部はヘラミガキで下半に指押さえ痕が残る。**427**は瓦玉。須恵器片を再利用したもの。**428**～**430**はSX37（C-３区の不明遺構。SX38と切り合う）出土。**428**は土師器皿で復元口径14.6㎝を測る。底部回転ヘラケズリ。**429**玄界灘式製塩土器の上半部片。歪むが復元口径25.4㎝を測る。外面平行タタキで、赤く焼けて黒ずむ。８～９世紀頃のもの。**430**は褐釉陶器の甕口縁部。**431**～**435**はSX38出土。**431**～**433**は土師器。**431**は皿で復元口径14.8㎝を測る。**432**は坏。ほぼ完形で口径13.3㎝を測る。**431**・**432**共底部ヘラ切り後ナデ。**433**は椀底部。**431**～**433**は９世紀前半のもの。**434**は甕口縁から胴部。復元口径23.4㎝を測る。器壁は厚手で、外面は木目直交のタタキ、内面はナデで当て具痕が残る。内外面は赤く焼け、ススが付着している。**435**は略円形の土玉か瓦玉。直径2.2×2.4㎝を測る。表面は摩滅する。**436**はSX41出土の瓦器椀底部。**437**はSX42出土の白磁碗Ⅶ-１c類の底部。**438**はSX49出土の白磁碗Ⅸ類の口縁部。**439**はSX59（攪乱土坑）出土の褐釉壷。内外面暗オリーブ褐色釉がかかる。**440**～**442**はSX68（不明落ち込み）出土。**440**は褐釉陶器の鉢口縁部片。**441**は青白磁の皿底部。見込みに梅花のスタンプ文様を施す。**442**は波状押圧文軒平瓦の瓦当。

⑤　第１面遺構面出土遺物（Fig.31）

443～**445**は土師器小皿。復元口径8.2～9.6㎝を測る。**446**は土師器坏。口径16.1㎝を測る。**447**は瓦器椀底部。底径6.6㎝を測る。調整は回転ナデとナデで指押え痕が残る。**448**・**449**は白磁。**448**は碗Ⅶ-１c類底部片。底径6.2㎝を測る。高台はケズリで露胎。**449**は皿Ⅰ-１類。高台に重ね焼き痕がある。**450**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-４類。高台部は無釉であるが目跡が残る。**451**は高麗青磁の鉄絵壺胴部。内外面不透明な灰オリーブ釉がかかる。**452**は肥前磁器紅皿。釉は不均一にかかる。**453**は軒丸瓦の瓦

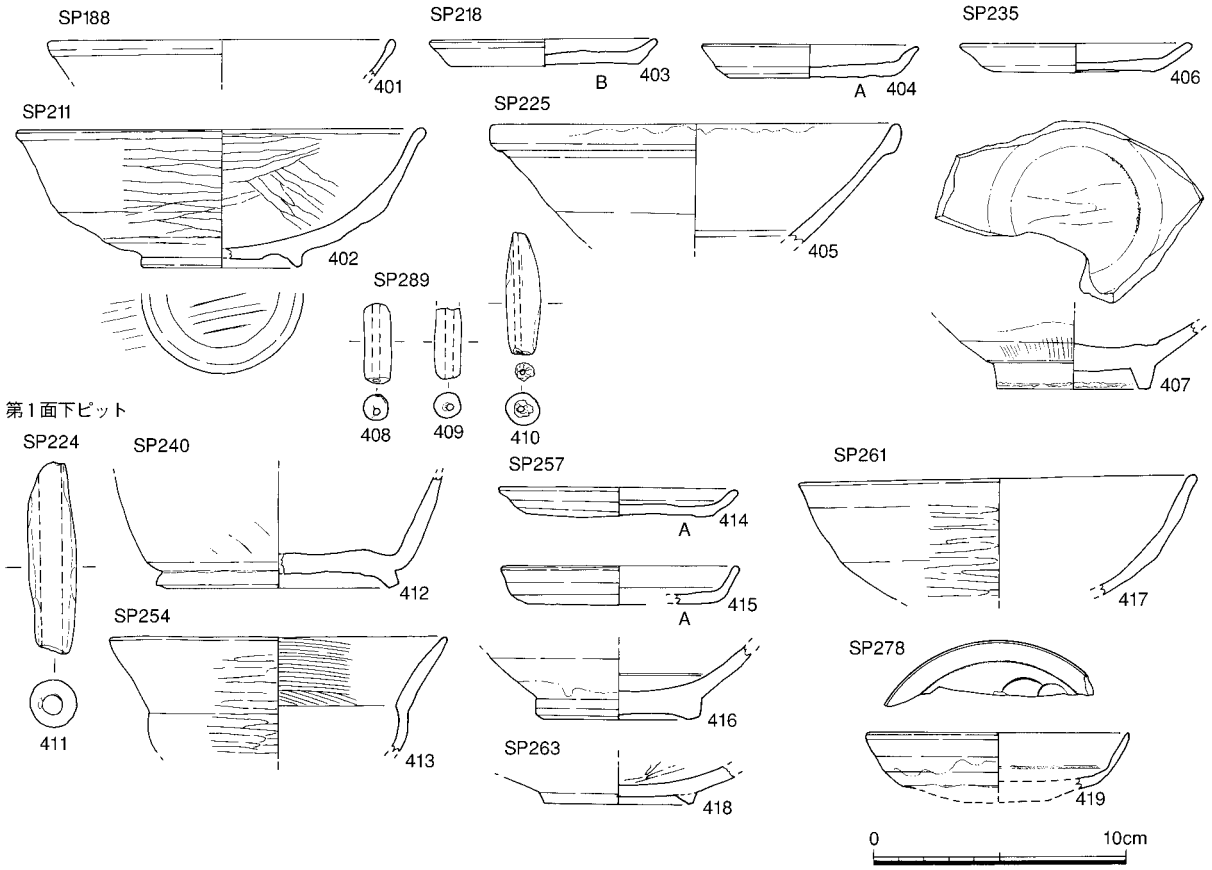


Fig.29　第１面・第１面下ピット出土遺物（1/3）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

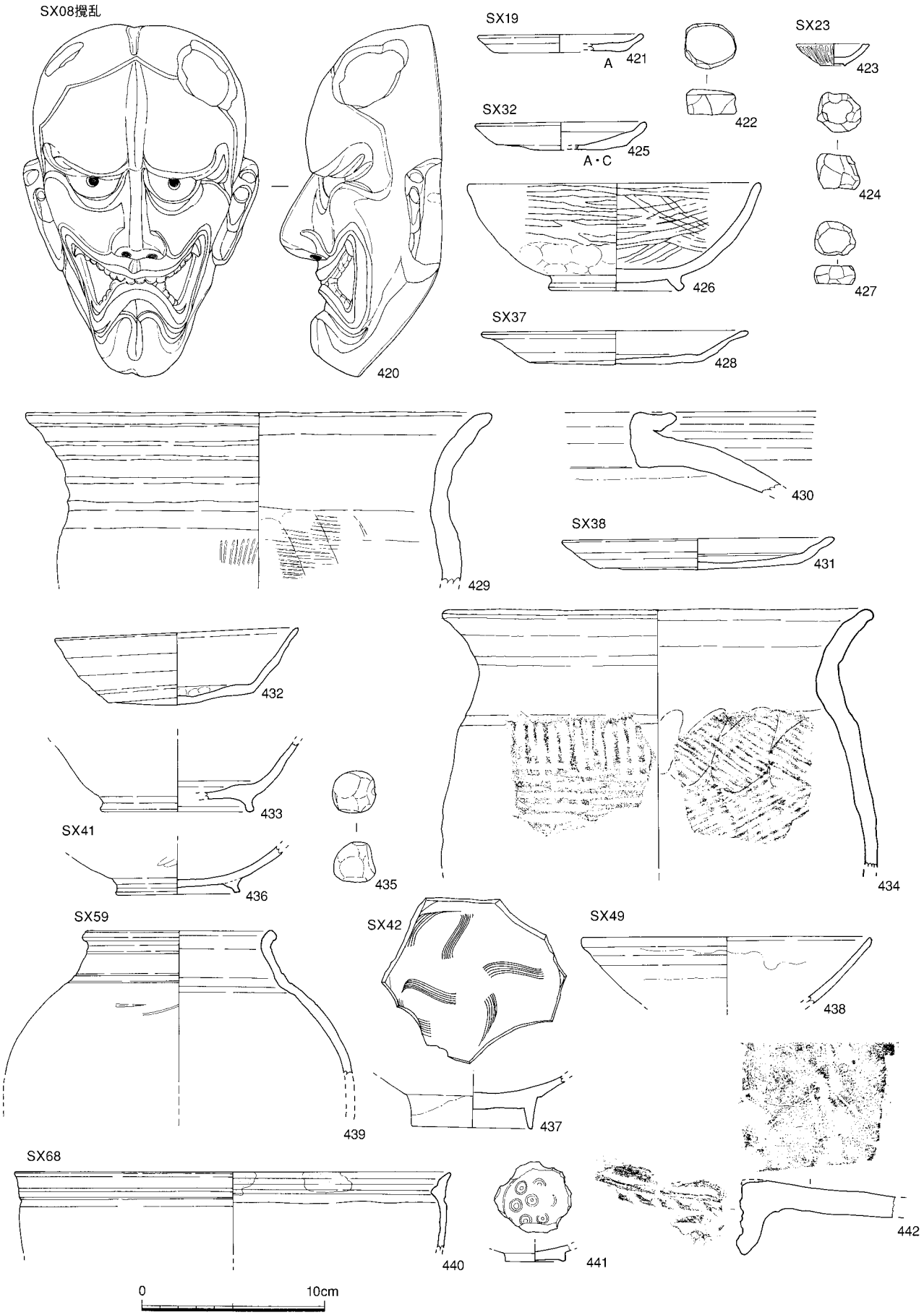


Fig.30　その他（SX）の遺構等出土遺物（1/3）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

頭。文様は草花文。**454**は陶製の文鎮。底部に「博多○町　皿山」と彫られている。**455**は須恵器片利用の瓦玉。**456**は土師質の管状土錘。

⑥　第１面出土石製品・鉄製品

石器類・石製品（Fig.32）　**457**はSX19出土。砥石片で残存長9.0㎝を測る。石材は頁岩。**458**はSX32出土。紡錘車の一部。石材は滑石。**459**はSX38出土。丸い扁平な黒い石製品で、形状から碁石か。径２㎝、厚さ0.9㎝を測る。**460**はSX61出土の砥石。残存長9.9㎝を測る。石材は花崗岩で荒砥石か。**461**はSP97出土の砥石片。残存長さ12.3㎝を測る。石材は砂岩で焼けている。**462・463**はSP263出土の小形の石球。径は2.2×2.4㎝・2.7×2.9㎝で、粗割成形である。石材は砂岩。**464**はSP267出土の滑石製品。長さ5.2㎝、幅3.1㎝、厚み2.1㎝を測る。石鍋を転用したもので、上面に２個の孔、底面に薬研彫りの刻目があり、ススが付着している。**465**はSX71（礫群２）で出土した砥石片。残存長10.6㎝を測る。断面は五角形を呈す。焼けて赤変している。石材は頁岩。**466～468**は遺構面出土。**466**は滑石製石鍋。小片で復元口径は約27㎝を測る。外面はノミによるケズリ痕が残るが、内面は丁寧な研磨仕上げ。**467・468**は砥石。**467**は残存長9.6㎝、幅4.4㎝を測る小型の砥石。側面には鉄分が付着する。鍛冶に使用されたものか。石材は砂岩。**468**は残存長7.0㎝を測る。表面は使用による摩滅が著しい。石材は頁岩。**469・470**は第１面下からの出土。**469**は滑石製品。全長5.6㎝を測る。先端は尖っておりヘラのようなものか。**470**は不明軽石製品。最大長7.6㎝を測る。雑な擦り仕上げ。**471**は表採品の滑石製容器。完形品で径6.2×6.8㎝、高さ2.9㎝を測る。外側面はタテケズリ、底部は平滑な研磨仕上げ、内面もケズリで、内底には工具痕が残る。

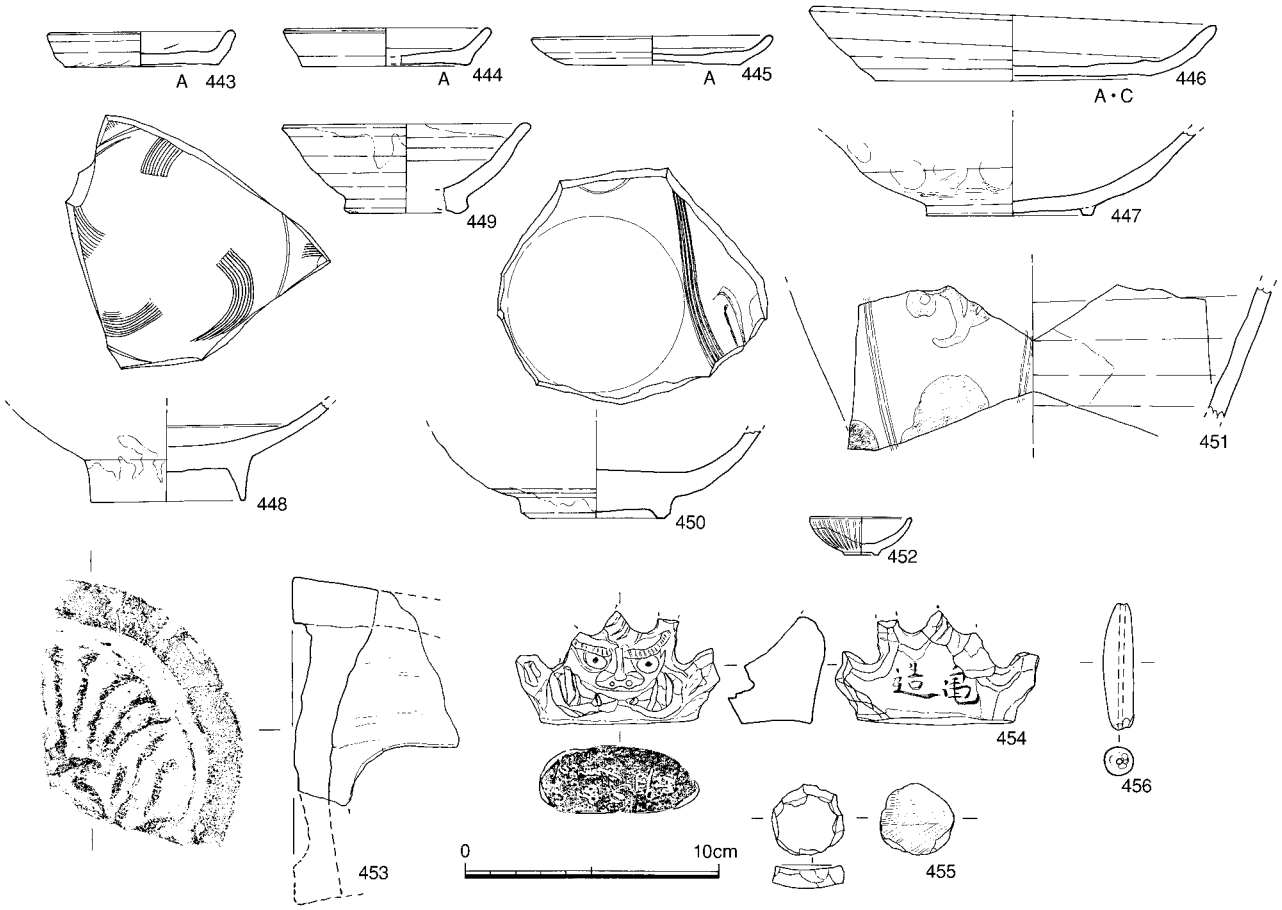


Fig.31　第１面遺構面出土遺物（1/3）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

鉄製品（Fig.33）　**472**はSE02出土のヤットコ。全長25.4㎝を測る。全体に錆がひどい。近世以降のもの。**473**はSE20井側内下層出土。短刀の茎から刃部片。残存長14.9㎝を測る。錆がひどく劣化が激しい。**474**はSK57出土。錆がひどく形状が正確に把握出来ないが、円筒状を呈す不明鉄製品。残存長6.0㎝、径1.8×2.7㎝を測る。**475**はSP26出土。小型のノミ状工具。残存長3.8㎝を測る。**476**はSP277出土。大型の角釘。先端は欠損するが残存長7.8㎝を測る。断面は方形又は長方形を呈す。**477**はSX19出土。板状の鉄製品で残存長4.8㎝、最大幅2.6㎝を測る。左端に径0.5×0.7㎝の楕円形孔がある。**478**は第１面下で検出した頭部が環状を呈す釘。先端は欠損するが、残存長9.6㎝を測る。断面は方形を呈す。**479**は遺構面出土の板状の鉄製品。残存長5.7㎝、最大幅3.0㎝、厚み0.2～0.3㎝を測る。断面から見て刀の一部か。

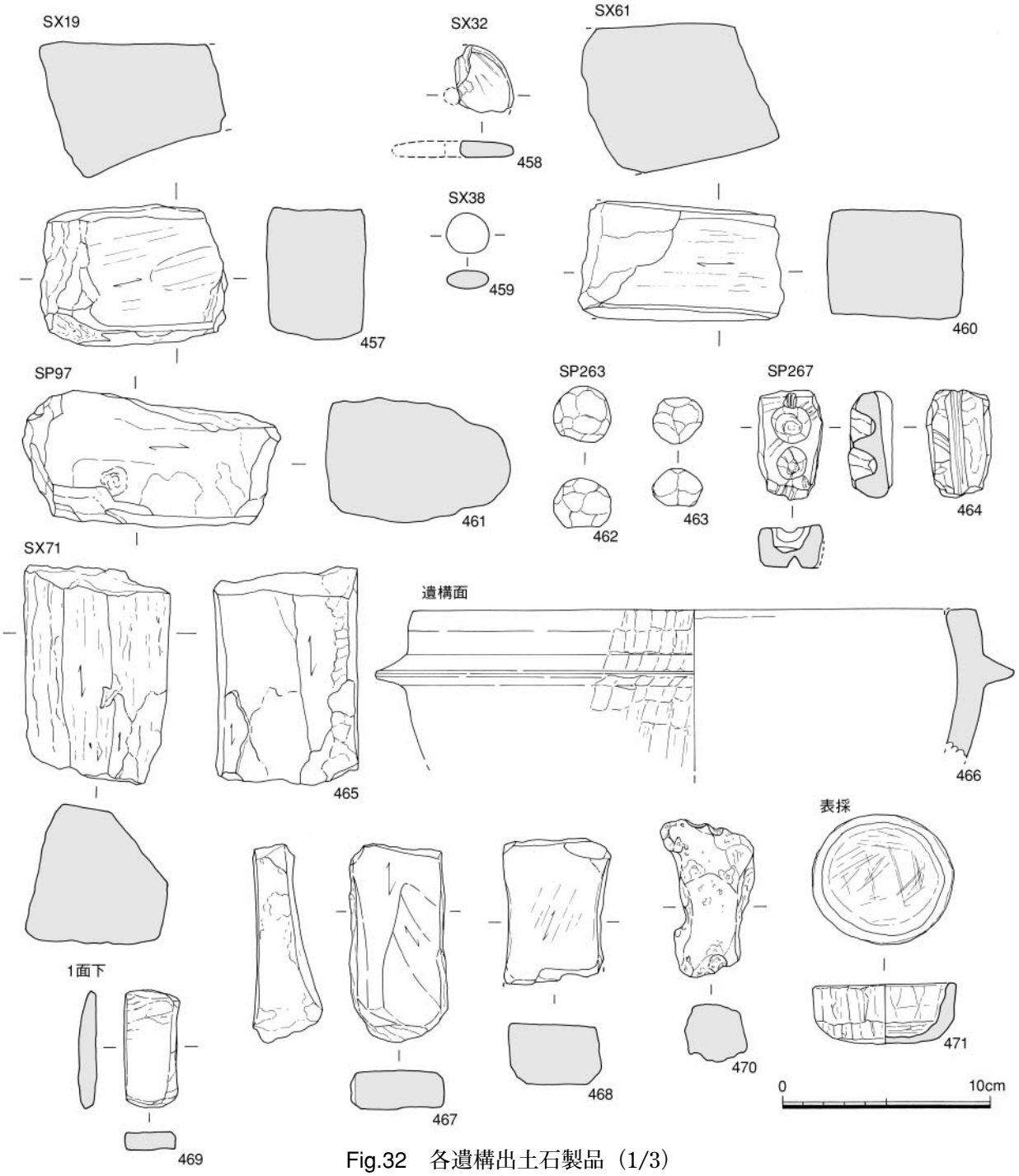


Fig.32　各遺構出土石製品（1/3）

3)　第２面の調査

①　竪穴住居跡（SC）

C-３・４区で３棟検出した。いずれも古墳時代後期の住居跡である。

SC109（Fig.35・36、PL.4）　B・C-３区で検出した、平面形が方形状を呈す住居跡。南東側はSR108、西側は第１面のSK28・29に切られ、残りは不良だが、規模は東西長4.16m、南北長4.38m、深さは0.2～0.3mを測る。主柱は４本柱で、各柱間距離は柱芯間隔で2.13～2.2mを測る。東壁中央部には灰白色粘土で造った竈が付く。当初竈とは認識出来ず、少し掘りすぎた部分もある。竈は崩れて原状を残していないが、粘土の中心部に焼土面がある。また灰白色粘土は竈から住居中央部まで広がっている。竈の規模は焼土や粘土の残り方から幅0.9m、長さ0.6mと推定する。　**出土遺物**は古墳時代後期の土師器・須恵器などがあるが、小片が多く図示出来るものは少ない。ただ住居跡周辺で須恵器の完形品や滑石製紡錘車が出土しており、この住居に伴う可能性はある。**480～483**は須恵器坏身。**481・482**は歪みがひどい小片で復元口径8.4㎝～11.6㎝を測る。底部回転ヘラケズリ、体部は回転ヨコナデ。全体に口径が小さく、口縁部の立ち上がりは低く、小田富士雄氏編年のⅣb期に近い。**484**は甑の口縁部と胴部片。復元口径21.6㎝を測る。口唇部にはカキ目状の沈線が巡り、胴部外面は木目直交のタタキで下半はケズリ、内面はナデであるが、同心円状の当て具痕が残る。**489**は鉄製の刀子片。茎から刃部で、残存長5.6㎝、刃幅1.0㎝を測る。断面は茎が長方形、刃部は細長い三角形を呈す。**480・489**は竈内出土。出土遺物から遺構の時期は６世紀末～７世紀初頃と考える。

SC112（Fig.35・36、PL.4）　調査区壁際C・D-３区で検出した平面形が方形を呈すと思われる竪穴住居跡。検出したのは一部分である。確認規模は長軸長で3.7m、床面に深さは0.35mを測る。北壁

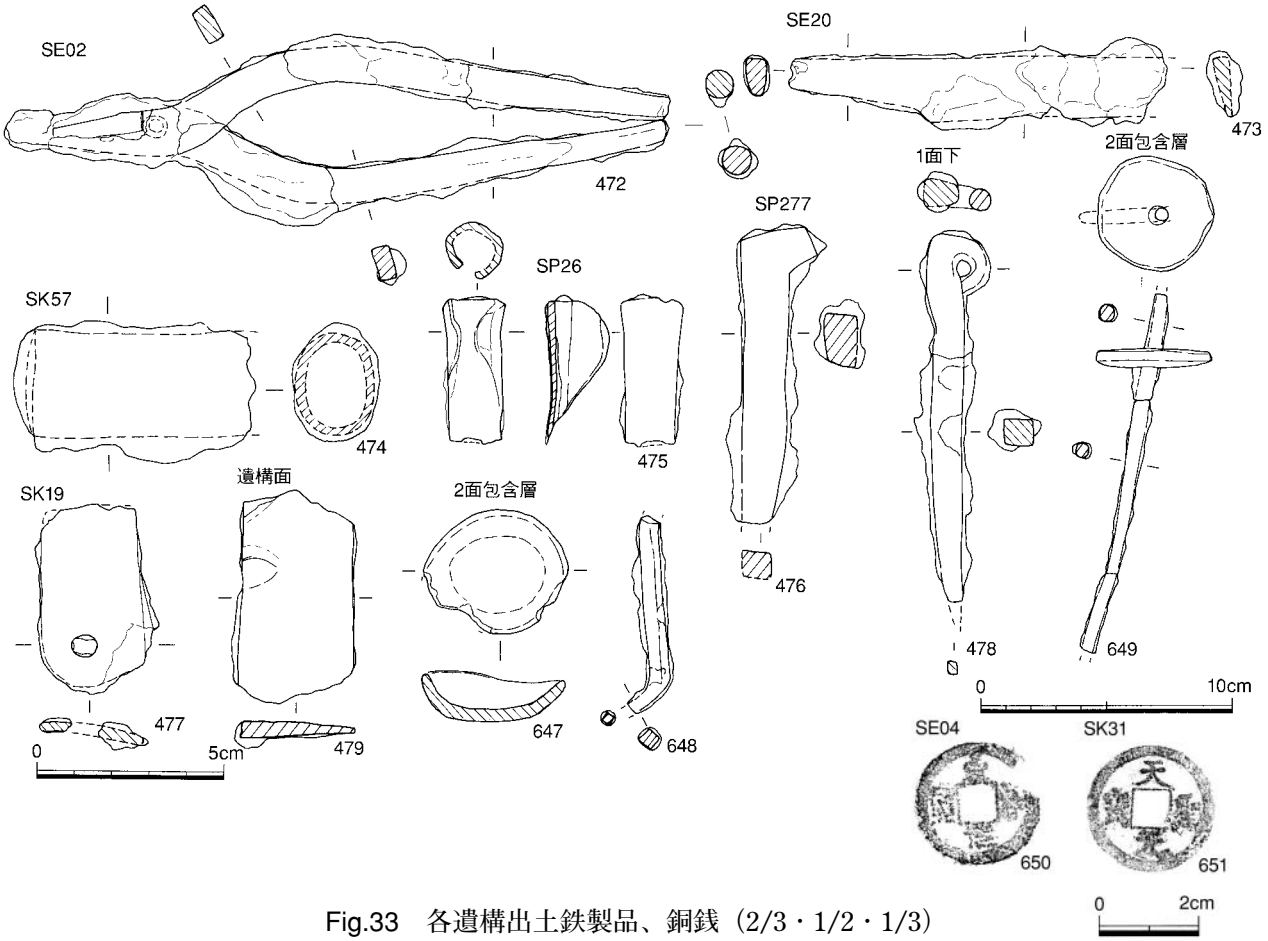


Fig.33　各遺構出土鉄製品、銅銭（2/3・1/2・1/3）

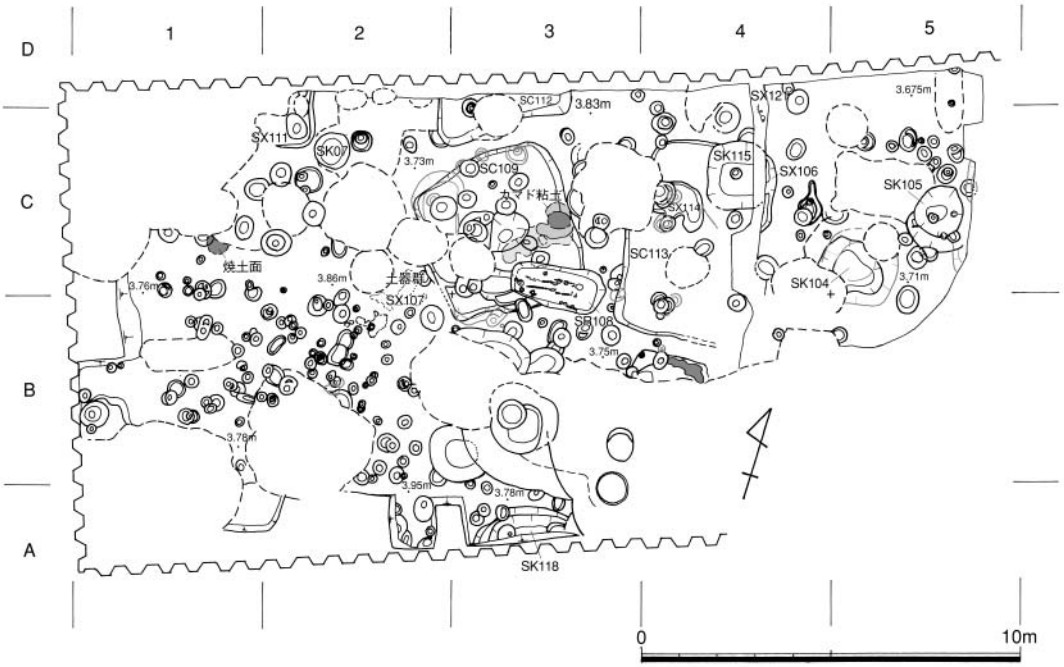


Fig.34　第２面遺構全体図（1/200）

土層を見ると上層がオリーブ褐色細砂、下層が黒褐色細砂、底面はかなり凹凸がある。主柱穴と思われる柱穴が西隅にあり、４本柱の住居跡の可能性がある。　**出土遺物**は古墳時代後期の土師器・須恵器が出土しているが小片で量は少なく、図示しえない。また南西隅に砥石が上面で出土している。**490**は砥石である。断面長方形を呈す細長い形状で、一部欠損するが、全長16.0㎝を測る。四面は使用によりすり減り方が激しい。石材は頁岩。遺物は少ないが古墳時代後期の住居跡か。

SC113（Fig.35・36）　B・C-３・４区のSC109の東側で検出した住居跡。残りは悪く、南西側壁と床面の黒みから検出した。東側は土層ベルトとして残した未掘部分があることや、当初工事の都合で、東側の一部を急いで調査を行ったため、住居として確認出来なかったことから、全容は不明である。主柱穴と思われる４基の柱穴を確認したので、これらと南西側壁面までの距離から推定して、住居跡の南北長軸長は約4.1mと推定する。壁面の残りは最大で0.25mである。各主柱穴間の距離は1.9～2.0mでSC109より僅かに狭い。　**出土遺物**は古墳時代前期から後期の土師器・須恵器が出土しているが、量は少なく、床面出土は少ない。**485**・**486**は須恵器。**485**は坏蓋。復元口径11.0㎝を測る。**486**は坏身で復元口径9.8㎝を測る。いずれも体部の調整は回転ナデ。**487**・**488**は土師器。**487**は甑の口縁部。復元口径29.6㎝を測る。調整は外面ハケ目、内面はナデで胴部はヘラケズリ。**488**は古墳時代前期の小型丸底壺。復元口径10.2㎝を測る。調整はナデで、内底はヘラナデ。出土遺物から遺構の時期は６世紀末～７世紀初頭と考える。

②　土坑（SK）

SK104（Fig.37・38、PL.4）　B・C-４・５区で検出した不整円形土坑。両側をSK22とSE16に切られるが、残存規模は長軸長1.74m、短軸長1.3m、最大深さ0.48mを測る。埋土は黒褐色砂である。**出土遺物**は弥生時代中期後半の甕が出土している。**491**弥生土器甕口縁から胴部1/10片。復元口径35.4㎝を測る。調整は外面ハケ目、内面はハケ目と平滑なナデ。**492**は底部で、外面はタテヘラミガキ、内面は表面摩滅が著しい。

SK105（Fig.37・38、PL.4）　C-５区で検出した不整円形の土坑。上面に比して底面は狭くピット状の落込みがある。規模は長軸長1.80m、深さは底面で0.9m、ピット底では1.13mを測る。埋土は淡黒褐色砂である。　**出土遺物**は古代の土師器・須恵器が出土している。**493**～**496**は須恵器。**493**は蓋。

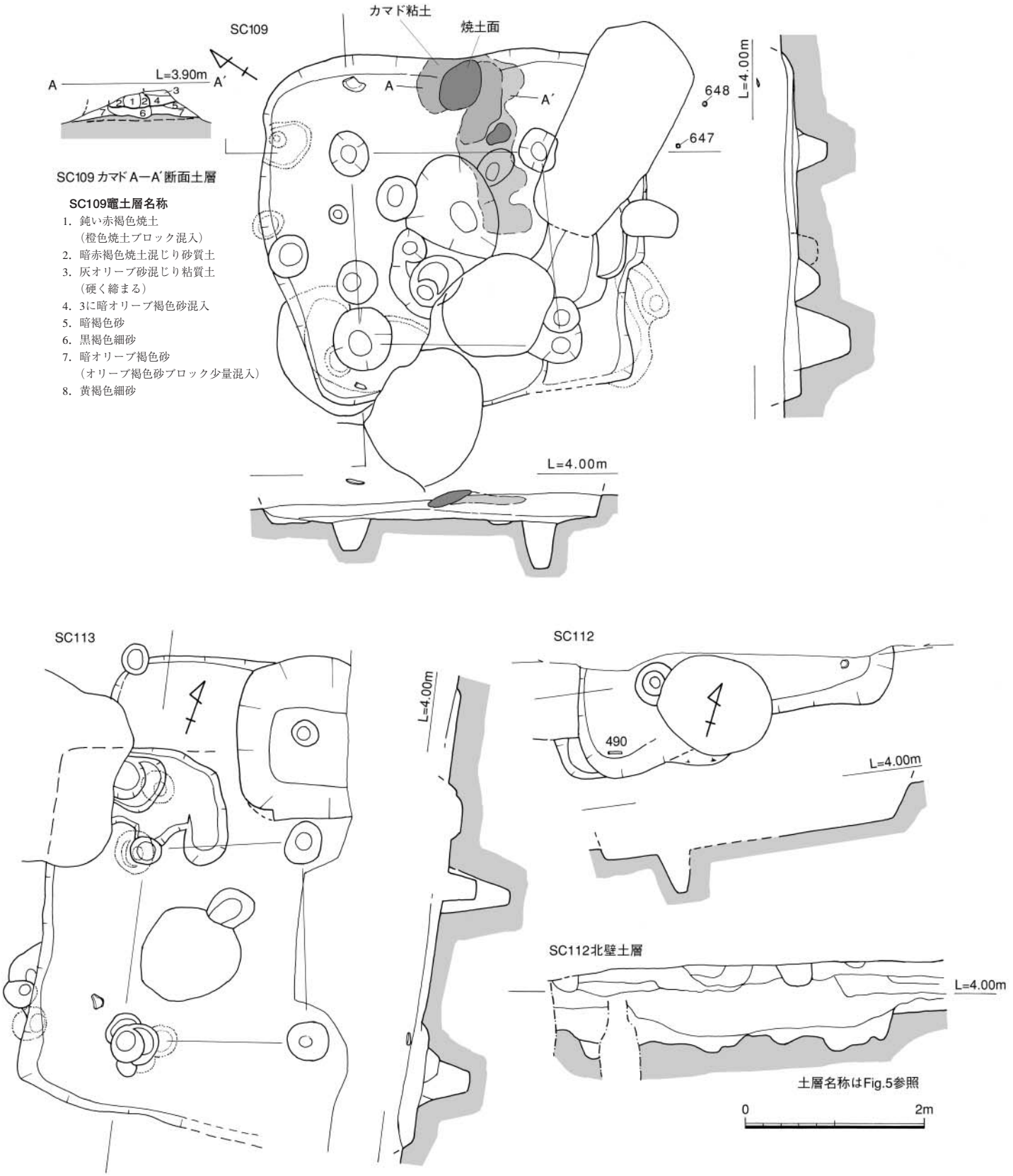


Fig.35　SC109・112・113（1/60）

ほぼ完形で口径15.5㎝を測る。天井部は静止ヘラケズリ、体部は回転ナデ。**494**～**496**は高台の付く坏。いずれも口縁を一部欠く。口径11.8～15.6㎝、器高3.6～4.7㎝を測る。調整は回転ナデ。いずれも８世紀前半のもの。**497**は土師器の甕。口径21.7㎝を測る。外面タテハケ目、内面口縁部ハケ目、胴部は

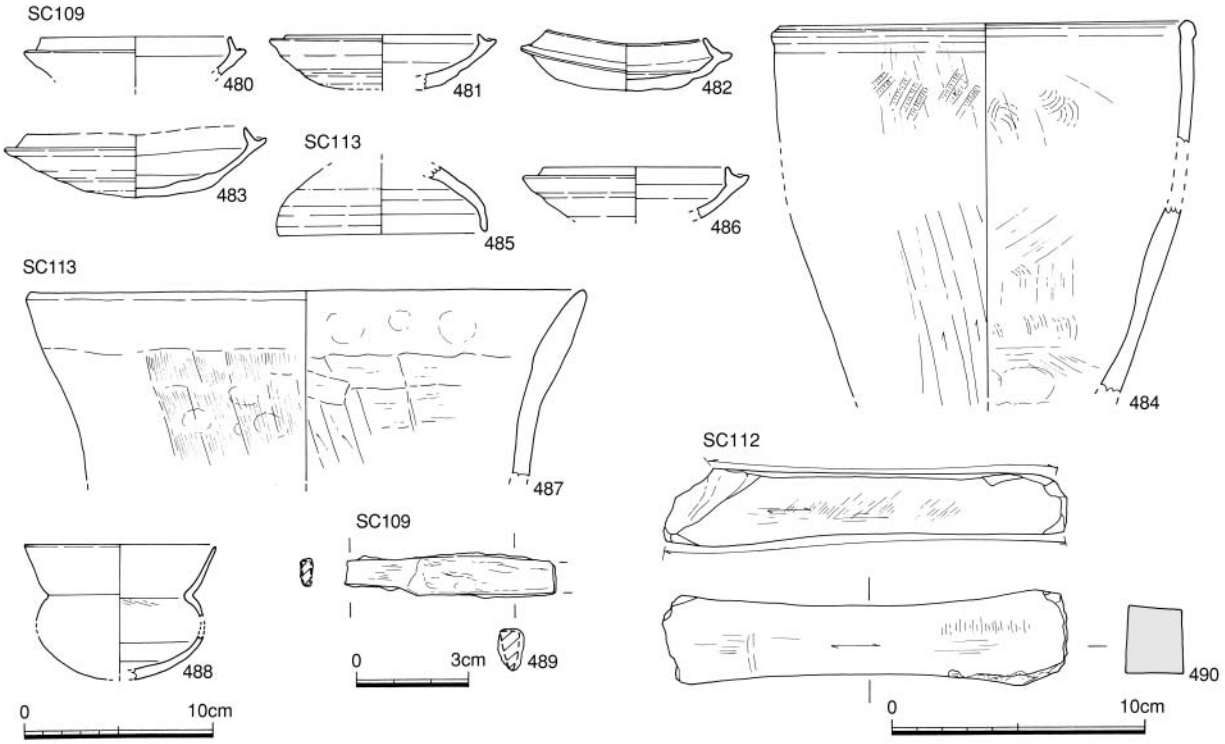


Fig.36　SC109・112・113出土遺物（1/4・1/3・1/2）

ケズリ。外面ススが付着し、二次加熱で赤くなる。出土遺物から遺構の時期は８世紀前半と考える。

SK115（Fig.37・38・42）　C-４区で検出した上面で平面隅丸方形を呈す土坑。土層ベルトを挟んでSX106と当初番号を付けた遺構と繋がると考え、それと合わせた規模は径1.84m、深さ0.85mを測る。底面には径0.3m、深さ0.4mの円形ピットがある。埋土は土層断面では、上部には暗褐色砂に黒色土を縞状に挟む風成砂が堆積し、その下は黒褐色、暗オリーブ褐色砂となる。　**出土遺物**は古墳時代の土師器が少量と古代の坏小片が１点出土している。**498**は土師器の鉢で復元口径12.0㎝を測る。ナデ調整であるが、外底は板ナデ上げ。**559**はSX106として取り上げた土師器の丸底の坏。復元口径13.9㎝を測る。底部ヘラ切り後ナデ。11世紀後半頃のもの。出土遺物から遺構の時期は11世紀後半と考える。

SK118（Fig.38）　A-３区の壁際で検出した土坑。大半は調査区外。確認長2.5m、深さ0.3mを測る。断面は浅い摺鉢状を呈す。埋土は淡黒色砂である。中から土錘が多数出土しており、漁撈に関わる遺構の可能性がある。　**出土遺物**は古代の須恵器や土師器、土錘などが出土している。**499**は土師器の小型の甕口縁部。復元口径15.4㎝を測る。調整はハケ目で、胴部内面はヘラケズリ。**500**・**501**は須恵器の坏。**500**は復元口径13.2㎝を測る。底部は回転ヘラケズリ後ナデ。**501**は高台が付く。復元口径18.3㎝を測る。底部は回転ヘラケズリ後ナデ。**502**～**513**は土師質の管状土錘。いずれも端部は使用により欠損する。残存長4.5～8.7㎝、最大径1.2～2.3㎝、孔径0.2～0.8㎝を測る。**502**は体部に孔が余分に穿たれている。また**502**・**505**・**506**は顔料などを塗布しているのか部分的に朱色を呈す。出土遺物から遺構の時期は８世紀前半と考える。

③　木棺墓（SR）

SR108（Fig.39、PL.4・11）B・C-３区で検出したSC109を切り、主軸をN－85°－Eに取り、平面形が長方形状を呈す墓。棺材は出ていないが、釘が数本出土しているため、木棺墓とした。確認規模は長軸長2.50m、最大幅1.23m、最大深さ0.52mを測る。東側を頭で北方向に横向く人骨が１体出土した。人骨の分析については付論３で述べるが、土師器の坏と黒色土器椀など15個体と刀子・鏡片が頭

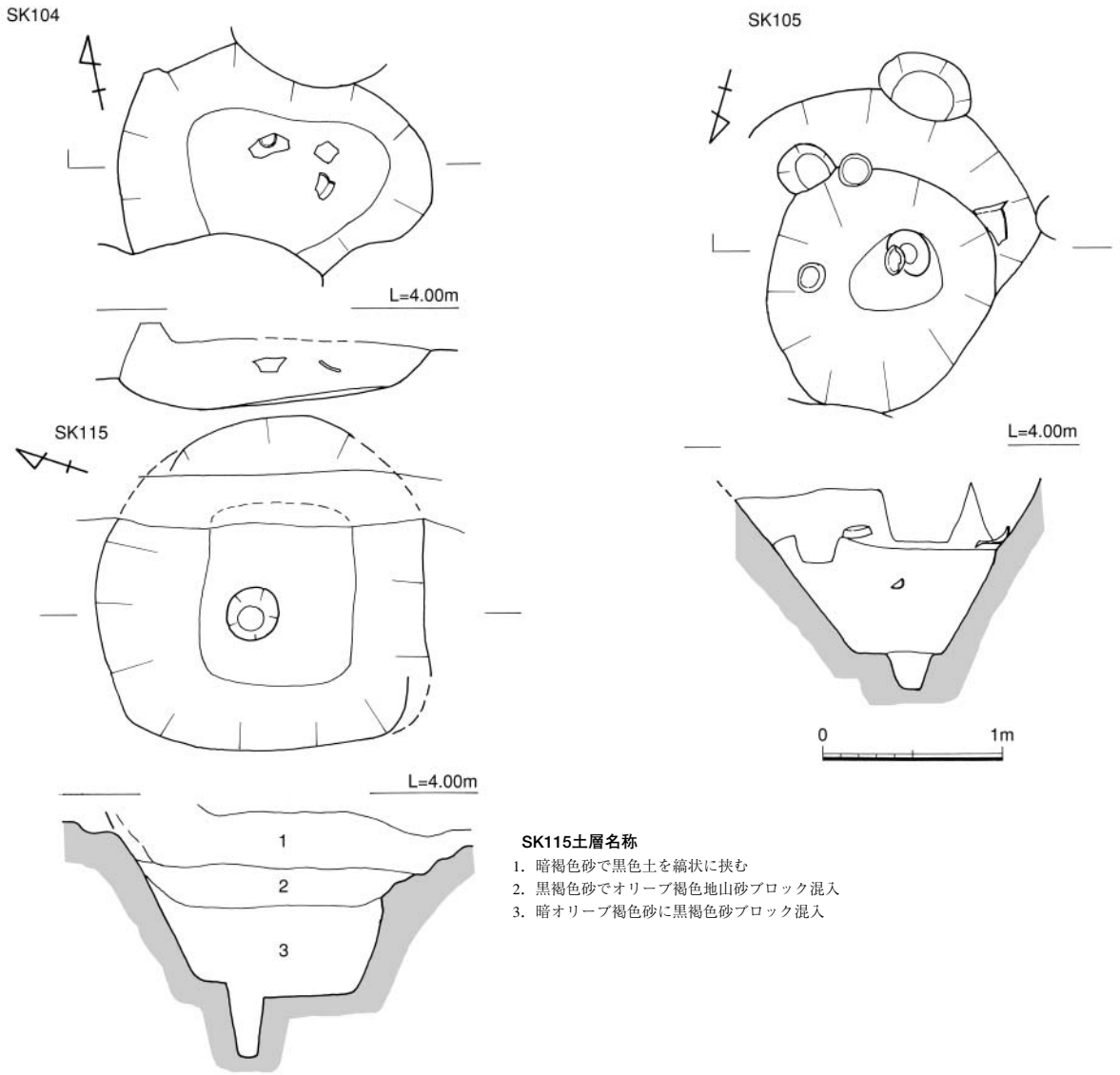


Fig.37　SK104・105・115（1/40）

部周辺と足下の二部分にまとまって出土した。副葬品であるが、底を上にしたり、斜めになったりで、棺の上に置かれていたものが、棺が腐ったあと落ち込んだ状況を示す。埋土は均質な暗褐色細砂で、部分的に酸化鉄分で黄味を帯び、下方は地山砂と黒色砂の混合である。　**出土遺物**は完形の土師器、黒色土器や鏡片、鉄製品、釘などが出土している。**517**～**529**は土師器の坏でいずれも完形か、完形に近い。口縁部が外反して開く形態で、口径11.8～12.4㎝、器高3.3～3.5㎝を測る。底部は回転ヘラケズリ後ナデ。調整も法量も類似している。**530**・**531**は黒色土器A類。同形態で口径14.5㎝・15.1㎝、器高5.1㎝・5.3㎝を測る。高台部は回転ヘラ切り後ナデ、体部外面は回転ヨコナデ、内面は丁寧なヘラミガキである。内面色調は緑黒色を呈す。胎土は金雲母を含むが精良。**514**は円形を呈すと思われる鏡の1/6片。大きさは５㎝×６㎝で、厚みは0.1㎝を測る。表面は緑青でおおわれる。割れ面は擦っている。縁は蒲鉾形。鏡背は無文で、絹らしき繊維が付着している。**515**は刀子片。残存長8.5㎝、刃幅1.3㎝、刃厚0.3㎝を測る。使用によりかなりすり減る。木質や緑青と絹の繊維が錆に付着している。**516**は釘。頂部は少し潰れるか曲がる。全体に錆がひどく木質が付着する。坏の法量などから遺構の時期は９世紀中～後半頃と考える。

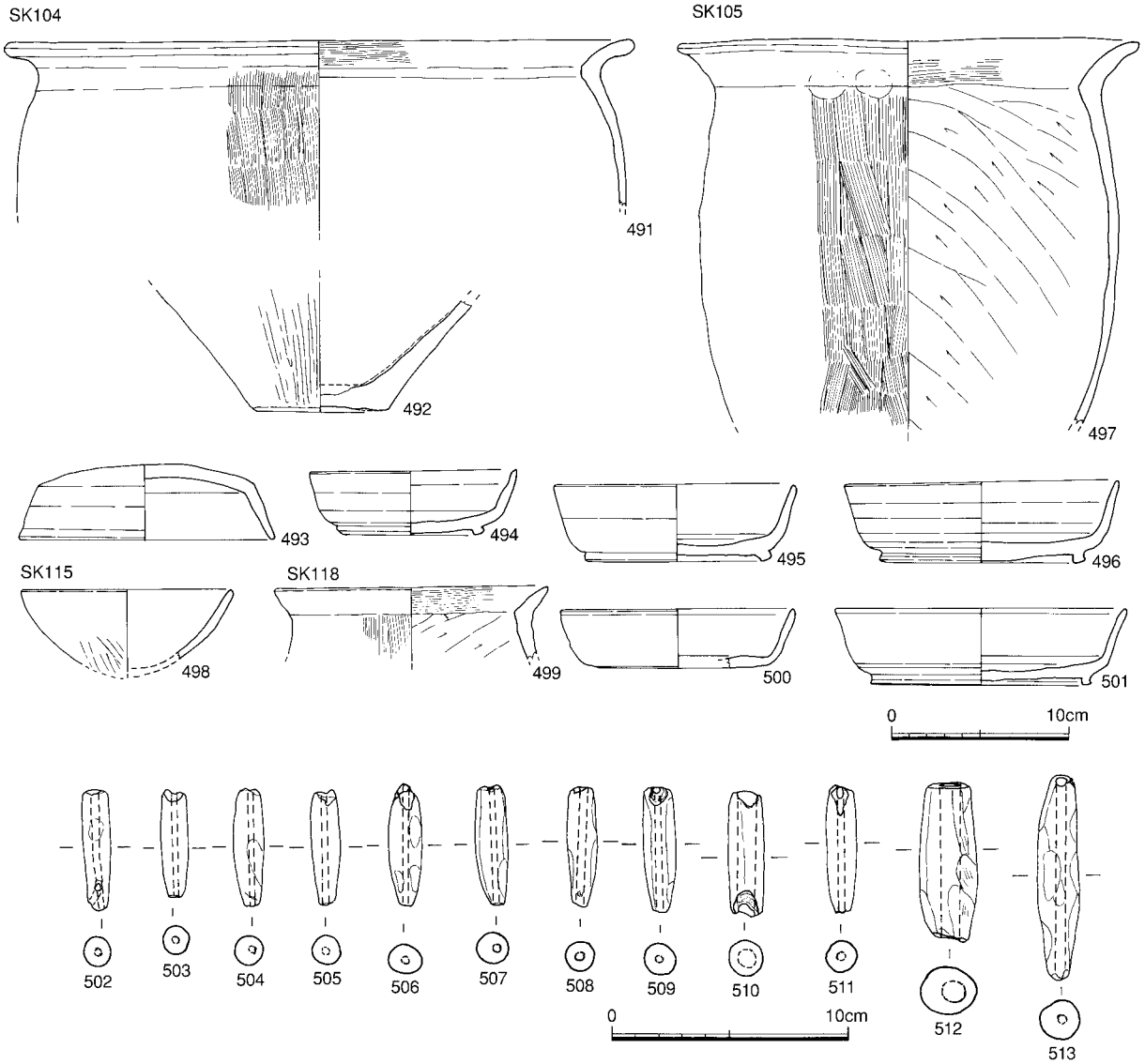


Fig.38　SK104・105・115・118出土遺物（1/4・1/3）

④　土器群（SX）

SX107（Fig.40～42）　B・C-２区の標高約４mの遺構面で検出した土器群。確認範囲は長軸長2.4m、短軸幅2.05mを測る。古墳時代前期初頭頃の土器が出土している。完形品はなく、いずれも破片である。器種としては壺、甕、鉢、器台、高坏などがある。平面プランなどは確認出来なかった。**532**～**535**は壺。**532**は壺口縁部。口径12.2㎝を測る。口縁部は内湾して開き気味に立ち上がる形態。調整は口縁部ヨコナデ、胴部は外面ハケ目、内面はヘラケズリ。**533**は畿内系の二重口縁壺の口縁か。復元口径13.8㎝を測る。口縁部はヨコナデ、外面にはハケ目が残る。胎土は精良である。**534**は作りの精緻な壺で、復元口径14.2㎝、最大胴径20.8㎝を測る。外面はタテヘラミガキ、口縁内面はヘラミガキとハケ目、頸部から胴部内面はハケ目、下半はヘラケズリ。**535**は頸部が締まり、口縁が開く形態。復元口径17.5㎝を測る。口縁部はヨコナデ、胴部は外面ナデ、内面はヘラケズリ。**536**～**550**は甕。**536**・**537**は布留系の小型甕で、**536**は口縁部の残りは悪く、復元口径11.4㎝、器高12.5㎝を測る。外面ハケ目、内面ヘラケズリ。**537**は復元口径12.8㎝を測る。口縁部はヨコナデ、胴部は外面ハケ目、内面ヘラケズリ。**538**は口唇部が直立し浅い凹線状を呈す形態。復元口径14.0㎝を測る。口縁部ヨコナデ、胴部外面はヨコ並行叩き、内面はヘラケズリ。全体に薄手の作り。口縁外面ススが付着する。

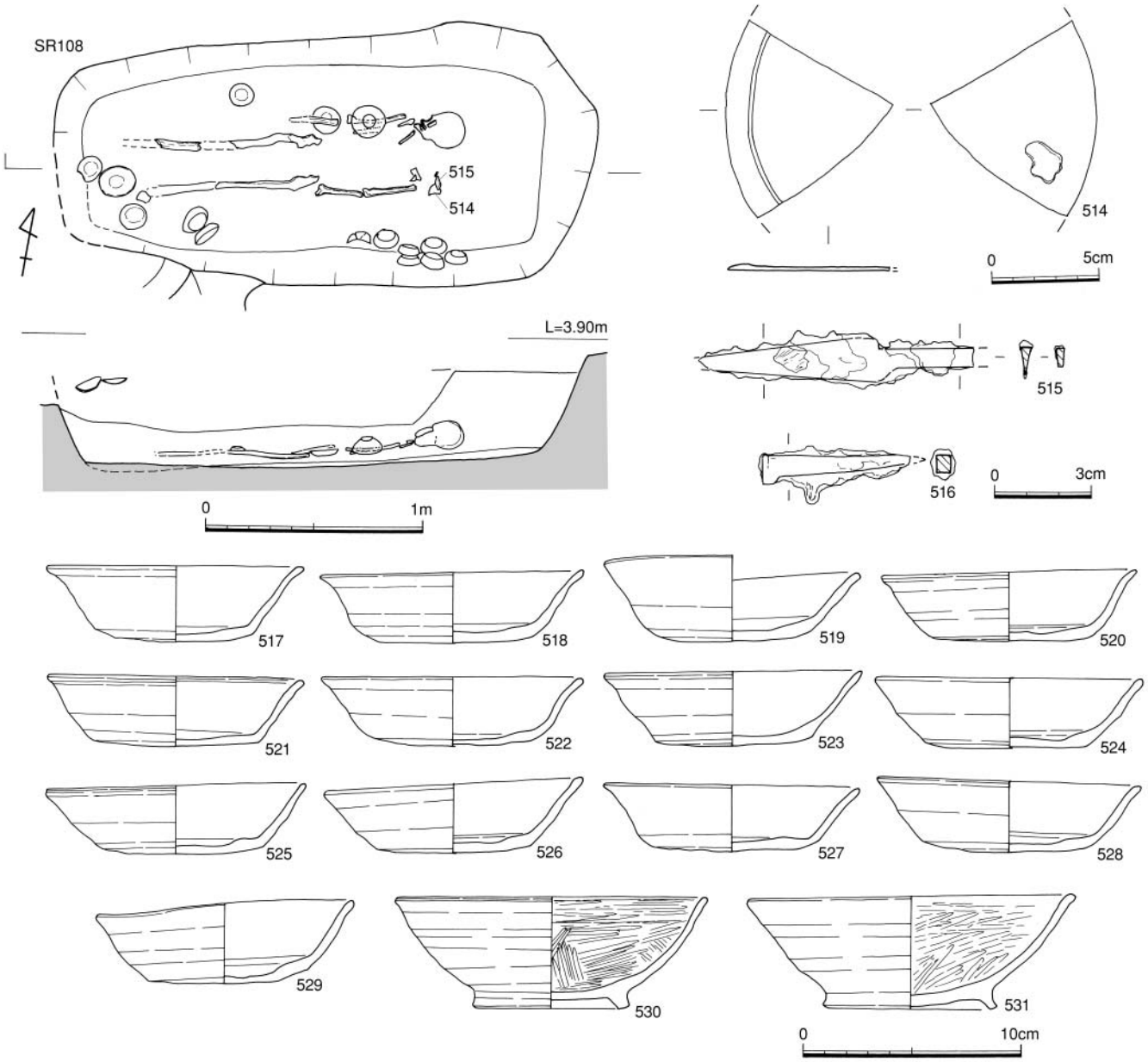


Fig.39　SR108と出土遺物（1/30・1/2・1/3）

539は頸部が締まり口唇部内面に低い段を持つ形態。復元口径14.2㎝を測る。外面ヨコ並行タタキ、内面ヨコヘラケズリ、口縁部はヨコナデ。**540**～**544**は口縁部が内湾気味に「く」字状に開き、端部をつまみ上げる布留系のもの。口径は復元で15.2㎝～18.4㎝を測る。調整は口縁部ヨコナデ、胴部は外面ハケ目、内面はヘラケズリで器壁を薄く仕上げる。**545**・**546**は外来系で、**545**の口縁端部に粘土帯貼付、**546**は折り曲げて段を付ける形態。復元口径16.6㎝・14.0㎝を測る。**545**は口縁部と胴部で、口縁部ヨコナデ、胴部外面はハケ目後ナデ、内面ヘラケズリ。底部は丸底で外面はハケ目後ナデ、内面はヘラでケズリ上げる。**546**は近畿地方からの搬入品で、口縁部ヨコナデ、胴部外面は平行タタキ後タテハケ目後ナデ、内面はヘラケズリ。口縁部外面ススが付着する。**547**・**548**は布留系甕の胴部。いずれも外面はハケ目で内面はヘラケズリで、**547**には黒斑がある。**549**は吉備系の大形二重口縁甕又は鉢。復元口径35.4㎝を測る。口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面はハケ目とヘラケズリ。**550**は小さな平底の胴部から底部。精緻な作りで、外面ヘラミガキで平滑に仕上げ、内面はナデでハ

ケ目を施す。工具の擦痕が残る。弥生後期末頃のものか。**551**～**553**は鉢。**551**・**552**は屈曲して外に開く口縁で、**551**は口径8.4㎝、器高4.8㎝を測る。内外面ヘラミガキ。**552**は復元口径13.4㎝、器高6.4㎝を測る。調整は外面ハケ目とナデ、内面は口縁部ハケ目、体部は丁寧なナデ。**553**は皿状で復元口径13.4㎝を測る。調整は口縁部外面ヨコナデ、底部はヘラケズリ、内面は丁寧なナデ。**554**は小型丸底壷で復元口径11.5㎝、器高9.8㎝を測る。調整は、口縁部は外面ヨコヘラミガキ、内面ハケ目、胴部外面上半はヘラミガキ後ハケ目、下半から底部はヘラケズリ後ナデ、内面は上半がナデで下半はヨコハケ目、底部はヘラケズリ。**555**は外来系の器台。坏部の復元口径9.9㎝、最大高7.1㎝を測る。調整は、口縁部はヨコナデ、体部から脚部は細かいヨコヘラミガキ、坏内面は放射線状のヘラミガキ、脚内面裾はハケ目。脚部に焼成前穿孔の径0.9㎝の円孔が３カ所ある。**556**・**557**は高杯坏部。**556**は小型で椀型の坏がつく。復元口径12.0㎝を測る。調整は外面ヨコヘラミガキ。**557**は坏底部から口縁が段を持って開く形態。調整は外面細かいタテハケ後粗くヨコヘラミガキを加える。**558**は台付鉢の脚部。底径7.0×7.5㎝を測る。径0.5㎝の円孔が3カ所ある。調整は丁寧なナデ。鉢との接合面には接合しやすいよう凹凸をつけている。**560**～**562**は周辺で出土。**560**は甕上半片で復元口径14.6㎝を測る。口縁部はヨコナデ、胴部外面は平行タタキ、内面ヘラケズリ。**561**・**562**は須恵器の高台付坏。**561**は７世紀後半、**562**は８世紀前半のもの。

Fig.40　SX107検出状況（北西から）

⑤　第２面ピット出土遺物（SP）（Fig.43）

大半が古代以前の遺物を含むピットであるが、一部第１面掘り残しのピットもある。合わせて報告する。**563**・**564**はSP506出土。**563**は須恵器の坏口縁部細片。底部は回転ヘラケズリ後ナデ。口縁部は回転ナデ。**564**は土師器の盤で復元口径16.8㎝を測る。外面ヨコヘラミガキ、内面は回転ナデ。８世紀前半のもの。**565**はSP536出土の土師質の管状土錘。下端部は欠け、残存長5.2㎝を測る。**566**はSP548出土。古墳時代前期の高坏の脚部。外面タテハケ後ヨコヘラミガキ、内面はナデ。**567**はSP552出土の古墳時代前期の高坏脚部。摩滅し調整は不明。**568**はSP570出土。直径が太く短い管状土錘、残存長4.9㎝、径2.8㎝、孔径1.3㎝を測る。表面は摩滅がひどい。**569**～**571**はSP582出土。**569**は須恵器蓋、**570**は須恵器皿の細片。８世紀前半のもの。**571**は土師質の管状土錘。下端部は欠け、残存長5.2㎝を測る。**572**はSP588出土。白磁碗Ⅵ類。復元口径14.6㎝を測る。外面に縦線文が入る。

⑥　第２面包含層出土遺物（Fig.33・44～46）

573～**609**は第１面下出土の遺物。**573**・**574**は土師器小皿。復元口径8.6㎝・10.4㎝、器高1.1㎝・1.2㎝を測る。**575**・**576**は瓦器椀小片。復元口径15.6㎝・16.2㎝を測る。体部内外面ヘラミガキ。**577**は白磁皿XⅢ類で17.0㎝を測る。外面縦線文が入る。**578**は白磁皿Ⅱ類で復元口径10.2㎝を測る。**579**は青磁水注の注口。灰オリーブ釉がかかる。**580**は中世須恵器甕底部。復元底径20.6㎝を測る。外面平行タタキ、内面工具ナデ上げ。**581**・**582**は土師器皿片。復元口径16.0㎝・17.0㎝、器高2.1㎝・1.6㎝を測る。底部回転ヘラケズリ後ナデ。８世紀後半のもの。**583**～**588**は須恵器で８世紀前半のもの。**583**・**584**は坏蓋。口縁部が立ち上がる形態。いずれも復元口径15.4㎝を測る。**584**はやや瓦質。**585**

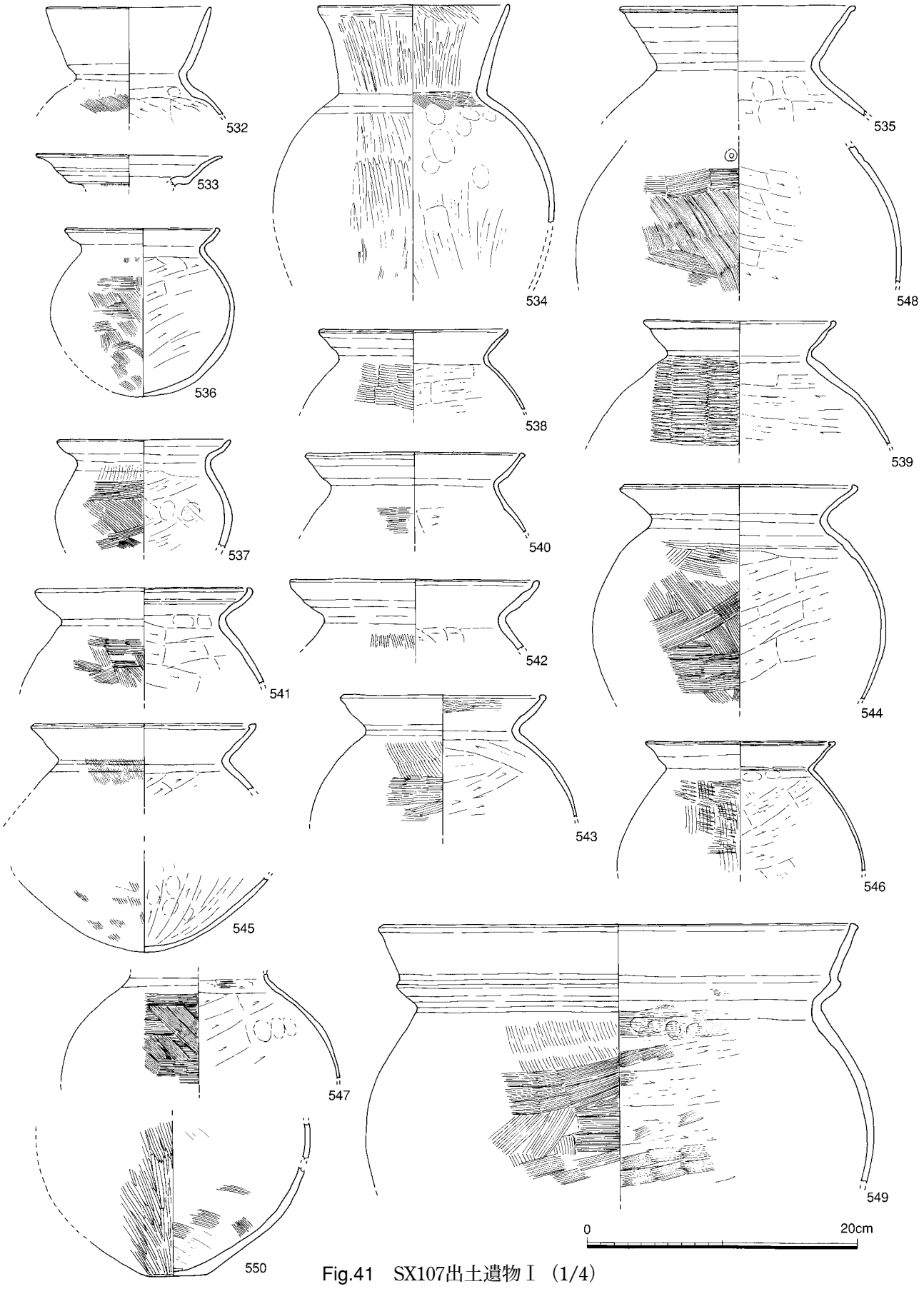


Fig.41　SX107出土遺物Ⅰ（1/4）

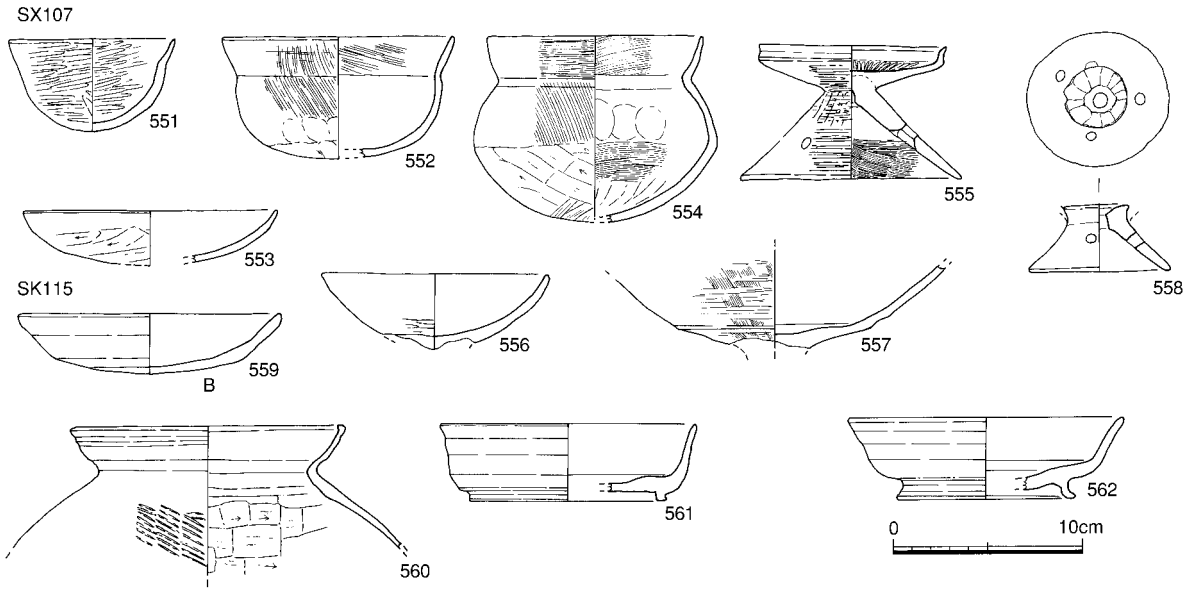


Fig.42　SX107出土遺物Ⅱ（1/4）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

～**587**は高台付坏。復元口径11.6㎝・14.6㎝・15.6㎝を測る。**588**は平底の坏で、復元口径16.0㎝を測る。底部ヘラ切り、体部から内底は回転ナデからナデ。**589**～**593**は古墳時代土師器。**589**は小型壺で復元口径7.0㎝を測る。調整はナデ。**590**は甕上半片。復元口径12.8㎝を測る。外面ハケ目、内面はヘラケズリ。外面ススが付着。６世紀のもの。**591**は鉢で口縁部が屈折して開く形態。復元口径13.2㎝を測る。外面ハケ目後ヘラミガキ、内面ヨコハケ目。**592**・**593**は高坏脚部。いずれも裾に円孔が３か所あく。**592**は外面ヘラケズリ後ナデ、**593**は脚部ハケ目後ヘラミガキかナデ、内面は細かいハケ目。坏部は放射線状のヘラミガキ。いずれも古墳時代前期のもの。**594**～**596**は須恵器。**594**・**595**は坏身片。復元口径10.4㎝・11.4㎝を測る。底部回転ヘラケズリ、体部から内底は回転ナデとナデ。**596**は坏蓋。復元口径12.0㎝を測る。天井部は回転ヘラケズリ口縁から内面は回転ヨコナデとナデ。Ⅲb期のものか。**597**～**606**は土師質の土錘。**597**は断面が丸い棒状の土錘。残存長3.6㎝を測る。上部に径0.3㎝の円孔がある。上端は紐を通したのか凹んでいる。**598**～**606**は管状土錘。**599**・**600**以外端部は欠ける。残存長4.5～7.5㎝を測る。調整は**605**・**606**が指押えで、外はナデ仕上げ。**607**は須恵器片転用の円板。径7.5×6.9㎝を測る。**608**は瓦玉。青磁碗底部を再利用したもの。直径5.5㎝を測る。**609**は板状の土製品。両端は欠損し、残存長7.2㎝、幅2.9㎝を測る。ヘラケズリ面とハケ目の面がある。

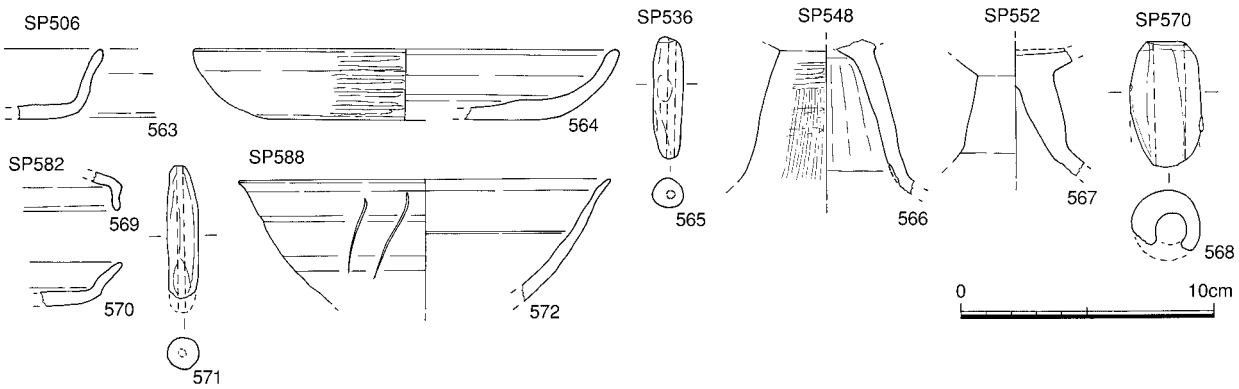


Fig.43　第２面ピット出土遺物（1/3）

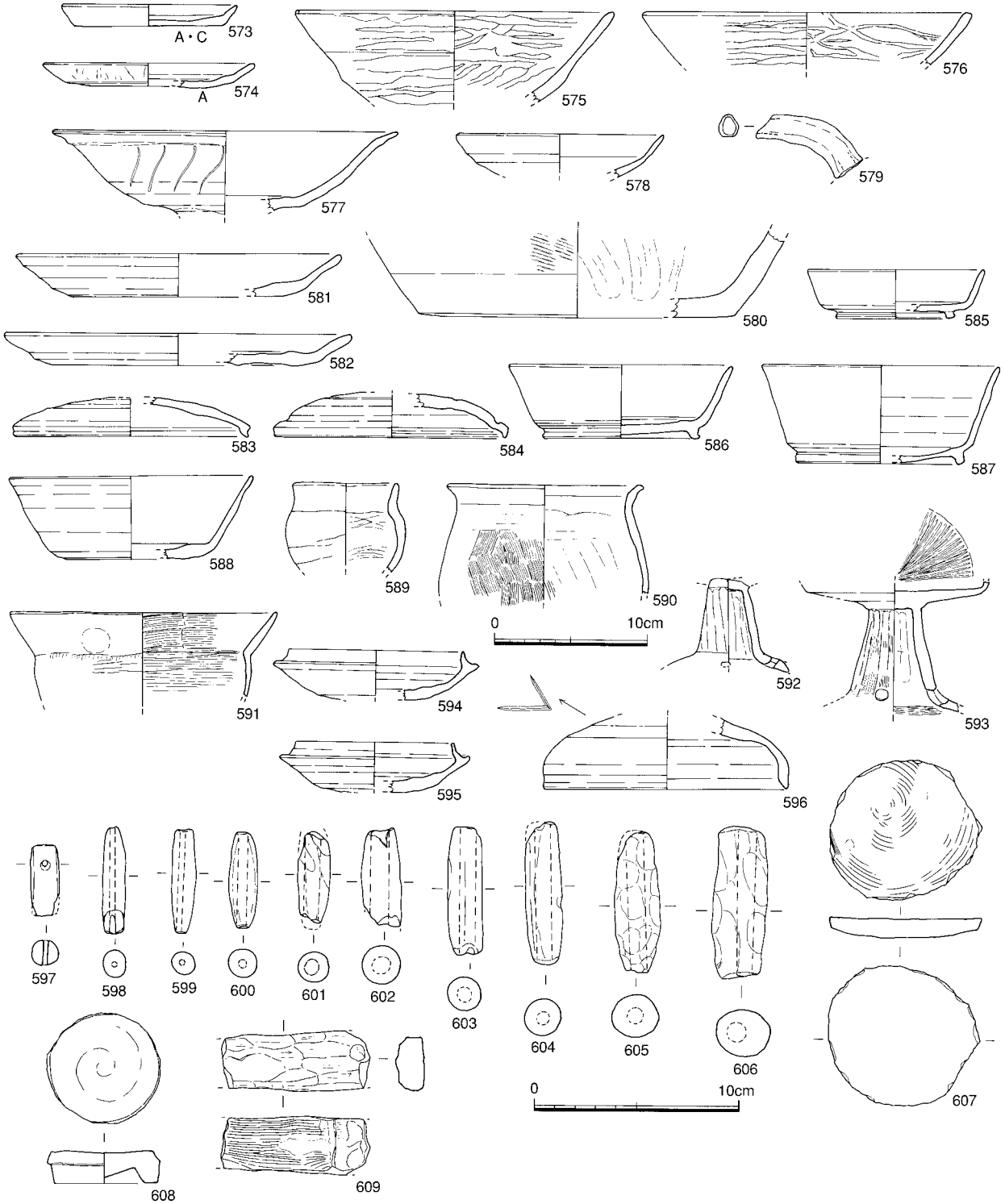


Fig.44　第１面下出土遺物（1/3・1/4）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

610～**649**は第２面上包含層出土。**610**～**622**は土師器。**610**は土師器の坏。復元口径13.1㎝、器高3.0㎝を測る。手捏成形で内面と外底部はナデで、体部外面指押え痕が残る。**611**・**612**は盤又は皿。復元口径20.2㎝・22.0㎝、器高4.1㎝を測る。底部はヘラケズリ後ナデ。内面は丁寧なナデで平滑に仕上げる。**613**～**619**は甕。**613**・**614**は８世紀のもの。復元口径28.0㎝・16.8㎝を測る。胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリ。**615**は小型の壺。復元口径8.8㎝を測る。外面はハケ目、内面は口縁部ハケ目、胴部はナデで指押え痕が残る。黒斑がある。古墳後期のもの。**616**は甕口縁部。復元口径11.4㎝

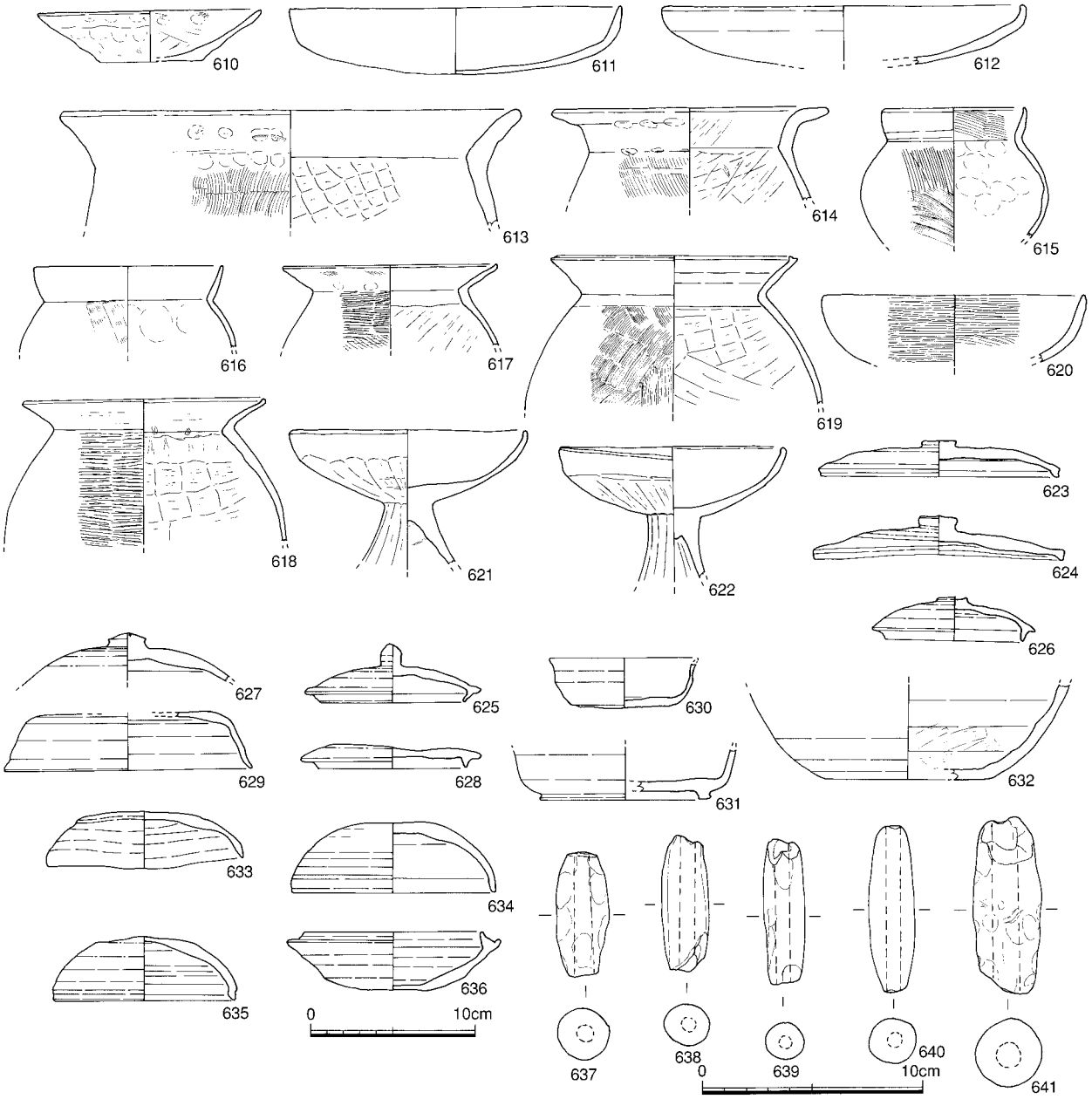


Fig.45　第２面包含層出土遺物（1/3・1/4）

を測る。外面タテハケ目でススが付着し、内面はナデ。**617**・**618**は庄内系の甕。復元口径13.0㎝・14.8㎝を測る。胴部外面は平行タタキ後ハケ目、内面はヘラケズリ。口縁部はヨコナデで、**617**の口縁外面にはススが付着。**619**は布留系の甕上半片。復元口径は15.0㎝を測る。口縁端部は凹線を巡らす。口縁部はヨコナデ、胴部外面はナナメの細かいハケ目、内面はヘラケズリ。**620**は椀状の鉢で復元口径16.0㎝を測る。調整はヨコヘラミガキ。６世紀後半のもの。**621**・**622**は口縁部が椀状の坏部がつく高坏。復元口径14.4㎝・13.8㎝を測る。外面坏部から脚部ヘラナデやタテヘラケズリ、坏部内面は平滑なナデ仕上げ。**623**～**636**は須恵器。**623**～**629**は蓋。**623**～**627**は摘みが付く蓋。**623**・**624**は扁平な摘みが付き、口縁部が直立する形態。14.4㎝・15.2㎝を測る。いずれも天井部は回転ヘラケズリ、口縁部から内面は回転ヨコナデからナデ。**625**は摘みの頂部が尖る形態。**625**・**626**・**628**は口縁部に身受けのかえりがあり、**625**・**626**の天井部には摘みがつく。復元口径8.5㎝・8.6㎝・9.1㎝を測る。**625**は回転ナデとナデで、外面には自然釉がかかる。**626**・**628**の調整は天井部回転ヘラケズリで、口

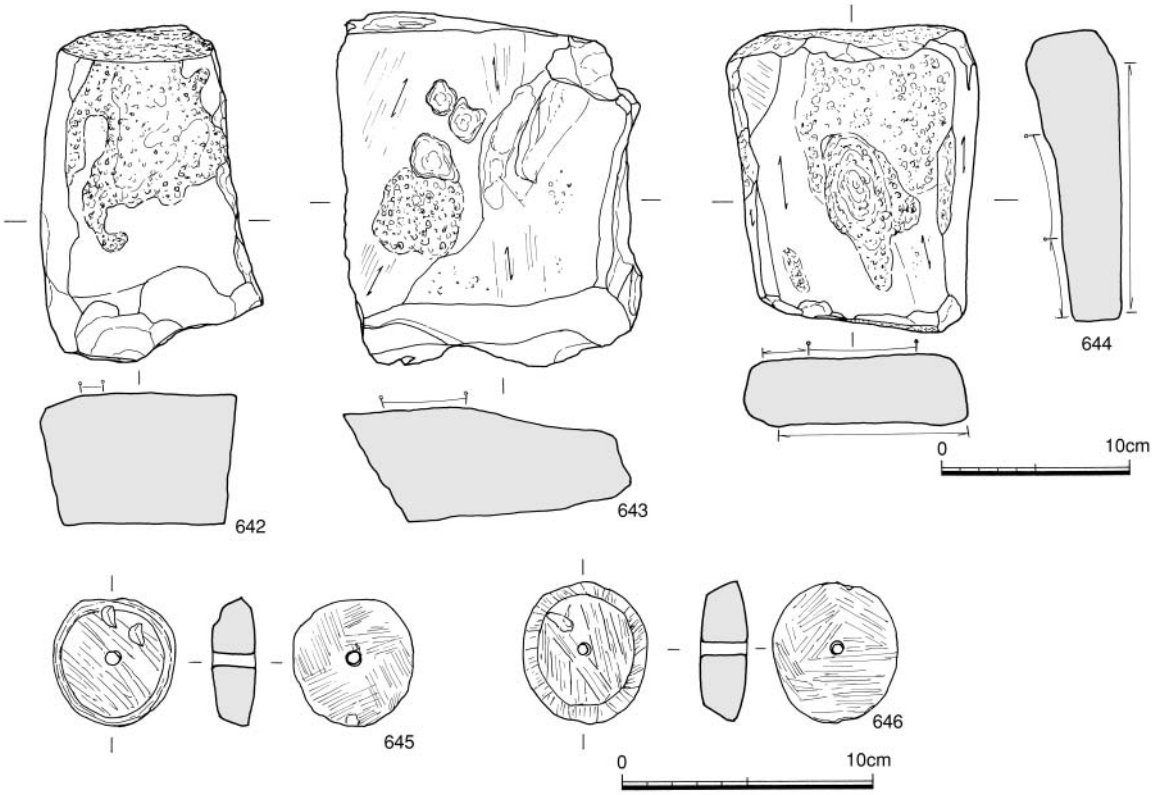


Fig.46　包含層出土石製品（1/3・1/4）

縁から内面は回転ナデからナデ。**629**は口縁部が外方に開く形態で、復元口径は15.0㎝を測る。天井部回転ヘラケズリ、口縁部から内面は回転ナデとナデ。**630**・**631**は坏。**630**は口径9.0㎝、器高3.1㎝を測る。**631**は底部に高台が付く。以上は７世紀後半～８世紀前半のもの。**632**は底部。外面ケズリとナデ。**633**～**635**は古墳時代後期のⅢb期～Ⅳa期のもの。12.0～13.0㎝を測る。調整は、天井部は回転ヘラケズリ、口縁部から内面は回転ナデとナデ。**636**はⅣa期の坏身。口径10.6㎝を測る。底部に自然釉がかかる。受け部から内底は回転ナデからナデ。**637**～**641**は土師質の管状土錘。端部は使用により欠ける。残存長5.6㎝～8.0㎝を測る。**642**は砥石又は墓石片。残存長17.7㎝、横幅11.8㎝を測る。側面は粗割調整又は敲打調整で、上面は擦られて摩滅した面と敲打調整面が残る。石材は砂岩。**643**は作業台石。最大長18.6㎝、最大幅16.0㎝を測る。上面と底面は使用による摩滅面と敲打痕が残る。石材は玄武岩。**644**は砥石。最大長16.2㎝、最大幅13.4㎝最大厚4.9㎝を測る。上面と底面は砥石として使用で、敲打使用痕が残る。石材は目が細かい砂岩。**645**・**646**は裁頭円錐形を呈す滑石製紡錘車。最大径は底面で5.1㎝・5.7㎝、最大高1.7㎝・1.9㎝、孔径0.4㎝・0.5㎝を測る。器面はケズリ後ミガキ仕上げで擦痕が残る。**647**は平面円形を呈す鉛製品の容器。直径3.3×3.8㎝、器高1.4㎝、器厚0.3㎝を測る。**648**は先端が曲がった釘。頂部と先端を欠損する。残存長5.4㎝を測る。**649**は鉄製の糸巻棒と紡錘車。糸巻棒は両端を欠損するが残存長14.4㎝、紡錘車は円形で径4.4×4.5㎝を測る。

2　第Ⅱ区の調査（Fig.47、PL.5）

1)　調査の概要

第Ⅱ区は立体駐車場棟である。工事の関係から杭打ちを先行した。調査区南東側は地下構造物で消滅しているので、その部分を廃土置き場とした。遺構面は大きく２面であるが、遺構の重複などがあったため、遺構面を３面として調査を行った。調査は平成19年７月７日から８月１日まで実施した。

調査面積は63㎡である。第１面は地表面から－1.4～1.5mの標高4.35～4.5m、第１面下遺構は標高4.2m、第２面は標高3.8～3.9mである。最後に基盤の明黄褐色細砂まで掘り下げ、遺構の再確認を行なったが、確認出来なかった。第１面下遺構は第１面とほぼ同時代で、切り合い関係や、第１面で確認出来なかった遺構であり、同じ項目で報告する。また調査区周囲は工事用の鋼矢板を打っているが、基礎の為の掘削が他区より浅く、矢板の打ち込みを浅くしている。遺構を深く下げると危険なので、深い遺構は完掘を断念している。

2)　第１面の調査

①　井戸状遺構（SE）

中世から近代の井戸を４基（中世３基、近代１基）確認した。中世の３基を報告する。

SE156（Fig.48・49・58、PL.5・6）　D-５区で検出した一部が調査区外にかかり、又南側をSK162に切られ、SE165を切る井戸。掘方平面形は半円形で、規模は確認部分で径2.2m、深さは未完掘であるが井側部で2.15m（標高2.35m）を測る。深さ1.65mで円形の井側を確認したが、鋼矢板にかかったため、安全上の問題から未完掘である。井側の直径は0.55mを測る。掘方埋土は上層が黒褐色粘質土で焼土・炭化物を混入し、下層は鈍い黄褐色砂で黒褐色粘土を縞状に挟む。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・青磁・青白磁・陶器、瓦、石鍋、古代の土師器・須恵器などがある。**1**～**6**は上層出土。**1**は土師器小皿。復元口径9.2㎝を測る。**2**は白磁碗Ⅷ-１類。復元口径17.6㎝を測る。内面には線彫りと片切彫りによる文様が入る。灰白色釉がかかり、口縁内外面に重ね焼き目跡がある。**3**は皿Ⅱ類。淡青色の釉がかかるが、底部は釉を拭い取る。見込みに沈線が巡る。**4**は皿Ⅵ類。復元口径9.8㎝を測る。淡黄色釉がかかるが、底部は釉を拭い取る。見込みは片切彫りと櫛描文が入る。**5**は同安窯系青磁碗Ⅳ類の底部か。灰オリーブ釉がかかるが、高台から体部下半はケズリで露胎。見込みは蛇ノ目釉剥ぎし、重ね焼き目跡がある。**6**は磁灶窯系四耳壺口縁部。褐灰色釉が外面から口縁内面にかかる。**7**は中層出土。土師器小皿で復元口径8.5㎝を測る。**8**～**13**・**125**は下層出土。**8**は土師器小皿。復元口径9.6㎝を測る。**9**は白磁碗底部。内面は見込みに櫛描文、体部は片切彫り文が入る。灰オリーブ釉がかかるが高台内は露胎。**10**は白磁碗Ⅵ類。復元口径14.0㎝を測る。内面沈線があり灰白色釉が不均一にかかる。**11**は青白磁皿底部。明オリーブ灰釉が厚めにかかるが、畳付は露胎。**12**・**13**は陶器壺。**12**は黒釉壺口縁部片。肩部に把手が付く。内外面黒褐色釉が厚めにかかる。**13**は褐釉壺底部で、内外面灰黄褐色釉が薄めにかかるが、底部はケズリで雑なナデ。**125**は扁平な石球。

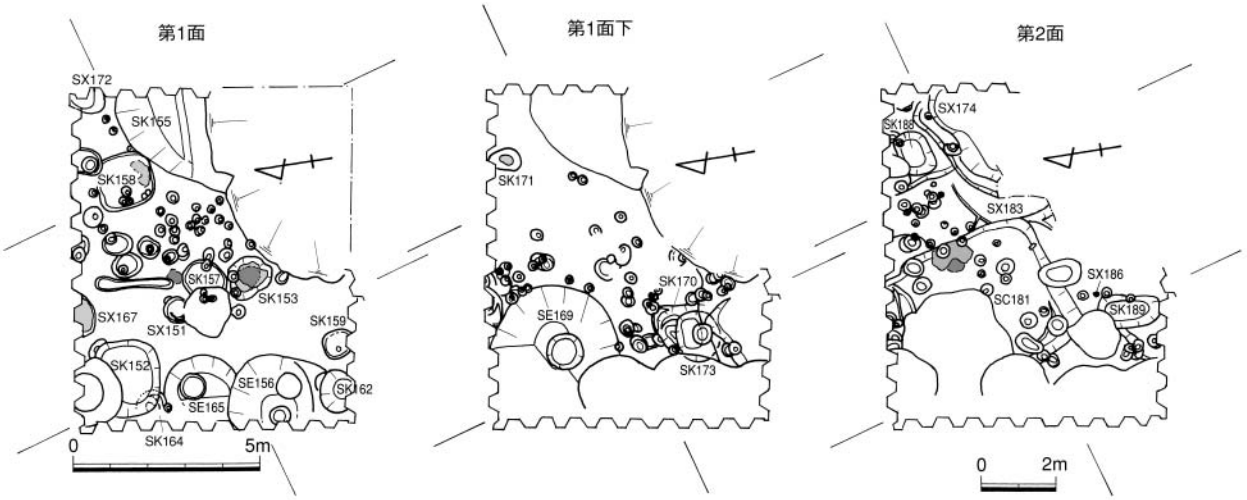


Fig.47　第Ⅱ区各面遺構全体図（1/200）

直径2.3㎝で、表面は擦っているが敲打調整痕が残る。出土遺物から遺構の時期は12世紀中～後半頃と考える。

SE165（Fig.48・49・58、PL.5・11）　D-５区で検出したSE156に切られる井戸。西側は鋼矢板にかかり未掘。掘方の確認規模は南北1.8m、井側部で深さ2.5m（標高２m）を測るが完掘していない。2.35mの深さで直径0.7mを測る円形の井側を確認した。この井側は当初上面で確認した楕円形状の土坑（SK154）の下で確認しており、井側は上面まで続いていたものと考える。掘方埋土はやや暗い黄褐色砂に黒褐色粘土を挟み水平堆積である。井側部は上面では黒褐色粘質土や暗褐色砂質粘土で鈍い黄褐色砂を挟む。全体に砂質で軟質である。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・青白磁・陶器、石鍋、挽き臼と、古墳時代から古代の土師器・須恵器がある。**14～19**は上層出土。**14～16・19**は井側内上層（当初はSK154）。**14～16**は土師器小皿。復元口径8.8～9.8㎝、器高1.1～1.4㎝を測る。**17**は瓦器椀底部片。体部から内面は粗いヘラミガキ、高台部はヨコナデ。**18**は白磁皿Ⅱ類の底部。底部以外光沢を持つ灰白色釉がかかる。底部重ね焼き痕が残る。**19**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。内面見込みは無文、体部は片切彫りの花文。緑灰色釉がかかるが、高台部は釉を拭い取り、重ね焼きの粘土が付着する。**20～27**は中層出土。**20・21**は土師器。**20**は土師器小皿で復元口径8.2㎝を測る。**21**は磨研土師器椀で復元口径13.6㎝を測る。口縁部は玉縁状を呈す。内外面丁寧なヨコヘラミガキ。**22・23**は白磁。**22**は白磁碗Ⅳ類底部。内面には淡黄橙色釉がかかるが、外底部は露胎。**23**は平底皿Ⅶ類で復元口径12.4㎝、器高3.1㎝を測る。内面には片彫りの花文が入る。灰白色釉がかかるが、底部は釉を拭い取る。**24～26**は青磁。**24**は龍泉窯系碗Ⅰ-４類の底部。内面片切彫りの花文が入る。**25・26**は皿。**25**は同安窯系皿Ⅱ-１類。内面劃花文と櫛刺突文、灰オリーブ釉がかかるが、底部は釉を拭い取る。**26**は龍泉窯系皿Ⅰ-３a類で復元口径12.2㎝、器高3.2㎝を測る。オリーブ黄色釉がかかるが、底部は釉を拭い取り、底部は重ね焼き痕が３か所赤褐色を呈す。**27**は青白磁合子蓋。復元口径4.6㎝を測る。天井部は印花。明緑灰色釉がかかる。**28**は下層出土の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-４d類で復元口径16.8㎝、器高6.6㎝を測る。内面は雲文と平行線による区画。高台内は釉を拭い無釉。**29**は上層・中層出土。磁灶窯系褐釉壺胴部片。外面には竜文を、鱗はヘラ片切り、爪は陽刻で施す。外面は暗灰黄褐色釉が、内面は透明釉がかかり、内面に当て具痕が残る。同様のものは博多44・45次、箱崎19次調査で出土。**126**は滑石製の有溝石錘。縦長6.0㎝、横幅6.3㎝を測る。溝の両端には抉りが入る。**127**は中層出土。半円形を呈す作業台石片。残存長20.6㎝、残存幅13.7㎝、最大厚7.7㎝を測る。上面と底面の両面に使用痕が窪みとして残る。石材は花崗岩。**128**は滑石製石鍋。井筒上層と中層で破片が接合したもの。復元口径24.4㎝を測る。外面はノミによるケズリ、内面はケズリ後丁寧な研磨仕上げ。外面下半少し焼けている。出土遺物から遺構の時期は12世紀中～後半頃と考える。

SE169（Fig.48・50・56・58、PL.5・11）　第１面下のE-５・６区で検出した。掘方平面形は略円形で、北側をSE161、南側をSE156に切られ、西側が調査区にかかる井戸である。規模は上面で最大径3.45m、井側底深さ約2.6m（標高1.6m）を測る。井側内は安全対策上から未掘、円形で直径は0.95mを測る。井戸埋土は上層が黄褐色砂で黒褐色土を薄く縞状に挟み、中層から下層は暗褐色砂で黒色粘土・黄白色砂をブロック状に挟み、井側内は黒灰色泥土で礫石や遺物を多く含んでいた。　**出土遺物**は中世の土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・青白磁・陶器、瓦、石鍋、鉄釘と、古墳時代から古代の土師器・須恵器がある。**30～32**は土師器。**30**は土師器小皿で復元口径9.2㎝を測る。**31・32**は坏で復元口径14.4㎝・15.8㎝を測る。**33～39**は白磁。**33**は碗Ⅳ-１a類。復元口径17.6㎝を測る。見込みに段が付き、外面下半は露胎。**34・35**は碗Ⅸ類底部。灰白色から灰オリーブ釉が内面から体部下半までかかるが、見込みは蛇ノ目釉剥ぎし、重ね焼きの痕跡が残る。

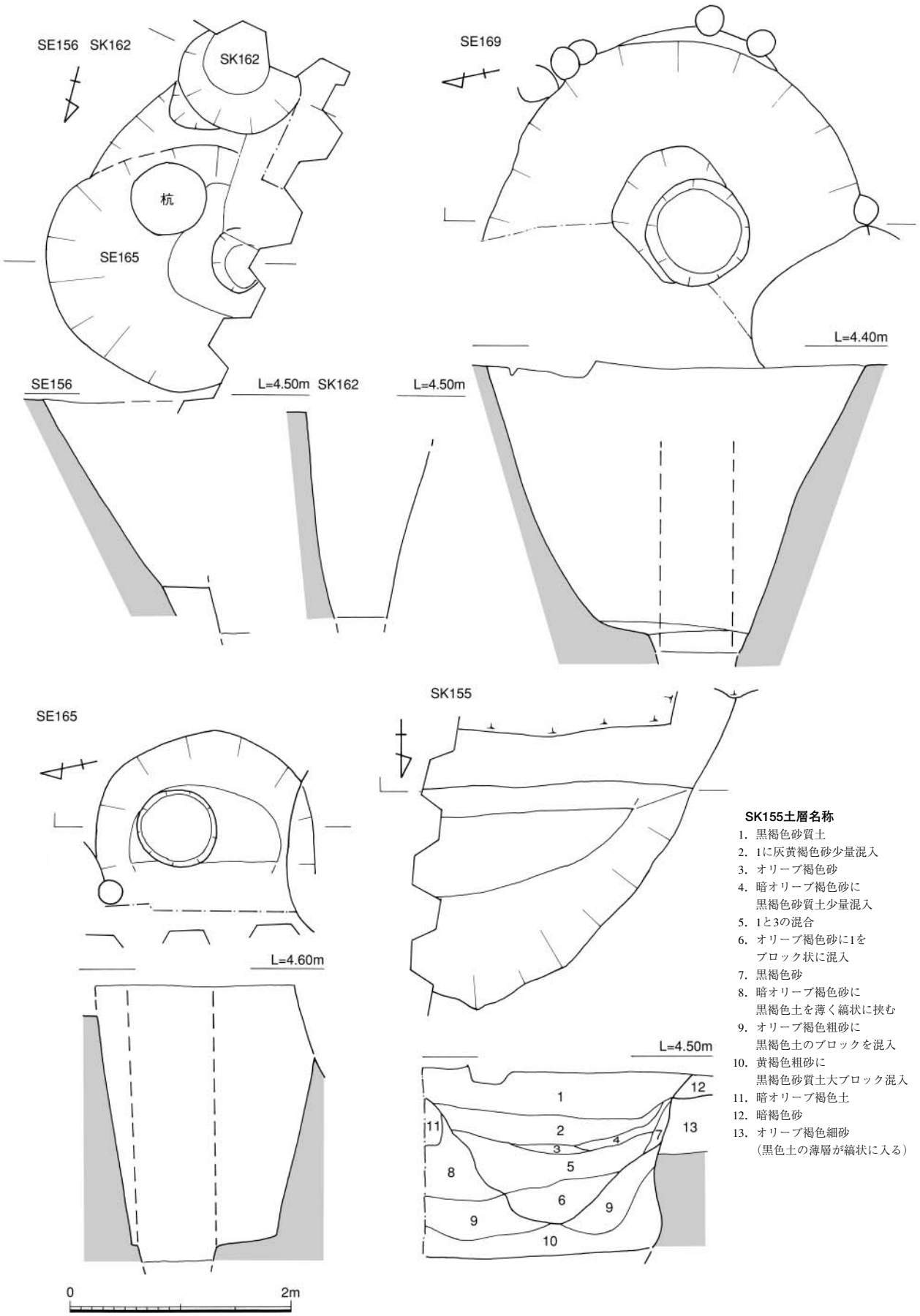


Fig.48　SE156・165・169、SK155・162（1/50）

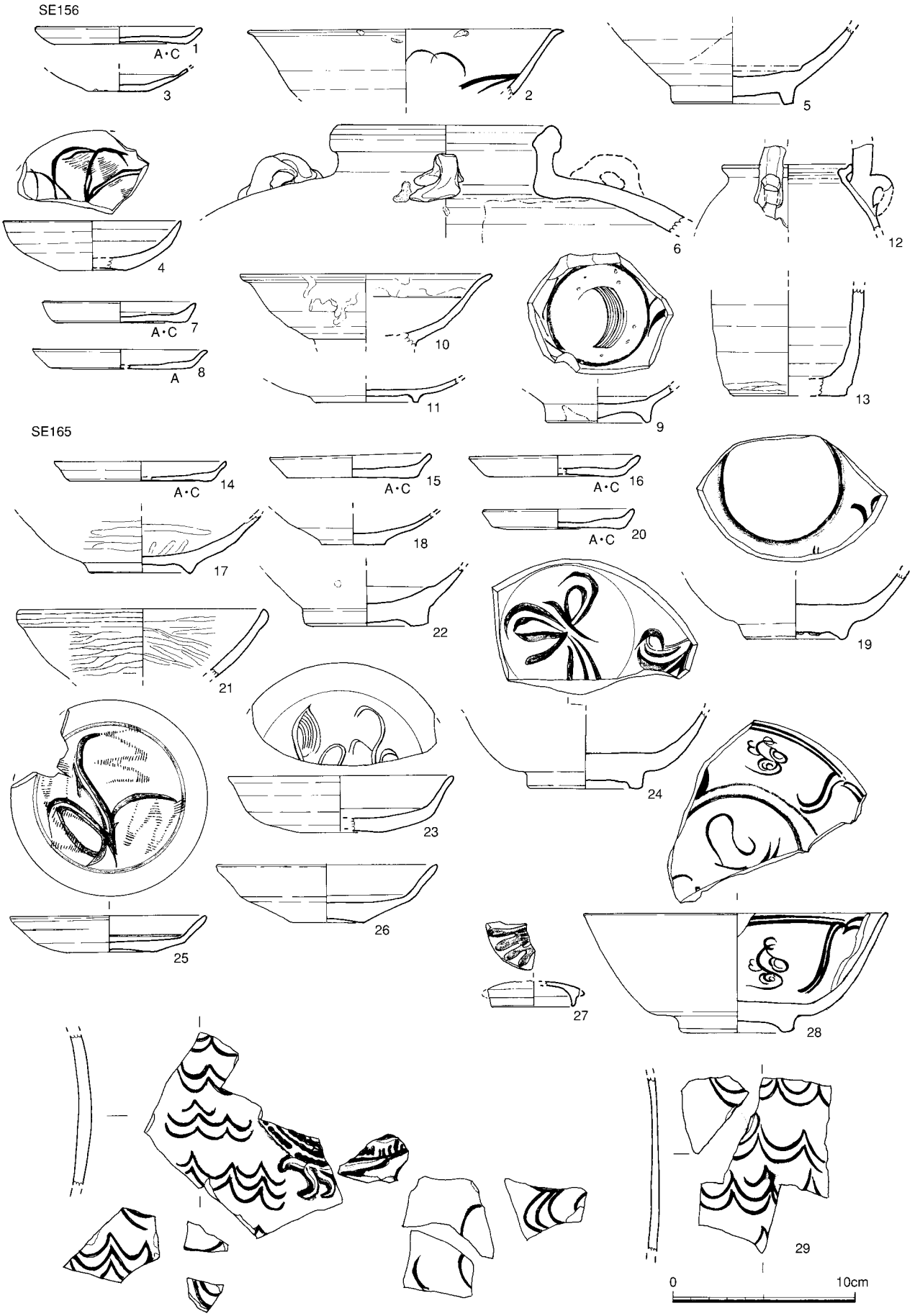


Fig.49　SE156・165出土遺物（1/3）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

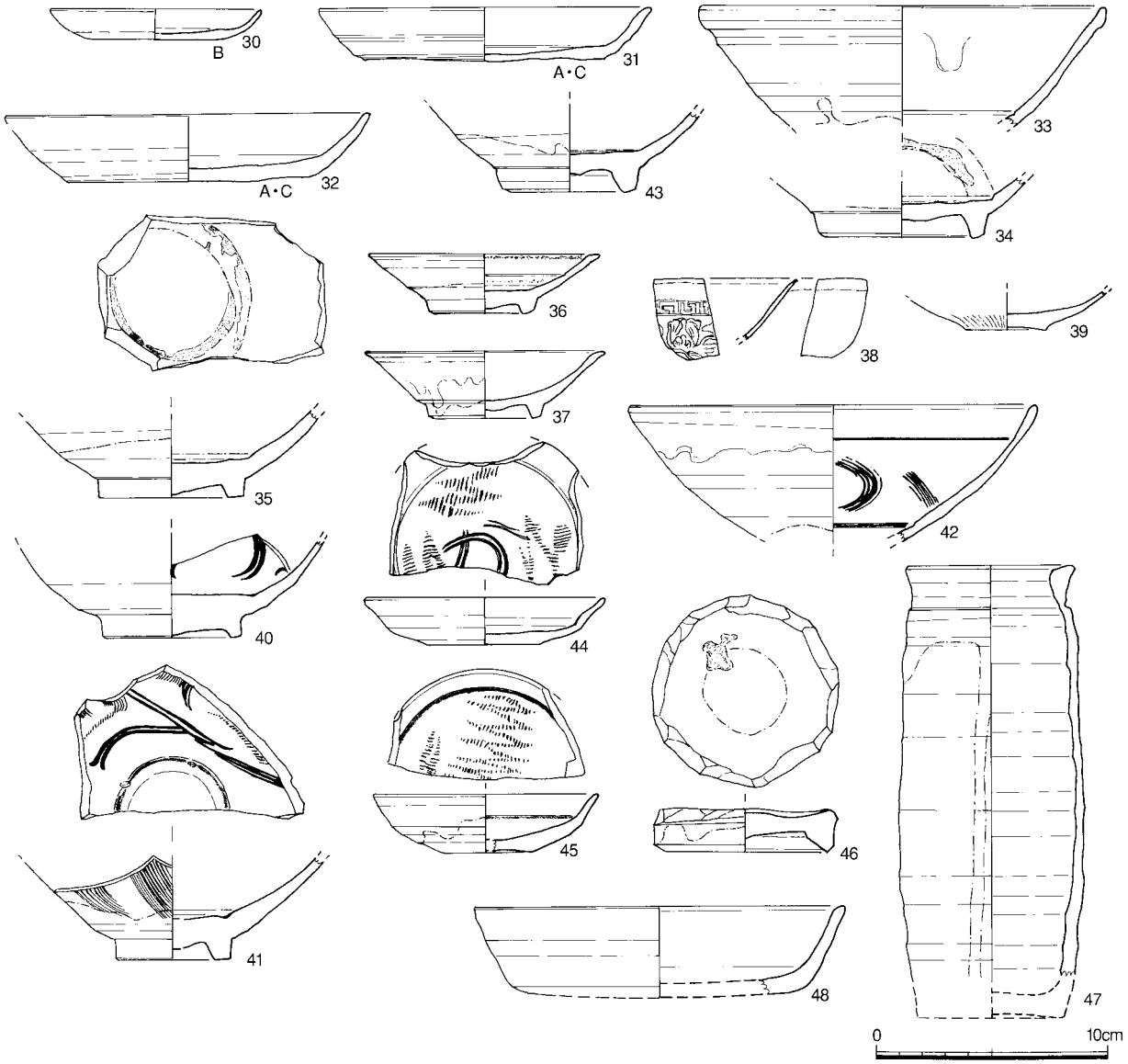


Fig.50　SE169出土遺物（1/3）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

高台部はケズリで露胎。**35**の内面一部黒色釉がかかる。**36**・**37**はⅢⅣ類で復元口径10.1㎝・10.4㎝、器高2.6㎝・2.9㎝を測る。**36**は明オリーブ灰釉がかかるが、体部下半から高台部はケズリで露胎。内面には粗砂が多く付着する。口縁部が一部黒く汚れており、灯明Ⅲに転用している。**37**は灰オリーブ釉がかかるが、高台部はケズリで露胎。内面砂粒が付着する。**38**は白磁の口縁部小片。内面に陽刻で雷文帯とその下は印花を施す。光沢のある透明釉がかかるが、口縁部は口剥げ。薄手の作りで景徳鎮窯か。**39**はⅢⅡ類底部。透明度の強い釉がかかるが、底部は釉を拭い取る。**40**～**45**は青磁。**40**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-４d類の底部。高台外面までオリーブ灰釉がかかる。内面片切彫り文。**41**・**42**は同安窯系青磁碗。**41**はⅡ-１a類底部。**42**はⅣ類。復元口径17.6㎝を測る。内面には櫛描文で、光沢のある灰オリーブ釉がかかるが、外面下半は露胎。**43**は青磁碗底部。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。無文だが同安窯系Ⅳ類か。**44**・**45**は同安窯系青磁Ⅲ。**44**はⅡ-２b類で復元口径10.4㎝を測る。オリーブ灰釉がかかるが、底部は露胎。**45**はⅡ-２c類。復元口径9.7㎝を測る。灰オリーブ釉がかかるが、底部は露胎。**46**は瓦玉。白磁碗底部片の転用品。**47**は褐釉短頸壺。復元口径7.2㎝、推定高19.4㎝を測る。内面は底部までオリーブ褐色釉が斑状にかかるが、外面は頸部までかかり、一部底部まで釉が垂れる。ロクロ成

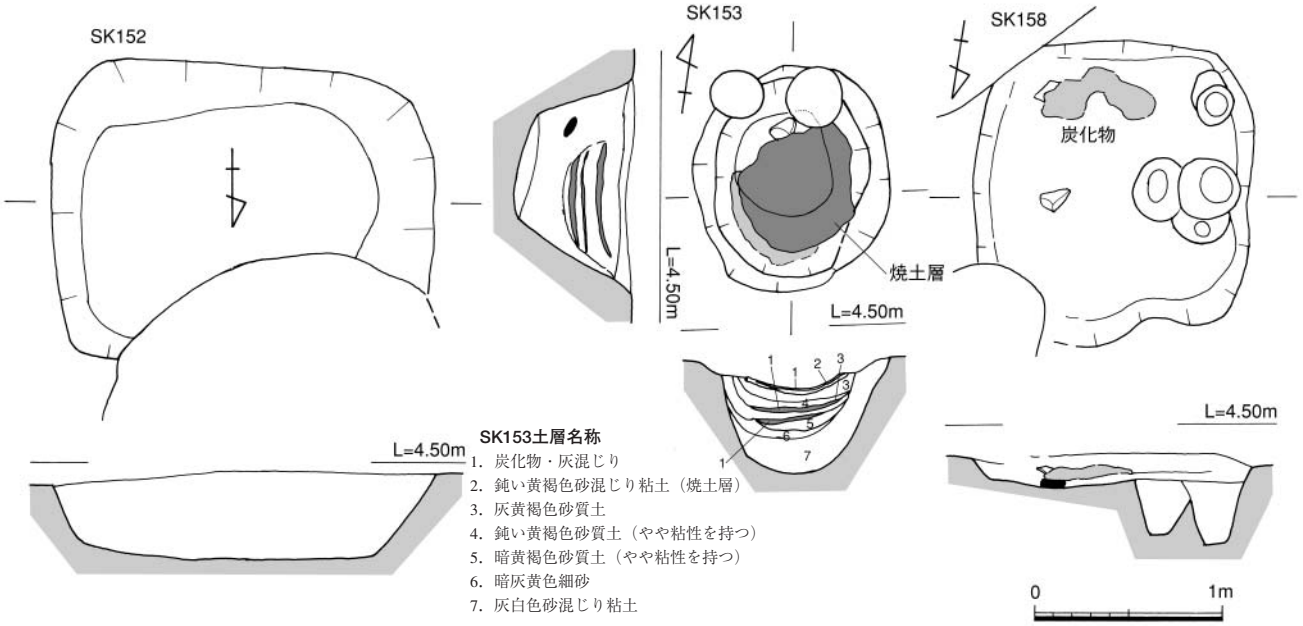


Fig.51　SK152・153・158（1/40）

形痕が明瞭に残る。**48**は須恵器坏で復元口径16.0㎝を測る。底部はヘラケズリ、体部から内底は回転ヨコナデ後丁寧なミガキ又はナデ。**101～103**は鉄製品。**101**は不明鉄製品。頂部が潰れ棒状の軸部に木質が付く製品で、先端が環状を呈し、そこに外径で5.8㎝、太さ0.9㎝を測る環が咬む形態。棒状の金具は全長６㎝、全体は9.8㎝を測る。木質が残ることから、戸の把手のようなものか。**102・103**は断面長方形の釘。残存長4.4㎝・5.5㎝を測る。頂部は曲がり木質が付着している。**129**は滑石製石鍋。1/2片で復元口径19.6㎝、器高8.5㎝を測る。内外面ノミによるケズリ。外面から外底部は使用によりススが付着し黒ずむ。底部は特にススが厚く付着する。**35・36・38・43・44・46**は上層出土。**30～34・37・40・45・47・48**は中層出土。**42**は下層出土。**41・129**は井側内中層出土。**101～103**は井側内下層出土。出土遺物から遺構の時期は12世紀中～後半頃と考える。

②　土坑（SK）

SK152（Fig.51・54）　E-５・６区で検出した隅丸方形土坑。規模は長軸長2.0m、短軸長1.6m、深さ0.4mを測る。埋土は黒褐色砂質土に炭化物を混入する。　**出土遺物**は中世の土師器、須恵器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、石鍋、古墳時代から古代の土師器・須恵器がある。上層は肥前磁器など近世以降の遺物が混入。**49**は土師器小皿。復元口径9.6㎝を測る。**50・51**は白磁碗底部。**50**はⅦ-２類。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。体部下半から高台部はケズリで露胎。**51**はⅦ-１a類で明オリーブ灰釉が高台近くまでかかる。**52**は同安窯系青磁ⅢⅡ-２b類。復元口径10.4㎝を測る。灰オリーブ釉が内面から体部下半まで厚めにかかる。**53**は陶器の四耳壷口縁部。復元口径10.8㎝を測る。内外面鈍い褐色釉がかかる。出土遺物から遺構の時期は12世紀中～後半頃と考える。

SK153（Fig.51・52・58、PL.6）　D-６区で検出した平面形が不整楕円形を呈す土坑。北側はピットで切られる。規模は長軸長1.2m、短軸幅1.0m、深さ0.65mを測る。埋土は上面に炭化物・焼土層があり、その下は灰黄褐色砂質土、鈍い黄褐色砂質土と炭化物・灰層が互層状に堆積する。下層は暗灰黄色細砂となる。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦器、中国産白磁、朝鮮陶器などと古代の土師器・須恵器がある。**54**は灰層下で出土。復元口径14.2㎝を測る。外面上半はヨコナデ、下半はケズリ後ナデ、内面丁寧なヘラミガキ。**130**は大形の磨石か敲石片。残存長12.6㎝、最大幅11㎝を測る。各面擦られて滑らかであるが、敲打痕跡が部分的に残る。**132**は扁平なガラス小玉。直径0.45㎝、高さ0.2㎝、孔

径0.25㎝を測る。色調はエメラルドグリーン呈す。

SK155（Fig.48・52、PL.6）　D-６・７区で検出した大型の土坑。南側が攪乱や調査区への降り口、東側が調査区外で未掘部分が多く、全体の形状は不明。確認規模は2.6×３m、最大深は1.6mを測る。底面はまだ掘れるようであるが、安全上から未掘である。埋土は黒褐色砂質土やオリーブ褐色砂などを主体とする。井戸の可能性がある。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・青白磁、朝鮮陶磁、瓦、石鍋、砥石、鉄滓、炉壁、焼土塊、古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**55**は土師器小皿で復元口径9.0㎝を測る。**56**は瓦器椀底部。底部はナデで、高台内ヘラ記号がある。**57**は白磁碗底部。白色釉がかかるが、外底部は露胎。**58**・**59**は青磁碗。**58**は同安窯系碗Ⅱ-２a類。復元口径18.0㎝を測る。内面劃花文を施す。**59**は口縁が直に開く青磁碗で復元口径16.4㎝を測る。灰オリーブ釉が外面体部下半迄かかる。釉表面には大きな氷裂が入る。**60**は小型の長胴の壺底部。外面灰オリーブ釉が胴部下半までかかるが、底部は露胎。内面は無釉。**61**は桶巻作りの技法による丸瓦。凸面縄目タタキ後ナデ、内面布目痕が残る。**62**は土師質の管状土錘。下端部を欠損する。指押え痕が残る。**55**・**57**・**59**は上層、**56**・**58**・**60**～**62**は下層出土。出土遺物から遺構の時期は12世紀中頃～後半頃と考える。

SK157（Fig.52）　D-６区で検出した楕円形を呈す土坑。西側に攪乱を受けるが、規模は1.25m、最大深0.17mを測る。底面は円形ピットや、焼土面がある。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・青磁、鉄釘、古墳時代から古代の土師器・須恵器がある。**63**は土師器小皿で復元口径9.2㎝を測る。

SK158（Fig.51・52）　E-６・７区で検出した方形土坑。規模は長軸長1.6m、短軸長1.44m、深さ0.1mを測る。南側に炭化物が出土している。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、土錘、古墳時代から古代の土師器・須恵器、瓦があるが量は少ない。**64**は白磁皿Ⅱ類の底部。灰白色釉がかかるが、体部下半から底部は露胎。

SK159（Fig.52、PL.11）　D-５区の鋼矢板隅で検出した長方形状の土坑。規模は長軸長0.86m、短軸長0.72m、深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色砂質土で黄褐色粘土、炭化物を混入する。重機による表土除去時に、この遺構に伴う青磁碗を検出しており、本来の遺構を損なっている可能性がある。
出土遺物は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、平瓦、古墳時代の須恵器があるが、近世の肥前磁器や瓦が少量混入。**65**～**70**は同安窯系青磁碗。完形品を含んで６個体出土。いずれもⅡ-１a類で、口径15.2～16.5㎝、器高は**65**が7.3㎝、**66**が7.1㎝、**67**は7.4㎝を測る。いずれも外面は縦の櫛描文、内面は櫛刺突雷文とヘラ劃花文が入る。以上の遺物は12世紀中頃～後半のもの。

SK162（Fig.48・54）　D-５区で検出した円形土坑。一部は調査区外にかかる。確認規模は長軸長1.12m、最大深さ1.6mを測るが、安全対策から底は完掘していない。埋土は暗褐色砂質土で炭化物・黄白色粘土ブロックを含む。井戸の可能性があるが、一部の調査であるため土坑とする。
出土遺物は中世の土師器、土師質土器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、平瓦、石鍋、鉄滓、古代の土師器・須恵器、瓦などがある。**71**～**73**は土師器。**71**は小皿で復元口径9.6㎝を測る。**72**・**73**は坏、**72**は復元口径10.4㎝を測る。**73**は口縁がナナメに開く形態。復元口径は12.6㎝を測る。**74**は白磁碗Ⅳ類で復元口径は14.4㎝を測る。光沢を持つ灰白色釉が内面から体部上半までかかる。**75**は陶器鉢で復元口径26.2㎝を測る。内外面光沢をもつ不透明な赤灰色釉がかかる。口唇部と体部外面中位に重ね焼きの目跡が残る。**76**は鞴の羽口先端部。復元径9.6㎝、復元孔径3.3㎝を測る。器壁は焼け、先端部には溶融したガラス質が付着。出土遺物から12世紀後半～14世紀初と考える。

SK164（Fig.54・58）　E-５区で検出した調査区にかかる土坑。確認した平面形は半円形で、規模

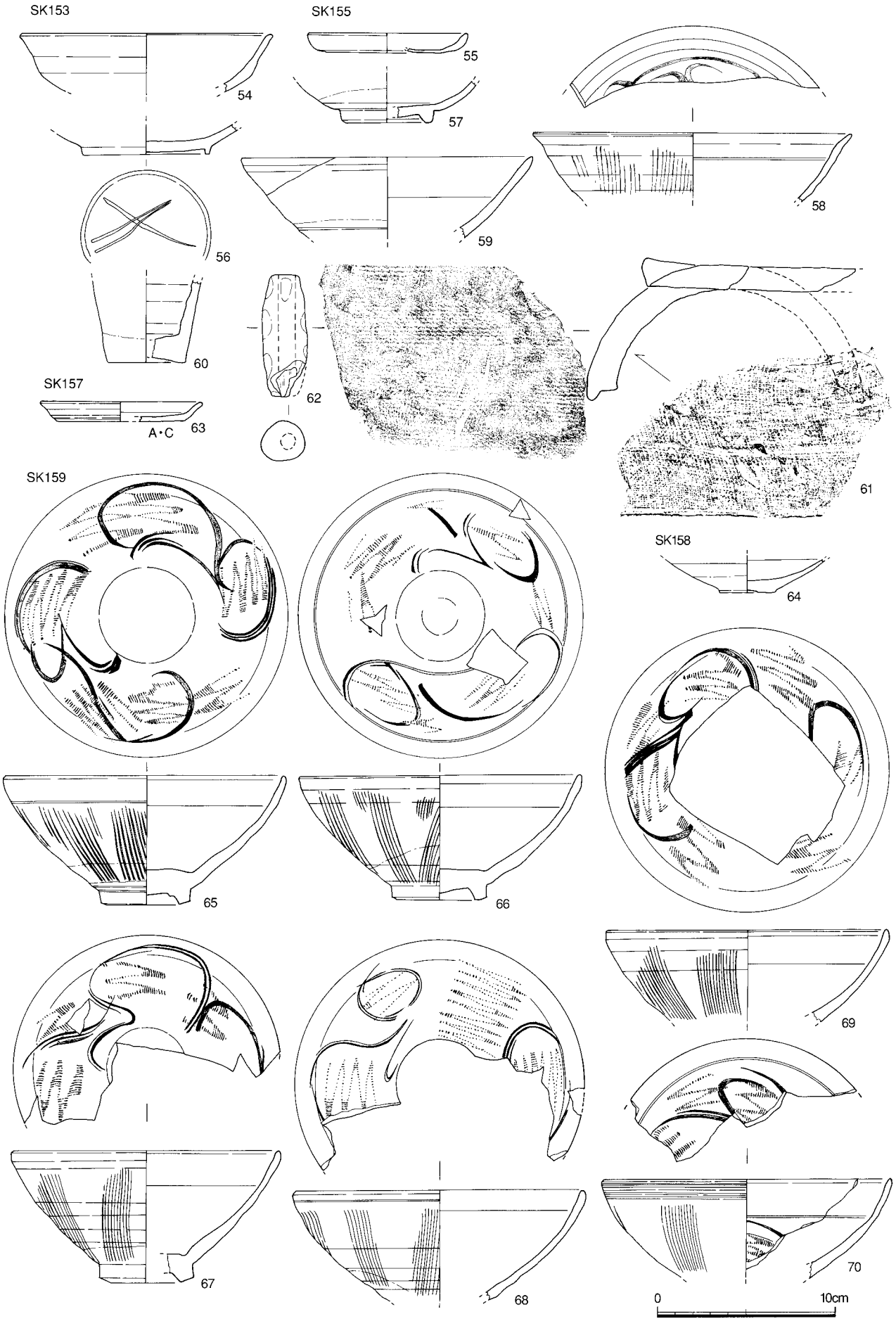


Fig.52　SK153・155・157～159出土遺物（1/3）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

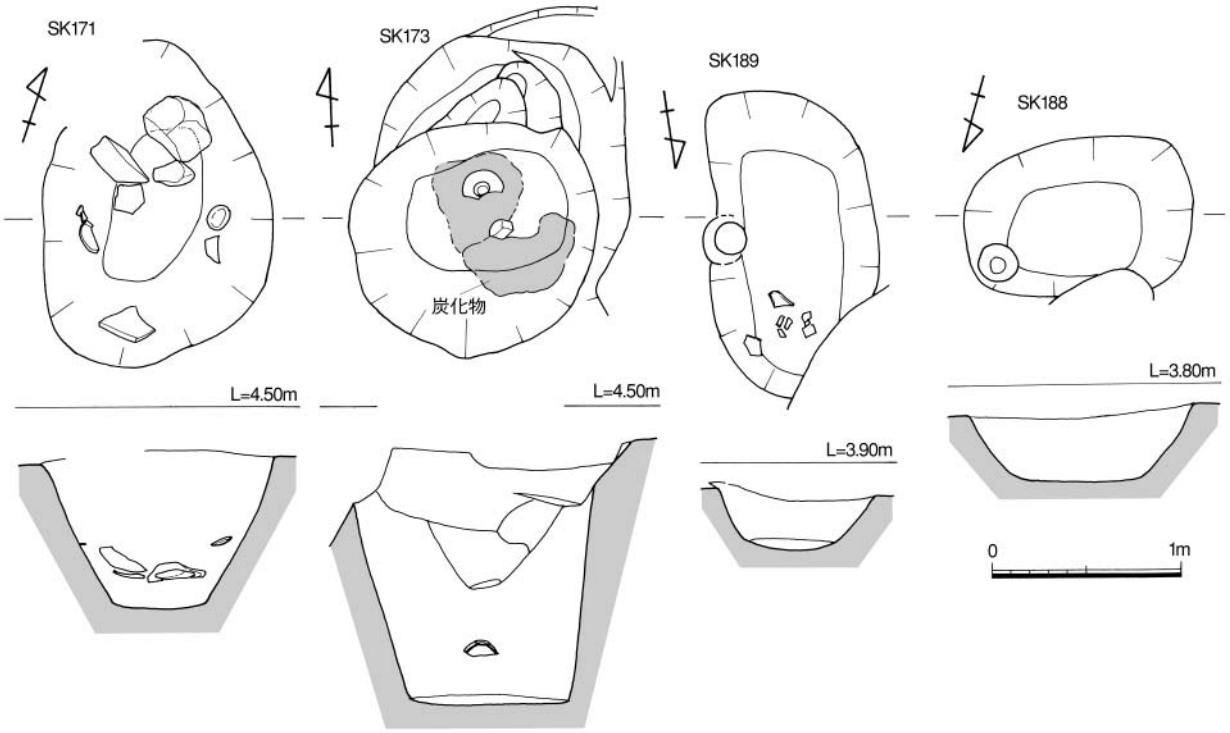


Fig.53　SK171・173・188・189（1/40）

は長軸長0.84m、最大深さは上面から0.4mを測る。埋土は黒褐色粘質土で炭化物を含む。　**出土遺物**は中世の土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、平瓦、石鍋・鉄滓、鉄釘などと古代の土師器・須恵器の破片が少量混入して出土している。**77**・**78**は土師器小皿。1/4片で復元口径は9.0㎝・9.9㎝を測る。**79**は瓦器椀で復元口径17.6㎝を測る。内外面粗いヘラミガキ。**80**は白磁碗Ⅶ-１b類の底部。灰白色の釉が高台畳付までまだらにかかる。**131**は扁平な楕円形状の磨石。残存長11.1㎝、幅8.6㎝、最大厚3.4㎝を測る。表面は擦られて滑らかである。上面には敲打使用痕が残る。火を受けたのか部分的に黒ずむ。石材は砂岩。**133**はガラス玉。直径1.18㎝、高さ1.05㎝、孔径0.4㎝を測る。色調は白濁した濃藍色を呈す。出土遺物から時期は12世紀後半頃である。

SK170（Fig.54）　C-５区で検出したSK173と切り合う土坑。遺構底は逆三角形状に狭くなる。確認規模は長軸長1.32m、最大深さ0.78mを測る。埋土は黒褐色土を主体とし、焼土・炭化物を含む。**出土遺物**は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・陶器、鉄釘、古墳時代から古代にかけての土師器・須恵器などがある。当初土層ベルトを挟んで２区に分けて遺物を取り上げたが、南側２区でSK173と切り合うことを確認したので、２区遺物はSK173で報告する。**81**は白磁碗Ⅱ類の口縁か。復元口径15.8㎝を測る。内面から外面体部下半まで光沢を持つ浅黄色釉がかかる。内面氷裂が入る。

SK171（Fig.53・54、PL.6）　第１面下のE-７区で検出した平面不整形の土坑。規模は長軸長0.86m、短軸幅0.6m、最大深0.42mを測る。埋土中から割石や土器の破片などが投げ込まれたような状況で出土しているので、廃棄土坑と考える。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、土錘、古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**82**は土師器小皿で復元口径8.4㎝を測る。**83**は白磁碗Ⅳ-２b類底部。灰白色釉がかかるが、見込みは蛇ノ目釉剥ぎし、高台部はケズリで露胎。**84**は白磁壺胴底部。光沢のある灰オリーブ釉が高台外面までかかる。畳付は擦っている。**85**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-４c類で復元口径16.9㎝、器高7.1㎝を測る。見込みヘラ片彫りの花文と櫛描文。**86**は陶器の捏ね鉢底部で、底径14.6㎝を測る。薄く釉がかかり灰赤色から暗赤褐色を呈す。底部は無施釉で雑なナデ。出土遺物から遺構の時期は12世紀後半～13世紀前半と考える。

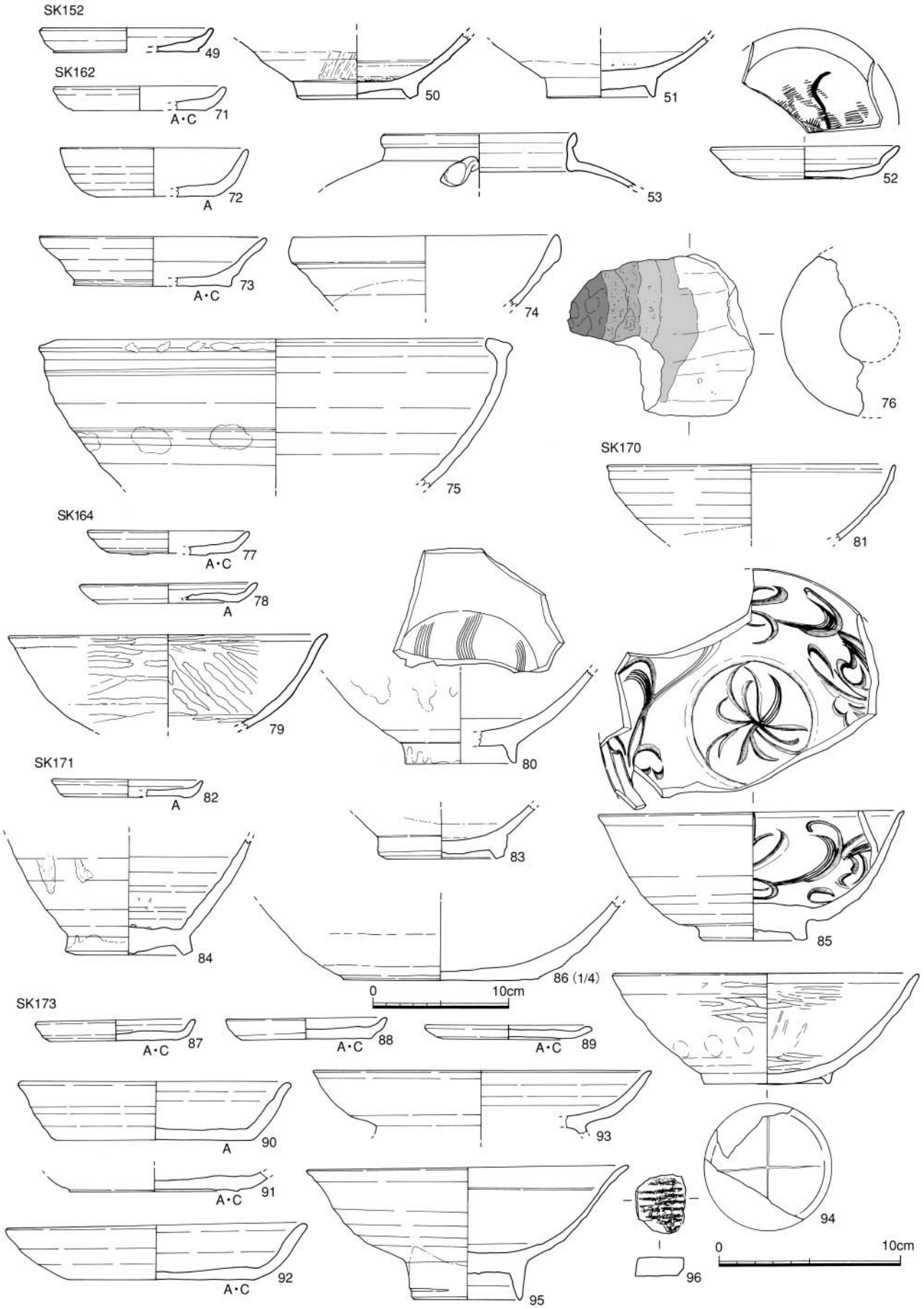


Fig.54　SK152・162・164・170・171・173出土遺物（1/3・1/4）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

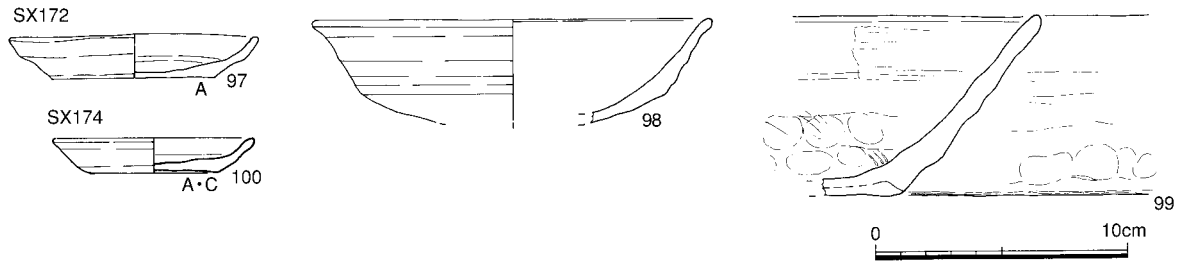


Fig.55　SX172・174出土遺物（1/3）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

SK173（Fig.53・54、PL.6）　第１面下のC-５区で検出したSK170と切り合う平面不整円形の土坑。規模は南北径1.38m、東西径1.24m、最大深さ1.40mを測る。埋土は黒褐色土を主体とする。底面南側で、炭化物・灰がブロック状に集中して出土した。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、古墳時代から古代の土師器・須恵器、砥石、鉄製品などがある。**87**～**93**は土師器。**87**～**89**は小皿。**87**・**88**は**87**が一部欠損、**88**が完形で、口径は8.8～9.2㎝、器高0.8～1.4㎝を測る。**90**～**92**は坏で、**91**は底部片。**90**・**92**は口径15.4㎝・16.7㎝、器高3.4㎝・3.3㎝を測る。**93**は高台付皿。小片で推定口径は18.6㎝を測る。**94**は瓦器椀で復元口径17.0㎝、復元器高6.1㎝を測る。調整は外面体部上半から内底はヘラミガキ、外面下半はヨコナデで指押え痕が残る。高台内には「十」の線刻がある。**95**は白磁碗Ⅵ類で口径17.8㎝、器高7.4㎝を測る。灰オリーブ釉が高台以外にかかる。高台は細くケズリ出す。**96**は瓦玉。須恵器片を再利用したもの。**87**・**90**・**92**・**93**・**94**・**96**はSK170-２区出土のもの。出土遺物から遺構の時期は12世紀中～後半頃と考える。

③　その他の遺構出土遺物（SX）

SX172（Fig.55）　E-７区隅で検出した不定形土坑。**97**・**98**は土師器。**97**は小皿で歪みがあるが、復元口径9.8㎝、器高1.8㎝を測る。**98**は丸底の坏か。復元口径15.8㎝を測る。外底部と内面は丁寧なヘラミガキ。体部外面は回転ナデ。**99**は土師質土器の鉢小片。調整はヨコナデ又はナデで内面下半指押さえ痕残る。外面ススが付着する。出土遺物から遺構の時期は12世紀中頃～後半頃と考える。

SX174（Fig.55）　第１面下で検出したSK155に切られる土坑の一部。**100**は土師器小皿で復元口径8.0㎝を測る。

④　ピット・遺構面・包含層出土遺物（Fig.57・58）

第１面及び第２面で検出したピット出土の図示出来る遺物を報告する。

第１面ピット出土遺物　**104**はSP609出土の土錘。下端を欠損する。残存長5.9㎝を測る。**105**はSP631出土の瓦器椀。復元口径14.8㎝を測る。内外面粗いヨコヘラミガキで、外面下半指押さえ痕が残る。**106**はSP640出土の瓦玉。陶器片を再利用したもの。**107**はSP644出土の土師器小皿。完形で口径9.0㎝を測る。**108**はSP647出土の瓦玉。白磁碗底部を再利用したもの。**109**はSP652

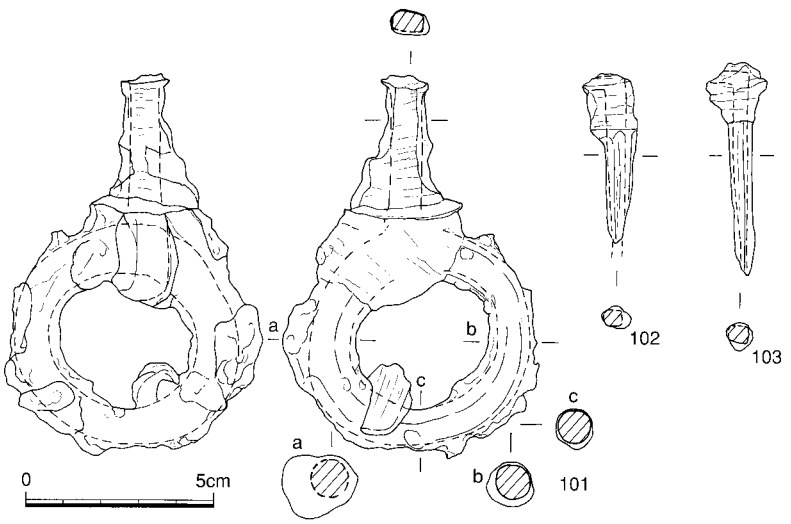


Fig.56　SE169出土鉄製品（1/2）

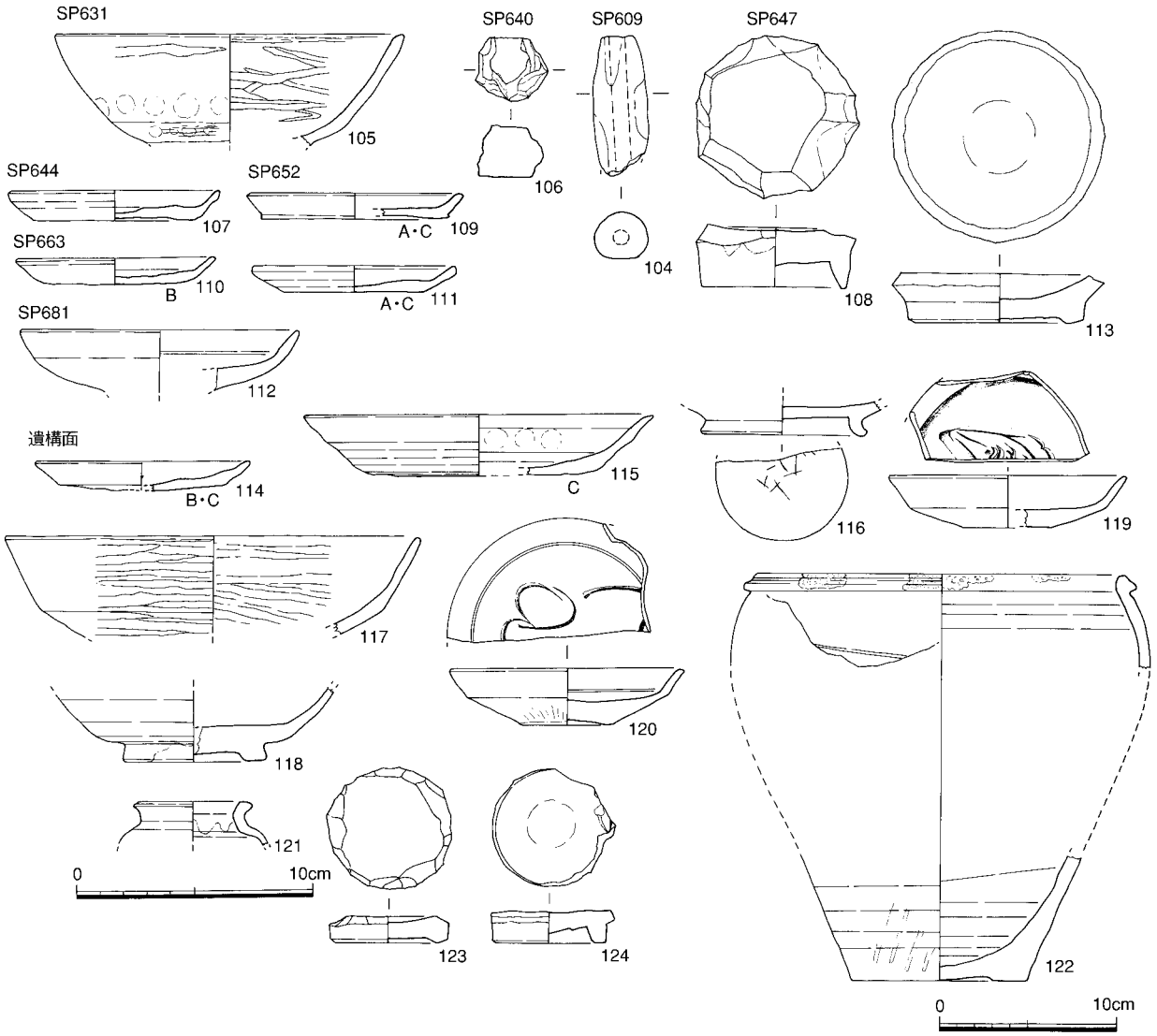


Fig.57　第１面ピット、遺構面出土遺物（1/3・1/4）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

出土の土師器小皿。口径9.1㎝を測る。**110**・**111**はSP663出土の土師器小皿。**110**は完形で口径8.4㎝を測る。**111**は復元口径8.6㎝を測る。**112**・**113**はSP681出土。**112**は白磁皿Ⅱ類の口縁部。復元口径11.8㎝を測る。**113**は瓦玉で白磁碗Ⅳ類底部を再利用したもの。**153**はSP601の中国北宋銭の「景徳元寶」（初鋳年1004年）。

第１面遺構面出土遺物　**114**・**115**は土師器。**114**は小皿。口径9.0㎝を測る。**115**は坏で復元口径14.8㎝を測る。**116**は黒色土器B底部。内面はヘラミガキ、高台内はナデで細い線刻が乱雑に入る。**117**は瓦器椀口縁部。復元口径17.6㎝を測る。内外面ヨコヘラミガキ。**118**は越州窯系青磁碗底部。灰オリーブ釉がかかるが高台畳付から内面は露胎。見込みと畳付に重ね焼きの目跡が残る。**119**・**120**龍泉窯系青磁皿Ⅰ-３類の平底皿。**119**は見込みに魚、**120**は花文を描く。**121**は灰オリーブ釉が厚めにかかる磁器小壷口縁。復元口径5.0㎝を測る。**122**は陶器の甕口縁部と底部片から復元。復元口径20.8㎝、復元高約23㎝を測る。灰オリーブ釉が内外かかり、外底部は露胎。**123**・**124**は瓦玉。**123**は白磁皿底部を再利用したもの。**124**は青磁碗底部を再利用したもの。**154**～**156**は中国の宋銭でいずれも３枚銹着している。**154**は「天聖元寶」（初鋳年1023年）、**155**は「至和通寶」（初鋳年1054年）、**156**は「政和通寶」（初鋳年1111年）である。

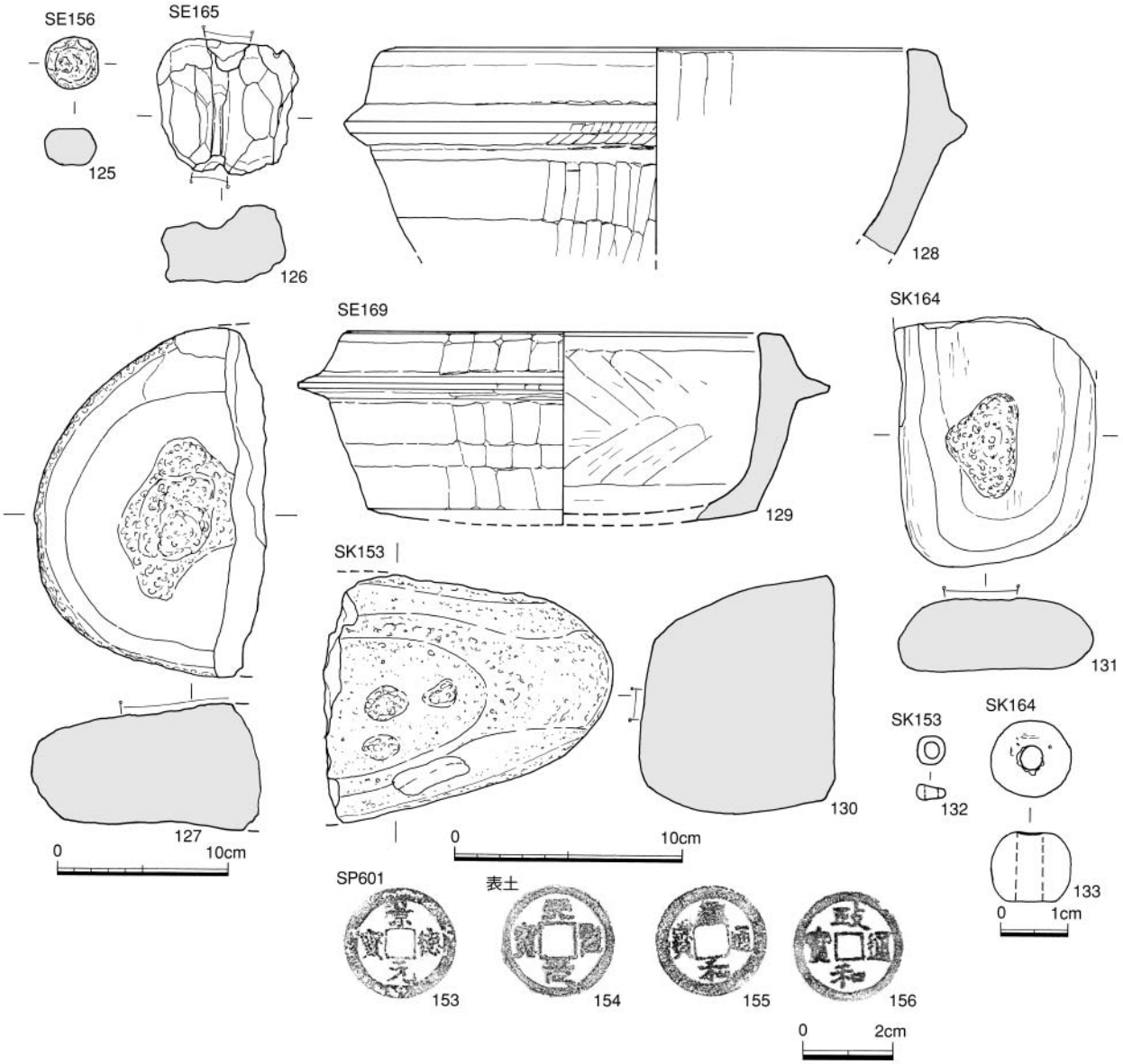


Fig.58　各遺構面出土石製品、玉類、銅銭（1/3・2/3・1/1・1/4）

3)　第２面の調査

①　竪穴住居跡（SC）

当初３棟番号を付したが、竪穴住居跡として明確な１棟を報告する。

SC181（Fig.59・60、PL.6）　D・E-５・６区で検出した平面形が方形状を呈す住居跡。北側はSE169や第１面の遺構に切られ、壁面は確かでないが、規模は東西長3.94m、南北長推定で3.98m、最大深さは0.5mを測る。主柱は４本柱と考えられるが、北側の柱穴は東壁からの距離でみたら、該当するものはない。柱穴の深さは0.14～0.46mで、深さに差がある。東壁中央部には灰白色粘土で造り付けた竈が付く。この位置関係は第Ⅰ区の住居跡と同じである。灰白色粘土中央には焼土面があり、本来は両側に粘土で袖を造り付けた形態である。竈の規模は焼土や残存粘土から幅1.0m、長さ0.6m位と推定する。　**出土遺物**は古墳時代後期の土師器・須恵器などがあるが量は少ない。砥石も１点出土している。**134**・**135**は須恵器坏身。復元口径8.0㎝・9.2㎝、器高1.7㎝・2.7㎝を測る。**134**は回転ナデで、外底部ヘラ記号がある。**135**は外底部回転ヘラケズリ、体部から内面は回転ナデ。いずれもⅣb

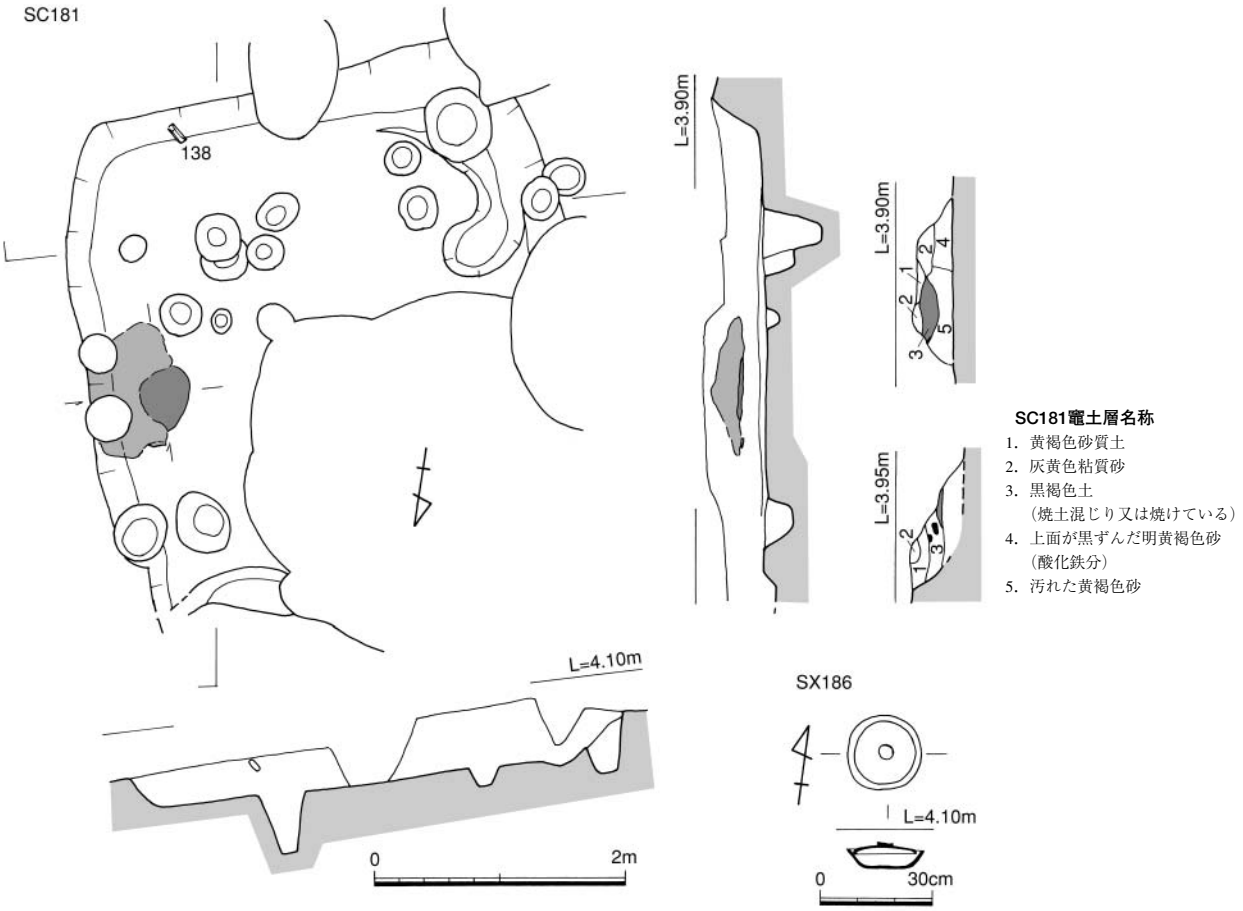


Fig.59　SC181、SX186（1/60・1/20）

期のもの。**136**は土師器鉢小片。口縁部が底部から屈折して開く形態。調整は内外面ヨコヘラミガキ。古墳時代前期のもの。**137**は土師質の管状土錘。下端部を欠損するが残存長7.2㎝を測る。**138**は方柱状の砥石で全長13.9㎝、最大幅5.95㎝を測る。表面は使用により中央部がすり減る。石材は頁岩。**139**は磨製石斧の刃部片。残存長4.6㎝、幅5.6㎝を測る。赤みがかった灰褐色で、石材は安山岩か。
以上の遺物から遺構の時期は６世紀末～７世紀初頭と考える。

②　祭祀遺構（SX）

SX186（Fig.59・60、PL.6）　D-６区の第１面下暗褐色砂中で検出した８世紀前半の土師器で、土師器の蓋と坏からなる。掘方は不明。後産処理の胞衣壺（えなつぼ）と考えるが、地鎮具の可能性もある。**出土遺物**　**140**は蓋。完形で口径15.7㎝、器高3.5㎝を測る。天井部に扁平な摘みが付く。調整は天井部回転ヘラケズリ、口縁部内外面は回転ナデ、天井部内面は丁寧なナデ。**141**は坏で口縁部が一部欠損するがほぼ完形。口径18.4㎝、器高5.1㎝を測る。調整はヘラミガキで、体部から内面は丁寧に平滑にミガキを行なう。

③　土坑（SK）

SK188（Fig.53）　E-７区で検出した平面形が隅丸長方形状を呈す土坑。規模は長軸長1.24m、短軸長0.84m、最大深さは0.42mを測る。埋土は淡黒褐色砂である。　**出土遺物**は古墳時代から古代の土師器、古代の須恵器があるが、細片で図示出来ない。古代の時期である。

SK189（Fig.53・60、PL.6）　D-５区の境界で検出した平面形が長方形を呈す土坑。規模は長軸長1.6m、短軸長0.9m、深さ0.35mを測る。埋土は黒褐色砂。　**出土遺物**は古墳時代前期の土器などが出

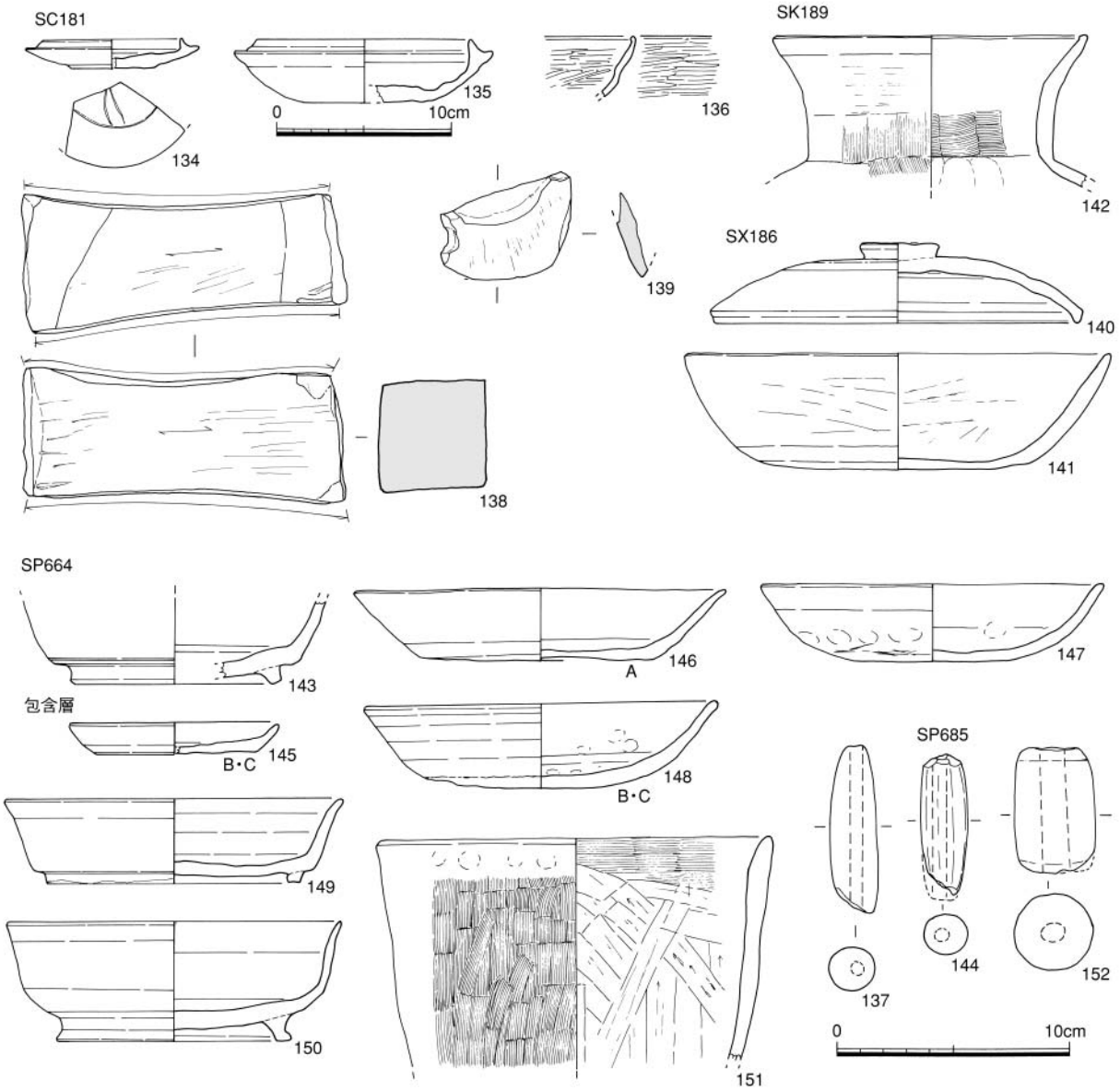


Fig.60　SC181、SK189、SX186、ピット、包含層出土遺物（1/3・1/4）A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

土している。**142**は直口気味に開く壺口縁部。復元口径18.0㎝を測る。口縁部上半はヨコナデ、下半はタテハケ目とヨコハケ目。内面は指押え痕が残る。SC181の破片と接合した。

④　第２面ピット（SP）・遺構面・包含層出土遺物（Fig.60）

143はSP664出土の須恵器坏。形態から８世紀前半のもの。**144**はSP685出土の土師質の管状土錘。上端は打欠き、下端は欠損する。残存長6.0㎝を測る。**145**～**152**は遺構面・第１面下包含層出土遺物。**145**～**148**は土師器。**145**は小皿で復元口径9.0㎝を測る。**146**は坏で口径16.0㎝を測る。**147**・**148**は丸底坏。**147**は復元口径14.8㎝を測る。底部はナデ、押し出し成形で指押さえ痕が内外面に残る。**148**は一部欠損で、口径15.1㎝を測る。底部ヘラ切り後ナデで板状圧痕が残る。指押さえ痕。**149**は須恵器坏。高台が付く形態。復元口径14.6㎝、器高3.6㎝を測る。体部から内面は回転ナデとナデ。**150**は土師器の坏で口縁部を1/3欠く。口径は14.4㎝、器高5.2㎝を測る。回転ナデとナデ、外底部は回転ヘラケズリで、高台内にヘラ記号がある。７世紀後半～８世紀前半のもの。**151**は土師器の甑口縁部。復元口径22.8㎝を測る。胴部外面と口縁内はタテ・ヨコハケ目、胴部内面はヘラケズリ。**152**は円柱状の管状土錘。全長5.45㎝、直径3.4㎝、孔径0.8×1.0㎝を測る。

3　第Ⅲ区の調査（Fig.61、PL.7）

1）　調査の概要

第Ⅲ区はオフィス棟部分である。建築工事との関係から調査区全体の調査が一度に出来ないので、調査区を東西二分割した。まず東側を行い、東側が終了した後、残りの西側の調査を行った。遺構面までの廃土は場外に持ち出し、調査中の廃土は現場内で処理した。東側の調査を８月２日から実施し、８月20日に終了、８月22日から西側の調査にかかり、９月18日に終了した。東側調査区は事前の試掘調査では、基盤の砂丘面まで基礎攪乱が入り、その面で遺構を確認したことから、重機で地表下－2.2mの砂丘面まで掘り下げて調査を行なった。遺構は少なく井戸と土坑などを検出した。西側は建物基礎攪乱が少なく、遺構の残りは良く、他区と同じように２面の調査を実施した。第１面は遺構面が4.4m前後、第２面は3.9m前後の面である。第１面の時期は中世前期～近世、第２面は弥生時代中期～古代である。第１面では井戸や土坑、溝、ピット群、第２面では弥生時代中期前半～後期末頃の甕棺墓を４基と、古墳時代前期竪穴住居跡２棟を検出した。

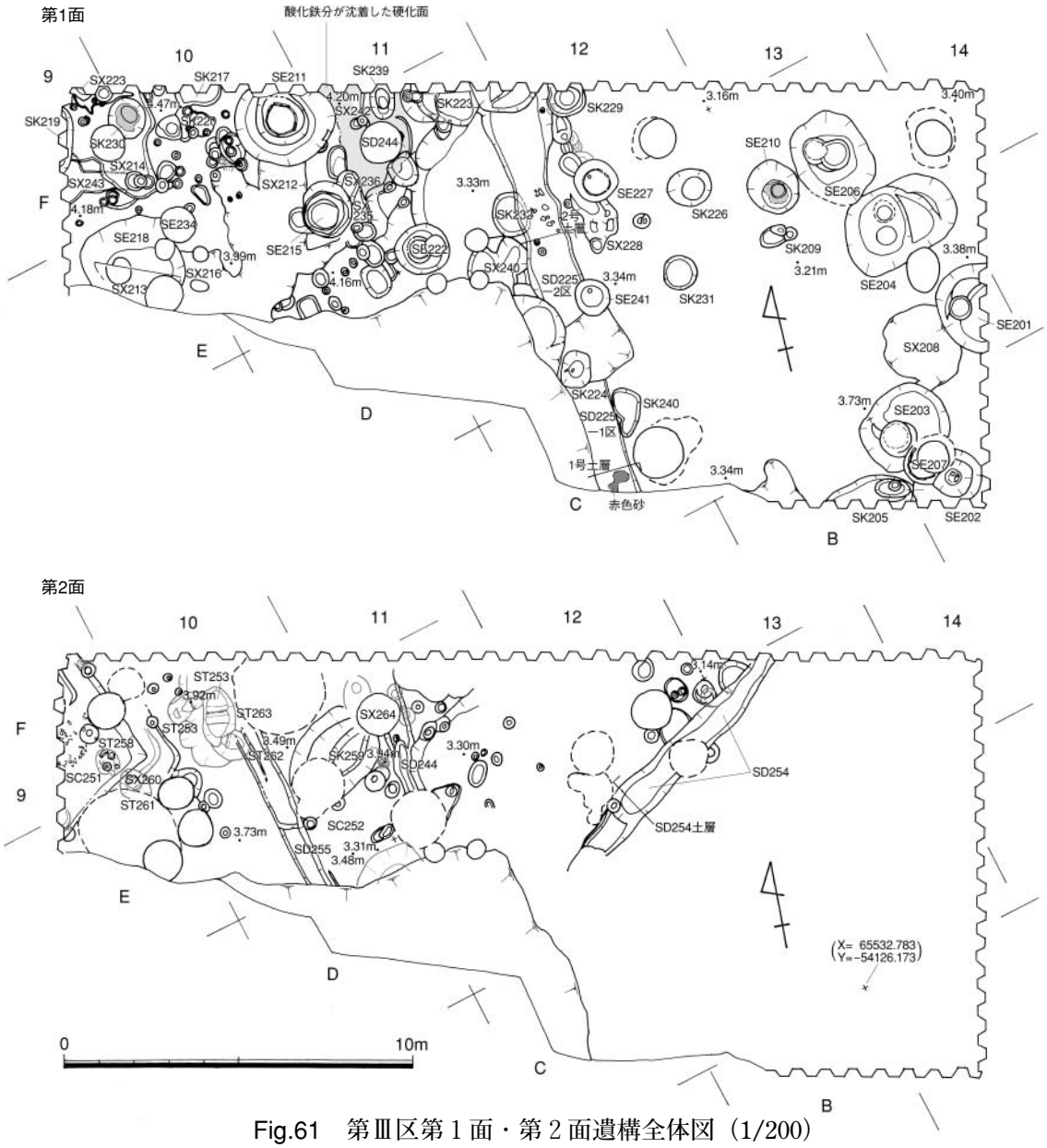


Fig.61　第Ⅲ区第１面・第２面遺構全体図（1/200）

2)　第１面の調査

①　溝状遺構（SD）

SD225（Fig.62・75、PL.9）C-11区～E-11区で検出した主軸を南北方向に取る溝。遺存状況は建物基礎などによる削平で不良。確認長は13m、幅は最大で２m、深さは0.06～0.3mを測る。底面は比較的平坦である。埋土は黒褐色土や暗褐色土を主体とする。南側境界で赤褐色砂が集中する部分があり、墓など遺構の存在の可能性を想定し、断ち割り調査を行ったが、遺構は確認出来なかった。

出土遺物は中世の土師器、須恵器、瓦器、中国産白磁・青磁・青白磁・陶器、古代の土師器・須恵器、越州窯青磁などがある。**1**・**2**は土師器小皿。**1**は完形。口径は8.6㎝・復元8.8㎝、器高は1.3㎝・1.4㎝を測る。**3**は白磁碗Ⅸ類。復元口径15.4㎝、器高5.7㎝を測る。底部は露胎で、高台部に重ね焼き痕跡が残る。**4**は褐釉陶器の四耳壺口縁部。復元口径14.0㎝を測る。暗褐色釉が口縁部内面から外面にかかるが、内面は灰褐色を呈す。**5**は黄釉陶器壺。口縁部と胴底部片から復元。復元口径９㎝、推定高23㎝を測る。内外面暗灰黄色釉がかかるが、釉の発色は不良。高台部から底部際は露胎。**128**は石錘。全長6.6㎝、幅4.8㎝を測る。礫岩の円礫側面を粗く溝状に抉り、表面は若干敲打調整を行う。出土遺物から遺構の時期は12世紀後半頃と考える。

SD244（Fig.62）　F-12区で検出した溝。基礎杭や他遺構に切られ残りは悪い。断面V字形の溝で北壁断面では幅0.8m、深さ0.5mを測る。埋土は黒褐色砂質土。　**出土遺物**は弥生土器や、古墳時代から古代の土師器・須恵器、中世の土師器、中国産白磁・青磁、土錘などがある。**6**は土師器の小皿。口径9.8㎝、器高1.0㎝を測る。**7**は土師質の管状土錘。両端部は少し欠損する。残存長3.4㎝を測る。**8**は瓦玉。白磁ⅢⅢ類底部を再利用したもの。11世紀代の遺構か。

②　井戸状遺構（SE）

井戸を12基（中世８基、近世４基）検出した。以下主な井戸について報告する。SE201～210・227は基盤の砂丘面で検出した。

SE201（Fig.63・65、PL.8）　D-13区調査区境界にかかる井戸。全体は検出していないが、確認規

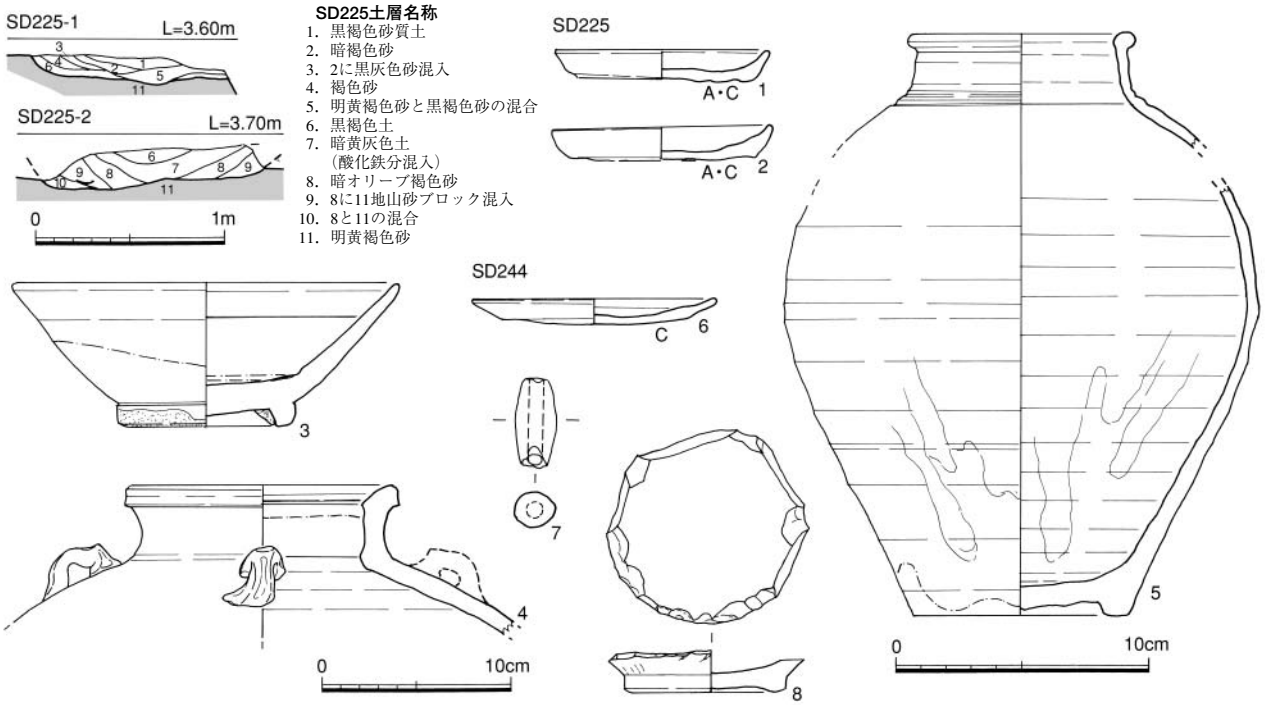


Fig.62　SD225土層とSD225・244出土遺物（1/40・1/3・1/4）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

模は長軸径2.52m、最大深さは井側底で２m（標高1.4m）を測る。遺構面から0.6m下がった所で平坦面があり、その西隅に径0.6×0.65mの略円形を呈す井側がある。埋土は暗黄褐色砂で、井側部は黒灰色粘質砂で周囲は鉄分が付着している。　**出土遺物**は中世の土師器、土師質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、国産陶器、瓦、石鍋、古代の土師器・須恵器などがあるが、少量の近代のタイル・煉瓦なども出土している。**9**は瓦器椀。復元口径14.8㎝、器高4.9㎝を測る。内外面粗いヘラミガキ。高台は回転ナデ。**10**は白磁皿Ⅱ類底部。淡黄色釉が分厚くかかるが、底部は露胎。底部には「上」という墨書がある。**11**は白磁合子。復元口径12.3㎝、器高4.0㎝を測る。透明感のある氷裂が入る灰白色釉がかかるが、口縁の受け部から口縁内は無釉。**12**は瓦玉。龍泉窯系青磁碗Ⅰ-２類底部片を再利用したもの。高台内には「十」と読める墨書がある。出土遺物から12世紀後半頃の遺構と考える。

SE202（Fig.63・65・75、PL.8）　C-13区の調査区隅で検出した基礎杭と近世井戸SE207に切られる井戸。南側は鋼矢板で未掘。掘方規模は長軸径で2.1m、井側部で深さ2.1m（標高1.35m）を測るが、安全対策のため、完掘していない。底面は狭く円形で径0.5mを測り、中央部に径0.3m程の井筒痕跡を確認した。井筒内から長さ20㎝ほどの礫石が出土した。掘側埋土は暗黄褐色砂で黒色土を混入し、井側部は暗褐色砂である。　**出土遺物**は中世の土師器、須恵器、瓦器、中国産白磁・青磁、国産陶器、石鍋、石錘、古代の土師器・須恵器がある。**13**は白磁四耳壺の口縁部。復元口径10.0㎝を測る。不透明な灰白色釉が外面から口縁部内面までかかる。**14**は緑釉陶器壺の底部から胴部。復元底径10.0㎝を測る。灰オリーブ色の釉が内外面にかかるが、高台部ケズリ出しで部分的に釉がかからない。畳付には灰白色粘土が付着する。**129**は滑石製石鍋。復元口径25.6㎝を測る。口縁部に4.6×2.7㎝の長方形の耳が２カ所残る。外面はノミでケズリ、内面はケズリ後研磨で平滑に仕上げる。**130**は滑石製石鍋片転用の石錘。全長8.25㎝、最大幅3.75㎝を測る。中央部に抉り、上下両側面に溝を彫り込んでいる。出土遺物から遺構の時期は11世紀後半～12世紀前半と考える。

SE203（Fig.63・65・75、PL.8）　C-13区で検出した南側をSE207に切られる井戸。掘方規模は上面で長軸径2.63m、短軸径2.33m、井側底深さ約2.22m（標高1.15m）を測る。上面から深さ1.3mで平坦面があり、その西寄りに円形の井側がある。井側の上面径は１mを測り、底の部分で長さ0.4m前後、幅0.1m程の板材を丸く並べた井戸枠があった。板材自体は腐食しており残りは悪い。井戸掘方埋土は暗黄褐色砂で黒褐色砂ブロック・粒子を混入し、井側部は黒灰色土である。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、石球、鉄釘、古墳時代から古代の土師器・須恵器がある。**15**は青磁小壺。口径3.4㎝、器高3.0㎝を測る。底部以外暗オリーブ釉がかかるが、釉の剥落が多い。**131**は石球。径2.95×2.8㎝を測る。粗割した後敲打調整で表面を丸くしている。石材は玄武岩か。

SE204（Fig.63・65・77、PL.8）　E・D-13区で検出した土坑を切る井戸。堀方平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸径約2.8m、短軸径2.3m、深さは井筒部で2.1m（標高1.2m）を測る。底面は東側のテラス状の高まりを持つ。西側はテラス面より0.6m下がって、1.8×1.3mの楕円形を呈す平坦面となり、その中央部に２基の井筒がある。南側井筒を井筒１、北側を井筒２とする。井筒２が切り合いから新しい。井筒１は上面では円形であったが、掘り下げると幅0.1m程の板材が壁に沿って方形に組まれていた。その長さは一辺0.5mを測る。井筒２が円形で径0.57mを測り、井筒内周壁に沿って幅0.1mほどの板材が桶状に組まれていた。その中に0.4mの曲物と思われる円形井筒の痕跡があった。掘方埋土は暗黄褐色砂に黒色粒子を混入する。井側内は暗灰色細砂質土で炭化物を含んでいた。SE204井戸は掘り直しがあったので、形状が不整形になったのであろう。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁、石球、石鍋、古墳時代から古代の土師器・須恵器がある。**16**～**19**は上層出土。**16**・**17**は土師器。**16**は小皿。ほぼ完形で口径8.1㎝、器高1.2㎝を測る。**17**は坏で復元

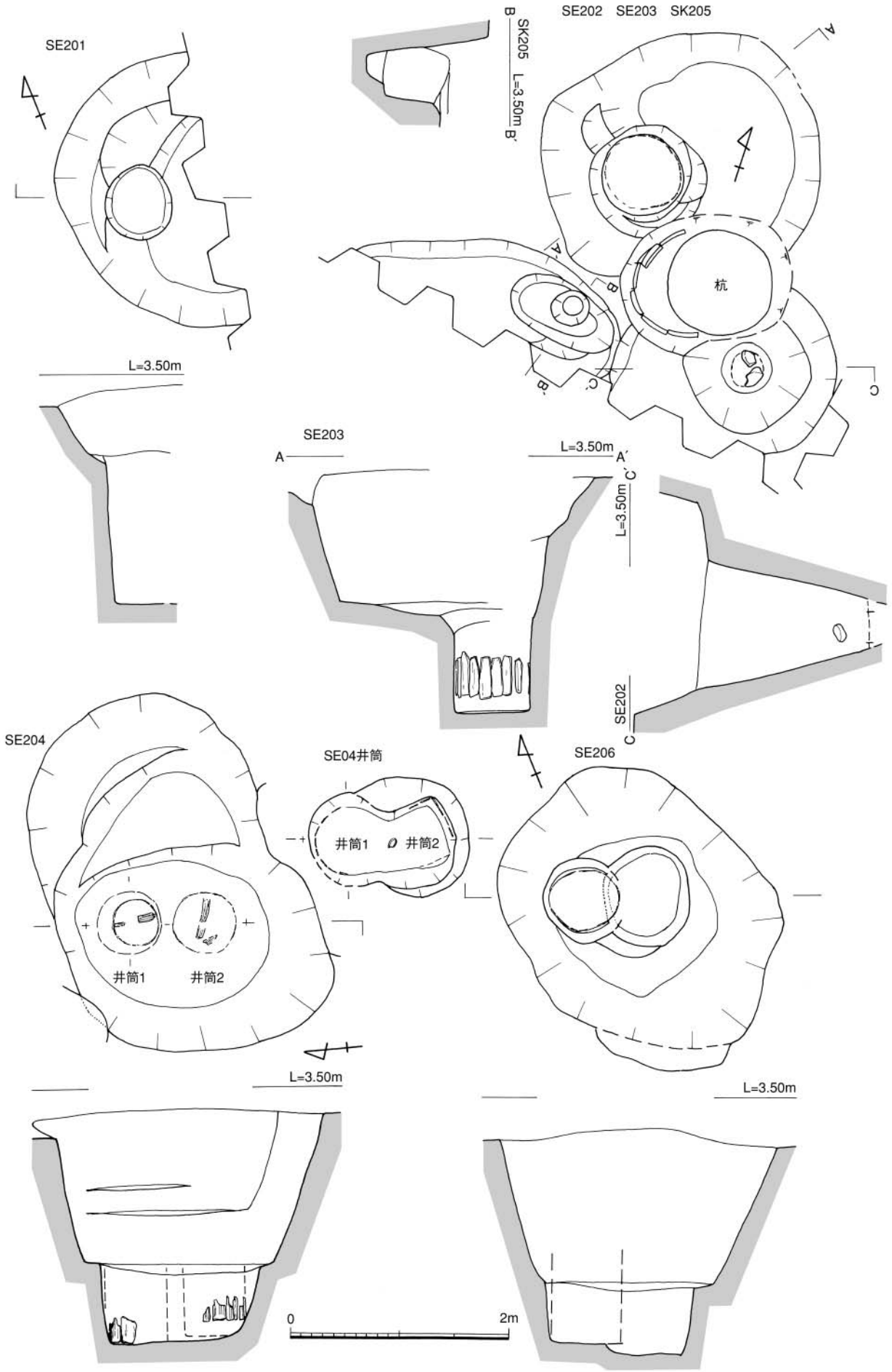


Fig.63　SE201～204・206、SK205（1/50）

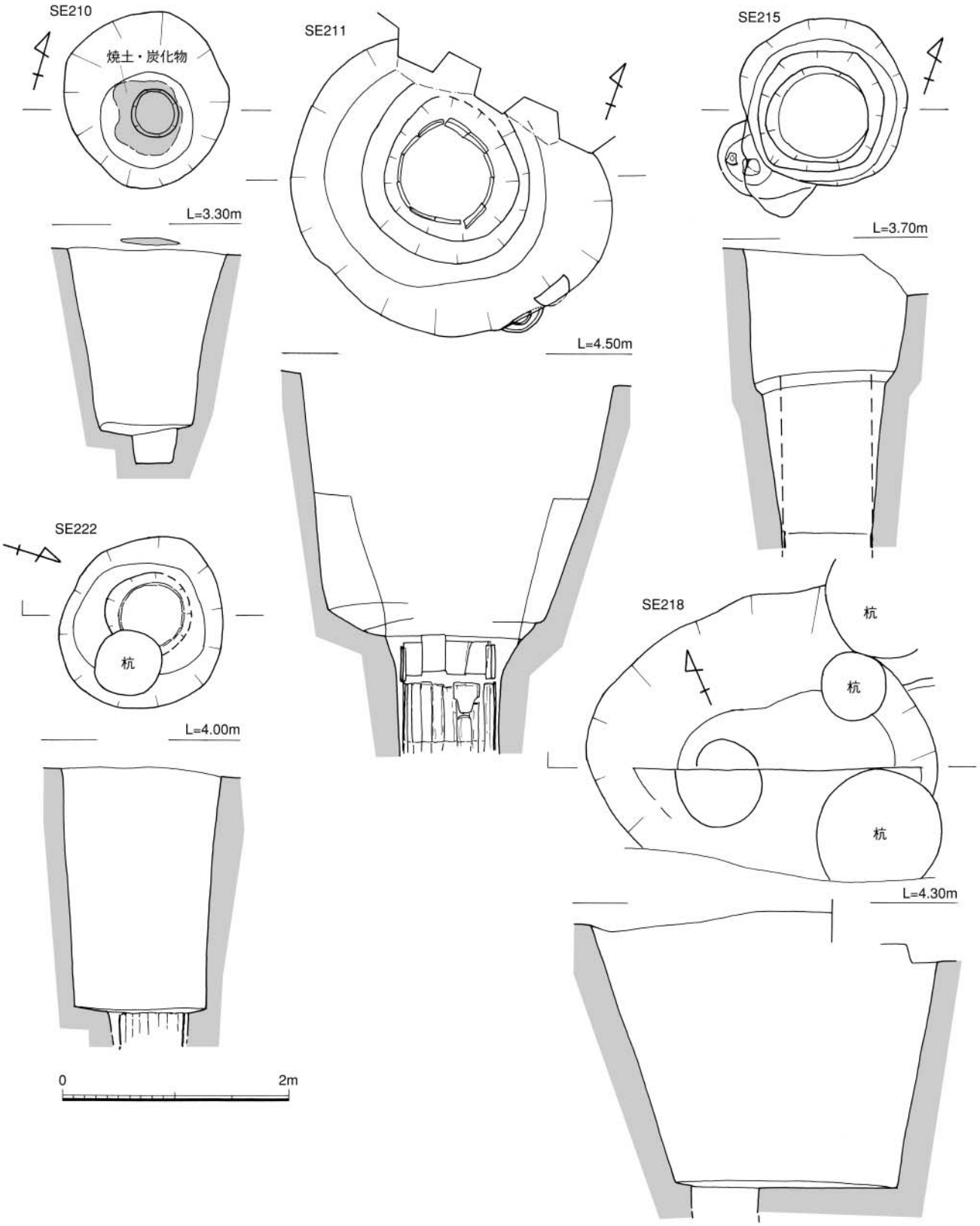


Fig.64　SE210・211・215・218・222（1/50）

口径12.9㎝、器高3.3㎝を測る。**18**は口縁が体部から屈折して外反する白磁口縁部。復元口径11.2㎝を測る。浅黄色釉がかかる。**19**は磁灶窯系の褐釉陶器四耳壺口縁から胴部で耳は２か所残る。口径15.2㎝を測る。外面から口縁部内面まで極暗褐色釉がかかるが、胴部内面は露胎で当て具痕が残る。**20**は

中層出土の土師器小皿。歪むが完形で口径9.6㎝、器高1.1㎝を測る。**21**～**23**は下層出土。**21**は土師器小皿。復元口径9.0㎝、器高1.4㎝を測る。**22**は白磁碗Ⅸ類。復元口径15.6㎝、器高5.3㎝を測る。灰白色釉がかかるが、外底部と内底は露胎。内底には淡黄色の重ね焼き痕跡が残る。**23**は同安窯系青磁皿Ⅱ-２b類。復元口径10.0㎝、器高1.7㎝を測る。底部は露胎。**24**～**28**は土師器。**24**～**26**は小皿。**24**は完形。口径8.4～9.6㎝、器高1.2～1.3㎝を測る。**24**の口縁部はススが付着し灯明皿に使用されている。**27**・**28**は坏。復元口径は12.4㎝・13.6㎝、器高2.9㎝・2.3㎝を測る。**29**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-６類。復元口径17.4㎝を測る。光沢を持つ灰オリーブ色釉が厚めにかかる。**30**は褐釉陶器壺底部。高台部以外暗褐色釉がかかる。高台畳付に重ね焼き粘土が残る。**142**は井側２出土。鉄製の小刀刃部。残存長14.4㎝、刃幅1.4～1.7㎝を測る。木の鞘の一部が残る。出土遺物から遺構時期は12世紀後半～13世紀前半頃と考える。

SE206（Fig.63・65・75）　E-13区で検出したSE204に切られ、掘方平面形が不整円形を呈す井戸。長軸径2.76m、短軸径2.23m、最大深さは井側で2.04m（標高1.15m）を測る。掘方は1.4mの深さで底面となりその部分で２基の円形井側を検出した。北側の井側１は径0.6mを測り、木質が残る。南側の井側２は径0.8～0.9mを測り、井側１より大きく深い。掘方埋土は暗黄褐色土で黒褐色粘土ブロックを混入するが層は乱れる。井側埋土は灰色粘質砂で黄白色砂ブロックを混入する。井戸を掘り直したのであろう。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・青磁・青白磁・陶器、石鍋、鉄釘、古代の土師器・須恵器などがある。**31**～**33**は同安窯系青磁皿Ⅱ類。口径10.0～10.9㎝、器高2.1～2.4㎝を測る。体部外面下半から底部は露胎。見込みは、**31**・**32**は櫛描文と片切彫り文で、**33**は無文。**34**は素焼きの陶器蓋。天井部に指調整による環状の摘みが付き、摘み部は淡黄色釉がかかる。露胎部は鈍い赤褐色を呈す。**132**・**133**は滑石製品。**132**は石錘か。全長4.9㎝、最大径3.1×2.8㎝を測る。上部は側面を斜めにケズリ込む。**133**は石鍋片を転用した板状を呈す転用品。丁寧な研磨仕上げであるがススが残っている。**31**・**32**は上層、**33**・**132**・**133**は下層、**34**は井側内出土。以上の遺物から遺構の時期は12世紀中頃～後半頃と考える。

SE210（Fig.64・65、PL.8）　E-13区のSE206南側で検出した井戸。土層観察で別遺構と思われる焼土炭化物を上面で検出した。井戸はその下で検出している。平面形は円形を呈し、規模は1.53×1.42m、深さは井側内で1.9m（標高1.2m）を測る。1.6mの深さで底面となり、底面中央部で井側を検出した。井側は円形で径0.4mを測る。井側壁周辺が黒く変色しており、曲物井側の痕跡と思われる。井戸底は鉄分が付着した赤褐色粗砂礫である。堀方埋土は黒褐色土が主体で暗オリーブ褐色砂などが混入する。井側埋土は灰白色シルト細砂である。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、石鍋、鉄釘、弥生土器片や古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**35**は白磁皿Ⅴ類。口径11.0㎝、器高2.5㎝を測る。底部以外釉がかかるが、内面釉がかからない部分がある。出土遺物から遺構の時期は12世紀中頃～後半頃と考える。

SE211（Fig.64・65・66・77、PL.8・11）　F-10区で検出した北側が鋼矢板にかかる大型の井戸。規模は長軸径2.84m、短軸長2.3m以上、深さは井側内で3.4m（標高１m）を測る。灰色粗砂混じり層まで掘り下げたが、湧水がひどく未掘である。底面は二段掘りで、深さ2.3mで平坦面となり、中央部に径0.8×0.85mの瓦組の井筒が一段残り、その下に残りは悪いが幅0.1m、長さ0.5mの板材を丸く組んだ井筒がある。井筒は二段まで確認したがその下は未掘で不明。瓦と板を組み合わせた井側である。埋土は上層が暗灰褐色砂質土主体、下層は黒褐色粘質土主体となる。井筒内は黒灰色粗砂混じり泥土である。　**出土遺物**は近世の国産の肥前磁器、国産陶器、瓦類、中世の土師器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、弥生土器片や古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**36**～**38**は肥前染付磁器。

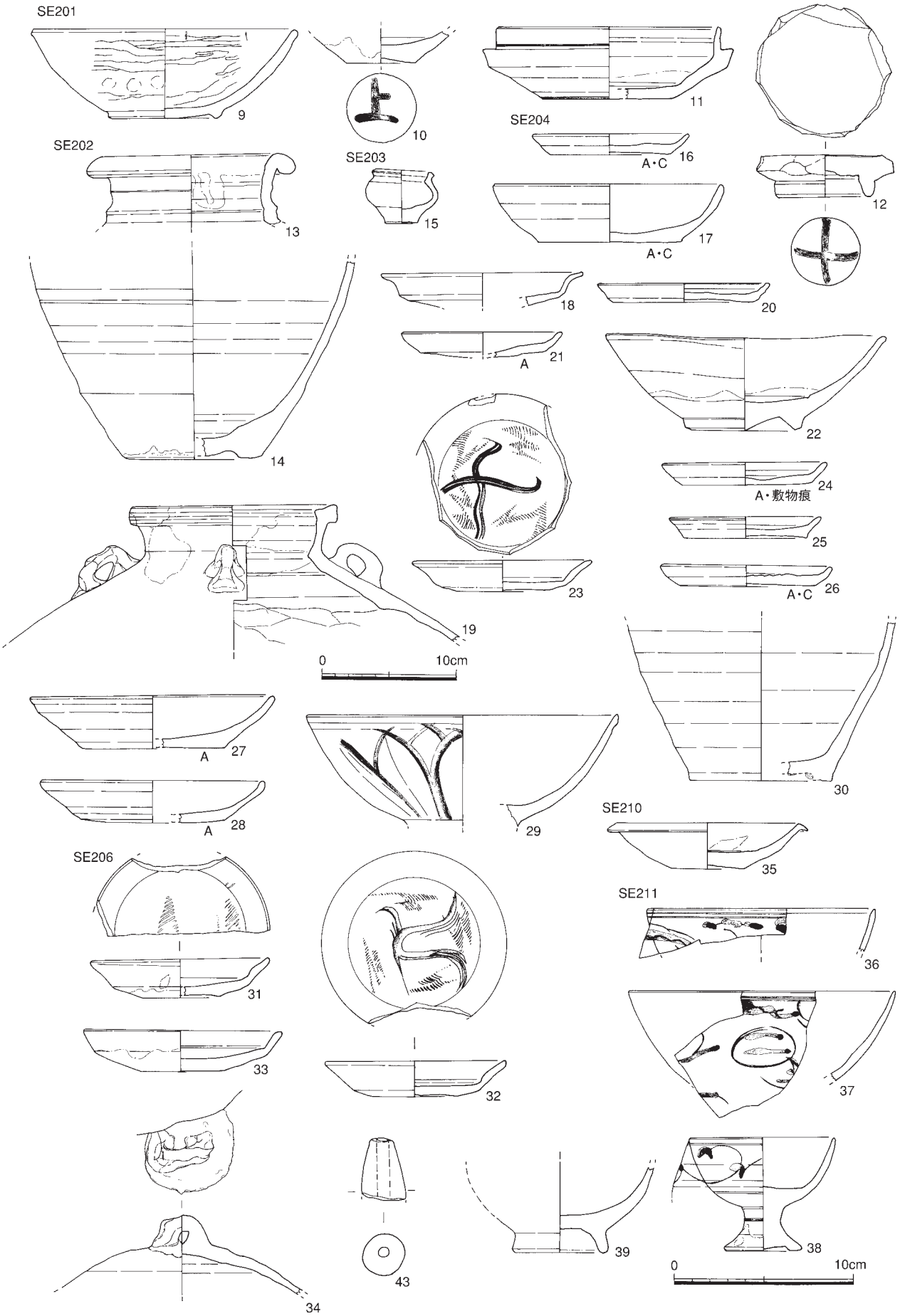


Fig.65　SE201～204・206・210・211出土遺物（1/3・1/4）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

36・37は碗。復元口径12.8㎝・14.9㎝を測る。17世紀後半のもの。**38**は仏飯器。口径8.2㎝、器高6.3㎝を測る。17世紀末～18世紀のもの。**39**は国産の白磁碗底部。浅黄色を呈す釉がかかるが、畳付は露胎。**40**は陶器の鉢底部。灰オリーブ釉がかかる。高台内面は深くケズリ出す。畳付は露胎。17世紀末～18世紀前半の肥前陶器。**41・42**は瓦玉。いずれも白磁皿底部を再利用したもの。**43**は土師質の管状土錘片。残存長3.5㎝を測る。**143**は不明鉄製品。頂部は丸く曲がり、下端は四方向に分かれ上方に開く形態。先端は尖る。全長8.9㎝最大幅7.5㎝を測る。**150・151**は中層出土の寛永通寶。各２枚銹着している。1659年以前の古寛永である。**39～42・143**は井筒内出土。出土遺物から遺構の時期は17～18世紀頃と考える。

SE215（Fig.64・66、PL.8）　E-10区で検出したSC252を切る平面円形の井戸。規模は上面で1.56×1.50m、湧水のため未掘であるが、深さは井戸底で2.7m（標高１m）を測る。また1.2mの深さで井側を検出している。井側は径0.8mを測り、底の部分で井戸枠の板材を検出している。板材は残りが悪い。埋土は上層が黒褐色土、下層は黄褐色砂と黒褐色土の混合、井筒は灰白色粘土混じりで底は黒灰色泥土である。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、土錘、近世の国産磁器・陶器、瓦類と、弥生土器片や古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**44**は無文であるが同安窯系碗か。復元口径16.4㎝を測る。オリーブ灰釉がかかるが、体部外面下半は無釉で鈍い橙色を呈す。**45・46**は青磁。**45**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-４類。高台まで明緑灰色釉がかかるが、高台内は鉄漿を塗ったのか褐灰色を呈し、重ね焼き粘土が付着する。**46**は同安窯系青磁皿Ⅱ-Ⅰb類。復元口径10.3㎝、器高2.2㎝を測る。底部は釉を拭い取る。**47**は丸瓦。復元最大幅15㎝、最大高7.1㎝を測る。凸面はナデで工具痕が残り、凹面は工具による掻き取りと布目痕が残る。**48**は軒丸瓦の瓦当。瓦当径は15.1～15.4㎝を測る。瓦当文様は藤巴。内面は丁寧なナデ。**49**は土師質の管状土錘。両端を欠くが残存長7.3㎝を測る。**44・45**は上層、**47**は井筒底出土。出土遺物から遺構の時期は近世と考える。

SE218（Fig.64・66・77、PL.9）　F-９区で検出した楕円形状の井戸。基礎攪乱で南側は未調査。長軸径3.04m、深さは井筒部で2.7mを測る。深さ2.4m（標高1.8m）の底面の西よりで径0.6mの円形井筒を検出した。井筒内は未掘。埋土は暗黄褐色砂に黒褐色砂質土ブロックを混入する。井筒は炭化物含む暗黄灰色粘質砂。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、土錘、石鍋と弥生土器片や古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**50・51**は土師器。**50**は小皿。ほぼ完形で口径8.5㎝、器高1.1㎝を測る。**51**は坏。復元口径13.6㎝、器高2.9㎝を測る。**52・53**は白磁碗Ⅶ類。**52**は底部片。灰白色釉がかかるが、底部は露胎。**53**は復元口径17.6㎝を測る。見込みは櫛描文で、高台部は露胎。**54**は明オリーブ灰色釉がかかる青磁碗。白磁の形態に似る口縁から底部片で、口径16.6㎝、器高6.0㎝を測る。見込み蛇ノ目状釉剥ぎ、体部下半から高台は露胎であるが、重ね焼き痕が高台部に残る。**144**は上～中層出土の鉄製の刀子片。残存長8.7㎝を測る。錆がひどいが鞘と思われる木質が残る。出土遺物から遺構の時期は13世紀前半頃と考える。

SE222（Fig.64・66）　E・F-11区で検出した円形井戸。工事用杭が南側に打たれていた。径は1.6×1.4m、深さは井筒で2.45m（標高1.3m）を測る。深さ2.15mで底面となり、その面で円形の井筒を検出した。井筒掘方は径0.7mで、その中に径0.55mの板材を丸く組んだ井筒がある。工事杭と湧水のため、未完掘。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**55**は瓦玉。須恵器の細片を再利用したもの。

③　土坑（SK）

SK205（Fig.63）　C-12区で検出した土坑で、南側が鋼矢板にかかる。平面形は半円形を呈する。

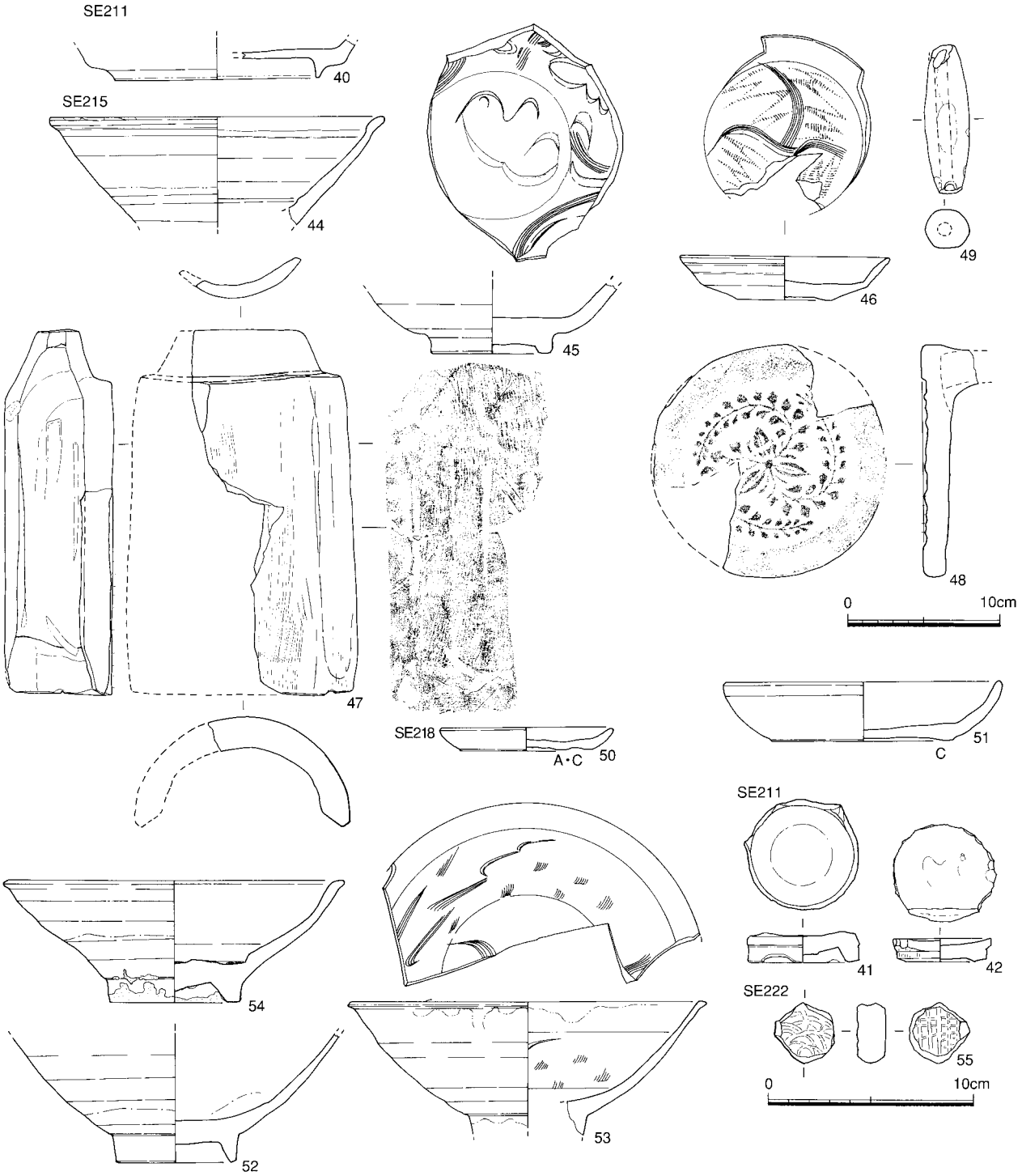
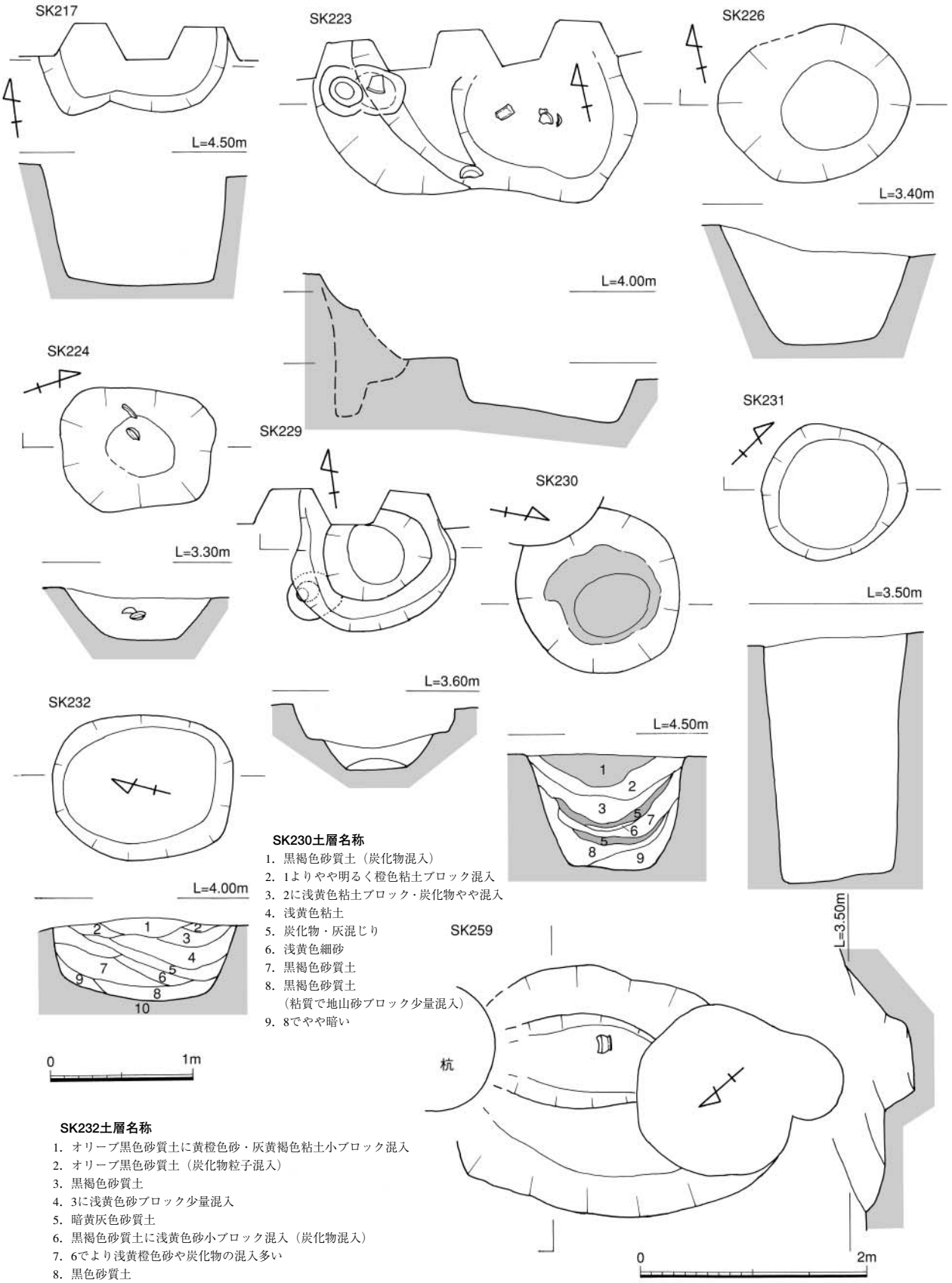


Fig.66　SE211・215・218・222出土遺物（1/3・1/4）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

規模は長軸長2.4m、深さ0.5mで、東側底面に楕円形状ピットがあり、その部分で深さ1.1mを測る。埋土は暗黄褐色砂で黒色土粒子を混入する。**出土遺物**は中世の土師器、瓦器、中国産青磁、古代の土師器・須恵器が細片で出土している。

SK209 出土遺物（Fig.68）　D・E-12・13区で検出した平面形が不整楕円形を呈す土坑。埋土は黒褐色砂質土、残りは悪く遺構の痕跡であろう。**56**は陶器の水注。復元口径8.0㎝を測る。器壁は薄手の作り。口縁部内面から外底部近くまで暗赤褐色釉がかかる。



SK230土層名称

1. 黒褐色砂質土（炭化物混入）
2. 1よりやや明るく橙色粘土ブロック混入
3. 2に浅黄色粘土ブロック・炭化物やや混入
4. 浅黄色粘土
5. 炭化物・灰混じり
6. 浅黄色細砂
7. 黒褐色砂質土
8. 黒褐色砂質土
（粘質で地山砂ブロック少量混入）
9. 8でやや暗い

SK232土層名称

1. オリーブ黒色砂質土に黄橙色砂・灰黄褐色粘土小ブロック混入
2. オリーブ黒色砂質土（炭化物粒子混入）
3. 黒褐色砂質土
4. 3に浅黄色砂ブロック少量混入
5. 暗黄灰色砂質土
6. 黒褐色砂質土に浅黄色砂小ブロック混入（炭化物混入）
7. 6でより浅黄橙色砂や炭化物の混入多い
8. 黒色砂質土
9. 黒褐色砂質土で鈍い黄橙色砂混入
10. 明黄褐色砂

Fig.67　SK217・223・224・226・229～232・259（1/40・1/50）

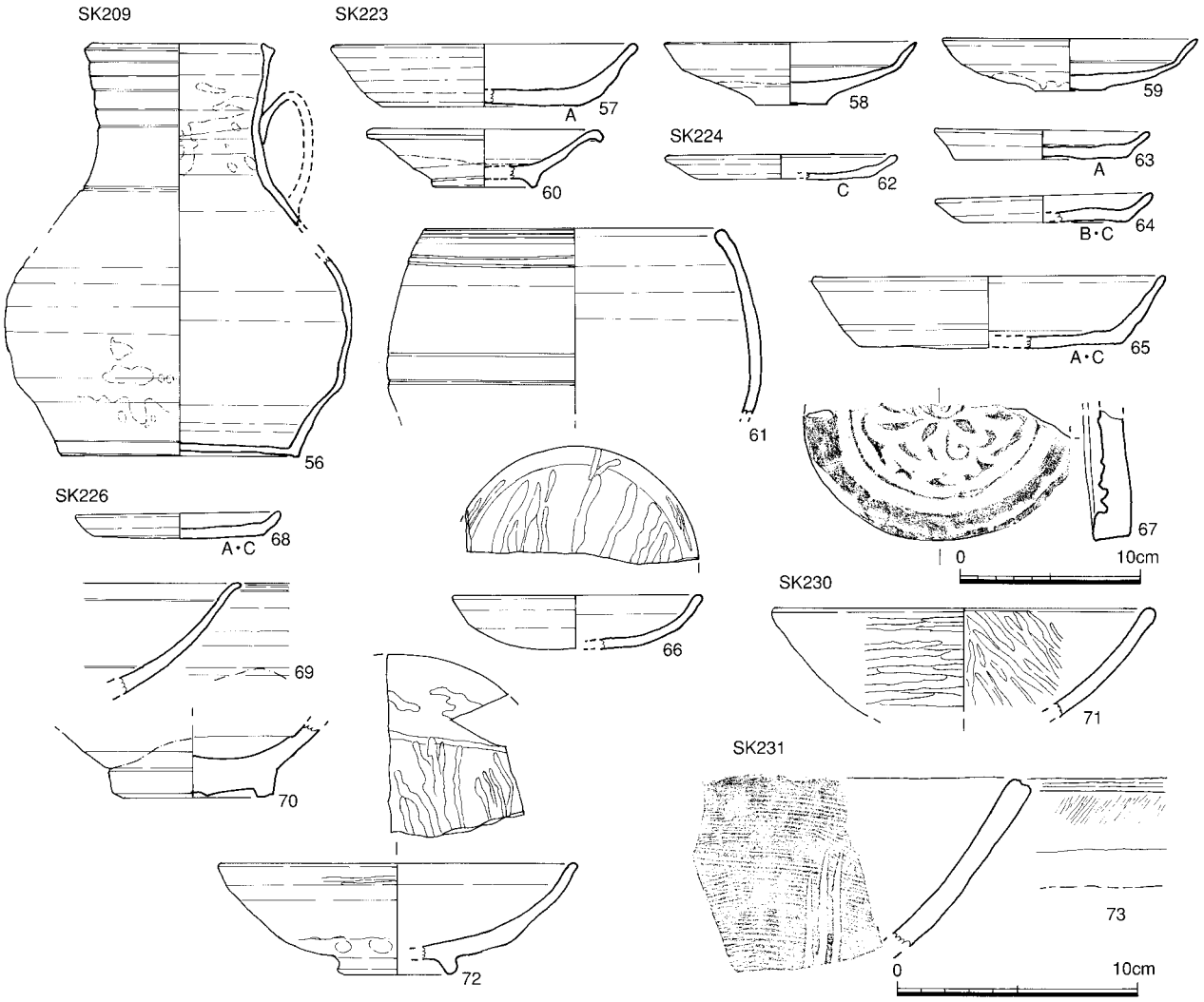


Fig.68　SK209・223・224・226・230・231出土遺物（1/3・1/4）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

SK217（Fig.67）　G-10区の境界で検出した不整形の土坑。規模は長軸長1.14m、深さ0.85mを測る。埋土は黒褐色土である。 **出土遺物**は中世の土師器、中国産白磁・青磁・陶器、鉄釘や古代の土師器・須恵器が細片で出土している。

SK223（Fig.67・68、PL.9）　F-11区の境界で検出した鋼矢板にかかる土坑。平面形は隅丸長方形状を呈す。規模は上面長軸長で2.22mを測り、底面は東側に段状に深くなり、最深で1.04mを測る。南側高所部から深さ1.04mを測る。埋土は黒褐色土である。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、古墳時代から古代の土師器・須恵器、瓦などがある。**57**は土師器坏。復元口径12.8㎝、器高2.6㎝を測る。**58**～**60**は白磁Ⅲ。**58**・**59**はⅡ類。口径10.6㎝、器高2.6㎝・2.2㎝を測る。内面は見込みとの境に沈線が巡る。浅黄橙色釉がかかるが、外底部露胎。**60**はⅣ類。口径9.8㎝、器高2.5㎝を測る。灰オリーブ色釉が厚めにかかるが、外面体部下半から底部は露胎。**61**は陶器の口縁が内湾する鉢。復元口径12.4㎝を測る。体部に沈線が二条巡る。光沢のある褐色釉が内外面にかかる。出土遺物から遺構の時期は12世紀後半～13世紀初頭と考える。

SK224（Fig.67・68、PL.9）　E-11区のSD225内で検出した平面形が隅丸長方形を呈す土坑。規模は長軸長1.06m、短軸幅0.86m、最大深0､38mを測る。埋土は黒褐色土で砂や炭化物を混入する。

出土遺物は中世の土師器、瓦質土器、中国産白磁・陶器、鉄釘、古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**62**～**65**は土師器。**62**～**64**は小皿。口径8.9～9.8㎝、器高1.0～1.3㎝を測る。**64**は坏。復

元口径14.7㎝、器高3.0㎝を測る。**66**は黒色土器Bⅲ。復元口径10.4㎝、器高2.2㎝を測る。外面回転ナデ、内面は粗いヘラミガキ。**67**は波状押圧文軒丸瓦の瓦当。瓦当文様は花卉文。出土遺物から遺構の時期は12世紀頃と考える。

SK226（Fig.67・68）　E-12区で検出した楕円形状土坑。規模は長径1.34m、短径1.08m、最大深さ0.86mを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色土で炭化物・焼土が混入する。上面は攪乱が入る。　**出土遺物**は中世の土師器、中国産白磁・陶器、古墳時代から古代の土師器・須恵器がある。**68**は土師器小ⅲ。ほぼ完形で口径8.6㎝、器高1.1㎝を測る。**69**は白磁碗Ⅶ類の口縁部小片。灰白色釉が外面下半までかかる。**70**は白磁碗Ⅳ類底部。高台部はケズリで露胎。13世紀前半の遺構か。

SK229（Fig.67）　F-12区の境界で検出した平面楕円形状の土坑。規模は長軸長1.15m、深さ0.36mを測る。底面は二段掘りである。埋土は黒褐色土で炭化物を混入する。 **出土遺物**は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、平瓦などと弥生土器、古墳時代から古代の土師器・須恵器が少量混入して出土している。

SK230（Fig.67・68、PL.9）　G-９・10区で検出した円形土坑。基礎杭が一部かかる。確認規模は径1.16×1.14m、最大深さは0.92mを測る。埋土は黒褐色砂質土が主体で、中層には焼土・炭化物混じり層が二層薄くレンズ状に挟んでいた。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦器、中国産白磁、古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。**71**・**72**は瓦器椀。復元口径16.0㎝・15.0㎝、**72**は器高4.6㎝を測る。**71**は体部から口縁の調整はヨコ・ナナメのヘラミガキ、**72**は口縁部から外面は回転ナデ、内面はヘラミガキ。出土遺物から遺構の時期は12世紀前半頃と考える。

SK231（Fig.67・68）　E-12区で検出した平面形が円形を呈す土坑。規模は径1.0m、最大深さ1.76mを測る。埋土は黒色土に黄白色砂を薄く縞状に挟む。電気のアース線が埋め込まれていた。
出土遺物は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・青白磁・陶器、平瓦、鉄釘、近世の国産染付磁器、瓦、人形の型と古墳時代から古代の土師器・須恵器など各時代の遺物がある。**73**は瓦質土器の擂鉢小片。内面はヨコハケ目で三条の擂り目が残る。

SK232（Fig.67、PL.9）　E・F-11区で検出した楕円形状の土坑。長軸長1.28m、短軸長1.02m、深さ0.56mを測る。埋土はオリーブ黒色砂質土や黒褐色砂質土などが主体で炭化物を少量含む。埋土は細分出来、人為的に埋られた状況を示す。　**出土遺物**は中世の土師器、瓦質土器、瓦器、中国産白磁・青磁・陶器、古墳時代から古代の土師器・須恵器などがある。出土遺物から13世紀頃の遺構か。

④　各面ピット出土遺物（SP）（Fig69・75）

図化出来たものについて図示する。**74**～**77**はSP702出土。**74**は土師器小ⅲで復元口径9.0㎝を測る。**75**は白磁ⅢⅡ類。復元口径9.8㎝を測る。灰白色の不透明釉がかかるが、底部は露胎。**76**は土師器椀底部。内面粗いヘラミガキ。**77**は中世須恵器の甕口縁部。復元口径36.0㎝を測る。調整は回転ナデ。**78**はSP722出土の墨書土器。須恵器の蓋片に「曰」とかかれている。**79**はSP724出土の瓦玉。白磁碗Ⅸ類の底部を再利用している。**80**・**81**はSP726出土の須恵器。**80**は高台付坏。**81**は蓋で、復元口径14.0㎝を測る。天井部ヘラケズリ後ナデ、口縁から内面は回転ナデ。８世紀のもの。**82**はSP743出土の白磁碗Ⅵ類底部。灰白色釉が高台外面までかかる。**83**はSP753出土。古墳時代の土師器甕。復元口径16.6㎝を測る。調整はナデとヘラケズリ。**84**はSP754出土の青磁蓋。復元口径8.2㎝を測る。オリーブ灰色釉がかかるが、口縁部外面鈍い赤褐色釉が塗られている。**85**～**87**はSP755出土。**85**は白磁碗底部。高台部は露胎。**86**は白磁碗Ⅶ類。復元口径16.4㎝を測る。**87**は同安窯系青磁碗Ⅱ-１a類底部。体部外面下半から底部は露胎。**88**は第２面のSP765出土。須恵器坏で復元口径14.0㎝を測る。８世紀前半のもの。**134**はSP754出土の砥石。残存規模は8.5×5.7㎝を測る。石材は砂岩。

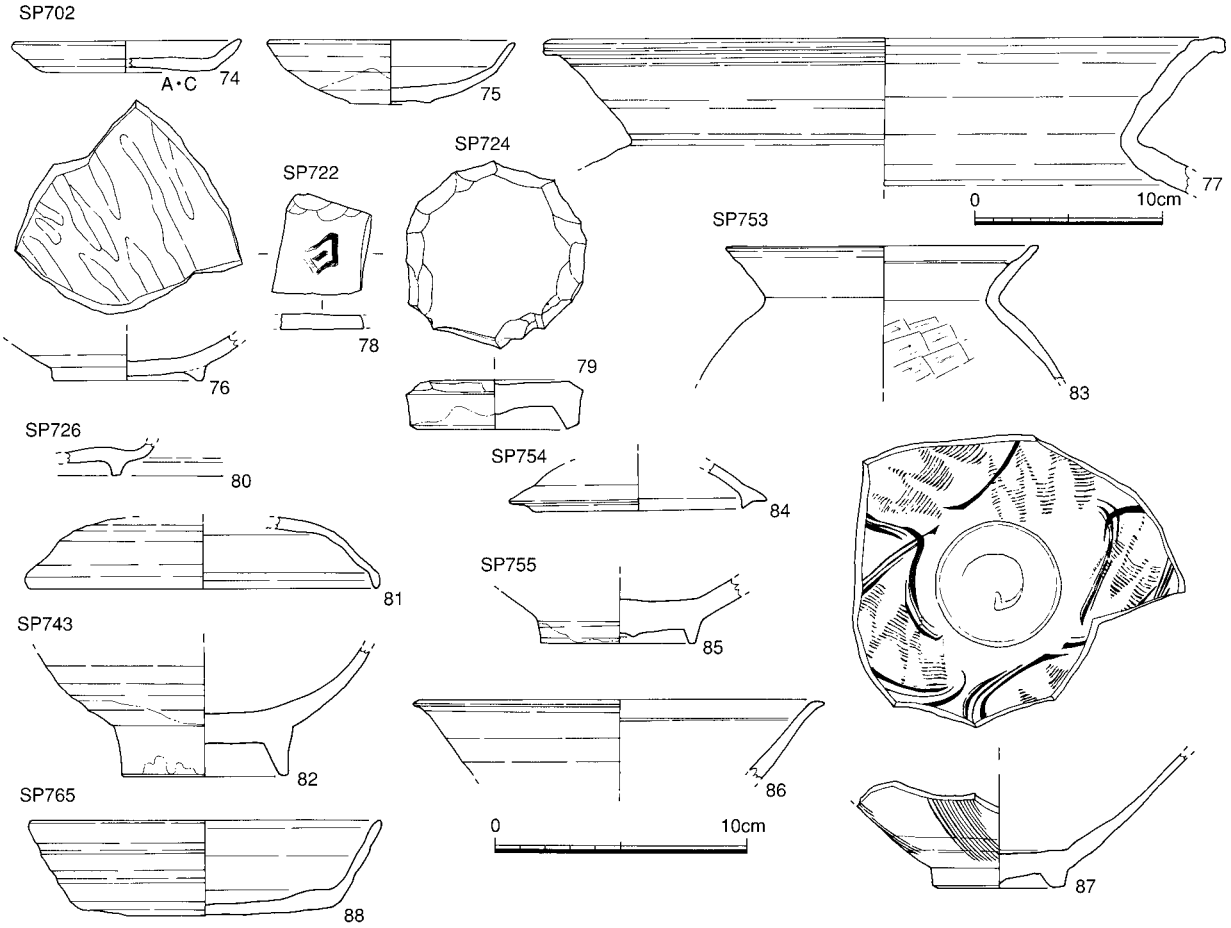


Fig.69　各面ピット出土遺物（1/3・1/4）　A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

⑤　その他の遺構（SX）・包含層出土遺物（Fig70・75・77）

攪乱などの遺構から出土した主なものについて報告する。**89**・**135**は攪乱SX212出土。**89**は土師器丸底坏で復元口径16.4㎝を測る。調整は回転ナデとナデで内面工具痕が残る。**135**は小形の滑石製容器の底部。内面はケズリだが外面は丁寧なケンマ仕上げ。**90**・**91**はSE218上面の攪乱SX213出土の白磁碗。**90**はⅥ類。復元口径17.0㎝を測る。体部外面下半から底部は露胎。**91**はⅦ類底部で、高台内に「王（花押）」とかかれた墨書がある。**92**はSX228出土。土師器小皿。復元口径9.1㎝を測る。**93**はSX238出土。土師器の丸底坏。口径15.2㎝を測る。外底部はナデ。**136**はSX237出土の滑石製石鍋の転用品。上面には線状の切り込みが入る。**94**～**97**・**137**は遺構面出土。**94**は土師器小皿。口径10.5㎝を測る。**95**は瓦器椀。復元口径16.3㎝を測る。内外面ヘラミガキ。**96**は白磁ⅢⅩⅢ類。復元口径13.3㎝を測る。高台部は露胎。**97**は褐釉盤口水注。内外面光沢のある褐色釉がかかる。**137**は全長2.8㎝の小形の滑石製品。ケンマ仕上げであるが左側面に斜め方向の切り込みを入れている。**98**～**101**は瓦玉。**98**がSX208出土以外は遺構面出土。**98**～**100**は青磁碗底部、**101**が白磁碗底部を再利用したもの。**102**・**103**は遺構面出土の８世紀後半の須恵器。**102**は蓋。復元口径13.8㎝を測る。**103**は高台付坏。復元口径17.8㎝を測る。赤味のある灰褐色を呈す。**104**～**107**・**138**・**139**は第１面下包含層出土。**104**・**105**は須恵器。**104**は蓋。復元口径13.6㎝を測る。８世紀前半。**105**は高台付坏底部。８世紀後半。**106**は古墳時代前期の甕。復元口径13.6㎝を測る。調整は胴部外面ハケ目、内面ヘラケズリ、口縁部はヨコナデ。**107**は土師質の管状土錘。端部を欠失。残存長6.4㎝を測る。**138**は軽石製品。表面はケズリ後擦って平滑に仕上げている。**139**は砥石を転用した敲石。全長13.9㎝、最大幅7.6㎝を測る。

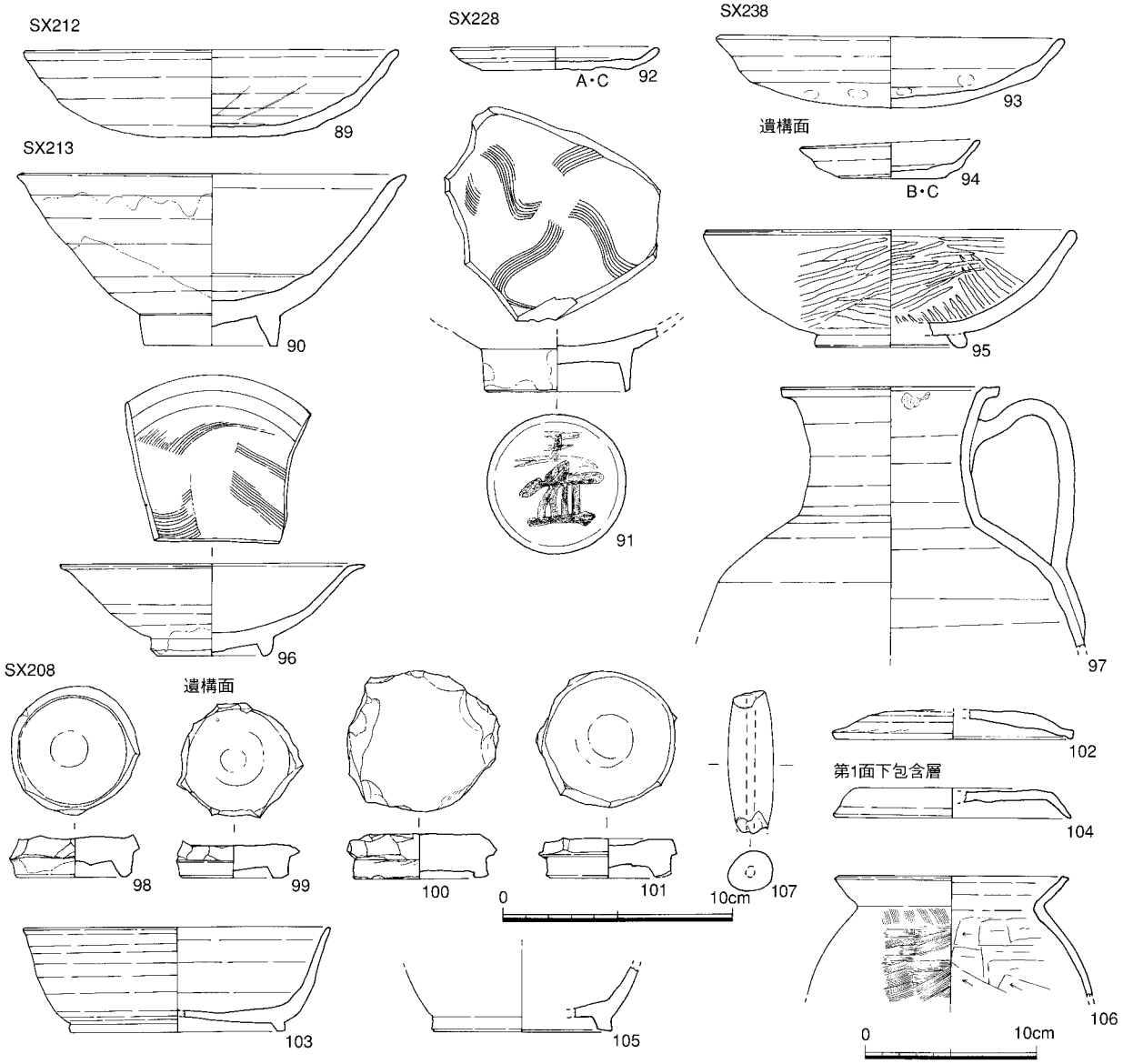


Fig.70　攪乱・遺構面・包含層出土遺物（1/3・1/4）A：糸切り　B：ヘラ切り　C：板状圧痕

上面に使用痕が残る。石材は砂岩。**145**はSP731出土の鉄製刀子片。茎～刃部で残存長6.75m、刃幅1.1㎝を測る。**146**はSP754出土の釣針か先の曲がった釘。残存長2.7㎝を測る。**147**は包含層出土の頂部が丸い大形の釘。先端は欠損するが全長15.0㎝を測り、断面方形で径1.0㎝を測る。

3)　第２面の調査

①　竪穴住居跡（SC）

SC251（Fig.71・72・75・77、PL.10）　F・G-９区で検出した、平面形が方形状を呈す住居跡。西側は境界にかかり全体は把握出来ないが、確認規模は東西長3.3m、南北長3.6m、最大深さ0.45mを測る。主柱は４本柱で基礎杭そばに径約0.6m、深さ1.1mを測る円形の柱穴を１基検出している。その周辺に土器片が集中して出土している。また住居の南東隅に甕棺墓ST258の甕の破片と工作台石が赤褐色砂に覆われて出土した。埋土は暗い黒褐色砂である。　**出土遺物**は古墳時代前期初めの土師器が大半であるが、混入と考える古代の須恵器も少量ある。**108**は小型の壷。復元口径9.6㎝、復元高12.1㎝を測る。胴部外面と口縁内面はハケ目、胴部外面下半はヘラケズリ後ナデ。胴部内面はナデ。胴部

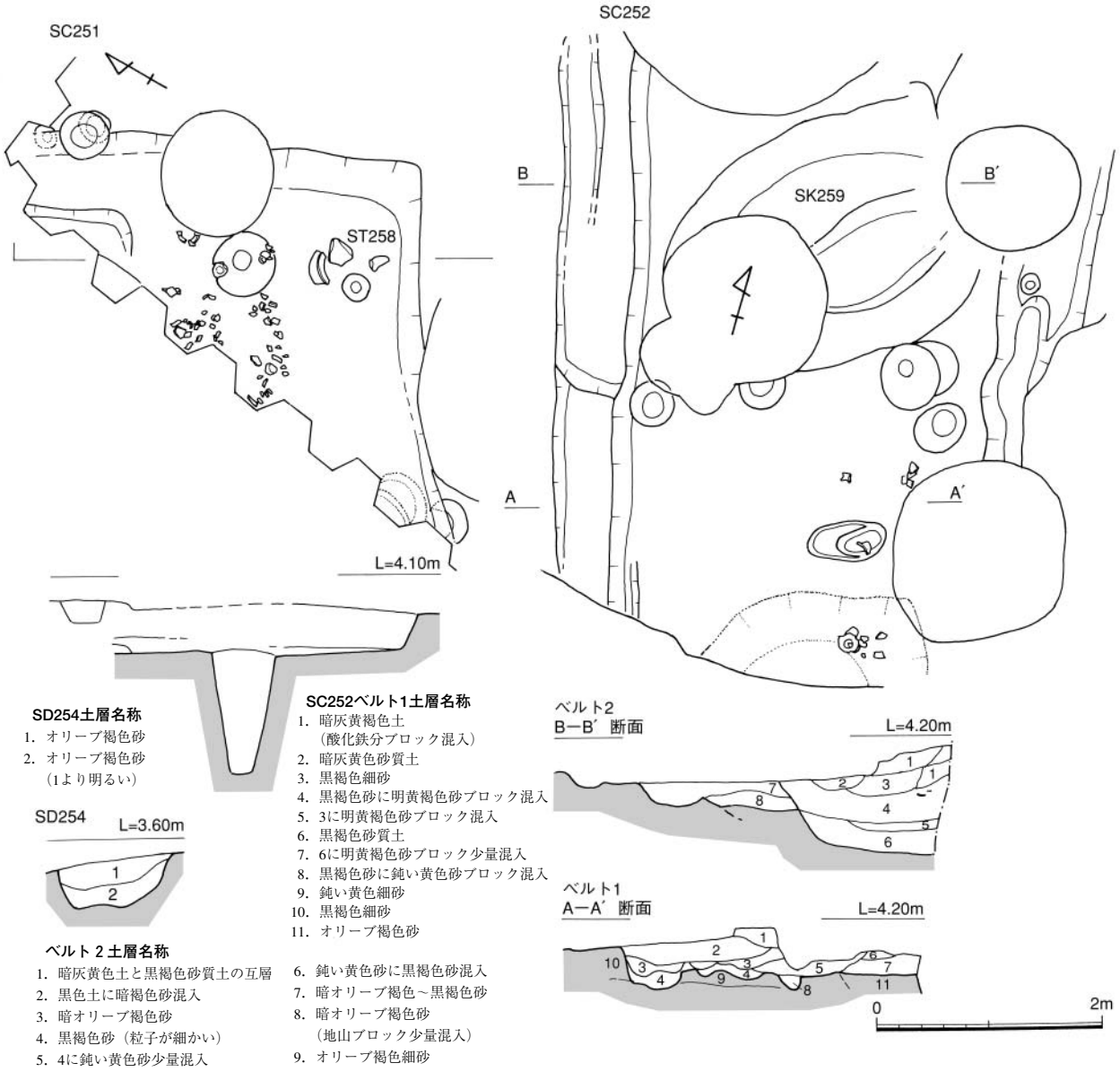


Fig.71　SC251・252、SD254土層（1/60）

に黒斑がある。**109**は広口壷。復元口径15.0㎝を測る。外面から口縁部内面はヘラミガキ、胴部内面ハケ目。**110**は二重口縁壷の口縁部片。内面ハケ目で、外面ハケ目後工具ナデ。**111**は布留甕をまねた在地系の甕。口縁部以外ほぼ完形。口径14.8㎝、器高20.9㎝を測る、胴部外面ハケ目、内面ヘラケズリ、口縁部はヨコナデ。内面は黒い。**112**は弥生土器甕底部。胴部外面粗いタテハケ目、内面は工具ナデ。搬入品の可能性がある。**113**は二重口縁か長頸壺の胴部で外面はヨコヘラミガキと工具ナデで擦痕が残る。内面はハケ目で上部がやや粗く、下部は目が細かい。**114**は鉢で口径19.9㎝、器高5.7㎝を測る。体部外面はハケ目、底部は板状工具で平滑にナデ仕上げ。**140**は作業台石。ST258上面で出土。最大長23.4㎝、最大幅22.9㎝を測る。上面は砥石として使用されたのか摩滅し、また部分的に敲打調整痕も残る。石材は泥岩。**148**は埋土中出土の鉄製の刀子片。残存長4.1㎝、刃幅1.3㎝を測る。断面から刀子とした。出土遺物から遺構は古墳時代前期初頭頃と考える。

SC252（Fig.71・72・75・77、PL.10）　E・F-10区で検出した。西側に周壁溝と思われる小溝SD255があり、その東側が直線的に深さ0.25m程直に下がった面がほぼ水平となるため住居跡とした。ただ井戸や土坑、攪乱、東側では上面で確認出来なかったが溝などに切られており全体が不明であり、

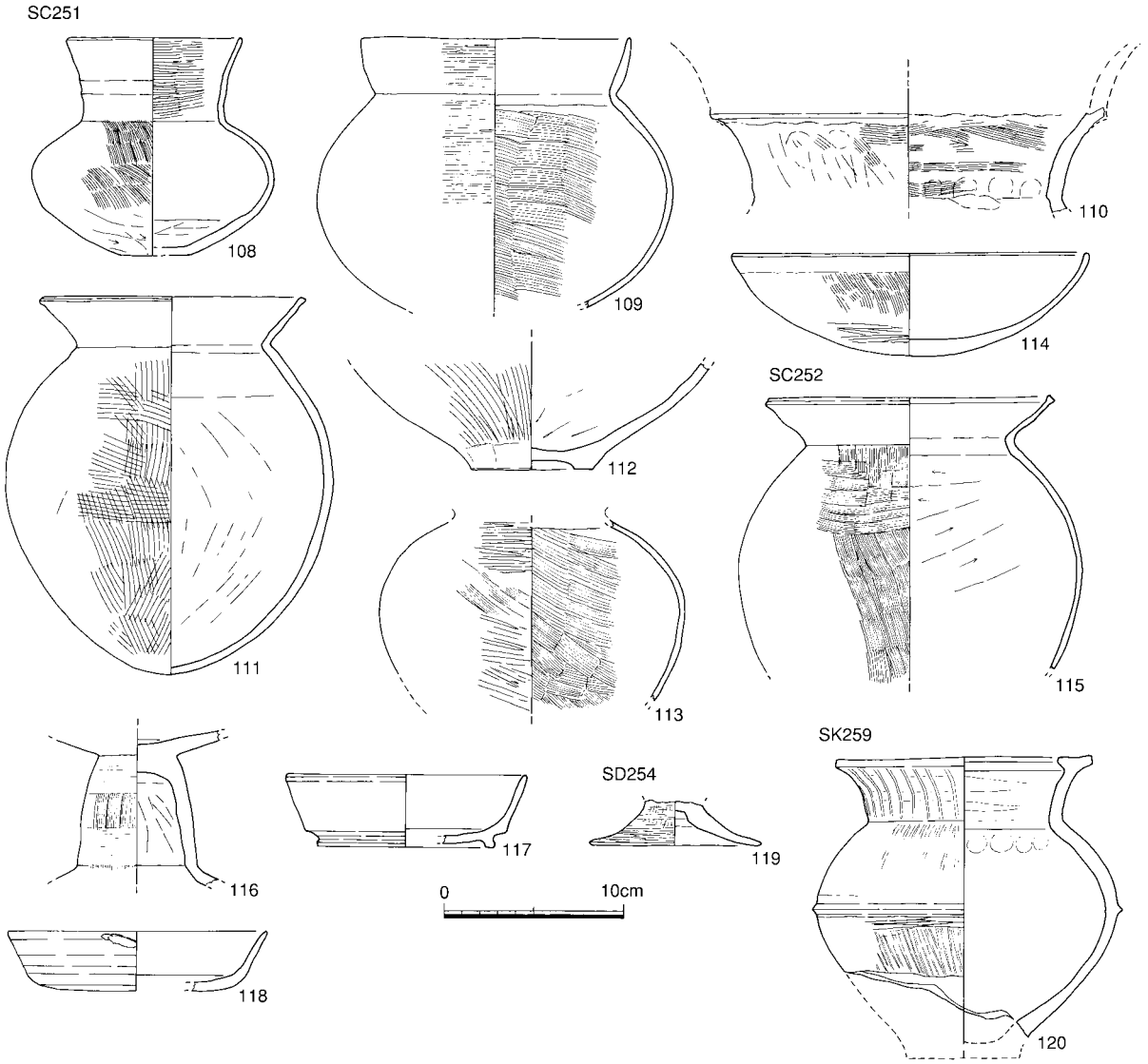


Fig.72　SC251・252、SD254、SK259出土遺物（1/4）

且つ住居跡、炉跡、主柱穴なども検出されていないので、疑問は残る。確認規模は長軸長約６m、幅4.8m、最大深0.4mを測る。埋土は暗オリーブ褐色砂や暗灰黄色砂質土、黒褐色砂質土などである。

出土遺物は弥生土器や、古墳時代前期の土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器、中世の土師器、瓦などがある。後世の遺構の遺物が混入している。**115**は布留式土器甕。口縁部から胴部で復元口径16.0㎝を測る。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面はハケ目で上半は細かいハケ目を波状に施す。内面はヘラケズリで器壁を薄く仕上げる。外面ススが付着する。**116**は高坏脚部。外面はハケ目とヨコナデ。**117**・**118**は須恵器坏。**117**は高台付坏。小片で復元口径13.4㎝を測る。調整は回転ナデ。**118**は坏で復元口径14.4㎝を測る。８世紀前半で混入品。**141**は楕円形状の石製品。6.75×6.1㎝、厚さ1.5㎝を測る。表面は擦り仕上げ。**149**は鉄製の刀子茎部。残存長4.6㎝を測る。遺物は混入品が多いので断定は出来ないが、古墳時代前期前半頃の住居と推定する。

②　溝状遺構（SD）

SD254（Fig.71・72、PL.10）　E-12・13区で検出した東西方向の溝。削平を受け残りは悪く、南西側で消滅する。確認規模は８m、溝幅は0.5～1.1mである。埋土はオリーブ褐色砂である。　**出土遺物**は古墳時代前期の土器がある。**119**は台付鉢脚部。底径9.5㎝を測る。外面はヨコヘラミガキ、内面ヨコナデ。以上の遺物から遺構の時期は古墳時代前期と考える。

③　土坑（SK）

SK259（Fig.67・72、PL.12）　F-10区のSC252床面で検出した平面楕円形を呈す土坑。上面で長軸長2.9m、短軸長2.2m、底面は二段掘りで中央部に長軸長1.5m、短軸長0.82mの長方形土坑がある。深さは上段で0.3～0.4m、中央部は深さ0.6mを測る。埋土は暗褐色砂と黄褐色地山砂の混合。

出土遺物は弥生時代中期の土器と混入の須恵質の丸瓦細片が各１点である。**120**は底部打ち欠きの小型壺。口径14.2㎝、残存高15.7㎝を測る。外面から頸部内面は丹塗り、頸部外面はヘラによるタテの暗文、胴部外面は中央部に突帯が一条巡る。胴部はタテヘラミガキと突帯部はヨコヘラミガキ。内面ヨコナデ。胴部黒斑がある。SK259は墓でその副葬品か。

④　墳墓（ST）

調査区西側で４基検出した。当初５基検出したが、ST258とST261が接合したので１基とする。埋土は遺構面よりやや暗い暗黄褐色砂でほとんど差はない。

ST253（Fig.73・74、PL.10・12）　G-10区で検出した主軸をN-50°-Eに取る接口式の小児甕棺墓。墓壙は切り合いで明確でないが、長軸長1.54mの楕円形状を呈す。甕棺本体の全長は0.77mを測る。上面より深さ0.5mを測る墓壙底に埋置角度＋４°で据えられていた。　**出土遺物**　**121・122**は甕棺。

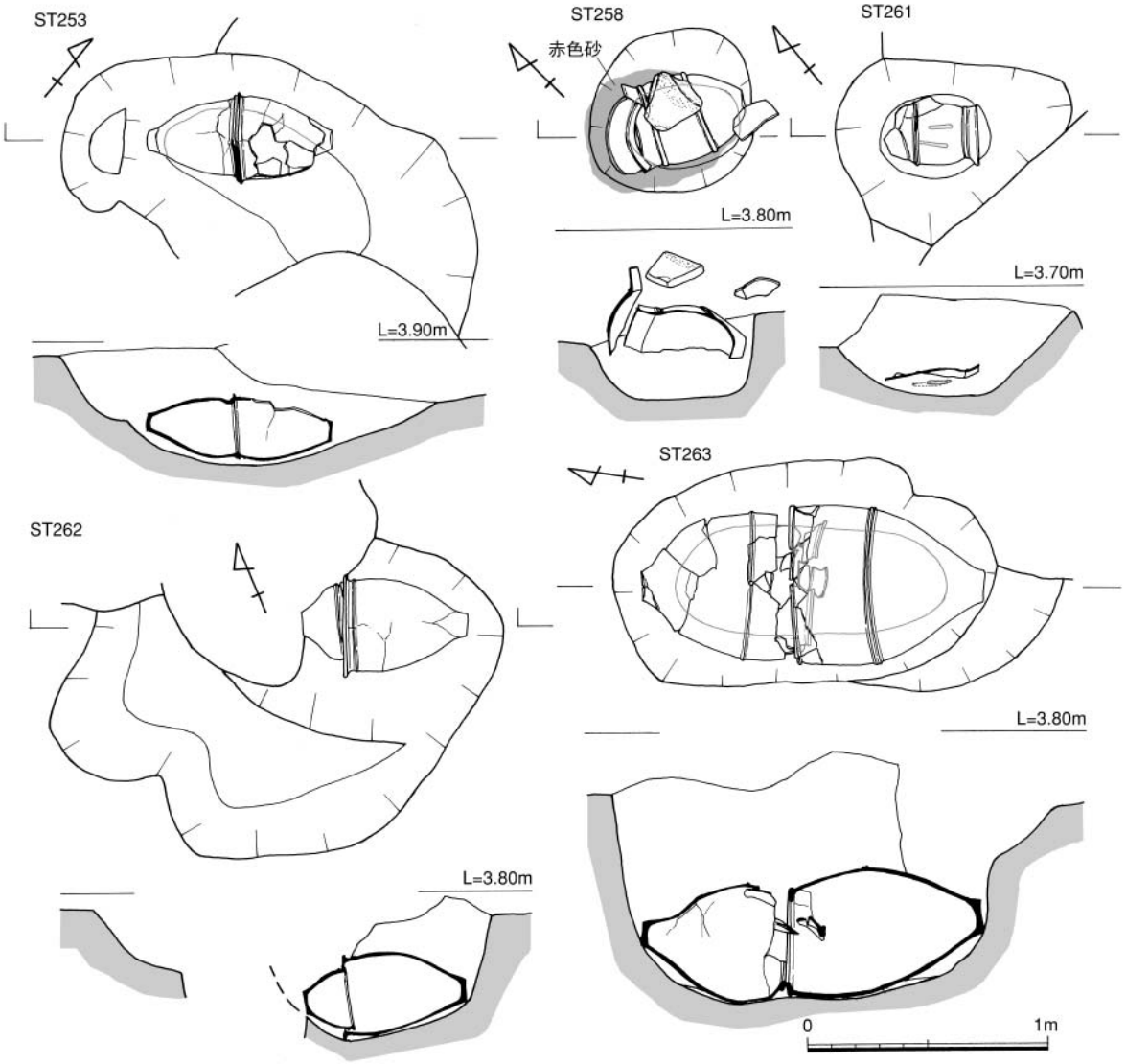


Fig.73　ST253・258・261・262・263（1/30）

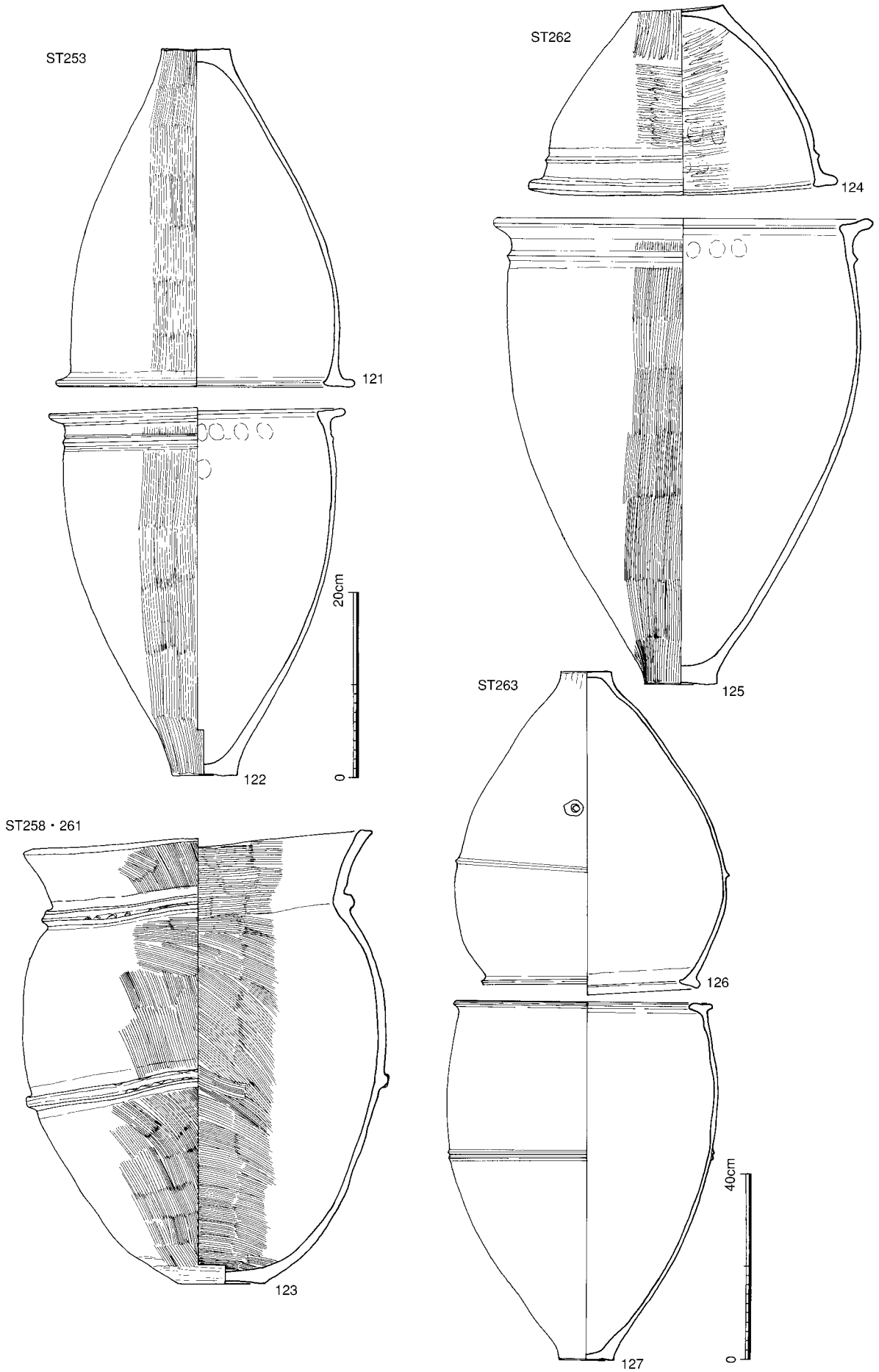


Fig.74　ST253・258・261・262・263甕棺（1/6・1/12）

121は上甕。やや歪むが口径32.2㎝、器高36.6㎝を測る。口縁部は鋤先状を呈し、胴部外面は粗いタテハケ目、内面はナデで平滑に仕上げる。外面底部にススが付着する。**122**は下甕で、口縁部形態や器壁の調整は**121**と同じ。頸部に三角突帯が一条付く。口径31.9㎝、器高39.7㎝を測る。胴部外面底部近くに黒斑がある。須玖Ⅱ式の甕棺で、橋口達也氏編年（以下橋口編年は省略）のKⅢa期。

Fig.75　各遺構出土石製品（1/3・1/4）

SK258・261（Fig.73・74、PL.10・12）　ST258はSC251内、ST261はとその住居外南側で検出した。ST258は径0.68×0.66m、深さ0.4mを測る楕円形の墓壙の中で検出した。大きく三分割された甕が、伏せた状態とその口縁部を覆うように直立させた破片と伏せた甕の上に作業台石が置いてあった。墓壙は赤色顔料を含む赤い砂で覆われていた。歯の一部が出土した。ST261は住居南壁に隣接して検出した。墓壙はSE218に切られるが、確認規模は長軸長0.98m、短軸長0.76m、深さ0.4mの不整楕円形状の底で甕の破片が伏せた状況で出土し、それを取り除くと四肢骨の一部が残っていた。副葬品はない。古墳時代に掘りだされた甕棺と人骨が再埋葬されたのか。　**出土遺物**　**123**はST258とST261を接合したもの。甕は歪むが口径37.8㎝、器高49.1㎝を測る。「く」字状に開く口縁で頸部と胴部中央に断面台形の突帯が各１条付く。頸部突帯は粗い刻み目が付き、胴部突帯は側面を波状に指押さえする。調整は内外面粗いハケ目で、突帯部と底部はナデ。黒斑が胴部両側に２カ所ある。KⅤc期に近い形態。

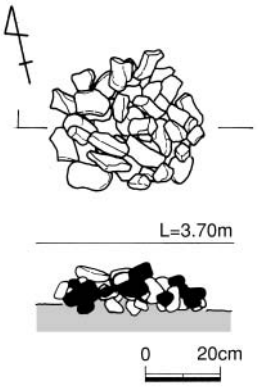


Fig.76　SX264礫群（1/20）

ST262（Fig.73・74、PL.10・12）　F-10区で検出した。ST263を切る甕棺。墓壙は楕円形を呈し、規模は長軸長1.2m、短軸長0.86m、深さ0.58mを測る。甕棺は墓壙内に主軸をN-68°-Wに取る方向で、埋置角度-５°で据えられていた。甕棺は鉢と甕の呑口式合わせ甕棺で、全長0.68mを測る。

出土遺物　**124**は上甕の鉢でほぼ完形。口径33.2㎝、器高20.4㎝を測る。頸部に三角突帯が１条付く。内外面タテヨコのヘラミガキで表面を平滑に仕上げる。外面赤色顔料が薄く塗られている。**125**は下甕。ほぼ完形であるが歪みが大きい。口径41.5㎝、器高50.3㎝を測る。頸部に三角突帯が一条付く。調整は外面粗いタテハケ目、口縁部と突帯はヨコナデ、内面はナデ。内底部黒化する。いずれもKⅢa期。

ST263（Fig.73・74、PL.10・12）　大形の甕棺でST253、ST262の下で検出した。墓壙は楕円形で長軸長1.58m、短軸長0.93m、深さ1.03mを測る。この墓壙底に主軸をN-７°30′-Wに取る方向で、埋置角度-３°で据えられていた。甕棺は甕と甕との接口式で全長1.42mを測る。人骨細片が出土した。

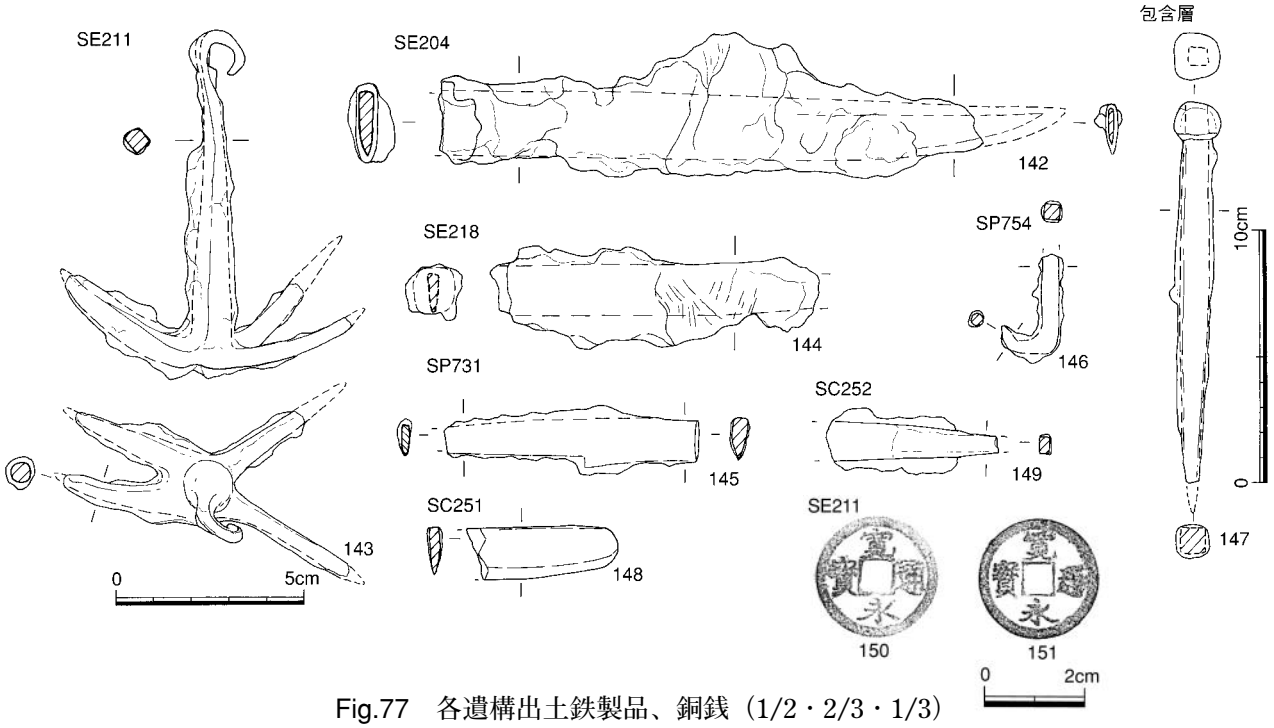


Fig.77　各遺構出土鉄製品、銅銭（1/2・2/3・1/3）

出土遺物　**126**は上甕。口縁部が締まる形態。歪みがひどいが口径は47.6㎝、器高70㎝を測る。内外面丁寧なナデ調整で表面を平滑に仕上げる。胴部中央上半に一条の三角突帯が付く。胴部には径1.1×1.5㎝の焼成後穿孔による円孔が１カ所ある。外底部黒化する。**127**は口径57.8㎝、器高77.6㎝を測る。胴部中央に三角突帯が二条付く。調整は外面ミガキに近い丁寧なナデで表面を平滑に仕上げる。外面黒色顔料が塗布されている。KⅡc期。

⑤　その他の遺構（SX）

SX264（Fig.76、PL.9）　F-11区の第１面下で検出した平面円形を至す礫群。規模は直径0.4m、厚さ0.15mを測る。礫石5～13㎝ほどで小さく、砂岩・花崗岩・玄武岩の自然石・割石などで構成される。下ほど大きくなる。埋土は褐色砂である。**出土遺物**はない。

4　まとめ

今回の調査で検出した遺構は大きく５期に分かれる。最も古い第１期は弥生時代中期前半から後期末で、第Ⅰ区・第Ⅲ区で検出した。主な遺構は第Ⅰ区ではSK104土坑、第Ⅲ区では４基の甕棺墓とSK259土坑である。甕棺墓は北側の第32次調査区からの続きで、甕棺墓群の南限を確認した。第２期は古墳時代で、前期と後期の時期に細分出来る。前期は第Ⅰ区と第Ⅲ区で検出した。主な遺構は、第Ⅰ区はSX107土器群、第Ⅲ区はSC251・252、SD254で、主に竪穴住居跡である。後期は第Ⅰ区と第Ⅱ区で検出した竪穴住居跡SC109・112・113・181である。前期の集落は西側の第50・156・169次調査区でも検出されているので、調査区一帯に古墳時代前期集落が展開しているのであろう。第Ⅲ期は古代で、奈良時代から平安時代の時期。第Ⅰ区・第Ⅱ区で主に検出した。主な遺構としては、第Ⅰ区では平安時代前期の墓SR108と土坑SK118、第Ⅱ区ではSX186である。第Ⅰ区では漁具の土錘が多く出土している。西側の第156次調査区でも土錘が多く出土しているので、漁撈に携わった集団がいた可能性がある。第４期は中世前期で最も多い遺構の時期である。11世紀から13世紀頃の時期で、14世紀以降の中世遺構は認められなかった。第５期は近世で、瓦井戸の時期である。近代建物基礎で破壊されている部分はあるが、中世後期の遺構・遺物が見られないことが、第173次調査区の特徴である。

付論１　博多遺跡群第173次調査区出土の貝類について

文化財部専門調査員　　山崎　純男

博多遺跡群第173次調査区第Ⅰ区１面から検出されたSK17の混貝土層を水洗して得られた貝殻類（表１）である。量は大型のポリ袋１袋分で、重量は1.52㎏である。分析にあたって、斧足綱については殻頂部から主歯部分が遺存する個体を対象として左右殻に分類して、数の多い方を個体数として示した。種が同定出来たのは腹足綱がスガイ、オオヘビガイ、ウミニナ、スズメガイ、イボニシの５種、斧足綱がハイガイ、マガキ、マツカゼガイの３種、節足動物甲殻綱フジツボ目フジツボ科の１種である。出現個体とその構成比は第１表に示した。マガキが左右殻に差異があるが750個体で90％以上を占め、次いでウミニナが45個体で５％前後を占める。他は１～11個体が存在するのみで、構成比は低い。ウミニナにはマガキが付着し、カキ棒の核として存在するものが９個体も存在していることを考えると、もともとは死貝であった可能性も強く、マガキを除いた他の貝はマガキの採集に混入して遺跡内に持ち込まれたものと考えられる。マガキは成長が悪く小型であり、ウミニナの死貝を核とした小さいカキ棒であることを考慮すれば、これらのマガキは泥性の強い河口付近で採集されたものと考えられる。なお、これらのマガキの処理は茹でて食されたと考えられ、カキ打ちの道具の傷や焼けた痕跡は認められない。

Fig.78　第173次調査区第１面遺構全体図（1/250）

※赤色は第１面下遺構

Fig.79　第173次調査区第２面遺構全体図（1/250）

付論２　博多遺跡群第173次調査ST258出土の赤色砂について

福岡市埋蔵文化財センター　　田上　勇一郎

博多遺跡群第173次調査で検出した甕棺墓ST258の内部及びその周辺に見られた赤色砂についての所見を簡単に報告する。

赤色砂を実体顕微鏡で観察すると砂粒自体が赤いのではなく、砂粒に赤色の微粉末が付着していることがわかった。このため、被熱で赤化したものでないことがわかる。

次に赤色の微粉末と砂粒について蛍光X線分析をおこなった。赤色の微粉末は他の砂粒に比べ、明らかに鉄（Fe）のピークが高い。また、水銀（Hg）のピークが見られなかった。よってこの赤色砂は水銀朱ではなくベンガラの赤によって着色されていると考えられる。

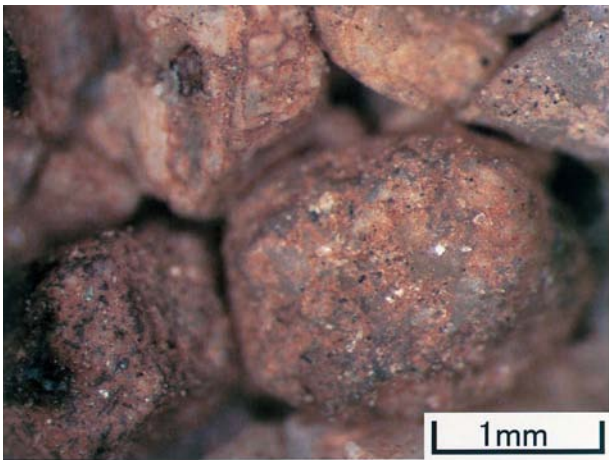
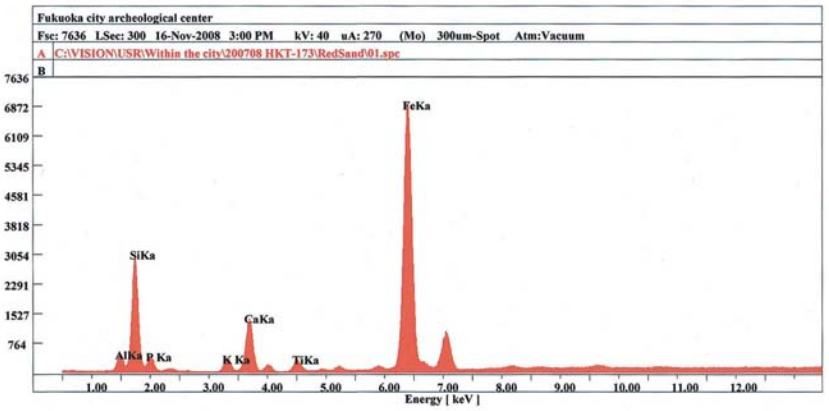


Fig.80　赤色砂の実体顕微鏡写真



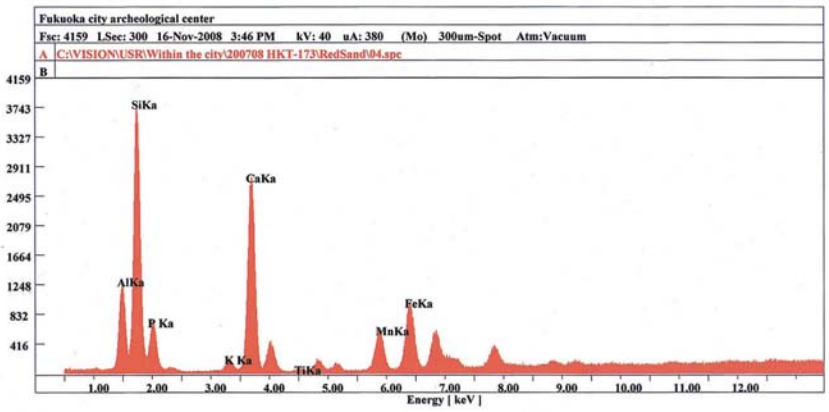


Fig.81　蛍光X線スペクトル
（上：赤色部・下：砂粒部一例）

表1　博多遺跡群第173次調査区SK17出土
貝類構成比表

	貝　種	殻	フタ	個体数	構成比
腹足綱	スガイ	11	3	11	1.34
	オオヘビガイ	3		3	0.37
	ウミニナ	45		45	5.49
	スズメガイ	1		1	0.12
	イボニシ	1		1	0.12
	小　計	61	3	61	7.44
	貝　種	左殻	右殻	個体数	
斧足綱	ハイガイ	1		1	0.12
	マガキ	750	458	750	91.46
	マツカゼガイ	1		1	0.12
	小　計	752	458	752	91.70
	フジツボ			7	0.85
	小　計			7	0.85
	計			820	99.99

付論３　福岡市博多遺跡群第173次発掘調査出土の中世人骨

九州大学大学院比較社会文化研究院
中橋孝博

はじめに

博多遺跡群における 2007 年度の発掘調査（第 173 次調査）によって、新たに平安時代所属の人骨が出土した。僅か一体、しかも保存状態が不良ではあるものの、全国的にみて中世人骨とりわけ平安時代の人骨はごく少数に限られており、貴重な研究資料となるものである。

博多は言うまでもなく港町・商都として古代に遡る古い歴史を持ち、これまでの発掘調査によって弥生時代から近現代に至る相当数の人骨資料を出土している。まだ各時代の資料数は必ずしも十分ではないが、いずれは同地域内における骨格形質の時代変化を明らかにし得るような、全国的に数少ない可能性を秘めた地域の一つとなっている。今後、当地域に関する豊富な考古、歴史情報と組み合わせて分析を進めれば、骨形質と生活環境との関係やその変化要因を探る上で貴重な検証の舞台となろう。以下に今回新たに得られた平安時代人骨に関する所見を報告する。

遺跡・資料・方法

今回、発掘調査の対象となったのは、福岡市博多区祇園町 2-21 の、標高４～５ｍの博多濱砂丘上に見いだされた一画である。2007 年度の福岡市教育委員会による調査によって、当地から弥生時代中期～近世に至る各時期の遺物、遺構が検出されたが、このうち、平安時代の墓から人骨が出土した。

墓坑は東西方向に掘られ、その中で頭を東に向けた仰臥伸展葬のかたちで人骨が検出された。顔面を右（北）に向け、両上肢は体側に沿って延ばされ、下肢もまた膝関節を伸ばした状態で埋葬されたことが確認できる。同墓坑内からは１５点に上る完型の副葬土器も見いだされ（図版参照）、これら出土遺物に関する考古学的な検討から人骨の所属時代は平安時代前期と見なされている。

骨の保存状態は不良で、僅かに頭蓋の一部については観察可能であったが、駆幹部や四肢骨はその痕跡を残すのみで詳しい特徴は不明である。

なお一部の頭蓋計測は Martin-Saller (1957) に従った。

人骨所見

１．保存状況

人骨は、検出時及び取り上げ後の観察により、頭蓋のほか、右側肋骨、左右の上腕骨と前腕骨、左右の寛骨、左右の大腿骨と下腿骨の各々一部が確認された。いずれも保存状態が悪く、形態観察が可能であったのは頭蓋に限定された。

頭蓋は上記のように顔面右側を下にした状態で検出された。土圧によりやや変形を受けているが、ほぼ全体が原型を保った状態で出土している。ただ、骨の劣化、脆弱化が著しく、観察、計測などの検討は一部に限られた。

以下に歯式を示す。

M^3	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2	M^3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

全歯の残存が確認されたが、第３大臼歯の歯根は未完成で、歯槽骨から歯冠を覗かせた状態であり完全な萌出には至っていない。また、齲歯は見られず、エナメル質減形成も確認出来ない。

２．性別・年齢

性判定に最も有力な寛骨は骨片を残すのみで観察不能である。唯一観察できた頭蓋では、眉間部の膨隆が弱く、乳用突起や外後頭隆起など筋付着部の発達の弱いことが確認出来ることから、女性である可能性が高い。頭蓋最大長の推定値が 173-178mm 程度（吉母浜中世人：男性平均 181.8、女性 176.4mm；北部九州弥生：男性 183.7、女性 177.0mm）であることもこの推定をある程度裏付けていよう。

年齢については、主要頭蓋縫合にはまだ癒合が認められず、また、第三大臼歯が萌出途上にあること、歯の耕耗が比較的軽微（象牙質の露出が見られない）であることなどから、若年後半から２０歳代の、かなり若い死亡年齢が推察される。第三大臼歯が未完成であることだけを見ればより若い年齢の可能性も考えられるが、他の例えば第二大臼歯の耕耗は軽微ながら萌出後数年の時間経過を示し、また蝶後頭軟骨結合部も癒合していることから、少なくとも二十歳前後には達している個体と推察される。

これまでの中世期の人骨に関する研究によって、ほぼ全国的にこの時期の人々には、長頭、低顔、扁平な鼻根部、強度の歯槽性突顎、低身長といった特徴が指摘されている。これまで博多から出土した人骨にも程度の差はあれ類似した傾向が散見されるが、本人骨については残念ながらそうした面での検討は殆ど不可能であった。ただ、やや歯槽性の突顎が確認できる他、脳頭蓋では幾分長頭傾向も窺えるが、この点については、顔面が側方を向いているため土圧による変形の影響を受けている可能性も否定出来ず、詳細は不明とするほか無い。

謝辞

当人骨を分析するにあたり、色々とご教示いただいた福岡市教育委員会の関係各位に深謝します。

文　献

Martin-Saller(1957): Lehrbuch der Anthropologie. Bd.I.Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.

中橋孝博・永井昌文（１９８５）:「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、　下関市教育委員会。

中橋孝博・永井昌文（１９８９）:「形質」、弥生文化の研究１（弥生人とその環境），雄山閣出版

PL. 1

(1) 第173次調査区周辺の状況
(東から西方面を臨む)

(2) 第Ⅰ区第１面全景（東から）

(3) 同 第２面全景（東から）

(4) 調査区北壁土層状況（南から）

(1)

(2)

(3)

(4)

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

(6)

(7)

(1) SE09（西から）
(2) SE20（南から）
(3) SE46（南から）
(4) SE63（北西から）
(5) SK14（北から）
(6) SK18・28・29・57（北西から）
(7) SK29焼土検出状況（北から）

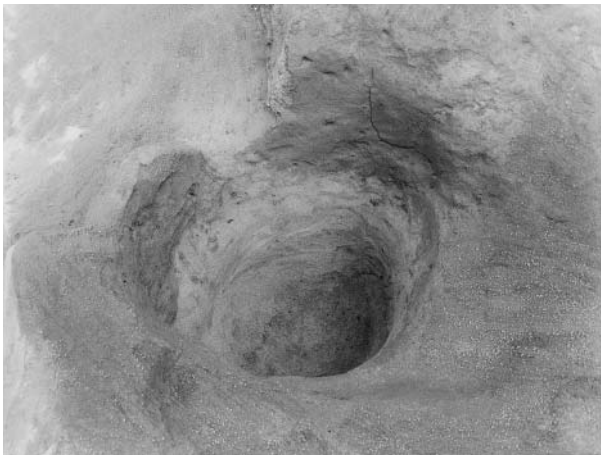
(1) SK27（西から）

(2) SK40（南から）

(3) SK43（西から）

(4) SK43・44完掘状況（東から）

(5) SK47（西から）


(6) SK52（北から）

(7) SK53（北から）

(8) SK55（東から）

(1) 調査区東側第２面検出状況（南から）

(2) SC109、SR108検出状況（東から）

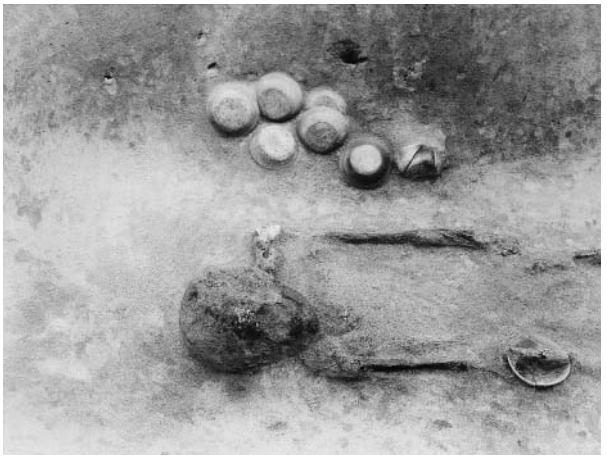
(3) SC112（南東から）

(4) SK105（北西から）

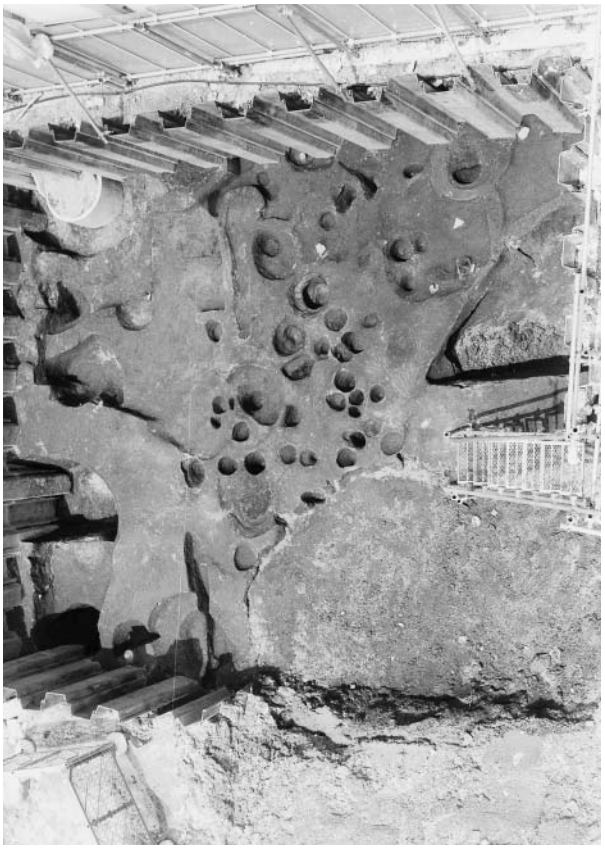
(5) SK104（南西から）

(6) SK105（東から）

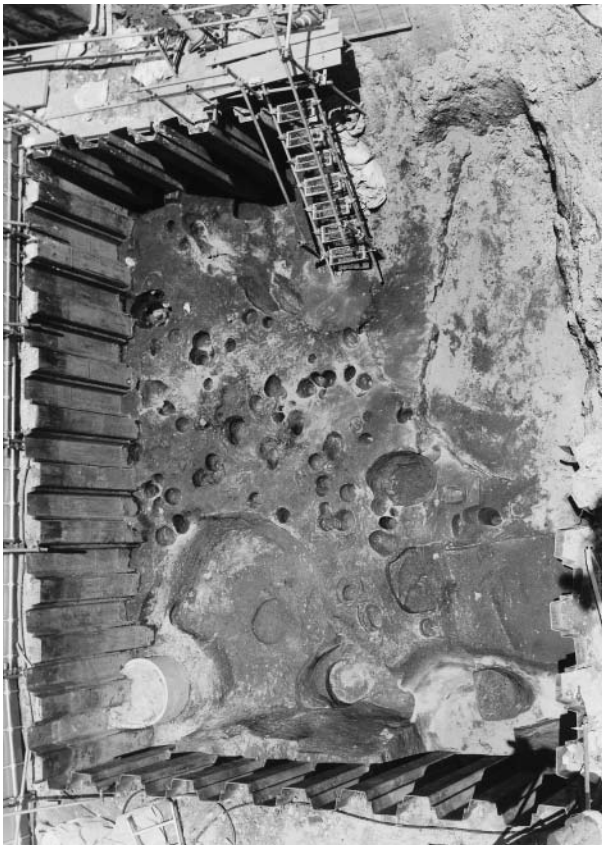
(7) SR108（北から）


(8) SR108人骨検出状況（北から）

PL. 5



(1) 第Ⅱ区第1面全景（東から）



(2) 同第1面下全景（西から）

(3) 同第2面全景（南から）

(4) SE156・165・169（南東から）

(1) SE156（西から）

(2) SK153（西から）

(3) SK155（北から）

(4) SK171（北から）

(5) SK173（南から）

(6) SC181（西から）

(7) SX186（南から）

(8) SK189（南から）

PL. 7

(1) 第Ⅲ区第 1 面全景（西から）

(2) 同東側第 1 面全景（西から）

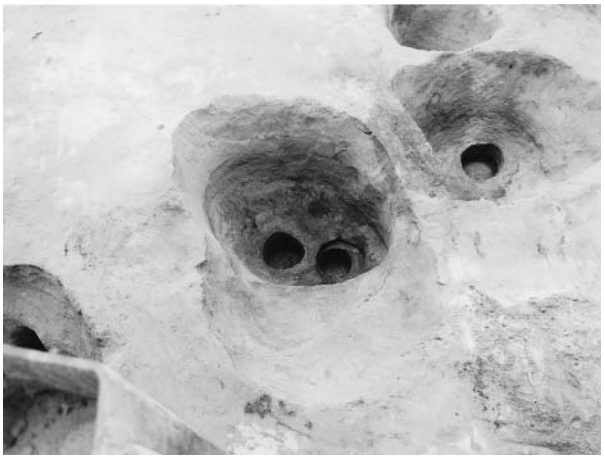
(3) 同第 1 面西側全景（北から）

(4) 同第 2 面全景（東から）

(1) SE201（西から）

(2) SE202（南東から）

(3) SE203（北東から）


(4) SE204（東から）

(5) SE215（南から）

(6) SE210（北西から）

(7) SE211（北西から）

(8) SE211井側（北西から）

(1) SE218（南東から）

(2) SD225（北西から）

(3) SD225遺物出土状況

(4) SK223（北西から）

(5) SK224（南東から）

(6) SK230（北西から）

(7) SK232（北東から）

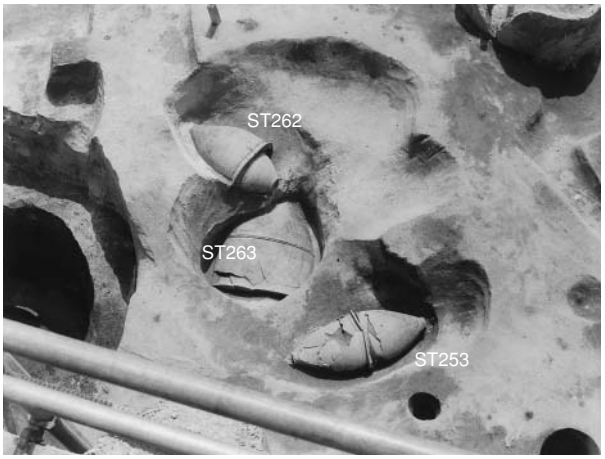
(8) SX264礫群（南東から）

(1) SC251（北東から）

(2) 同 遺物出土状況

(3) SC252（北から）

(4) SD254（南西から）



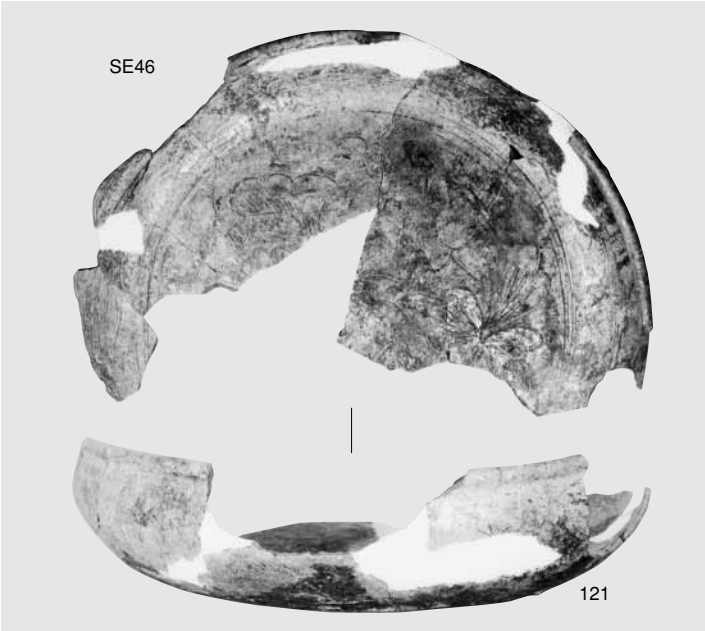
(5) ST253・262・263（北西から）

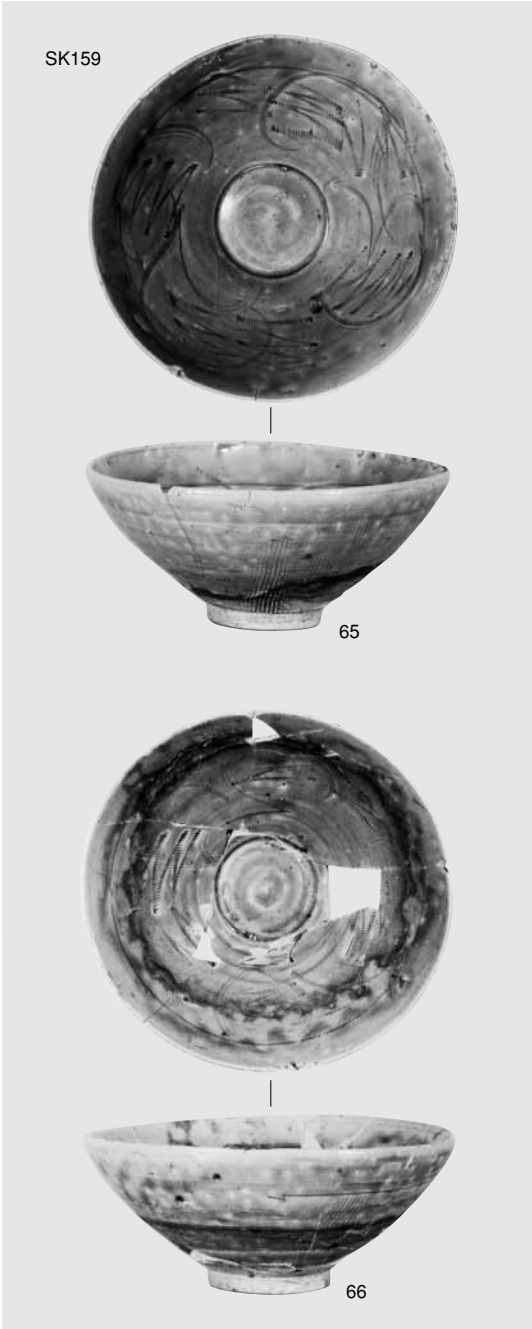
(6) ST263（北から）

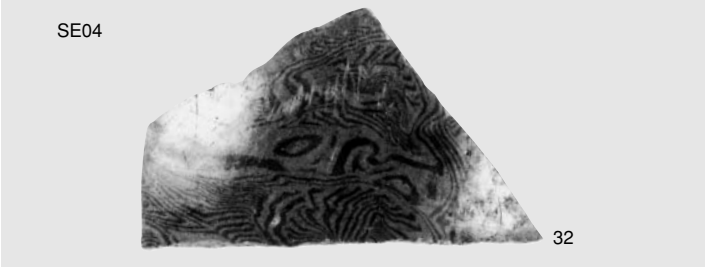
(7) ST258（北西から）

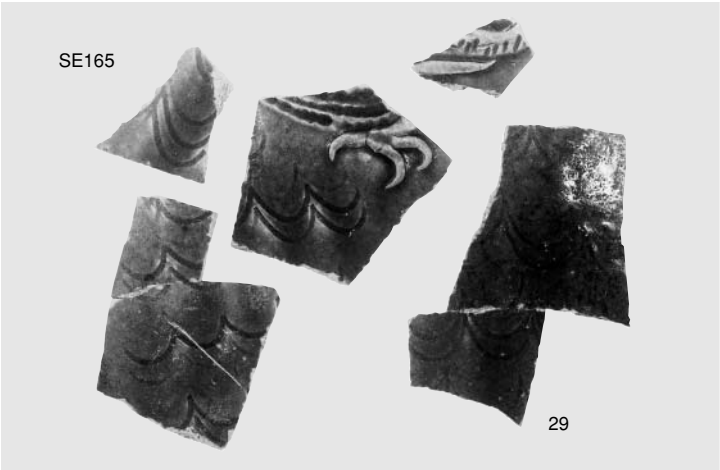
(8) ST261（東から）

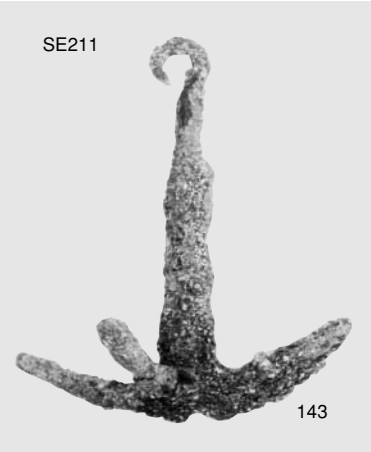
PL. 11

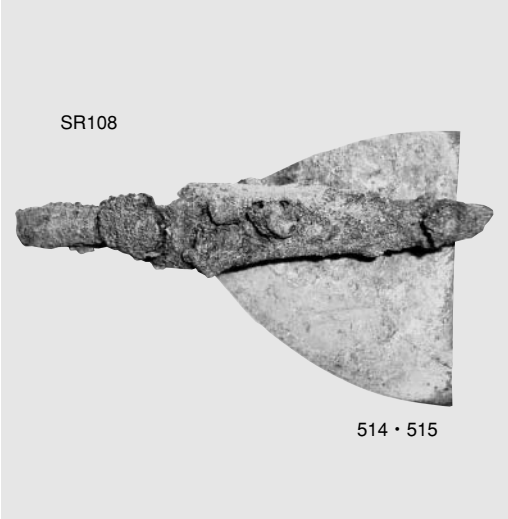






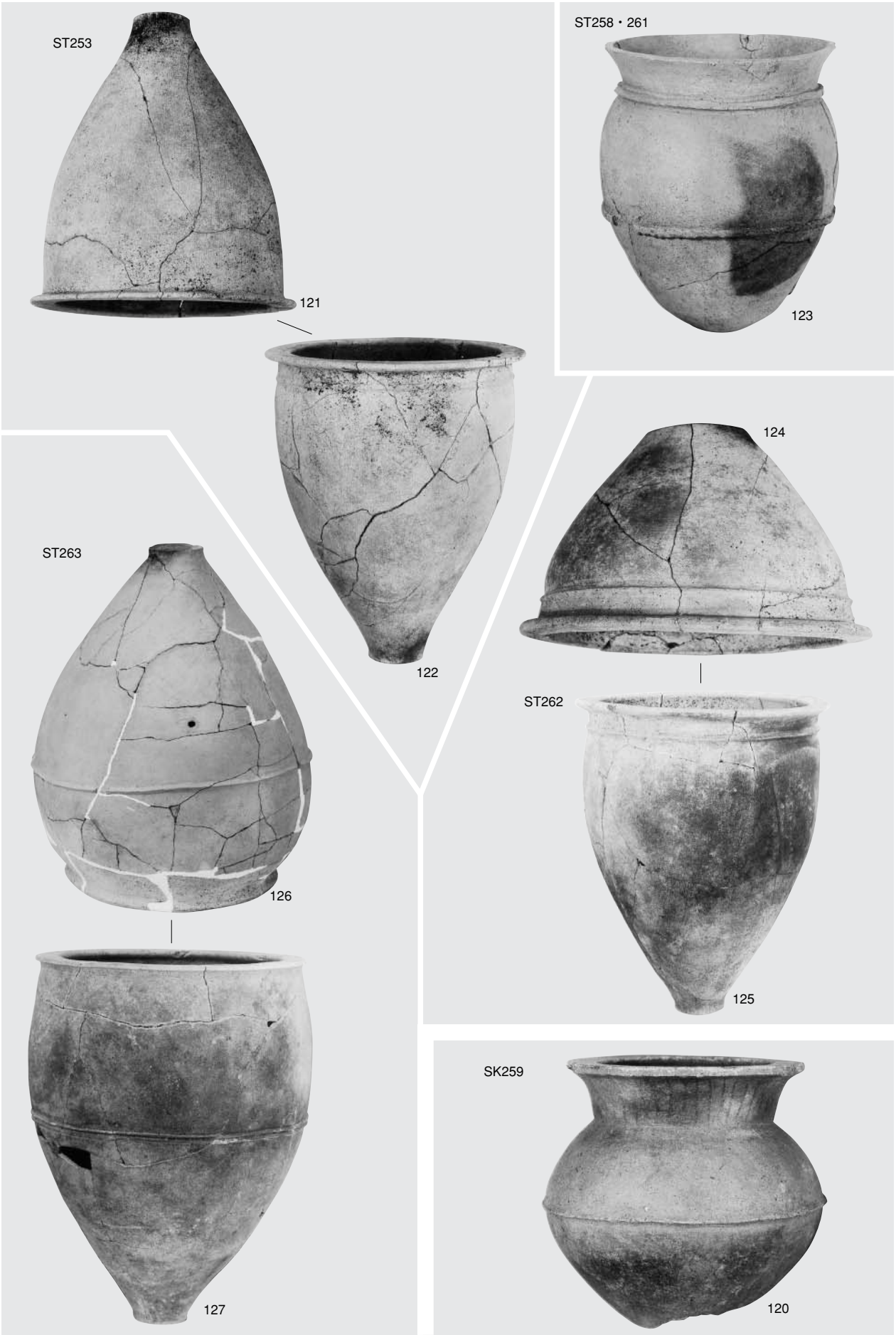






PL.11　第Ⅰ区～第Ⅲ区出土遺物（縮尺不統一）

PL. 12



PL.12　第Ⅲ区出土遺物（縮尺不統一）

報 告 書 抄 録

ふりがな	はかた
書名	博多130
副書名	ー博多遺跡群第173次調査報告ー
巻次	130
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1042
編著者名	山崎龍雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810－8621 福岡市中央区天神1丁目8－1　TEL092－711－4667
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
はかたいせきぐん 博多遺跡群 だいひゃくななじゅうさんじちょうさ 第173次調査	ふくおかしはかたく 福岡市博多区 ぎおんまちにのにじゅういち 祇園町2－21	40130	0121	33° 35′ 34″	130° 24′ 51″	20070501 ～ 20070918	645	ホテル・ 事務所ビル 建設

所収遺跡名	種別	主な遺構	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群 第173次調査	集落・墓地	弥生時代 ～ 近世	弥生時代ー甕棺墓＋土坑/古墳時代ー竪穴住居跡＋溝＋柱穴/古代ー木棺墓＋土坑＋柱穴/中世ー溝＋井戸＋土坑＋柱穴/近世ー井戸	弥生時代ー甕棺＋弥生土器＋石器/古墳時代ー土師器＋須恵器＋鉄製品/古代ー土師器＋須恵器＋鏡片＋鉄製品/中世ー土師器＋瓦器＋中国産陶磁器＋滑石製品＋宋銭＋鉄製品/近世ー国産陶磁器＋日常雑器＋瓦類＋鉄製品	弥生時代中期前半～後期末の甕棺墓4基、古代の人骨が残る木棺墓

要約	調査は、調査区を３区に分割して行った。調査面は試掘に基づいて２面で設定した。第１面の基本時期は中世（12～13世紀）、第２面は弥生時代中期から古代である。第１区：第１面は井戸、土壙、ピットなどを検出した。古墳時代前期初頭の土器群や後期の竪穴住居跡３棟、平安時代の木棺墓１基、土坑などを検出した。木棺墓には鏡片や土師器が多数副葬されていた。第Ⅱ区：第Ⅰ面は井戸や土坑などを検出した。第２面は古墳時代後期の竪穴住居跡１棟、古代の胞衣壺遺構を検出した。第Ⅲ区：第１面は井戸や溝、土坑などを検出した。第２面は弥生時代中期前半から後期末の甕棺墓４基、古墳時代前期の竪穴住居跡２棟、土坑、溝、礫群を検出した。甕棺墓内からは副葬品の出土はなかったが、人骨の細片が出土した。

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1042集

博 多 130

ー博多遺跡群第173次調査報告ー

2009年（平成21年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印　刷　久野印刷株式会社
〒812-0023　福岡市博多区奈良屋町3番1号
TEL 092-262-5726　FAX 092-262-5720